

二十二の使徒

海砂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タロット占いができる引きこもり少女の異世界転移

目次

第十二話	54
第十一話	49
第十話	44
第九話	40
第八話	35
第七話	31
第六話	28
第五話	23
第四話	19
第三話	15
第二話	10
第一話	1

第十三話	59
第十四話	65
第十五話	69
第十六話	75
第十七話	78
第十八話	82
第十九話	88
第二十話	96
第二十一話	100
第二十二話	106
第二十三話	110
第二十四話	117
第二十五話	121

第二十六話
第二十七話
第二十八話
第二十九話
第三十話
第三十一話
第三十二話
第三十三話
第三十四話
第三十五話
第三十六話
第三十七話
第三十八話

127
132
135
141
148
154
160
165
170
177
185
195
203

第三十九話
第四十話
第四十一話
第四十二話
第四十三話
第四十四話
第四十五話
第四十六話
第四十七話
第四十八話
第四十九話
第五十話
第五十一話

212
223
232
239
246
253
259
268
276
284
293
299
305

第五十二話
第五十三話
第五十四話
第五十五話
第五十六話
第五十七話
第五十八話
第五十九話
第六十話
第六十一話
第六十二話
第六十三話
第六十四話

313 320 332 338 345 352 359 367 379 387 395 405 415

第六十五話
第六十六話
第六十七話
第六十八話
第六十九話
第七十話
第七十一話
第七十二話
第七十三話
第七十四話
第七十五話
第七十六話
第七十七話

425 433 443 453 461 468 476 487 497 505 513 524 531

第七十八話

第七十九話

547 540

第一話

私はここに居る。

私はここに在る。

ここは私の世界ではない。

失った故郷を求めてこの世界を歩む。

帰る方法は知っている。

知っている。

それがここでは何よりも強大な力。

ろくな力のない私でさえ、誰よりも先んじることが出来る。

危険な世界。

都合のいい世界。

HUNTER×HUNTERのせかい。

私の名前はエイラ、本名は捨てた。

故郷には敵しかいなかった。

この世界には敵も味方もいない、孤独なものには慣れている。
一人で本を読むのが好きだった。

誰にも邪魔されずに、自分の部屋で、自分だけの世界。

想像する。私が彼だったら。

想像する。私がこの世界にいたら。

想像が現実になったのが何故かはわからない。

けれど私はここに居る。

HUNTER×HUNTERのせかい。

私には力がない。

私には知恵もない。

足りない頭で考えよう。どうすれば前に進めるのか。

そうだ、無ければ奪えばいい。

嘘を現実に来る世界。

覚悟と想像力がものをいう世界。

HUNTER×HUNTERのせかい。

世界は広い。文字も読めない私には、どうすればいいのかわからない。だから手当たり次第に旅をしよう。

『知っている』人間に出会うために。

「……で？ それで飢えてた、と」

「……はい」

「馬鹿？」

「はい」

「……知っていることを全部話したら、故郷にでも帰んなさい」

「それはどこですか？」

「あたしが知ったことじゃ無いわ」

「私にもわかりません」

「……………」

目の前の女性はため息をついた。

私がこの世界で初めて出会った『知っている』人間。

今はこうして食事を食べさせてもらっている。

私はどうしようもない。何の力も無い。だけど知っている。知恵はないけど知識な
らある。

だからこの人についていこう。

私も力を得られるかもしれない。

私も仲間を得られるかもしれない。

食事に誘ってもらう前、私は彼女に向かって深々と頭を下げた。

「初めまして、マチさん。私は貴方を『知っています』」

彼女の眼が、光った。

道に落ちていたから拾った。

拾ったというのは正しくない。勝手についてきた。

途中で気付いてはいたが別に害も無さそうなので放っておいたら、突然服を掴まれ
た。

うっとうしいとは思ったけれど、こんな人混みの中で目立つわけにもいかない。

あたしは振り上げようとした手は上げずに、尋ねた。

「何？」

「……おなか、すきました」

物乞いの類か、それにしても洋服が綺麗だけれど。

私は一枚の1000ジェニー札を取り出して彼女に渡す。

「すみません……使い方がわかりません」

言葉は通じている。なのにお金の使い方すらわからない。

少女は前髪を長く伸ばしていて表情は見えない。嘘をつく理由は？ 特に無い。

けれどあたしはそんなに優しい方でもない。

誰かその辺の人間に聞けと突き放してその場を去ろうとした。

すると少女は、あたしに向かって頭を下げた。

「初めまして、マチさん。私は貴方を『知っています』」

名乗った覚えは無い。少なくともあたしはこの子を知らない。何かの能力者か？

掴まれている袖を振り払った。

凝……見えない、ただのどこにでもいるような弱い人間。

知っているのは偶然か？ それとも何かの罠なのか？

少女は続けて口を開く。

「私は知っています。貴方のこと、仲間のこと、そして……貴方達が死ぬ理由。蜘蛛の足は間もなく欠けます。私はそれを救いたい。……助けて下さったら、恩返しはします」

少女の腹が大きく音を立てた。……何か食べさせろ、ということか？

そうだ、殺すのはいつでも出来る。

蜘蛛の存在を匂わせて、ただで帰れるとも思っていないだろう。

あたしは少女を連れて、手近なカフェに入った。

一通り食べて、満足した彼女は、一そろいのタロットカードを取り出した。

「私は占い師です。望んだ物を見ることは出来ませんが、見てはならないものならよく見ます。蜘蛛のことも、そのひとつ」

彼女は目の前でカードをシャッフルする。

「この中から一枚ひいてください。それは開かずに伏せたままテーブルの上に」

言われるとおりに一枚選び、テーブルに置いた。

「まずこれは、貴方自身も含んだ、蜘蛛のことを占っています。シンブルに今後どうなるか。簡単な占いなのでおおよその傾向しかわかりません。念能力でもなければただの占いなので、気構えずに聞いてください」

そして少女はカードを表へと向ける。あたしから見ても逆向きの、これは……塔？

「事故が起きます。軽い事故……蜘蛛という所の『軽い事故』ですから、足が1〜2本もげる、せいぜいその程度でしょう。不吉ではありませんが決して悪いカードではありません」

ん

失う蜘蛛の足にもよるけど、大きな打撃を受けることはない……そんなところだろうか。

死ぬのはウボオーか、ノブナガか、多分そのあたり。

ウボオーは帰ってこないかもしれないな。

「塔の逆位置には改革……古いものが壊れて新しく生まれ変わるという意味もありませぬ。私はこれを『頭の入れ替わり』と読み解きます。ただし頭が潰されるわけではない。

『頭が使い物にならなくなる』……一時的なものだとは思いますが」

『頭の入替わり』と言われた瞬間に、あたしの頭に血が上りかけた。

そのことをすでに知っていたかのように、彼女は続けざまに己のリーディングを述べる。

「あるいはもつと単純に、失った足の代替品が蜘蛛のもとに訪れる、というだけのことかもしれません。こちらもそれほど深く考えなくていいと思います」

不快に思ったが反射的に殺さなくてよかった。

彼女は置いてあつた塔のカードを手元に寄せると再びシャッフルし始める。

「今度はマチさん自身を占います」

先ほどと同様に一枚を抜き取り、テーブルに伏せ、そして開く。

赤い目をした悪魔の逆位置。

「多少盲目的になつてゐる部分があるでしょう、情報のすべてを信じない方がいい。でも、これもさっきの塔のカードと同じで必ずしも悪い意味のカードではないです。現状が最低、ここが底で上昇の可能性も示唆しています」

表情を変えることもなく彼女は言葉が続ける。

「他の占い師がどうかは知りませんが、私はカードの『絵』にも注目することがあります。どうしても気になるんです、理由はわかりません。例えば先ほどの塔の逆位置、地面から雷が生えているように見えました。雷が蜘蛛に関わつてくるかもしれません。そして今度の悪魔のカード。私がどうしても気になるのは『悪魔の背後に描かれている鎖でつながれた男性』です。先ほどの雷なんかよりはるかに気になります。意味は……：わかりません」

今度は背筋が凍り付いた。この少女は何も知らない。ただの乞食の占い師。ただの占い師が『鎖野郎』の存在を指摘する。

悪魔の背後には鎖に繋がれた男女の姿が描かれている。

にもかかわらず、少女は『男性』と断言した。

……ホンモノ、だ。

あるいは鎖野郎について何かを知っている？ パクに探らせるべきか？

とてもそうは見えないが、あたしより数段上の実力を持った念能力者ならありえなくはない。

それほどの念能力者が何故こうもガリガリになるまで飢えている？

制約？ 違う、目の前でガツガツとむさぼり食っていた。

念能力者なら飢えるなんてありえないだろう、いくらでも稼ぐ手段はある。

あたしを油断させるため？

必要ない、彼女のオーラは微小且つ垂れ流されている。

あたし相手だったら油断させるにはそれだけで十分だ。

『能力者かもしれないが、持っているのはただの占い師としての才能だけ、すなわちシ

口』

あたしの感覚はそう結論付けた。

第二話

カフェでの食事と占いを終えた後、マチさんは私について来いと言った。

何も言わずについていく。お土産にサンドイッチまで買ってもらった、もう悔いはない。

……冗談だ。

餓死するのは嫌だった。苦しいのは辛かった。

けれど死ぬのは怖くない。

ついていった先が天国か地獄かはわからない。

けれど彼らは気軽に私を殺すだろう。道端の草を踏む程度の気楽さで、意識もせず。

それでいい。

私は死ぬことは怖くない。

この世界に来る前、何度も死に損ねた。

人間の体はなんてしぶとくも生き汚いんだろう、そう思った。

蜘蛛なら私を瞬殺できる。それもいい、それでいい、それがいい。

だんだんと人気のない場所へと向かっていく。

街はずれからさらに岩場を越えて廃墟。

「ウボオーは帰った？」

「まだだ」

私は知っている、この廃墟は蜘蛛のアジト。

私は知っている、ウボオーギンさんはクラピカと闘っている。

私は知っている、マチさんに返事をした男が旅団の団長さん。

「その餓鬼みたいなガキは何だ？」

私を見て呆れたような声を出しているのが、ノブナガさん。

「拾った。パク、この子に聞いてみてくれる？『能力を持っているか』『蜘蛛に害意を持っているか』」

占いのこと、蜘蛛のことを知っていたという説明だけを添えて、マチさんはそう告げた。

金髪のスタイルのいいお姉さんが私に近寄ってくる……パクノダさん。

能力とは恐らく念能力のこと、そして害意は、少なくとも私にはない。

念能力の方も、聞かれてもきつと問題ない。

「お嬢ちゃんは、念能力を持っている？」

さりげなく私に触れながら、パクノダさんが尋ねる。

「持っています、ただし驚くほど弱い能力ですが」

特に修行していたわけでもない。発は最初から持っていた。

ごくごく微量のオーラ。私の役に立つことはあるかもしれない。

けれど、蜘蛛には特に意味はない。

「……じゃあ『蜘蛛に害意』は？」

「ありません、微塵も。むしろ私は皆さんに協力したいとすら思っています」

平和なんてくそくらえ、善人なんて唾棄して捨てる。

それは私が前の世界で培った価値観。

レタスと卵をこれでもかと挟み込んだフランスパンをかじりながら、私はパクノダさ

んの質問に嘘偽りなく答えた。

「嘘は言っていないわ。念能力は持っているけど見たとおり弱い。発もわかったけど……」

あなたたちも自分の切り札は知られたくないでしょう？ お嬢ちゃんのオーラを見る

限り少なくとも私達に害をなすようなレベルの能力でないことだけは確かね。お嬢

ちゃんのためにも私達のためにも、知らない方がいいと思う」

「そうか」

黙って聞いていた団長さんが顔を上げた。

優しい気な笑顔。私は騙されない。彼は騙そうとも思っていない。

「能力は、占いか？」

「半分正解、半分不正解。占いに関係はあるけど占うこと自体が能力じゃないです」

この時点で団長さんは知っている、蜘蛛の中にユダはいないこと（いるけど）

予知能力者がマフィアンコミュニティの中にとまで予想はすんでいるだろう。

私の占いは、ただの占い。ただし事前に知っている。

あくまで念能力についての質問だったので、私の原作知識についてはパクノダさんに見えなかったようだ。

「私の能力はタロットカードに模したものです。それ以上は出来れば勘弁してください」

「うん、それはいいよ。それよりマチの占いが気になる。もしよければ、オレのことも占ってもらえるかな？」

「喜んで」

マチさんの時と同じ、ワンオラクル。

団長さんの引いたカードは、逆位置の月だった。

「とてもいいカードですね。現と幻の狭間で苦しんでいる人が、そこから抜け出す意味を持っています。何が本当で何が嘘か、もうすぐわかるでしょう。あるいは生まれ変わりも示唆しています。団長さんの生まれ変わりなのか、それとも蜘蛛の生まれ変わりな

のか……」

「オレは団長だとは名乗っていないけど？」

「マチさんとパク？　さん？　の様子を見ていればわかります、あなたがこのグループの頭、蜘蛛の頭。名前は知りませんが」

「クロロだよ。クロロ＝シルフル」

私がカードを回収している間に団長さんは立ち上がって皆に告げる。

「夜明けまで待つ。夜明けまでにウボオーが戻らなければ予定変更だ」

団長さんはご丁寧に、団員を全員紹介してくれた。私も自己紹介をした。

小学生にしか見えないだのもっと肉をつけるだの散々な言われようで、何故かチョコロボ君を三個もらった。後で食べよう。

東洋人が飢えてガリガリになったから幼く見えるだけで、私はれっきとした高校生だった。

今はもう、遠い昔の話。

第三話

アジトに残る人間、出ていく人間。

やがて原作通り、ゴンとキルアがここに連れてこられた。

今日は九月の三日。ゴンとノブナガさんが腕相撲をしている。

「何でその気持ちを……お前らが殺した人達に分けてやれなかつたんだ！」

ゴンくんは 正義の味方か 反吐がでる エイラ、心の俳句。

殺した人間が殺された人間のことを考えるはずがない。

だったら最初から殺さない。

いじめめる人間がいじめられた人間のことを考えるはずがない。

だったら最初からいじめない。

あいつらは皆理解してやっている。自分が相手の立場にならないことを。

彼らもまた知っていた。自分たちが殺される側にならないことを。

ところがウボオーギンさんが殺られた。

失われる蜘蛛の足の一本目。

タイミング的に、私が彼を救うのは不可能だった。

だから私は努力しよう。これ以上足を失わないように。
できるなら頭も失わないように。

勘違いされそうだが、いじめられた私はクラピカに感情移入はしない。

自分の仇を取ろうなんて微塵も思わないからだ。

いじめる奴らが去った後にニヤニヤしながら寄ってきて、

何事も無かったかのように私に話しかける奴ら。

私はむしろ、こいつらの方が嫌いだった。

助けるでもなく、放っておくのも気まずく、

自分が安心するために、いじめられている私と仲良くするふりをする奴ら。

善人、偽善者、普通の人間に悪党。

上に立つ者、下にかしづく者、自分が中流だと信じている者。

全部まとめて死ねばいい。

そうすればほら、世界はこんなにも平等。

私がこの世界を訪れたタイミングから、私は蜘蛛に味方する。

別に相手は誰でも構わなかった。

もう少し来るのが遅ければ蟻に味方していたかもしれない。

力を持たない私の代わりに世界を荒らしまわってくれる人たち。

善人も悪人も平等に殺しまわる人たち。

私の能力は、そのために使う。奪い取ったこの力。

数はまだ、少ないけど。私の使徒。

ノブナガさんとゴンたちを除いた皆がアジトを後にして、私は一人でここに残った。

ついてきても来なくてもいい、団長さんは私にそう言った。

前の世界の頃の私は、能動的に死にたかった。

けれど今の私は違う。別に死んでもいいけれど、決して自分から死にたいとは思わ
ない。

もし生きられるのなら、生きて続きを見てみたい。

そして私の力では、これから起こるセメタリービルでの戦いにはついていけない。

チヨコロボ君をひとつ、開封して口に放り込む。

お菓子なんて食べたのは何年ぶりだろう。

この世界に来ておよそ三月、前の世界で食べたのが最後だ。

カフェではマチさんがカフェも食べさせてくれた。

それこそカフェなんて、食べたのは十年ぶり以上になるかもしれない。

今は何もすることがない。ただ待とう。

ウボオーギンさんを送る派手な花火を見つめながら。
私にも手向けられた鎮魂歌だと、せめて妄想の中でそう思いながら。

第四話

蜘蛛の皆さんは一人も欠けることなく戻ってきた、大量のお宝を抱えて。

ついでに酒や食べ物やそういった宴会アイテムもギツてきたらしい。

そして私の前にはチョコロボ君が二十箱ある。何故。

オメーはもつと肉付けろ、主に胸！ とか言われた。セクハラ。

「お嬢ちゃん」

コーラを持った、パクノダさんが私に近付いてきた。

どうやらそのコーラは私のために持ってきてくれたらしい。

自分はずでに開けた缶のビールを片手に持っている。

「パクノダさん、私には構わなくて結構ですよ？」

孤独には慣れている。蜘蛛に私を殺す人はいてもいじめめる人はいない。それだけで充分だ。

「そう？ ……私はあなたの発を知ってしまったから、気にしているかと思って」

「気にしてません、何なら全員に公表したって構わないです。私の能力はいずれにしても蜘蛛にはさして意味を持たない。だから皆には話さないでいてくれたんでしよう？」

……ありがとうございます。言わないでいてくれたことには感謝しています」

「もちろんそれもあるけど……団長は、あなたの占いを随分と気にかけていたわ。もしよければ私も占ってもらえるかしら？ 無理にとは言わないけど」

「喜んで。……マチさんや団長さんを占つたのはワンオラクルと言って単純に未来を視るだけのものです。他にも過去を視たり現在を視たり……いろんな占い方がありますが、どうしますか？」

「未来だけでいいわ、これから数日」

ちようどいいサイズのコンクリートのブロックの上の埃やゴミを払いのける。

取り出したタロットカードを広げてシャッフルした。

「私の占いは、……これはあくまで私の感覚ですけど、今から一か月以内の未来を示唆します。なのでこれから数日、と言った占い方はできません、ごめんなさい」

「それでいいわ、私の方が占ってほしいとお願ひしてるんだから」

マチさんの時や団長さんの時と同じ……パクノダさんに、一枚引いてもらう。

彼女が開いたカード。

ローブを着て翼を持った、大天使ミカエルを示すと言われている『節制』のカードの正位置。

「何をコントロールしたいですか？」

「?」

「節制の意味はつまるところ『なにがしかのコントロール』です。それは自分の感情だったり、他者との関係だったり、これは例えばですが蜘蛛のバランスのコントロール……蜘蛛に足は必要か、何本必要か、頭は必要か、それは代替できるものなのか」

パクノダさんが固まった。私は言葉が続ける。

「パクノダさんがコントロールしたいものによってこのカードの意味は変わってきてきます。……とはいえ、正位置で出ているので、コントロール可能であるということを示しています。あなたはバランスを取ることができる。堅実に、確実に。ただしそれには忍耐を伴いますが」

示された節制のカードを引き取って、丁寧にカードを順番に並べてまとめて箱にしまふ。

ここまでが私の占いのワンセット。特に意味はない。

「……それは、私の未来なのよね。だとしたら、今の時点では何をコントロールしたいのか、考えても無駄だったことかしら」

「無駄ではないと思います。時間と人生は過去から未来に向かって流れている。過去にパクノダさんが考えたことが今のパクノダさんを形作り、そして未来のパクノダさんを形成していく。そこに何一つ無駄はありません」

パクノダさんはしばらく目を閉じて何かを考えていたのだろう。

目を開いたときには、とてもいい笑顔を見せてくれた。

「エイラちゃんだったかしら。何か食べたいものや飲みたいものはない？ 持ってきて

あげるわ」

「チヨコロボ君以外なら何でも」

ケラケラと笑いながら、彼女はここから離れていった。

私の占いは、何か役に立つだろうか。

私は、自分が原作知識を持っていることを話すつもりはない。

何故なら信じてもらえる気が微塵もしないからだ。

逆の立場で考えよう。自分なら信じるか？ 答えはノーだ。

だとしたら自分を信じてもらうにはどうしたらいい？

……私には、占いがある。そして知識がある。

うまく蜘蛛を絡めとろう。

自分のために、自分も仲間を得るために。

「はい、どうぞで」

パクノダさんはチヨコバナナを持ってきてくれた。

旅団の人たちはどうしても私にチヨコを食べさせたいらしい。何故。

第五話

さかのぼること三か月ほど。

私は気付くと、外に放り出されていた。

知らない場所、東京程度の大都会。

ビルに囲まれて孤独。人に囲まれた孤独よりははるかにましだった。

言葉は通じた。

繁華街の場所を聞いて、徒歩でそこに向かった。

私は何も持たない。ここがどこかもわからない。

地名を聞いたけど、知らない場所だった。

神様がくれた異世界転移、私はそう感じた。特に根拠はない。

まず手に入れるべきは家と金。

元の世界と同じなら、それは繁華街にある。

戸籍がなくとも、寮が付いていて、ある程度の金も稼げる。

子どもに見える東洋人の女はスキモノに高く売れる、店長と名乗った男はそう言っていた。

そう、私は身体を売った。

何故なら他に何も持っていないから。

唯一持っていたのは、心のよりどころにしていた一そろいのタロットカード。

これさえあればいい、だったらもう一つの方を売ればいい。

性的虐待も受けていた私は、ある程度の『知識』は持っている。

客は大きく二種類に分類された。

一つ目は暴力をちらつかせながら乱暴にするタイプ。

こいつらは一番楽だった。痛みさえ我慢すれば対処は簡単だし、限度を超えれば店が守ってくれた。

私はあくまで商品だから。傷付けられれば店はそれを許さない。

二つ目は愛情を持っているように見せかけるタイプ。

私の苦勞に共感し、時にはチツプをはずみ、仕事を辞めるように説教し、でもやることは結局一緒。

内心で売女を見下しているのが手に取るように分かった。

自分が上に立ちたい、けどそこまでの力を持っていない、そんなタイプ。

私は性欲の発散相手の、そのまたさらに代替品。

情報は少しずつ集まってきた。

客が出張土産をくれた。出張先は『カキン帝国』

聞き覚えのある地名。他にも覚えのある地名はいくつか聞いた。

それらが5を超えたときに確信した。ここはHUNTER×HUNTERの世界である。

仕事をしているのももちろん日時も知っている。1999年7月某日。

原作の今、どのあたりかはよく覚えていない。

もうハンター試験は終わったのか、天空闘技場はどのあたりなのか。

ただしこの日付だけは覚えている、1999年9月1日。

ヨークシンでオークションがはじまる、あの日付だ。

私の道は標を得た。

確信した次の日、私は有り金をはたいてヨークシンへと向かった。

ただしひとつ当てが外れた。

漫画を読む限りヨークシンは治安のそれほど良くない街だという認識があった。漫画に描かれていた部分が主に地下競売だったからかもしれない。

私はここでこれまでと同様に家と金を手に入れるつもりだった。

だがヨークシンは想像以上に治安が良かった。

売春婦ですら全て管理されていたのだ。

国際人民データ機構の国民番号を持たない私は、金も家も手に入れるすべを持たなかつた。

よつて飢えた。よつて家はなかつた。

前金であれば身分証なしで入れるネカフェで寝泊まりするだけで精一杯だつた。飲み物で飢えを満たしていた。

話はもう一度さかのぼる。私が最初にいたのはレテアというサヘルタ合衆国にある一都市だ。

ヨークシンシティも同じ国にあつたのが幸いした。

移動に身分証明書はいらなかつた、ただチケットを買えばよかつた。

そしてレテアにいたのはおよそ二か月。

一日に五人〜十人ほどの客を取つていた。もちろんゼロの日もあつた。

色々と経費で差し引かれた。それでも別に構わなかつた。

短期間だつたがりピーターもそれなりにいた。

そいつはその中の一人だつた。

先ほど語つた、大別して二種類の客。彼はそのどちらにも属さなかつた。

会つたのは全部で三回。

彼は見た感じ爽やかスマートで、とてもこういつた店を利用するような人には見えな

かった。

暴力的でもなく。愛を語るでもなく。

彼はただひたすらに、私に『足蹴にしてください』と懇願してきた。

お客様のゴ要望には全力でお応えするのがエイラ流。

頭から尻から背中から、思う存分蹴飛ばした。喜んでた。意味不明。

そしてそれは三回目の出来事だった。

「僕は……僕はもう！　もう！　貴方のものです!!　あああああ！」

彼の体が光を放った。そして私に流れ込んだ。

『愚者』^{フル}

手に入れたのが先だった。

後から地名を聞いて確信した。

私が手に入れたのは念能力。

唯一手にした最初の力。

無いのなら、奪えばいい。

第六話

ネオンⅡノストラードの占い能力を手に入れた団長さんが皆を占う。

ヒソカの占いを経て団長さんが方針を示す。

蜘蛛は、仮宿に残る。

チームを班分けする。

団長さんに頼まれた。

能力で占うことができなかつたフィнкクスさん・フェイタンさん・コルトピさんを私が占う。

パクノダさんが危虞の視線を私に向けている。

大丈夫、蜘蛛にはさして意味はない。

フィнкクスさんが引いたカードは『愚者』の逆位置。

「……フィнкクスさんのカンは当たりません。今は他者の言うことに従っていた方がいいでしょう。間違いを犯す危険があります」

フェイタンさんのカードは『皇帝』の逆位置。

「メンツよりも大事なものがあります。それに固執するとあなたは信頼を失う。過信せ

ず流れに身をゆだねてください」

コルトピさんのカードは『戦車』の正位置。

「とてもいいカードです。問題に直面するかもしれないかもしれませんが乗り越える力を示しています。例えばこの三人でチームを組むとしたら、私はコルトピさんの意見を最も重視することをすすめます。それくらい、他の二人に比べて良いカードです」

「つてことは死ぬのはオレかフェイタンだな」

予想外にも、フィンクスさんは私の占いを信じてくれているようだ。

団長さんが奪ったネオンⅡノストラードの占いを見た直後だからかな。

「そもそもこのガキの占いは百パーセント当たるわけ違うね、そこまで信用する必要はない」

私もそう思います。でも、知っていますから、一応虚実織り交ぜて。

パクノダさんは一人で行かせた方がいい、そうしないと団長さんが危うい。

おそらく団長さんが攫われるところまでは私の力では回避不能。

だったら彼女が人質交換を終えてアジトに帰ってくるころまではそのまま原作通りに。

そこから私が手を加える。

出来る自信なんか微塵もないけど、パクノダさんを死なせたくはない。

そして私はここから出ない。……闇に乗りなくてもゴンとキルアは私を圧倒できる。死んでも蜘蛛の足は引つ張りたくはない。

「役立たずの私は、ここにいてもいいですか？」

「ああ、構わない。自由にしていてくれ。……これは例えばだが、オレがもう一度エイラに占ってもらうことは可能か？」

何故だろう、団長さんは最初から私の占いに固執する。強者のカンってやつだろうか。

マチさんも、いくら鎖野郎のことを匂わせたとはいえ、疑うことなくここに私を連れてきてくれた。

私が蜘蛛の為に動きたいと本心から思っていることが伝わっているようで嬉しい。

二人にそんなつもりが微塵もないのはわかってはいるけれど。

「可能ですが、一か月以内に再度占うと的中率が格段に下がりますのでオススメはしません」

「そうか、ならいい。じゃあ、行動開始だ」

蜘蛛が散る。ボノレノフさん、フランクリンさん、ヒソカを除いて。

ヒソカにも触らない。すべては原作のままに。

足を失うその直前のタイミングまでは。

第七話

「お嬢ちゃんは、四大行は出来ないのわ？」

団長さんが攫われて全員がアジトに集合するまでの間。

フランクリンさんが暇つぶしにか私に話しかけてきた。

私がつつとしよぼいオーラを垂れ流し続けているからだろう。

パクノダさんが『念能力を持っている』と言ったにもかかわらず。

「出来ないことはないです。けど、意味はあまりありません。私には今視えている通りのオーラしかないからです。能力自体は産まれた時から持っていて、産まれたときから使っていました」

嘘と本当を適度にブレンドさせて、私は苦も無く回答する。

苦痛と死への恐怖さえなければ、蜘蛛も、きつと蟻も、こんなにも身近になれる。

「なるほどな、じゃあ修行も何もしてないけど『使える』ってわけか……なんだったら、簡単な修行方法でも教えてやろうか？　今すぐにもできるような」

「纏や練の常時展開くらいだったら知ってますけど、他に何かあるんですか？」

前提として、私は発以外の四大行をフランクリンさんに見せた。

見せるほどのものでもないけども。

ついでにジンたちが漫画でやってたイボゲームもやって見せた。名前は勝手に付けた。

手のひらにオーラのイボを出して、もぞもぞと動かす手遊びだ。

ついでに周辺のオーラは絶にして、完全にイボだけのオーラの形をトランプのマークに変えて見せた。

「ほう、絶と流はなかなかのもんだな」

「オーラ総量が少ないから出来るんでしょう。力が大きくなればなるほど扱いにくくなる。筋肉でも、オーラでも」

「とりあえず一番いいのは体を鍛えることだろうな。念能力もその容器が頑丈でないとすぐに壊れる」

鍛えたことなんて一度もないからな。

……腹筋とか、そういうのでいいんだろうか。いいらしい。

フランクリンさんがモノがなくても出来る筋トレのやり方を。

途中から話を聞いていたボノレノフさんが基礎的な格闘技の動きを教えてくださいました。

ほんのちよつと動くだけでも息切れして汗がにじむ。

二人はそんなへたれた私を孫でも見るかのような眼差しで見つめながら応援してく

れる。

いい人たちだ。

ヒソカは寝転がってケータイを眺めていた。多分イルミとやり取りしているんだらう。

どこからともなく音がした。入れ替わりのタイミングが訪れた。

「俺たちと一緒に来い、守ってやるから」

何事も起こらないことを知っている私は、言われた通りにしよう。

ヒソカが前を歩く。

私はその後ろを、ボノレノフさんとフランクリンさんの間に挟まれて付いて行く。

ヒソカが先行し、部屋に入る。中では即、入れ替わりが行われている。

私たちが部屋に入ると、カルトちゃんに変装したヒソカが建物を飛び出していった。

「追うか？」

「いや……誘いかもしれねえ、全員揃うのを待とう」

入れ替わり、無事完了。さようならヒソカ、嫌いではないけれど貴方は私に必要ない。

少なくとも今の私には。

さあ、皆が戻るまで筋トレを続けよう。

毎日続けたらウボオーギンさんみたいになれるかな？

無理か。強化系じゃないし。

第八話

私の家では母が正義だった。

私の知識を育ててくれたのはスマホだった。

どうやら家の外では、汚いことは悪らしい。

それは前もって知っていた。

けれど家では母が正義なので、飲む以外に水を使うことは許されなかった。

タオルも、シャンプーも、母のためのものだった。

どうやら外の世界では、父と母は一人ずつらしい。

私にいたのは、一人の母と、数えきれないほどの父。

食事は与えられた。何個か入った菓子パンを週に数回、決して少なくはない。

炭水化物に偏った私の体重は醜く太った。

太っていることも、この世界では悪らしい。

ツーアウト。

同級生に声を掛けられる。

私はイエスしか言葉を知らなかった。それ以外を言うとはひどい目にあつたから。

どうやらそれも悪だったらしい、スリーアウト。

必然的に、私はいじめられた。

いちどだけ、先生が家に来たこともある。

母が金切り声で追い出した。

扉を閉めた勢いそのままに私を殴りつけた。

次の日に、顔を腫らした私を見た先生は、以降私に関わるのを辞めた。

学校に行くのは当たり前。

母に恥をかかせないのも当たり前。

殴られるのも当たり前。

お風呂に入れないのも当たり前。

クラスメイトに犬の糞を擦り付けられるのも当たり前。

教科書にウンコって書かれるのも当たり前。

『日本国民総中流』

中流ってなに？ 普通ってなに？

私にはこれが普通。ただの日常。

TVのアニメやドラマはフィクション。

サザエさんもドラえもんもクレヨンしんちゃんもすべてフィクション。

友達が欲しかった。でも出来ないことも分かっていた。

母は時々泣きながら私に縋りつく。

私はその頭をなでてこう言う。

「大丈夫だよ、おかあさん。だっておかあさんはこんなにきれいなだもん」

私と違つて。そう言葉を続ける。

それでいくばくか気分の良くなつた母は眠る。

母の寝ているときだけが私の幸せな時。

誕生日は産んでくれた母に感謝する日。クリスマスもお正月も関係ない。

でも一度だけ、たつた一度だけ、何かの気まぐれで母が誕生日プレゼントをくれた。

安っぽくて、ペラペラな、けどとてもきれいな二十二枚の絵のタロットカード。

欲しいと言つた時には殴られたけど、欲しいと言つたことを覚えていてくれた。

うれしいおかあさん、ありがとうおかあさん、わたしいいこにするよ。

やけどだらけの手でカレーを作る。

母はカレーが好きだから。

毎日だと殴られるけど、ありがたうを伝えるために私はこの日カレーを作つた。

それから三日、母は帰つてこなかった。

残してくれた菓子パンがあつたから飢えはしなかつたけど。

手のつけられることのなかったカレールとご飯は腐臭を放っていた。

母の眠っているときだけ、私はタロットカードを取り出す。

絵の一つ一つに意味があるのだと、スマホで知った。

私は一生懸命勉強するよ。母は占いが好きだから。

だからきつと、私が占えるようになったらびつくりして、きつと褒めてくれる。

これはウンコと書かれた教科書に載っていることよりもはるかにだいじなこと。

綺麗な絵、大事な意味、表と裏、上と下、正と逆。

何度も何度も繰り返し並べて、寝ている母のスマホを使って意味を頭に叩き込む。

一番好きだったのは『恋人達』のカード。

女の人の絵が少し母に似ていた。

おかあさんにもこんな人が現れますように。

おかあさんのところにキューピッドが訪れますように。

おかあさんがしあわせになりますように。

今ならばかばかしいと笑えるけれど、あの頃私の世界は母だった。

そして今も私を、タロットという呪いで縛り付けている。

それは力であり、勇気であり、苦痛であり、地獄。

それでも私はタロットを愛している。
タロットを使って、私は仲間ともだちを手に入れる。

第九話

団長さんとパクノダさんを除く蜘蛛の全メンバー、そしてゴンとキルア、そして私。十三人がアジトに揃った。(ヒソカイルミは数には入れてない)

この数字は吉兆か、それとも凶兆か。

パクノダさんが戻ってくるまで私に出来ることはない。

戻ってきてても、一度目はそのまま行かせるしかない。

「なあなあ、アンタ旅団のメンバーじゃねえよな。アンタだけ、見るからに弱いもんな。なんでこんなところにいるのさ」

「余計なことを話したら旅団メンバーの尾を踏むかもよ?」

「こんくれー平気だろ」

ゴンとキルアは鎖で縛り付けられているが、簡単に引きちぎれることは知っている。「弱い私を人質にとつてここから逃げ出す? そうしたら彼は遠慮なく団長さんを殺すでしょうね」

ゴンがこの言葉に反応した。

「そんなことしないよ」

「それが賢明ね。私に人質の価値はないし、あなたたちは彼にそんなことをさせたくない……」

「良く知ってるんだね、オレたちのこと」

「私は占い師だから」

しまった、ゴンの目がキラキラし始めた。面倒なことになりそう。

「いつまでその餓鬼どもと慣れ合てるつもりね」

「弱い者同士、多少は。今は何もすることがないですし」

「あの、オレ、この人に占ってもらいたいですけど、いいですか!？」

場の空気が凍る。ゴン、本当に空気を読まない子……。

ノブナガさんがいればうまく仲立ちしてくれそうな気もするが、残念ながら彼はホテルビーチタクルでシズクさんに殴られたままいまだに意識を取り戻していない。

「私は占い師だつて言ったでしょう？ 占うには代償が必要よ、一般的にはお金だけど」

私が占いをできると知つたと勝手にタダで占わせようとする人たち、腐るほど居た。

技術は無償じゃない、もちろん私自身が占いたいと思えば話は別だけれども。

「うーん、でも今オレ現金持つてるわけじゃないしなー」

「別にお金じゃなくてもいいよ、私にあなたを占つてもいいと思えるようなナニカがあれば。この場合はキルアの方が私にとって対価を払える人材かもね。ゾルディックが

一度だけ無償で私の依頼を受けてくれる……それは、報酬になり得る」

何人かの視線がキルアに向けられる。

おそらくそれは、キルアがゾルディックであるということが周知されていなかったという事。

「……キルアと同等の力を持つハンター・ゴン。君が一回だけ私の言うことを何でも叶えてくれるのであれば、私はあなたを占ってあげる」

「うん、わかった」

少しは考えようよ！ 何でもってアナタ何でも出来るわけではないでしょう！

駄目だ、ゴンと話していると自分まで向こう側の人種の性質に引つ張られてしまう。

……もういいや、占おう。そしてこの状態から解放してもらおう。

シャッフルしたカードをまとめて、縛られた状態のゴンの後ろ手に持っていく。

そして一枚引いてもらう。

「上下が大事だから、引いたカードを動かさないようにしてね」

引いてもらったカードを開く。

『太陽』の正位置。

「希望の光が見える。これは現状のあなたじゃない……何かもう一つ、大きな期待を寄せているものがある。それはあなたの望み通りに願いが叶う。一筋縄ではいかないか

もだけど、将来が開けると約束できるわ」

まぶしい、太陽。とてもゴンに似合いの前向きなカードだ。

グリードアイランド
G・Iのことを暗示させてもらった。

クラピカのことには触れない……。

それ以上先のことは、私の占いでは占えないことになっている。

直近の未来だけを見せることにしよう。

「お姉さん、すごいね！　ありがとう！」

きつとあつちはうまくいくよキルア、と相方に向かって無邪気に笑う。

別に君たちのことは嫌いじゃないよ、ゴン、キルア。

ただ私とは向かう方向があまりにも違いすぎる。

以前のキルアであれば少しは近かったのかな？

……むしろ今の方が私に近いのかもしれない。

過去を振り切って新たな仲間を得ようとする、キルアと私。

やっぱり方向は違うみたいだけれども。

第十話

一度目のパクノダさんの帰還。

私は一言も言葉を発しなかった。

これは蜘蛛の問題。私には関われない。

関わったとしても、何の意味も持たない。

関わるべきは、二度目。団長さんが無事解放されたその後。

そして随分と時間が経って、二度目のパクノダさんの帰還。

「団長は？」

フィinksさんが口火を切る。

「ここには来れない」

パクノダさんはそう答える。それしかできない。

私が介入すべきはこの時。

「あ？ ふざけろよ。きつちり説明しろ！」

「パクノダさん、伝える必要はありません、あなたは何も話さないでください」

鎖野郎のこと、団長さんのこと、起きた出来事、ゴンとキルア。

パクノダさんが伝える必要はない、私が全て知っている。
フィングスさんが私をにらみつけた。

「テメーには関係ないだろうが、すっこんでろ」

「関係はまだ無いですが、私は蜘蛛を救いたいと考えています。これ以上、足は一本も失いたくない」

このままだと、パクノダさんは初期メンバーに記憶を伝えて死ぬ。

それは私の望むところじゃない。

パクノダさんが私の方を見る。目が合った。

「お嬢ちゃん、ありがとう。でもあなたにはまだ関係のないことよ」

そして、パクノダさんは旅団メンバーを見つめる。

「フェイタン、フィングス、マチ、ノブナガ、シャルナーク、フランクリン……信じて、受け止めてくれる？」

「パクノダさん、駄目！」

私の静止は届かなかった。

「信じろ、あれはパクだ」

漫画で知っていた通りの流れ。

一つだけ違っていたのは、彼女が銃を撃つその刹那、まさに同時。

「エイラちゃん、私はあなたに降参するわ」

六人に銃弾が撃ち込まれる。記憶が伝わる。

パクノダさんの心臓に絡まっていた鎖がそれを貫く。

「パク!!」

私はパクノダさんを救えなかった。

光がパクノダさんから放たれて私の中に吸い込まれる。

『ハイブリエステス
女教皇』

こんなこと、私は望まなかった。

パクノダさんに、死んでほしくなかった。

「死んで……」

シズクさんが、パクノダさんの遺体をあらためる。

「どういうこと？」

「オレが説明する」

すべてを知ったフィックスさんが、パクノダさんの遺体を見下ろしている。

涙はないけれど、パクノダさんの遺志は確かに彼らに伝わった。

「すべてわかった。パクノダは……」

団長への敬愛の念、仲間への想い、交換の条件、覚悟のあかし。

一つずつ、丁寧に、フィンクスさんは残りの仲間にそれを伝えていった。

「最後に……エイラ、だったな。あの言葉……あれがあったから、パクは己が死ぬことすら享受したんだな」

「……多分。私はそれでもパクノダさんに生きていて欲しかった」

この世界に来て初めて、私は涙を流した。

この世界に来る前から、もう随分と涙なんて流していなかった。

とつくに枯れたと思っていたけれど、私は今、こんなにも悲しい。

私の発の記憶は六人には伝わったのだろう。そして残りのメンバーにも説明する必要がある。

それは私からパクノダさんにできるたった唯一のこと。

役に立たなくてごめんなさい、パクノダさん。

私はこんな形で蜘蛛の仲間になんかなりたくなかった。

あなたに生きていて欲しかった。

生きることはこんなにも難しい。

変えることはこんなにも難しい。

パクノダさんを止めるだけの速さ、力、それがあれば間に合ったかもしれない。力が欲しい。そう、思わずにはいらなかった。

第十一話

私はカードを具現化する。

具現化されたカードは二枚。

『愚者』、そしてたった今手に入れた『女教皇』

「これが私の発です。『お前の物は俺の物』と『舞い踊る二十二の使徒』、カードを具現化

した能力は後者になります。一日に一枚だけ、手に入れたカードのうち一枚を使用することができません。効果は二十四時間。一度発動すると二十四時間が経過しないと他の能力は使えません」

前もって準備してもらった世界地図。それを見つめながら、私は一枚のカードを引いた。

『愚者』

皆の目には見えないが、私の目には地図上のある一点が光って見える。その場所を、私は指さした。

「……団長さんは、ここに居ます。ただし先ほどのフィックスさんの説明の通り、旅団のメンバーさんが接触するのは望ましくありません。よろしければ私が団長さんと接触し、念能力を取り戻すための手助けができればと考えています」

「人間の居場所がわかるってのがお前の能力か？」

フランクリンさんの質問に、私は間を置かず答える。それが私の誠意。

旅団に隠し事はできるだけしない。原作の知識だけは伏せさせてもらうけど……。

「正確には『顔を見たことのある個体』の『現在地』になります。地図や写真上でもわかりますし、近ければ方向や距離もわかります。これは『愚者』のカードの能力になります。そしてもう一枚、『女教皇』のカードは……パクノダさんの、能力、です」

パクノダさんの能力なんて欲しくなかった。奪える気もなかった。

だから私は何度も思った。

『私の能力は蜘蛛にさして意味をもたない』

「もう一つの能力『お前の物^{ジャイアニック}は俺の物^{エゴイスト}』は、シンプルに言う^トと相手の念能力を奪う能力です。ただし条件が多岐にわたるので、皆さんの能力を奪うことは出来ないに等しいと言っていると思います」

今の私のオーラでパクノダさんの能力を再現できるかは甚だ微妙だが、今後鍛えることによってももしかしたら使えるようになるかもしれない。

使えなかったらその時は私の能力丸ごと団長さんに盗んでもらえばいい。

そうすれば、パクノダさんの能力をそのまま旅団に遺すことができる。

そのためには、私が生き残ることが必須。

「つまり、その能力でパクの念能力を引き継いだってわけだね」

「はい。パクノダさんの最期の言葉が最後の条件を満たしました。条件の一つは『私相手に敗北を認めること』正確には『私にまいること』……これは、口頭だけでも意識の中でも構いません。……蜘蛛の皆さんが、私相手に敗北を認めるなんて、本来ありえないことですから」

それがこの場では逆効果になった。

パクノダさんは自分の能力がレアだということを知っている。

逆に言えば、能力さえ残せれば蜘蛛にとって自分は死んでも構わない、と。

……きっと、そう思ったに違いない。私の能力を知っていたばかりに。

蹴られ好きGPS男の能力と、パクノダさんの能力。

現在私の持つ手札はこの二枚だけ。

「団長さんの傍に居て、私は自分を鍛えます。身体も、念能力も」

私は力を手に入れる。

才能なんてたぶん無いけど、生き残る確率を上げるためにはそれしかない。

そして単純に、強くなれば能力を奪うことも容易くなる。

力、それは旅団メンバーになるための最低条件。

私はこれまでこれほどまでに、強く生きたいと願ったことはなかった。

パクノダさんの『念』を背負い、私は生きる。何があっても生き延びてみせる。

旅団の皆さんと、団長さんに伝えるべきいくつかの事項を確認し終えた後。

私は道中困らないだけのお金をもらった。

連絡先はあえて交換しなかった。

それ自体が『団長と旅団員の接触』と認識されることを恐れたためだった。

携帯電話で地図アプリを開く。

ヨークシンシティからそれほど離れていないサヘルタ合衆国の一か所。

光が示すその場所のさらに先……東を目指し私は出発した。

先回りしなければ、私が団長さんに追いつけるはずもない。

国境をうまくこえられるかどうかが重要になってくるだろう。

けれどやらなければならぬ。やってみせる。

それが私の、やりたい、やらなければならないこと。

『愚者』^{フル}

- ・ 任意の個体の現在地を知ることができる
- ・ 対象の顔を実際に見たことがある必要がある（写真不可）
- ・ 現在地を知る方法は写真上・地図上など多彩
- ・ 直径一キロ圏内にいる場合には何もなくともおおよその方角と距離がわかる（完璧に正確ではないのでライフルなどでの攻撃は視認でもしていない限り不可に近い）
- ・ 地図上などでは平面的にしかな場所を知ることができないが、半径五百メートル圏内の場合は高さを含め立体的に居場所の方向を把握することができる
- ・ 同時に複数の人間を調べることができないが、都度切り替えて一人ずつ調べることが出来る（二十四時間内に複数回可能）

第十二話

もう少し具体的なヨルビアン大陸の地図を拡大した。

想像したとおり、念能力のない団長さんの速度は常人プラスアルファレベルにまで落ちている。

おそらくは飛空船を使って海辺の町あるいはその最寄りまで飛ぶつもりなんだろう。

最初の点から真東ではなく、少し都会の方向へと逆走している。

その都市までにほぼ常人の私が追い付ける可能性は皆無。

だったら私はサヘルタ合衆国の国境間近まで先に飛空船で行き、徒歩で国境を越える。

パスポートもビザもない私には、国境を越えることは出来ない。

徒歩であれば、どこかにスキがあるかもしれない。

そう思つて、ひとまずは国境へと向かった。

幸い、真東へのルートからそれほど外れるところのない国境そばの位置にレダス国際空港という大きな空港があった。

私のガチ旅はここからスタートする。

この街で、野宿に必要な火種やナイフを手に入れる。それから、小さな鍋を一つ。

そして大量の袋ラーメン。

これなら軽い、私でも持ち運べる。

そして最悪、鍋とラーメンを捨てれば身軽になる。

国境を越える方法はいくつもあるだろう。

もつとも楽なのは、そのままゲートをくぐる方法。

念能力者の監視さえなければ、絶を使つてうまく何とかなるかもしれない。

金属探知機はあるだろうから、その場合は荷物をすべて破棄する必要があるけど。

この方法が一番効率がいい、出来るのであれば。

あるいは車に交じつて越えることができればなおよい。

荷物も捨てずに済むかもしれない。

次に街道から逸れた山を越える。

サヘルタ合衆国とその隣国の関係は漫画には記されていないかった。

けど基本的に、そう簡単に国境線は越えられないと思つておいた方がいいだろう。

そうしないと一般人ですら密輸が暗躍しまくってしまう。

それでもピンポイントで人の出入りが多いゲートよりは、念能力者の監視が減るかも

しれない。

……あるいは逆。

人の目の多いゲートは一般人の数の暴力で監視し、そうでない広大な境は念能力者が監視する。

そのケースもあり得る。

前者は最初からあきらめようかと思っていたけれど、トライする価値があると私は判断した。

まずは荷物を捨てずに済む、車の横を通り抜ける方法。

結果から言うと、想像以上に簡単に通り抜けられてしまった。拍子抜け。

絶を使い、車の陰に隠れて、同時に合わせて歩き始める。

ゲートが見えなくなるまでは絶を使い続けた。

途中で念能力者に声を掛けられる覚悟もしていたんだけど、全くそんなことはなかった。

もしかしたらサヘルタと隣国は案外仲がいいのかもしれない。

基本的に、隣国とは直接利益関係が出てくるから仲が悪いのが常道なんだけど。

とはいえ、私にしてみれば超ラッキー。

このまま私は徒歩で（途中からタクシーに乗って）港町へと直行する。

地図アプリを見ると、まだ団長さんはサヘルタにいる。多分先回りできるだろう。

『グリードアイランド』から海を挟んだ、ヨークシンシティから真東にある港町へと。

徒歩で歩く時は常時おもりをつけて。

タクシーに乗っている間は纏と練。

少しずつでも私は修行する。

格闘に関しては下手に自己流で知識を植え付けるより直接団長さんに教わった方がいいだろう。

団長さんにその気があればだけど。

タクシーの運転手さんがなんかゾワゾワしたのは私の練のせいですが、ごめんなさい。

敵意がないから大丈夫だといいなと思つてたけど、やっぱり無効にはならなかつたみたい。

運転に支障が出ると困るので、練の修行はやめた。

左手にオーラを集めて、体を通つて右手のこぶしへ攻防力移動。

やっぱり私の予想通り、オーラが増えるほど私の絶と流のレベルが落ちている。

同時に今後は絶と流の技術も維持していくために修練を積む必要があるかもしれない。

い。

港町に到着するまで、私はひたすらそれをやり続けた。

第十三話

マツセツチュという名の大きな漁港。

それがグリードアイランドから真西にあるヨルビアン大陸の港町の名前。

漁港であるがゆえに観光客は少なく、宿泊できるのは民宿が2〜3軒だけだった。

私はそのうちの一つに宿を取った。

民宿を切り盛りしているおぼちゃんは海の女と言った風情で貫禄があり気風が良く、食費を節約したい私に快くガスコンロを貸してくれた。

毎日三食、袋ラーメン。

私にすれば、なんて御馳走。

見かねたおぼちゃんが時々魚のあらをくれた。

酒と砂糖と醤油で炊いて、皆にふるまったりもした。

一時間に一回、私は地図アプリを確認した。

団長さんは緩やかなスピードで東へ向かってきた。おそらくは飛空船。

それ以外の時間は、私は纏と練、そして筋肉増強。

漁船に乗って仕事の手伝いなどもした。

民宿で出す牡蠣の殻を剥く仕事なども手伝ったりした。

そのお礼にといくつかもらった牡蠣を焼いて食べた、初めての経験。美味しい。それしか言葉がなかった。

どうも私は甘いものよりしょっぱいものの方が個人的に好きらしい。

わずかに垣間見えた海辺の食生活は私にとても合うものだった。

保存のために塩漬けにして干した魚、三枚におろして皮をはいだサバのような魚。

細長い殻からにゅつと足？ が飛び出している不思議な形の貝も、焼いて食べると美味だった。

民宿のおばちゃんは、私にいろんなものを食べさせてくれた。感謝。

感謝の正拳突きでも始めようかと思った頃に、団長さんが最寄りの空港へと到着する。

その空港からこの町へ、車を使えば二時間半、徒歩なら一日はかかるかな？

団長さんが町に入らない可能性を考慮しておかなければいけないだろう。

私はお世話になった皆さんにお礼を言って、民宿を後にする。

あとは纏や練をしながらアプリとにらめっこだ。

光の点に合わせて、私は自分の位置を調整する。

やがて光が町の中に入る。速度的に団長さんはおそらく徒歩でここに来た。

もう、大丈夫。私は携帯をしまい込んで、最後に見た光の方向へと向かった。「ダンチヨーさん、おひさしぶりです」

「えっあれ？ エイラ？」

アジトで会った時の団長さんは、少し張り詰めた表情をしていた。

今の団長さんは柔らかい雰囲気、どこにでもいる青年の姿に擬態している。

私は団員からのメッセージを団長さんに伝える。

一方通行のそれは、団員との接触到にカウントされなかった。

そして、私の能力の説明をする。

パクノダさんの能力を、意図せず奪ってしまったこと、そして彼女の死。

私は自分が鍛えたいこと、出来るなら団長さんに手ほどきを受けたいことを願っていた。

「でもオレ、人に教えたことなんてないよ」

天才は人に教えることを得意としない。

何故なら彼らは詳しい説明なしに全てをやったのけるから。

だから教わるならできれば秀才の方がいい。彼らは努力でその場にいるのだから。

それも踏まえたうえで、私は団長さんをお願いする。

私は一足飛びにでも強さを身に着けたい。パクノダさんの念を有効活用するために。

それともう一つ……私がパクノダさんの能力を利用できなかった場合。

団長さんが能力を取り戻してすぐに『能力を盗んでもらうため』に。

私は団長さんの傍に居たかった。

そのことも伝えた。団長さんは少しだけ考えこんだ。

「エイラ……一か月経つてはいないが、オレの状況は大きく変化した。これでもまだ、今占つてその的中率は下がるのか？ ……というより、本当に一か月以内だとの的中率が下がるのか？」

……一か月以内に占うと的中率が下がる。これは、『前の世界』での私の占いだ。

この世界において私は未来を知っている。

なので正直、占った時に出るカードは何でもよかった。

カードの意味と知っている内容を結び付けるだけでいい。こじつけでかまわないのだ。

そもそも私は、占い師は一種のカウンセラーであると思っている。

相手を観察し、相談内容を吟味し、相手が欲しがっている言葉があればそれを提供する。

特になければカードの指し示す方向を提示する。

「……的中率は、下がります。けれど当たらないとは言いません」

「ここが、私に譲れる最大の、嘘のない言葉。」

「団長さんはこの言葉を信じてくれるのか、それとも……」

「……OK、エイラ、今からオレを占ってくれ。内容がどうであろうとオレはお前を信じる。そしてその代償に、オレがお前を鍛えよう。多少スパルタにはなるだろうが」

「念能力に関しては使えないし見えないので何の役にも立たないがな。」

「団長さんはそう付け加えた。」

「私の理想通りの展開だ。願ってもない言葉が返ってきた。」

「一つ気になることがある……お前は今日、『愚者』のカードを使ったんだな。なら、明日、『女教皇』のカードを使ってみてくれ。まだ、使ったことはないだろうか？」

「旅団メンバーと別れてからずっと団長さんを追っていたから、『女教皇』のカードを使ってみる余裕はなかった。確かに、一度も使っていない。」

「これはあくまでオレの予想だが……お前は現状でもパクノダの能力を使うことができるかもしれない」

「……！」

「私の能力は相手の命を奪うことなく能力だけを奪い取る。」

「けれどパクノダさんは死んだ。……すなわちそれは、死者の念！」

「パクノダさんが死んだ後、私はカードを具現化できていた。」

つまり能力を使用することができる。

団長さんの能力とは違い、死者の能力もそのまま使用することができるのか、それとも死者の念としてここに留まってくれたのか。

どちらかはわからない。けれど私にも使えるかもしれない！

私はその可能性にようやく思い至り団長さんの顔を見ると、とても優しい笑顔をしていた。

まるで最初に会った時のような。

いや、あの時のような貼り付けた笑顔じゃない、本物の笑顔。

「ありがとう、エイラ。お前の存在が、パクの無念を救ってくれた」

きつと団長さんは、心の底からそう思ってくれている。

だからこそ、私を鍛え上げようという気にもなってくれたんだろう。

……期待に、応えなければいけない。絶対に。

第十四話

パクノダさんの能力を試すため、また、船を手に入れるために。

私は再び民宿に戻ることになった。

私が彼氏を連れてきたと、民宿は上を下への大騒ぎとなったけど、それはまた別の話。

いくら否定しても「大丈夫！ 全部わかってるから！」みたいな顔された。何故。

一泊して、私は昼前まで修行を続ける。団長さんは船を見繕いに行った。

そして昨日『愚者』のカードを使った時刻を過ぎて、私はカードを具現化する。

『女教皇』

パクノダさんのカードを引いた。

そういえばこの女教皇の絵は雰囲気が少しパクノダさんに似ている。

鼻が高く、センター分けのボブヘアで。

だからこのカードになったのかな？

まずは拳銃を具現化……可能。私の手の中にはずっしりとしたリボルバーが在る。

一旦それを消して、民宿のおばちゃんのもとへと向かう。

「ねえねえおばちゃん、おばちゃんは旦那さんのこと、好き？」

肩に手を置いてそれ越しにおばちゃんがつづいている最中の鍋の中を覗き込みながら、そんなことを尋ねる。

旦那さんが漁師だということはすでに知っていた。

「あらやだよこの子ったら、……まあ、嫌いだったらこんなにも長く連れ添っちゃいないだけだね」

私の脳裏には同時に、色黒でガタイのいい若かりし頃の旦那さんが、不似合いなバラの花束を差し出して若い頃のおばちゃんにプロポーズしている場面が映し出されていた。

……記憶を読み取る能力、可能。

あとは、団長さんが帰ってきたらこのプロポーズシーンの記憶を打ち込んでやろう。

それができれば、記憶弾メモリーボムも可能。

外に出て、人のいない方へと進む。

拳銃を具現化して、その辺の木へと向かって撃つ。

OK、武器としてのリボルバーの使用は可能。

そして私は、その場に倒れ込んだ。

目が覚めたのは、夕方、日の暮れる直前。

数時間眠っていたようだった。リボルバーは消えていた。

オーラを使い果たしたのか、はたまた『死者の念に食らい尽くされた』のか。

パクノダさんは私に対して悪意を持っていなかったと思いたい。死ぬこともなかったし。

故にこれは純粹に、私のオーラ不足が原因だと言えるだろう。

ずっしりとした疲労感を抱えて民宿へ戻ると、すでに団長さんは戻ってきていた。

「なるほど、使用自体は可能、ただしそれなりのオーラが必要だというわけか。やはり念能力の修行も同時に行うべきだな。せめてオレがオーラを見ることだけでも出来れば少しはそつちの役にも立てたんだが、まあ仕方ないだろう」

団長さんはすでに船を買い付けてきていた。小型のエンジンが載ったボートのようなもの。

それに、鋼鉄製の頑丈そうなオールを数本。

「この町の沖合に出ると海流が複雑に渦巻いている一帯がある。お前の基礎体力はそこで磨こう。まずはお前だけが、オールのみでその一帯まで舟を漕ぐ。そこからは、半日

はオールで出来得る限り東へ向かい、残りの半日は念の修行だ。お前が念の修行をしている間に、オレがずれたルートを戻しておく。念の為にエンジン付きの船を購入したが基本的には使わないと思っていてくれ」

そして団長さんが追加で購入したのが、寝袋と、キャンプ用の小型ガスバーナー、それに大量のドライベジタブルとレモン汁。

「野菜は大事だからな」

団長さんが私の持っていた大量の袋ラーメンを見てうんざりしたような表情をしていたのはそれだったのか。意外。

タンパク質はその場で釣ればいいと、釣り竿も数本買ってきていた。

「出発は明朝だ。今夜はぐっすり休んでおくといい」

もしかしたらベッドで眠るのはこれが最後になるかもしれない。

布団の重みをかみしめながら、私は眠りについた。

第十五話

どれだけ期間がかかるかわからないので、塩水を真水にろ過する装置も購入した。これですべてが準備完了。

「出港ー」

舟を漕ぐのは腕を中心に全身の筋肉を使う。

足で踏ん張らなければいけないし、力を無駄にすることなく腕に伝えるために体幹の筋肉も必須。

団長さんが潮の流れを読んだ的確な指示を出してくれるので、漕ぐ方向などについては考えなくても指示通りにただただ漕ぐだけでよかった。

およそ八時間、私は舟を漕ぎ続けた。

念の修行は同時進行で行われた。

常時纏。それだけと言ってしまえばそれまでだが、これがなかなか難しい。

体を動かしながら、舳先に集中しながら、かといって周をするわけでもなくひたすら纏。

慣れるまでに数日ほどかかってしまった。

慣れてからは練や周、堅、流なども試してみた。

駄目だマトモに念能力使うと八時間もたない。死ぬ。

「こんなところか。じゃあ次は食料調達の時間だ」

錨を下ろし、団長さんと並んで釣り竿を振る。おそらくこれは休憩時間にあたるのだろう。

波が穏やかな時は常時絶をするようにと言われたので、その通りにしている。

荒れている時は身体の危険があるので絶は使用しない方がいいそうだ。

釣りをしている間は暇なので、色々な話をした。

念能力の鍛え方、団長さんの出身地のこと、私の母親のこと、旅団員のこと。

お互いの『核心』には触れない。それは暗黙の了解。

魚はそれなりに釣れた。すでに日は傾いていた。

団長さんは袋ラーメンを食べるのを嫌がって、釣った魚を軽く半身にさばいて鋼鉄製のオールにのせて炙って食べていた。内臓やあらは海に捨てた。

私も食べさせられた。筋肉を鍛えるのに良質なタンパク質は必要不可欠。

ラーメンより魚を優先的に食べるように、そう言われた。

それからは睡眠時間。購入した寝袋にくるまって舟床に転がる。

柔らかな毛布に包み込まれているようで意外と寝心地は良かった。

疲労もあり、私はすぐに眠りにつく。

朝に団長さんに起こされるまで、ぐっすりと眠った。

ほぼ変わらない毎日。およそ三週間ほど経っただろうか。

私は絶でもオールを漕げるようになり、また、周だけで八時間漕げるようになってもいた。

(練や堅だとまだまだ無理っぽい)

団長さんが言っていた、海流が複雑に渦巻いている一帯。

それは見るだけで十分に理解できた。右から左に流れているそのほんの数m先では逆方向に潮が流れている。

ところどころに渦ができ、ぶつかり合って白い波を立てる。

眼前に広がる海原のすべてが、そんな海域だった。

「今日からはちゃんとした念の修行にも入る。一日四時間オールを漕いで、四時間を念のみの修行に充てる。特質系の修行方法は一概にこれとは言えない、個人差があるからな。なので最初は各系統の初歩的な修行から入ってもらおう。二時間は水見式による練の修行、二時間は各系統の修行だ、やり方は教えるがオレは結果を見ることはできないので、お前自身で己の能力がどの系統に適しているかを見定めろ」

己の特質系能力以外に全く適性のない能力者もたまにはいるが、おおよそいずれかの

系統にそれなりの適性を持つ能力者が多いと団長さんに教えてもらった。

特に多いのは具現化系と操作系だが、それ以外の系統に適性が抜きんでる者も特質系に限ってはそれなりにいるらしい。

水見式。私の能力は明らかに特質。

水で戻したドライベジタブルを水に浮かせて練を行う。

それは千切れながら分裂し、小さな二十二枚の野菜の切れ端となった。

切れ端を取り除き、改めて練を行う。それをただひたすらに繰り返す。

団長さんが、荒れた海の上でも水見式の邪魔にならないよう出来る限り揺らさないように舟を漕いでくれているのが分かった。

残りの二時間は系統別の修行。

「お前は初めてオーラを見たとき、何を想像した?……蒸気。湯気。大体はそう感じる人間が多いが」

「私もそうでした……蒸気が立ち上っていると、そう感じました」

「その感覚が大事だ。オーラを変化させるにあたって多くの人間が最も変化させやすいもの、それは蒸気だ。お前が新たに変化系の発を得たいと願うなら話は別になるが、特にそういつたことが無いのであれば、己のオーラを蒸気に変化させるよう念じろ、それが初歩的な変化系の修行になる。これだけはオレが目視で確認できる唯一の修行法だ

な」

なるほど。

変化させることに成功すればオーラの見えない団長さんでも蒸気を確認することができる。

……具現化系の場合はどうなんだろう？

「具現化系は修行そのものにリスクが大きいし、限られた時間の中では具現化することすら不可能だろう。よって他の四種類の修行を優先する。いずれにも効果がさほど見られない場合には試す価値もあるだろうがな」

そもそも私はすでにカードを具現化できている。

……余計なことはいらない方がいいということか。

「お前の場合はタロットカードを扱うことがそのまま具現化系の修行になると考えていだろう。念を纏ったお前のカード……最初はそのせいで、オレはお前が占い自体を能力としているのだろうと誤解した」

長く使い込んでいた間に、私のタロット自体がオーラを帯びてしまったのだろう。

一番最初の都市に居た頃も、よく当たる占いの出来る嬢としてご指名をいただきまくったものだ。

占ってるだけで時間が過ぎるから延長料金でウハウハになったりもしていたが、それ

もまた別の話。

「誤解とはまたちよつと違いますけどね、占いが能力なのには違いないですし」

「確かにそうだけども、そのカード自体が具現あるいは操作された能力かと思つたとい
うわけだ」

「なるほど」

なので即奪うことを考えた、そう言つて団長さんは笑う。私も笑つた。

私たちの能力はとて良く似ている。必要な手順は違えど、ともに奪う能力。

「オレたちはどこか似ているのかもしれない」

そんな団長さんの言葉が、私は嬉しかった。

第十六話

団長さんに教わって具現化系と特質系以外の初歩修行をしてみた結果。

私には絶望的に強化系の才能がないことが分かった。

いや、特質系の正反対に位置してたからうすうすわかつてはいたけれど。

逆に向いている系統は操作系。

多分六性図の通り、特質系を中心に操作と具現化に八割の力を割り振ることができるといえると思う。変化系と放出系はちよびつとだけできた。

というかそもそも団長さんの指示は多分、初歩の修行ではない。

それは彼が天才であることの証。

教えたことも教わったこともないがゆえに、独学で編み出した修行法。

なので才能がなくなつて初歩の初歩の強化系の力くらいなら私にだってあるはずだ。

と思う。多分。

団長さんは時々、ケータイで誰かと話をしていた。

彼の電話は衛星使用で世界中どこでも繋がるらしい。私のスマホは繋がらなくなつてたのに。

しっかりと話の内容を聞いていたわけではないので推測になるが、相手は多分イルミカヒソカ。

すでに除念師の情報を集めているのだろう。

本来の原作では団長さんがグリードアイランドに直接向かったという記述はない。

旅団員が外から訪れたときにレイザーが「久しぶり」だと言っていたことから、団長さんが（少なくともその時まで）島を直接訪れていないことがうかがえる。

何も無ければどこかでのんびりとしていたかもしれないのに。

私を鍛えるためにあえてこの道を選んできた。嬉しい。

だから先に伝えておこう。

「団長さん、この先さらに東にある島はグリード・アイランドという念能力者が作り出したゲームの島です。ゲームをプレイする以外の方法で島に侵入すると、製作者によってアイジエン大陸のどこかにばらけて飛ばされます。つまり、私と団長さんは別々の場所に飛ばされます」

「お前は、何故それを知っている？ まだオレに話していない能力を持っているのか？

……ああ、別に詳細を話す必要はない」

「はい、持っています。というより、その『グリード・アイランド』に関する知識を持っている、と言った方がより正確です」

「わかった。今更お前を疑ったところで仕方のないことだ。飛ばされた場合、オレはその場所からほぼ動かずに待機するからお前は『愚者』の能力を使って出来る限り急いでそこまで来い。修行は忘れずにな」

「わかりました」

今後の指針を示してもらい、私は引き続き魚を釣る。

操作系の能力でフライをゆらゆらと操作すると、釣果は操作しないときよりも多くなつた。

あと魚食べるの飽きた。

「団長さん、私は今夜はラーメンを食べます」

それは覚悟の証、制約と誓約。

今夜、私は、ラーメンを、食べる！

「勝手にしろ、ただし野菜を入れるのを忘れるな。保存料にも入ってはいるだろうがレモンの汁も入れておけ。海に出てもう随分と長い期間になる、壊血病にも効果的だ、ビタミンCは脳にも良い影響を及ぼす」

誰もそこまで聞いてないけど、了解です団長さん。

健康は、大事。

第十七話

渦潮が海のだ真ん中にくくつも発現するような異常海域に踏み込んでおよそ一か月。纏および絶、周の状態で四時間ぶつ続けで漕ぐことには成功した。

堅だと大体三十分程度。

それでも原作ゴン達と比べたらそれなりの才能だと考えていいと思う。多分。

異世界転生にありがちなチート能力が私にも備わっているのかもしれない、それなりに。

そしてその日が訪れた。これまで何も見えなかった海の向こうに大きな島が見えてきた。

「あれがグリード・アイランドか」

私は『愚者』を発動して、地図アプリ（GPSを使用している為これだけは使うことができた）を使ってフェイタンさんとフィンクスさんの位置を確認する。

彼ら二人が居る、あの島が間違いなくグリード・アイランド！

「上陸後は手はず通りに。次に会った時にそれなりの修行の成果を見せなかつたらその時は……わかっているな」

「はい」

ボコられるんですねわかります。

団長さんにボコられるならそれはそれで本望だ……などと不埒なことを考えつつ、私は島に向かって舟を漕ぎ続けた。

周をしていけば海流の有無にかかわらずそれなりのスピードで船を進ませることができる。

みるみる島は大きくなり、そして私たちはたどり着くことができた。

「やあ、ようこそ侵入者たち……というべきかな、招かれざる客は何年ぶりだろうか」

「初めまして、レイザーさん。私はエイラ、こちらはクロロさんです」

レイザーが虚をつかれたように私の方を見る。

まさか自分のことを知っていると想定外だったのだろう。

「ふむ、何らかの能力で知ったか、あるいはこのゲームの関係者のさらに関係者かな……わざわざ船を使ってここへ来た目的は？」

「単なる修行です。グリード・アイランドに侵入する目的ではないので、早々に飛ばしてくださいませ」

「なるほど、このカードのことまで知っているとは、それなりに優秀な能力者か、口の軽い関係者の知り合いのかな、例えばジンとか」

「それはご想像にお任せします。さあ、どうぞ」

団長さんは一切口を挟もうとしない。レイザーの力量を見測っているようだ。

「じゃあ遠慮なく、『排除』エリミネイト使用！」オン

私と団長さんは、それぞれにアイジエン大陸の各地に飛ばされた。

「さて、と……スマホは使えるかな？」

スマホを取り出して地図アプリを起動する。無事使用することができた。

もう国境は越えたくないなあ、などと考えつつ『愚者』を使用する。

オツケーオツケー、団長さんも私もカキン帝国内に飛ばされたようだ、ラッキー。

ただし場所は山脈を二つ越えて西の端（団長さん）と東の端（私）。

回り道するのも面倒だし山越えるしかないか。さすがにトンネルを掘るのは無理だ、距離がありすぎる。

カキン帝国の都市部は主に西海岸。まずは近くにある村か町かを探してお買い物するかなあ。

山越えは肉体的には問題ないだろう。念の修行も同時進行で行いながら、ぼちぼち向かいますか。

あつ、ラーメンと鍋を船に置いてきてしまった！

仕方ない、改めて買うとしよう。それまではナイフとライターで原始的な狩猟をするしかない。

あとは毒の見分け方を前世で読んだ漫画で知っているので、果実を採取。キノコは怖
いから嫌だ。

ひとなめして、様子を見る。特にしびれたり辛かったりしなればひとかけら飲み込
んでみる。

半日以上様子を見て異常がなければその果実は問題なし、以降は普通に食べる。

何の漫画で読んだんだったかな。仲間と団結、不可思議サバイバル漫画だった気がす
る。

好きなだけでなんの役にも立たないと思っていた時間つぶしの読書が、役に立つ日も
来るもんだなあ。

私は妙に感慨深くそう思った。

第十八話

絶を使って小動物に近付きナイフで仕留める。

毛皮をはいで内臓を抜き取り起こした火で焼いて食べる。

お肉おいしいです。久しぶりのお肉です。

絶を使えば狩猟もそれなりの成果になった。3回に2回は逃げられるけど。

そんな感じで今夜もご飯を食べていた。

危険な生物は炎に近付いてこないと思うので特に怖くはない。

「ピィ」

どこからか小鳥の鳴くような声が聞こえた。鳥？　こんな夜中に？

声のした方を見ると一本角の生えた子猫がこちらを見ていた。

怯え半分、興味半分といった感じだ。

猫って肉食だよね？　あつでももう焼いたウサギしか残ってない。焼いててもいい

よね。

ちつつちち、これ食べるおチビちゃん？

おチビちゃんはおなかが減っていたようで、焼いた肉でもペロリと平らげた。

そしてなんだか私に懐いてしまったようだ。

私は彼（彼女？）をゲレゲレと名付けた。

ゲレゲレは火に当たりながらコロコロと伸びつつ転がっている。

火をそのままにして私は寝て、起きてもゲレゲレはそこにいた。

一緒に寝てたようだ、毛皮のモフモフがもっふもふ。

いつまでもモフモフしてはいられないので、消えかけていた火をもう一度起こす。

「ピィピィ」

えっあつ朝ごはんかな？ 言われるがままに私は再びウサギを狩ってくる。

今度は生のままあたえようと、角で突き刺してわざわざ焼いて食べていた。

あれっこれっでもしかして、原作に出てきたキャンプタイガーじゃなからうか。

……あれカキン帝国だったっけ？

というか、この子の親タイガーはどこにいるんだろう。

一晩一緒に寝てて、もしかしたら危険だったかもしれないな。

火を恐れない猛獣の子猫。

猛獣は怖い。でもゲレゲレは可愛い。

「じゃあねゲレゲレ、元気でね」

私は道なき道を進む。ゲレゲレも後からついてきた。

「ゲレゲレ、私はやることがあるの。ついてきちゃダメ、わかる？」

「ピー」

全くわかってない様子で、角が刺さらないように収納したおでこをすりんと寄せてきた。

困った、希少種のキャンプタイガーを連れて行くわけにもいかないし、どうしたらいいだろう。

……とりあえず放っておこう。猫は気まぐれだ、気分次第でどこかに行くだろう、多分。

私はわしわしと先に進んだ。子猫は時々転びながらもついてきた。

ジャングルに近い森の中は常に薄暗い。そんななかで明るい一角が見えた。

誰かいるのかな？ 私はそのちらへと向かう。

前方に人影を見つけた。

その人達は焚き火のそばに座っている。二人。

「おつ、ボクたち以外にも人がいるなんて珍しいな、ヤハハ」

「あなたもハンターですか？ 私たちは国の依頼で生物調査をしているアマチュアハンターです」

……なんか見おぼえあるな、多分これあれだ、カイトたちのグループだ。

そういえばカキン帝国で生物調査をしてたっけ。

原作で出てきたシーンよりこんなに前から調査してたのか。

確か原作で出てきたのはキメラアント編序盤。まだまだ先の話だ。

「初めまして、私もアマチュアのハンターです。名前はエイラ。今は特に何をしているというわけでもなく、修行しながらカキン帝国を東から西に横断中です」

ゲレゲレは見知らぬ人にビビったのか、どこかへ消えてしまった。

……『愚者』の能力でどこに隠れてるのは知ってるんだけどね。

百メートルほど後ろのヤシミたいな木のカゲに隠れているのはわかっているのだよ、ゲレゲレ。

「ヒキヨーでシユギヨー、なーんて変わった子だね、ヤハハハ。ボクはスティック、スティックゥディナー」

「私の名前はバナナカヴァアオです。よろしくね」

他にも何人かでグループを組んでいて、それぞれに調査をしている最中だという。

二人は休憩兼火の番というわけらしい。

おっ、ゲレゲレが木のカゲから離れた。……このまま私からも離れてくれればいいけど。

そして健康に元気に育つんだよ。

「西へ行くんだったら、ここから南に五百メートルほどいくと川があつて西に向かつて流れてるから、その川を辿つていけばいい。水辺の方が色々と捗るしね、食料調達とか」
「山に登る川なんてのも珍しくてカキンならはだよね、どういう仕組みなのかはわからないけどさ、ヤハハハハハ」

有用な情報を得て、私は二人と別れる。

彼らのグループ以外にも調査グループはあるらしいので、また誰かと出会うこともあるかもしれない。

ちよつとだけカイトさんに会つてみたい気もしたけど、私にそんな暇はない。

南に下ると確かに小川が流れていた。しかも重力に従わず、西の山の方へ向かつて登つて流れている。

ステイツクさんじゃないけど、どういう仕組みなのか私も知りたい。

「ピィ」

……やつぱりついてきたか。いや知つてたけど。

ゲレゲレは自慢の一本角にウサギとネズミを一匹ずつ刺していた。

どうやら私に食べると言っているらしい。

いつのまにか立場が逆転してしまったようだ。私は彼（彼女？）のために火を起こした。

そして今度はしっかりと調べる。ゲレゲレは、彼だ。
可愛らしいナニがふたつ、お尻の下にちよこんと並んでいた。

第十九話

私は引きこもりではあつたけれど、決して人間が怖いわけではない。

たまには外出して、店で買い物をすることもあつた。

店員と雑談をすることもあつた。それくらいは平気。

ただ、私は壊れていたから、その時目の前でその店員が誰かに殺されたとしても、おそらく大して何も感じなかつただろう。

前の世界に、思い入れのある人物はいなかつた。

故に、眼前で死なれても何も感じない。

この世界に来て、私は初めて思い入れのある人たちを手に入れた。

しいて言えば母がそうであつたかもしれないので、初めてではないのかもしれないけれども。

旅団とそのメンバー、私は彼らのために強くなる。

私は彼らのために自分を鍛え上げる。

彼らと対等になるために、彼らと並び立つために。

できるなら、私も旅団メンバーとなるために。

「ミイ」

小川に沿って山を登る。一つ目の山脈。

子猫には辛いであろう道のりを、ゲレゲレはよくついてきてくれると思う。

鳴き声が、パイからミイへ進化した。

いずれはガオーになるのだろうか。それはちよつと見てみたい。

「ゲレゲレ、お昼休憩にしようか」

ツタで編んだ定置網に似たものを小川に仕掛けエサに道中集めたナッツを仕込み、私は火を起こす。

ゲレゲレは肉でも魚でも好き嫌いなく食べる。

内臓は主にゲレゲレに与えた。

前世で読んだ本の中に、猫に切り身だけ与えると栄養バランスが崩れると書いてあった気がするから。

もちろん内臓だけではなく、身も与える。

彼は喜んでそれらを炙って食べていた。

魚が捕まるまでの間、私は練の修行をする。

初めて練をした時は飛んで逃げたゲレゲレだったが、今では悠然と私のすぐそばに座っている。

ゲレゲレは今、常に纏をしているようだ。

私の練に触れても平気になったのはその為だろう。

自然に、ただ現在、己が居心地よくなるために、念能力を身に着けた子猫。

未来や過去に一喜一憂する私たち人間も、見習うべきところがあるのかもしれない。

仕掛けた網が激しく動く、どうやら魚がかかったようだ。

覗きに行くと、結構大きめのヤマメのような魚が2匹。

一匹ずつ焼いて食べた。私が残した内臓まで、ゲレゲレがきれいに平らげた。

それに加えて、キイチゴのような木の実。ゲレゲレは食べなかつた。

ずっと山を登っているけれど、どこにも人間の痕跡はない。

多分秘境と言われるような奥地で、人は住んでいないのだろう。

ラーメンが恋しい。

都市部に着いたら最初に袋ラーメンを食べることを心に誓い、火を消した。

「行くよ、ゲレゲレ」

「ミィ」

不意に人の気配がした。

善人か悪人かはわからない。ゲレゲレはすかさず逃げた。

二人……いや、三人。一人は念能力の使い手だ。

大きな荷物を抱えている。網に入った……あれは、死んだキャンプタイガー？
「そこに誰かいるよね」

しまった、気付かれた。

逃げてでも捕まるかもしれないので、私は彼らの前に出る。

「通りすがりの者ですが」

「こんなところを？ それに、こいつを見られちゃ生かしておけないな」

一人が親指でキャンプタイガーの死骸を指さす。密猟者か。

「というわけで、死んでね」

親指で指していた男がそのまま腕を私に向ける。放出系か？

大した力はなさそうだったので私は両腕に凝をして放たれた弾を防いだ。

「なんだ、お嬢ちゃんも『使える』のか、なら遠慮はいらねえやな。おい、お前らは手え

出すんじゃないぞ」

残りの二人にそう言って、彼はものすごいスピードで私に近寄ってきた。

おそらく足に攻防力移動、そのままその足で私にケリを食らわせる。

すべて見抜いていた私は両腕の凝を硬にして完全に防ぐ。恐らくこいつ本来は強化

系だな。

「やるじゃん」

再び距離をとって私たちは向かい立つ。

私も『女教皇』を具現化するか？ いや、どの程度使えるかまだ未知数だ、使わない方がいい。

再び男が地を蹴って私に接近する。

そこで互いに想定外の出来事が起こった。

「な……………」

男の背中から胸にかけて、一本の深く力強いオーラを纏った角が貫いていた。

男の口から血が吐き出される。

「ミィー！」

震える子猫。 怯える子猫。

それでも子猫は逃げずに立ち向かった。私のため？ ……それとも、もしかして。

「い、この野郎！」

残りの二人が銃を取り出す。この二人は間違はなく念能力者ではないようだ。

ゲレゲレを狙っているみたいだが男に当たりかねないので迷っているらしい。

私は瞬時に彼らの元へ行き、腹部に強く当て身をして眠らせる。

ゲレゲレが貫いた男はすでに事切れていた。

「…………ゲレゲレ？」

ゲレゲレの角を男から引っこ抜く。

彼は悲しそうな顔をして、倒れた男たちのそばに置かれた網の中のキャンプタイガーに近寄った。

猫にも表情はある。ゲレゲレとともに旅をして気付いた。

彼らの表現はとても豊かだ

そんな彼が、とてもとても悲しそうな声で、ただ一言ミイと鳴いて死骸にすり寄った。「ゲレゲレ……お父さんか、お母さんなの？」

ミイ……もう一度小さく鳴いて、私の方へと戻ってきた。悲しい表情はもう消えていた。

子猫が一回り大きく見えた。それは、オーラのせいだけではないと思う。

死んだキャンプタイガーを土に埋めて、ついでにゲレゲレに刺された人も別に土に埋める。

途中で気付いた男たちは、取り上げた銃を向けたら散るように逃げて行った。キャンプタイガーの墓に適当な石を置き、花を飾る。

「……行こうか、ゲレゲレ」

ゲレゲレは、元気にミイと鳴いた。

私たちは引き続き山を登る。そして下る。

小川は変わらず西に向かつて流れていた。

水にも困らない。食べ物にも困らない。

もつときちんとあの二人にお礼を言っておけばよかったなと思う。

情報は何よりも重要。彼らはそれを気軽に提供してくれた。

世界は悪い人ばかりじゃない、知っている。

世界はいい人ばかりでもない、良く知っている。

それぞれにそれぞれの事情がある、わかっている。

それでも私はとうに壊れてしまっていたから、出来るなら全人類の滅亡を願った。

自分には出来ないことがわかっていているから、幻影旅団に近付いた。

蟻の王に近付いた方が当初の私の夢は叶ったかもしれない。

けれど私はすでに、旅団に近付きすぎてしまった。

強い愛着、思い入れ、パクノダさん、団長さん。

私は旅団に依存する。己の夢の方向が少しずれたことを感じていた。

わかっている。本当は、私はただ仲間ともだちが欲しかっただけ。

最初にマチさんがそれをくれた。そして、パクノダさんも。

パクノダさんの遺志を継ぐだなんて大それたことは考えないけど、少しでも役に立て

ればいい。

両手に凝をして、眼前の邪魔な岩を砕く。

一歩ずつ、私は前進する。

一つ目の山脈を越えて二つ目の山脈を登り始める。

少しずつ、私は前に進んでゆく。

「ミイミイ」

うん、ゲレゲレ、君も一緒だよ。私の大事な仲間ともしたち。

でも危ないから使わない時はその角はしまっておこうね。

そういうとしょんぼりとした表情で、角を収納した。

第二十話

私は毎日タロットを触っていた。

触る時間を設けていた、一日におよそ一時間ほど。

カードを具現化する私はこれだけでも修行になると団長さんが言っていたからだ。

もう少し修行して、カード自体を武器として具現化できるようになれたら少し楽かななどと考えている。

イメージはヒソカのトランプだ。あれはおそらく具現化したものではないけれど。

いや、具現化系と変化系は相性がいいはずなので、もしかしたら具現化されたものなのかもしれない。

でも多分、違う気がする。ヒソカはそんなところにメモリを使わない、多分。

カードを触っている間、ゲレゲレは不思議そうにそれを眺めていたり、あるいは獲物を狩りに行ったりと、邪魔をしてくることはなかった。

最初にカードを見た時に興味津々で匂いを嗅いだりはしていたけど、すぐに飽きたようだ。

最近では私が練の修行をしていると、短時間ではあるが真似をして練をするように

なった。

もしかして私よりゲレゲレの方が念能力の才能があるかもしれない。

……水見式、させてみたい。させようがないのでどうしようもないけれど。でも彼は私の言葉をうつすら理解しているようだ。

休憩と言えば休憩、行くよと言ったら立ち上がる。

待つてと言えば待つ。ただし私の姿が見えなくなると追いかけてくる。不思議。二つ目の山脈を登り終えて、ちょうど夕日が沈む頃合いだ。

山を下った先の西の方にはたくさんの明かりが見える。都市部が近いのだろう。

ここまで、人に会ったのは二回。カイトチームの二人と密猟者。

それ以外には、これといった事件もなかった。

ひたすら纏と練、タロットをいじくり回してたまに獲物を狩る。

操作系の修行のために木を削って作ったフライで釣りをしたりもした。

そして暇さえあればゲレゲレをモフる。

しばらくはモフられるがままになっていっているのだが、途中でイラツとするのか凝をしたネコパンチやネコキックを繰り返してくる。時々硬。殺す気か。

やめてよね、そんなので死にたくない。なお爪は出してない模様。

日常は、そんな感じ。それもきつともうすぐ終わる。

ゲレゲレは街に連れて行っても大丈夫だろうか。

角は常時収納させることができるとはいえ、猛獣であることに変わりない。

街に着いたら、まず首輪とリードを買おう。そして猫だと言いつ張ろう。

まだサイズ的には成猫程度だから、問題はない……といいな。猫より足がめっちゃくちゃ太いけど。

「ミィ？」

ごめんねゲレゲレ、君を飼うつもりはなかったんだけど。

ここまでついてきたからには君にも飼われるものとしての覚悟と気概を叩き込むよ。

別にお手もお座りもできなくていいから、無神経に念能力を振りまくのはやめなさい。

私に叱られている時やお説教をされている時、ゲレゲレは絶で遠い目をしている。

獲物を狩るときもしつかり絶を使っているようだ。

絶はまあいいとして、それ以外は普段使わないようにしつけておかないと、人間の世界ではいきなり練を使うだけでも周囲の人が吃驚仰天だ。

「ゲレゲレ、戦うときと狩りのとき以外、練は禁止。凝や硬も禁止。特に他に人がいるときは絶対禁止。わかる？」

「ミィ」

「絶だけはたまに使ってもよし。普段はオーラを纏わずに垂れ流しなさい。わかる?」
「ミイ!」

あ、オーラ垂れ流し始めた。ホント賢いなこの子。もう私の言ってること全部わかってるんじゃないか?

私の言葉は理解しているのに、私に意思を伝えることが難しいのは歯がゆいだろうな。

でも私、猫語知らないしな。違った、キャンプタイガー語?

そんなものあるのかどうかすら知らないけれども。

まあ、なんとなくなら意思の疎通も出来るようになってきたので、問題はないだろう。間違ったら私が凝のネコパンチを食らうだけだ。

第二十一話

街におりてまず私がやったことは三つ。

最初にネカフェでシャワーを浴びて、自分の服を買う。ボロボロになった服のままだと目立つ。

ゲレゲレの首輪とリードを買う。彼は繋がれることにはそれほど不服を述べなかつた。

そしてこれが一番大事、袋ラーメン！

ラーメン屋さんでラーメンを食べたことがない私には、袋ラーメンが一番の御馳走。前の世界にいた頃に母がごくまれに食べさせてくれたそれは、しょっぱくてつるつるしてて最高の味だった。

ついでに鍋もまた買った。

そして荷物を抱えてリードを引いて、私は『愚者』を発動する。

スマホはネカフェで充電させてもらった。

地図アプリによると、この街の北端にあるカフェ、そこに団長さんがいる。

少し近付けばすぐに私に感じ取れる圏内へと入った。

「遅かったな。……なんだ『ソレ』は」

いきなりゲレゲレをソレ呼ばわりはいただけない。

団長さんに、大陸横断していた間の出来事をざつと説明した。

ゲレゲレという名前に軽く引いていた。

けれど『念能力を使える獣』にはいたく興味をひかれたようだった。

「ミイ……？」

ゲレゲレは不安そうに私を見上げる。

団長さんと肩を組んで見せた。

ゲレゲレは安心したように視線を外し、周囲をきよろきよろと見まわしている。

団長さんは軽く引いていた。

ごく軽くではあるが、念能力者と対戦したことも話した。

修行の成果がそれなりに出ているのだろうと感心された。

けれどほとんどはゲレゲレの戦果であることも話した。

団長さんは軽く引いていた。

そんなに引かれると凹んでしまいます。

「エイラ、お前は『グリード・アイランド』について知っていると聞いていたな」

私は頷く。飛ばされる前、私は確かにそう言った。

「オレは今、ヒソカと連絡を取つてある人物を探させている。その人物はグリード・アイランドの中にいるようだ。旅団員とも接触させている。どうやら人を介した接触はある程度までは『団員との接触』にはカウントされないようだ」

……そういうえば、そうだったな。

人を介する分には問題なさそうだ。ということのはつまり。

「お前にもグリード・アイランドに行つてもらおう」

やっぱりそうなりますか。

「今からお前に旅団の本拠地の場所とオレの連絡先を教える。まずは次のハンター試験を受けるといい。ハンターライセンスがあれば世界中をまたにかけて動きやすくなる。お前のように見た目が若い人間の場合持つていた方がより効果的だろう。それから、本拠地に向かつてメンバーと合流してもらおう」

「ちなみに今日は何日ですか?」

「十二月二日だ。先にライセンスの申し込みをしておいた方がいいだろうな」

次の試験……私にキルアと互角にやるだけの力が手に入ったとは思えないけど、とりあえずやるしかないか。

自分の実力を測るいい機会だと思えばいい。

「それから、明日もう一度『女教皇』を使え。以前に比べてどの程度使える様になったの

か、それで大体把握できる。特に武器としての銃の利用がどれだけできるようになったのかが重要になってくる。お前は攻撃的な発を他に持つていないからな」

パクノダさんは特質系だけど、能力を見る限りおそらく向いている系統は具現化系と放出系。

本来は具現化系だったのかもしれない。

よって放出系がそれほど得意でない私が武器として使用する場合、普通より多めのオーラを使用することになる。

以前使った時に一発撃っただけで倒れてしまったのはその為だろう。

逆に記憶を読んだり記憶弾は特質系メモリーボムなので、私はあまりオーラを使用することなく使えると思われる。

「それと……この虎に水見式をしてもらおうか」

え、いやそれは無理じゃないかと……。

「コイツはお前の言葉を完全に理解している。水に向かって練をするようにいうだけでやってのけるだろう。随分と賢い獣だな、こうしてみるとただの虎の子供のようだが」

無理だろうと思いつつカフェでお冷をもらい、やってみようと、全開で強化系でした
ありがとうございました。

水がコップからじよろじよろと溢れ出る。

「あんたほんと賢いねー」

おでこをカシカシと撫でてあげる。

ゲレゲレはノドよりオデコの方が撫でられるのが好きらしい。

ぐるぐると鳴らしているのはノドだけだ。

「お前は今後もこの虎とともに行動しろ、互いにならないものをフォローし合える関係性になれるだろう」

誰かと一緒に行動するのは少し苦手なんだけど、ゲレゲレだったら大丈夫、何も問題はない。

ちなみに団長さんとの時は一人の時間もちゃんとくれたので苦にはならなかった。

翌日、私は『女教皇』を使用して、リボルバーの弾の分、六発を撃てることが判明した。

七発目以降を装填すると気絶した。前と同じパターンだ。

半ばぐったりした状態で、私は団長さんを占う。

ワンオラクルしか無理です、当たる気がしません。

出たカードは『愚者』の正位置。

「現状維持で構わないと思います。信頼の意味を持つこのカード、旅団員への信頼を意味していると思われます。特に策を弄さずとも信念に沿って行動すれば、おそらくは団

長さんの願うがままになるでしょう」

いいカードが出た。団長さんは黙ってそれを聞いていた。喜ぶことも、悲しむこともなく。

そして私はハンター試験を申し込む。試験会場はピースカフマロ。知らぬ。

ひとまずキルアも凶狸狐の元へと向かっていた気がするので、私もそうしよう。

あとは地図アプリで探せばいいだろう。

ドーレ港へ向けて、私とゲレゲレは出発した。入船に身分証はいらなかった、よかった。

ゲレゲレはキャリーバッグの中でおとなしくしている。

あとでラーメン食べさせてあげるからね。虎にはよくないか。駄目か。

とりあえずキャットフード買ってきたから、しばらくはそれで我慢してね。

第二十二話

ドーレ港について、一本杉を目指す。

ドキドキ二択ばーさんが大声出しながら飛び出してきた時、ゲレゲレは腰を抜かして
いた。

ちなみに問題は原作と同じだった。

毎回問題変えればいいのに。その内バレちゃうよ。

そう言うところ「ここまでくる奴は毎年数人だからね、合格した奴はしゃべりやしないし
落ちた奴はたいてい死ぬから大した問題じゃないのさ」と笑っていた。

そして一本杉の根元に立っている家へと到着する。その頃にはゲレゲレもしつかり
歩けるようになっていた。

ノックして部屋へ入ると凶狸狐たちとキルアが談笑していた。何故。

「げっ、テメー」

「ん？ そのお嬢ちゃんからもほんの少しだけゴンの匂いがするねえ、知り合いかい
？」

ほんのちよつとしか一緒に居なかった私からもゴンの匂いがするらしい、凶狸狐の嗅

覚、悔れない。

「詳しい説明はしづらいんですが……私はゴンに小さな恩を売ってまして、その恩を返してもらおうとここに来たんです。キルア、例の件、願いは叶えてもらったってゴンに伝えておいて」

「願いつて、試験会場に行くことかよ」

「もちろんそうだよ。私と凶狸狐さんたちには何のつながりもないから、ただお願いするわけにはいかない。ゴンに頼まれて、という形で、私は凶狸狐さんたちに試験会場までの案内をお願いしたいんです、あ、この子も」

さつきからキャリーバッグの中に隠れていたゲレゲレを引きずり出す。

「おや、キャンプタイガーの子供じゃないか、珍しいもん見れたね、母ちゃん」

「そうだね父ちゃん、この国にはいない珍しいヤツだよ」

角を収納した状態でもキャンプタイガーだと見抜く凶狸狐の方が珍しいヤツだと思えます……。

「ゲレゲレ、この人たち怖くないから。仲間だから」

私はキルアと凶狸狐たちと順番に肩を組んで回る。

キルアにあほくさそうな目で見られた。悲しい。

「一緒に行くのは別に構わないけどよ、試験では敵だかな」

「もちろんわかかってるよ、キルア。対戦したとしても、お互いに遠慮なしで戦う。それでいいでしょう?」

しぶしぶと言った感じで、キルアは凶狸狐たちに、私が占い師であること、ゴンが「一つだけ言うことを聞く」という条件を付けて占ってもらったことなどを説明してくれた。

「そういうことなら問題ないよ。出発は明日だから、今夜はうちに泊まっていくといい」
凶狸狐（娘）が占いに興味津々だったので占ってあげたりもしつつ、私たちは一夜を明かした。

翌日、凶狸狐にぶら下がって私たちはビースカフマロへと向かう。

途中に休憩をはさみながら、おおよそ四日で到着した。

ゲレゲレはキルアにずいぶん懐いたようで、キルアもまんざらではなさそうだ。

ゲレゲレの爪と牙を見て「オレにも真似できるかな……」などとつぶやいていた。

「楽しかったよ、がんばりな」

「ん、サンキュ」

「ありがとうございます」

「ミイ」

それぞれにお礼を言つて、私たちは凶狸狐に指示されたマンションの503号室へ向かう。

諸々飛ばしてディックサクラで買物をして、エレベーターを使って会場へと案内された。

「じゃ、オレあつち行くわ」

「ん、お互いの試験の合格を祈るね」

キルアとも別れ、私はゲレゲレと二人、会場の端つこに座り込んだ。

「ねーゲレゲレ、ライセンスとれるといいねー」

「ミイ」

猫もちゃんと申請すればハンターライセンスとれるのかな？ 言葉喋れないと駄目

かな。

そんなことを考えながら、試験官が来るのをただ待っていた。

第二十三話

「ん~~~~~~~~、お前ら、殴り合うか？」

二時間の間に五人ぶつ倒す。それは、余裕。

問題は、キルア。

キルアが駆け抜けて次々と倒していく様を見たゲレゲレが真似をし始めて、次々と倒してゆく。

私、することがない。

とりあえず待っていた。

そして、キルアとゲレゲレと私以外のすべての人が倒れ伏した。

「やっぱこーなるか。つかゲレゲレすげーじゃん、あの女よりお前がハンターになった方がいんじゃないかね？」

「ミィー！」

ドヤ顔のゲレゲレはともかく、キルアだ。

彼をどう倒す、あるいは引き分けに持ち込む？

「えーと、とりあえずプレートを集めない？ それぞれの。決着はその後ということだ」

「オーケー」

時間稼ぎ、完了。

試験官は制限時間は二時間だと言った。

キルアがプレートを集め終えて彼の下に行くまでに、一時間半かかっていた。

ゲレゲレが倒した分は私が集めるから、時間は少し短くなる。

それでも一時間は超えるだろう。

残り一時間……キルアと戦ってみるか。

「ゲレゲレ、お座り。あんたは私とキルアの戦いを見てなさい」

およそ半数ずつのプレートを集め終わり、それぞれがゲレゲレの左右に置く。

「じゃあ、やりますか」

「言つとくけど手加減ナシだかな」

「リョーカイ」

いよいよキルアと相対する。

「よっしゃ、いくぜ」

おそらくこの時期、キルアはすでに『アレ』を持っている。

キルアが素早く私に駆け寄ってきた。特に何も意図は見られない、私は何もせずただ

かわす。

それを何度か繰り返す。

「オツケー、やつば他のヤツらと同じようにはいかないみたいだ」

おそらくそれは速度の確認。私にはキルアを視認できる。

かわすだけの身体能力も身につけられている。

「じゃ、次な」

今度は指をナイフのように尖らせて虎の爪のように私に切り込んでくる。容易くかわす。

やっっていることはさつきまでと何ら変わらない。

「恐怖とかも特にナシ、と……ねえ、さつきから何もしないのはなんでさ？」

「一撃食らってから反撃しようと思って。速さでは私はキルアに敵わないからね」

特に嘘をつく必要もないので、思った通りに答える。

勝ちたいわけじゃない、でも負けるわけにいかない。

現状のキルアと比べて自分がどの程度まで達しているのか、それを見極めるいい機会。

「その割にはさつきから逃げてばっかじゃん」

呆れ顔でそう返される。だって明らかに手加減されてるんだもん。

次は肢曲。彼は十人弱に分裂した。でも、知っていれば見分けることはできる。

一人だけオーラの量がわずかに多いキルアがいる、それが本体。本体が他に移ることはあっても、その都度見分けることができる。

「手加減ナシじゃなかったの？」

さつきからキルアが使っているのは暗殺技術だけだ。念能力は微塵も使用していない。

肢曲を使った十人ほどのキルアが一斉に攻撃を仕掛けてきたけれど私は本体の攻撃を防ぐだけ。

念を使用するまでもない。

「キルア、そろそろ念能力を使ってみたらどう？」

「そだね、普通にはやれないことがよつく分かった、よつと！」

キルアは自分の背後に隠した左手から電気を纏わせたヨーヨーを振りかぶって私に向けて投げつける。

当たれば痛いし痺れもするだろう。けれど当たらなければなんてことはない。

私はヨーヨーをかわした、背後で壁にめり込む音がする。

私が着地した場所に彼は先回りをして、凝によるパンチ、そしてヒットアンドアウェイ。

堅をしていなかったら即お陀仏だっただろう。

「げっ、意外と固いのな。強化系？」

「まさか、強化系は一番苦手な科目よ」

私はカードを具現化する。二十二枚の大アルカナ。

そのうちの一枚をキルアに向かって投げる。

紙一重でかわしたキルアのすぐそばで轟音とともに灼熱が炎をあげた。

『太陽』のカードはひたすらに燃える。雲のない真夏の太陽みたいだね」

私の意図したタイミングで『太陽』は爆ぜる。

彼も堅で防いだのか、それとも私の修行不足か、ダメージはさほど大きくはなかった。

「なにそれヒキョーじゃねえ？」

「お互い様でしょ。まだカードは二十一枚残ってるよ」

これは私の嘘^{ブロンフ}。

確かにカードは二十一枚残っているが、『太陽』のように特殊能力をつけたカードはあと一枚だけ。

まだ全部考えてもいないし思いつかなかったものもあるし、なによりオーラが全然足りない。

つまり二十枚はただのカードでしかない。

念で具現化したものだから一般人相手ならそれなりの殺傷能力はあるかもしれない。

でも、念能力者にはまず通用しないだろう。

「いつの間にそんなに強くなったのさ」

「それこつちのセリフなんだけど。随分いい師匠に出会って修業したのね」

「まあな、いいかどうかは知んねーけど散々修行はしたよ」

肉体的な能力は互角より暗殺技術の分だけキルアが上。

念能力はほぼ互角か気持ちだけ私が上、すなわちトータルだと私がちよつと負けてる……かな。

近距離の対戦に弱いのも私に不利だ。

一応倒れている人たちにはお互いに気を使っているので本気で戦っているとはいいいがたいかもしれないけれど。

船の上で培った私の体内時計が鐘を鳴らす。二時間が経過した。

「おーいお前ら、いつまで殴り合って……ん……だ……だ……？」

扉から入ってきた試験官が絶句する。

「ミィー！」

何かのお供え物のようにゲレゲレの横に積まれたプレートが二つ山。立っているのは残り二人。

「……終わりかな」

「そだね。また機会があればやろうね、キルア。今度は邪魔のないところで」

「次は圧倒してオレが勝つかんな！」

私たちは二人して試験官に向かう。

「やる？ 二次試験」

試験官が誰かに電話をかける。おそらくはネテロさんだろう。一次試験で合格者が二人になってしまった、どーすんべ、みたいなの。

結果、私達二人がそのまま今期のハンター試験合格者となった。

第二十四話

キルアとともにハンター講習を受けた。

キルアが別れを惜しんだのか必要以上にゲレゲレをモフった。

結果、ゲレゲレが超ネコパンチでキルアを吹っ飛ばした。

「あいててて……マジパねーなゲレゲレ。まさかの念能力者かよ」
「ミィー！」

よほど懐いたのか、凝だったところにゲレゲレの愛情を感じる。

私相手だとほぼほ硬だからな最近。

そもそも人相手に念能力は使うなって言ったのに……。

キルアも使ってたから大丈夫だと判断したのかな？ だとしたらすごい賢いな。

どんだけ賢いのキャンプタイガー。

そしてライセンスを手に入れ、キルアに別れを告げる。

これで身分証ゲットだぜ！ 国外への飛空船も乗り放題だ！

私は団長さんの指示通り、旅団の本拠地へと向かう。

飛空船で三日ほど、それから徒歩でも三日ほど。

国境は越えたが問題ない。ライセンスがなくても問題ない。

何故ならそこは見捨てられた地域。入るも出るも捨てるも全て自由。

そんな街のはずれに、蜘蛛の本拠地はあった。

廃屋に近いコンクリート四階建ての建物。一階には瓦礫の山と逆十字の祭壇。

探してみたけれどそんな本拠地のどこにも誰もいなかった。

入れない部屋もあつたけど人の気配はなかった。

二階の一部屋に、グリードアイランドらしき機械が二台。いずれも稼働中だった。

おそらくは全員中に入っているのだろう。

TV画面を見る。一台はフィックスさんとフェイタンさんとシズクさんとシャル

ナークさんと知らない人。

もう一台は両方ともにマルチタップが付けられていて、コルトピさんとフランクリン

さん。

空きスロットは六つ。全員ではなかったけど何の問題もない。

……あ、ゲレゲレはプレーヤーとして認識されるのかな？

念に關しては問題ないけど、ブックもゲインも無理だろう。虎だし。

いったん私だけ入ってイータさんに聞いてみるか。

「ゲレゲレ、私は今からここから消える。一か月、この周辺で自力でエサを何とかして寝る場所はここなら安全だと思う。一か月以内に戻ってこなかったら、その時はもうここからも出て自由にして構わない、いいね」

硬のネコパンチ。こちらも硬で受け止める。

ここでゲレゲレのワガママをきくわけにはいかない。

ゲレゲレの目をじっと見つめる。

先に逸らしたのは、ゲレゲレの方だった。

「ミイ……」

「寂しいのはわかる。でも必要なことなの。もしかしたら数日で帰ってこれるかもしれないし、出来るだけ早く帰ってこれるように努力する。だからゲレゲレも我慢して。あ、あと人は襲つちやダメだからね」

大丈夫だとは思うけど念の為釘を刺しておこう。

戻ってきた時にゲレゲレが駆除されてたら泣くに泣けない。
「じゃあ、行ってくるね」

空きスロット分準備していたのであろう、その場にあつたメモリーカードを一枚差し、練。

無事スタート地点に転送された。

「グリード・アイランドへようこそ……」

「初めまして、イータさん」

「あら、私のことをご存じなのですね、うふふ」

知っているからといって特に目新しい情報を聞けるはずもなく、ゲームの説明とゲレゲレのことを聞いて階段を降りる。

そして、シソの木の根元に降り立った。

第二十五話

シソの木から北に向かうとアントキバに到着する。

さらに北に向かうと山賊だの怪物だのマサドラだの。

ひとまずはゲームから出ることが最優先なので適当にモンスターを狩りつつマサドラに向かう。

狩ったモンスターをすべて売って買えるだけ呪文カードスベルを買う。

『離脱』リフトは出なかった。ちっ。

マサドラからさらに西へ五十キロ。大金なんかないので所長をぶん殴る。

強化系じゃない私でも割と簡単に倒せたので、意外と『離脱』リフトよりこっちの方がねらい目なんじゃないだろうか。

もつともここに来るまでにまたさまざまモンスターと遭遇したけど（だいたい逃げた）

そしてチケットを使って現実に戻る。

流星街唯一の港アガベ。そこに飛んで、本拠地へと戻る。

グリード・アイランドに入ってからこの間、およそ十日。

ゲレゲレはおとなしく待っているだろうか。

本拠地に入るとボノレノフさんとマチさんが居た。ゲレゲレもいた。

「ミヤイアイ」

形容しがたい鳴き声をあげてゲレゲレは私の懐に飛び込んでくる。

勢いあまつて倒れ込む。強化系の愛は重い。

「待たせたね、ごめんね、ただいま」

「その子、あんたのペットだったのね。危うく殺すところだったわ」

で、団長は？ と聞かれる。あつたことをそのまま伝えた。

船で修業をつけてもらったこと、グリード・アイランドに上陸したこと、ゲレゲレと出会ったこと、ハンターライセンスを取りに行ったこと、一旦グリード・アイランドの中に入ってゲレゲレがプレーヤーとして参加できるかどうか聞いてきたこと。

そして何より重要なのは。

『団長はまだ念を取り戻してない。でもヨークシンの真東にグリード・アイランドがある。すなわちグリード・アイランドの中に除念師がいる』

「なるほど、シャルの分析とも一致するな」

「あ、シャルナークさんも戻ってきてたんですか？」

「ああ、今はゲーム内に持ち込む品を探しに行っている。他のメンバーもそれぞれそう

だ。数日中にはここにまた集まるだろう。旅団員が一人増えたから、その時にでも紹介しよう」

そして二日で、団長さんを除く旅団メンバー全員が本拠地に集合した。

一人増えた旅団員はヒソカの抜け番、旅団ナンバー4のカルトちゃん。

「初めまして、カルトさん。私は故あつて旅団とともに活動しているプロハンターのエイラと申します」

「……よろしく」

そっけない。だがそれがいい。

愛想のいいカルトちゃんなんてカルトちゃんじゃない。

「で、エイラ、団長は何だつて？」

「私がグリード・アイランドの、全てではないですが知識を持っているので、それを有効活用するようにと。ちなみにその虎はゲレゲレと言って、私の相棒です。念も使えます。空きスロットを使わせていただいてスタート地点の人に聞いて、この子もグリード・アイランドに入れることは確認済みです」

シャルナークさんはうーんと首をかしげる。

「確かにグリード・アイランドの情報自体は必要なんだけど、別にクリアを目的としてるわけじゃないしなあ……」

「それよりもむしろあそこにいる除念師、ですよね」

「あ、やっぱ団長もそう思ってた？」

「はい。ヒソカさんに除念師を見つけてくるよう依頼しています」

「それはもう知ってる。中でヒソカに会ったから」

なるほど旅団員とヒソカとの接触は完了していると。そういえば団長さんもそう言ってたな。

「で、詳細は言えないけど人を探す能力を持っているボクがメンバーになった」
なるほどなるほど。

それでこれからカルトちゃんを連れてみんなで中に入ってアベンガネを探すのか。

「私にもヒントなら見えました。その除念能力者は頭部を含む全身を覆うマントを着ている……と思います、占いにしました」

「へえ、それは確度はどのくらい？」

「さあ……私の占いはそれなりには当たりますが100%とはいきませんので」

キルアがグリード・アイランドに戻ったということは「爆弾魔」の一斉爆破はもう終わったということだから、アベンガネは念獣とともにマントを羽織って隠れているはず。

ただ、正直このあたりの細かい時系列まではよく覚えてないな。

「私は引き続き修業したいので、マサドラ近辺でモンスターを狩って呪文カードスベルを買うことを繰り返したいんですが。皆さんが除念師を探すにも呪文カードスベルがあつた方がいろいろと便利でしょうし」

「そうだね、別に全員が一緒に行動する必要はないし、構わないと思うよ」

「オレたちは引き続きプレイヤー狩りするかね」

「それもいいけど、ヒソカを監視する役目が一人か二人必要かな。万が一向こうが先に除念師を見つけてしまったらこっちの計算も狂うし」

メンバーがばらけるのなら私が中継役として動くのもアリかな。

そうシャルナークさんに伝えて了承を得る。

グリード・アイランドの中でケータイは全く使えない。

私の『愚者』の能力があれば誰がどこにいるかは一目瞭然だし、呪文カードスベルを多数保持していればメッセンジャーにもなりやすい。

「よし、じゃあ誰かに伝えることがあつて手持ちの呪文カードスベルが心もとなかつたらエイラの所に行くということ。面倒だつたらその辺の誰かから奪つてもいいけど目当てのものを持つてるとは限らないしね」

フランクリンさんがヒソカの監視、フィンクスさんとフェイタンさんはプレイヤー狩りの続き、私はマサドラ周辺をウロウロ、それ以外は除念師を探すのに専念することに

なった。

そして私は再び、グリード・アイランドの中に入る。
今度はゲレゲレも一緒に。

第二十六話

グリード・アイランドに入って、まず私はゲレゲレを待った。

ゲレゲレが指輪をくわえてやってくる。それを受け取って、左手の指にはめる。

右手には自分の指輪がはめてある。

これも一種の裏ルール。念能力を持ったペットがいる場合、ペットにもアカウント一
つ使うことによつて一人で二冊のバインダーを所持することができる。

そもそも念能力を持ったペットつてのがレアすぎてルールにしづらいところはある
んだろうけど。

なので私には二冊分のフリーポケットがある。

マサドラでの呪文集スベルめに立候補したのもこのためだ。

右手を前に出してブックと言えば私のバインダー。

左手ならゲレゲレのバインダーが具現化される。

両方同時に出せないのは難点だが、それを補って余りあるほどの圧倒的優位性！

……近頃思うのだが、旅団と接触し始めてから、人生が楽しい。

性格が変わってきている気すらする。

仲間ができるって、こんなに違うものなんだろうか。

最初は生き残らなければならぬって感じだったけど、今は生きたい！　って感じ。

「ミイ？」

ゲレゲレの存在も大きい。無条件に私を愛してくれる個の存在。

「まずは北に行こうかね、ゲレゲレ」

「ミイ！」

指さした方向に向かって意気揚々と進むゲレゲレ。ありがとう、君に救われてるよ。

「ちよつと待った！」

誰か出てきた。呪文カードスベルかけるつもりかな。

あいにく入ってきたばつかなのでバインダーのフリーポケットのカードはすべて消滅してしまっている。防ぎようがない。

「ブツク！」

右手のバインダーを出す。嘘ブラフは必要。

「新人さんかい？」

「いえ、二度目です」

「ふうん……じゃこつちにしとくか」

殺すか？ 面倒。

ゴンと同じ作戦でいこう、相手を取り出したカードを即座に奪う。

「……！」

「このカードはもらうね。まだやる？」

「……ちつ、『再来』^{リターン} オン、マサドラへ！」

即行で逃げて行った。殺しちゃってもよかったかな。

手に入れたカードは密着^{アドヒージョン}。とりあえずバインダーにしまおう。

他にも視線は感じるけど、襲いかかってくる奴らはいないみたいだ。

「よし、行くよゲレゲレ」

「ミィ」

ゲレゲレなりに、一生懸命今のやり取りを理解しようと努めている。

ゲームに入る前に意味が分からなくても説明を聞いて来いと命令した。

いい子、かわいい子、賢い子。あんたならこのゲームのシステムを理解できると信じるよ。

アントキバを越えてマサドラへ到着した。

特にモンスター狩りはしていないので、バインダーには最初に奪った密着^{アドヒージョン}だけ。

これ売って、食料とライターと水を買う。

「じゃあまずはモンスター狩りに行こうかね、ゲレゲレ」

「ミイー！」

ゲレゲレ的には街に居るよりも草原や森に居る方が居心地がいいようだ。

元々は野の獣だからだろうね。

マサドラから東に向かうと湖がある。とても大きな湖だ。

私たちはその一区画にキャンプをはった。

とはいえ別にテントも寝袋も何もないけど。

ただ火を焚いただけ。煙が上がってるから人が寄ってくるかもしれない。

そうしたらまたカードをいただこう。

野生の動物もそれなりに居る。これらはカード化するものとしらないものに分けられる。

そもそもここに存在していた獣たちと、モンスターとして作られた獣たちが混在しているのだろう。

食料もいらなかったかもしれない、まあいいや。

「ゲレゲレ、まずは狩り。二手に分かれていっばい獲物を集めよう。カードになったらそれもここに持ってきて」

「ミイ」

「集めてきたらここで休憩。おなががすいたらカードになつてない奴を食べてもいいよ」

「ミイイ！」

子猫のゲレゲレの二大欲求は食欲と睡眠欲。タマタマを使うのはまだだいぶ先の話よね。

すでにおながが空いているようだったので、食料の中から肉を一つ現実化してゲレゲレに与える。

さあ、一狩り行こうぜ。

第二十七話

一度目の狩りによって、マリモツチ四枚・リモコンラット三枚・一つ目巨人三枚・メラニントカゲ二枚・バブルホース一枚・ハバヒロバチ三枚・スマイルスライム五枚・キチキチキチバツタ五枚・ヒヒマント三枚を手に入れた。

カード化できなかったモンスターは全部置いてきた。

そしてそれ以外に、食べられそうな獣を数種二日分程度、抱えて持っていく。

私が焚き火に戻るとゲレゲレは先に戻って待っていた。訂正、先に食べていた。

「ミイー！」

ゲレゲレも同程度のカードを持つて戻ってきていたようだ。それらを全てバインダーに納める。

ゲレゲレが持ってきたカードのほとんどは時間が間に合わなかったせいで元に戻ってしまっていたがそれは仕方ないだろう。

フリーポケットにはまだまだ余分がある。

もう一回くらい狩りに行って、それからマサドラに売りに行くか。

入り口からそう離れていないこの辺りだと、高値で売れるようなモンスターは出ない

と思う。

なのでひたすら繰り返す。延々と繰り返す。黙々と繰り返す。

マサドラでバイトするのとどっちが割りがいいかな……なんて考えながら、二度目と三度目の狩りを終えた。

二冊のバインダーのフリーポケットがほぼ埋まったので、ゲレゲレと二人でマサドラに向かう。

そういえばマサドラでも指定ポケットのカードを取るイベントとかあるのかな？

原作には出てこなかったけど調べる価値はあるかもしれない。

GETしたらもちろん売り飛ばす。

ひとまずはモンスターを全部売って、五万ちよいになった。

まずは島の地図を購入。

これで『愚者』を使えば旅団メンバーを含め会ったことのある人間なら居場所が特定できる。

つまり、トレース追跡のカードは私には必要ない。出たら売り払おう。

残ったお金でスベル呪文カードを一パックだけ買う。

出たカードはリフレクション反射、アナリシス解析、ピックポケット掏摸の三枚。

私的には絶望的にクズカードだ……泣きたい。

カツとなった私は残ったお金で二バツク買う。いずれもクズカードだった。涙。
旅団員との交信の為にコンタクトマグネティックフォース交信や磁 力あたりのカードの枚数を揃えておきたい。

そのためには……今のモンスター狩りだと途方もなく時間がかかりそう。

食料は狩れるから、これ以上は必要ない。水は必要。小銭も処分しよう。

とりあえずマサドラで情報を集めて、指定ポケットのカードが手に入らないかどうか探ってみよう。

場合によってはアントキバあたりまでなら戻ってもいいかもしれない。

懸賞の街だし、マサドラより稼ぐには向いてるかもしれない。

「ゲレゲレ、嫌かもしれないけどこれからしばらく街をウロウロするからね。離れて一匹で行動してもいいけどどうする？」

聞くまでもなかったようだ、私の足にすりんと寄り添う。

離れるくらいならどんな所にも一緒に行く、そう言っているように感じる。

強化系の愛、重いけど、感謝。

第二十八話

情報を得るならギルドか酒場。RPGの常道よね。

マサドラにはギルドはなかったけど酒場は二件あった。

酒場のドアをくぐる。

カウンターとテーブル席がいくつか。

カウンターに店員が一人、客は三人組がテーブル席に。

あと、一人でカウンターに座っている人がいる。

おそらく全員がNPC。っぽい。

私はカウンターに座ってオレンジジュースを注文する。

ゲレゲレも一緒に入ってきたが特にとがめられることはなかったので問題はないだろう。

足元に座ったので、彼の為に味の付いていない焼肉も注文した。

私は店員に声をかける。

「あの一、この辺で金稼ぐのにいい場所知りませんか？」

「何だお嬢ちゃん、金が欲しいのかい？」

返事をしてきたのは店員ではなく、二つ隣に座っていた客だった。

「はい、出来るだけ大金を稼ぎたいんですが、何かいい方法はないかと思って」

「それなら北に居るドラゴンでも退治するかい？ あいつは時々人里を襲うから懸賞金もかけられてるし、もし捕まえられたなら角でも皮でもウロコでも高値で売れるぜ。もつともお嬢ちゃんを倒せるようなヤツとも思えないがな」

ドラゴンとか、いよいよRPGっぽくなってきた。私に倒せるかな、無理かな。

「ちなみに北というのはどのくらい北ですか？」

「そうだな、ここからだいたい六十キロつてところか。その辺りにヤツの住処がある」
行つてみて、無理そうなら逃げればいいか。

「他には何かないですかね？ もうちょつと、私にでも出来そうな」

今度は店員の方が答えてくれた。

「うちでバイトするかい？ 時給六百ジエニーで賄い付きだ」

……モンスター狩った方が割りがいいな、こっちは断ろう。

「他にはそうだな、東にある湖に沿つて北上したところに、幻と言われる猫がいるらしい。なんでも何にでも変身することができるとさうだ。誰も見たことがない単なるうわさ話だな。もし捕まえてこれれば高値で買う奴はいくらでもいるだろう」

猫。私はどうにも猫と縁があるらしい。

ゲレゲレを見た。焼肉を美味しくそうに頬張っている。

情報が出てきたということはいずれも何かしらのカードである可能性が高い。

結局、聞けた情報はその程度だった。

ドラゴンか、猫か。危険がなさそうなのは猫かな。

とりあえず猫をキーワードに情報を集めて探しに行ってみよう。

代金を支払って、酒場を出た。

変身できる猫をキーワードにして情報を集めた結果、以下のことが分かった。

- ・非常に警戒心が強く、人を見るときぐに逃げるらしい

- ・絶滅寸前で、ほとんど数がいないらしい

- ・湖の真北すぐのあたりが生息地らしい

- ・過去に四匹だけ捕まえてきたやつがいるらしい

……カードとしての所有者が四人つてことかな？

売ったり失ったりで実際に所持しているのはもっと少ないかもしれない。

ひとまず湖の北を目指そう。ドラゴンは後回し。

そして地図を見ながら、湖の真北に到達した。

周辺は森っぽい感じで隠れる場所は多い。

円で探索は可能だろうけど猫に気付かれて逃げられる恐れがある。

ここは……絶。ゲレゲレにも絶をさせる。

そして座って瞑想。自然と一体化する。

瞑想は占い師の得意分野です。

ただ一点、全てが自然のまま在ることにだけ集中する。

小鳥が肩に止まる。私は微動だにしない。

虫が体を這う。私は一ミリも動かない。

ゲレゲレにも動かないように命令した。彼も律義にそれを守っている。

「ミイ」

突然、ゲレゲレが絶を解いて声を発する。

小鳥は逃げたが、目の前の木の陰に猫がいる。

「ミイ」

猫は逃げようとしたが、ゲレゲレの声に反応しこちらに振り返る。

ゲレゲレが近寄る。猫は逃げようとはしない。

「ミイ、ミイ」

ゲレゲレは続けて何かを話しかけている。猫とキャンプタイガーって言葉通じるん

だろうか。

いけない、雑念はよくない。私は石。私は木の葉。

二匹が鼻先を突き合わせる。互いの匂いを嗅いでいるようだ。

「……ニャア！」

猫がカードに変化した！

私は慌ててゲレゲレに近付き、カードを見る。

『S-6 カメレオンキャット』

まさかの指定ポケットSランクカードだった。

ゲレゲレ、でかした！

急いでカードをバインダーに仕舞う。これを買ったらおいくら万円かしら？
帰り道でもモンスター狩りをしながら、ゲレゲレと二人マサドラへと戻る。

カメレオンキャットとモンスター、合わせて五十八万ジエニーで買い上げ！

こんだけレアなの持ってきても、カードショップの店員さんは無表情。

ちよつときみしい。

そしてそのお金で買えるだけの呪文カードを購入する。

使えそうなのは同行三枚、交信四枚、離脱一枚、磁力一枚。

レアめなのだトランスフォームホーリーウォーターと擬態と聖水を一枚ずつ手に入れた。

せつかくなんで聖ホーリーウオーター 水は自分に使っておこう。

売り飛ばしたカードってカード限度枚数にカウントされるのかなあ。

……多分リセットされるんだろうとは思うけど。

それすなわち、カメレオンキャット無限増殖！ 取って売って出す！

カメレオンキャットをゲットするにはゲレゲレだけで大丈夫そうんだけど、カードのまま手に入れるには私も一緒に行くしかない。

とりあえずこれを繰り返して呪文スペルカードをガンガンゲットしていこう。

あつ、離脱リブを誰かと取引するのを忘れずに！ レアカードカモンカモン。

あとはもう一件の酒場の方でも金銭情報聞いてみよう。

第二十九話

手に入れていた名簿リストを使用して、現在カメレオンキャットが所持されている枚数を調べた。

所有枚数で出たのは四枚。

情報収集で得たとおり、四枚がそれぞれ誰かに所有されているようだ。

このカードはカード化限度枚数が六枚と少ない。

すなわち、カード化できるのは残り二枚。

一往復で二匹のカメレオンキャットをゲットして戻っては売る。

それを二度ほど繰り返すと呪文スベルカードにはひとまず困らなくなった。

次は修行。ドラゴンに行くその前に、もう少し情報収集をした。

この街では他に指定ポケットの魔女シリーズの何かを手に入れることが出来そうだと聞いた限りでは修行になりそうな感じはしないので、やっぱりドラゴンに向かうことにする。

街を出て真北に六十キロ。森を越えて木々はまばらになり、山を登る。

途中に出てくるモンスターもそれなりに狩っていった。

山の中腹に差し掛かった所だろうか、すさまじい空気の振動とともに獣の咆哮が聞こえた。

きたか、ドラゴン！

私の左側から凝をされた爪が襲い掛かってくる。かわすのは容易い、キルアより遅い。

二トントラック程度の大きさのドラゴンがそこには居た。

想像していたより、意外と身は細い。

私のイメージはおなががでつぶりしたドラゴンクエストのドラゴンだったんだけど。

二本の角に凶悪な牙、鋭い前足の爪。

角が一本であることを除けばゲレゲレだつて負けてないぞ。

サイズは段違いだけれども。

ゲレゲレと私は堅をする。想定外の攻撃に備えるためだ。

ドラゴンは口元にオーラを集め始めた。これはあれだな、火を吐くな。

「ゲレゲレ！ 口から火！」

言われなくとも理解していたゲレゲレは、ドラゴンから吐き出された炎をいともたやすくかわしてゆく。

ドラゴンはゲレゲレを追うように首を動かして炎をゲレゲレに向ける。紙一重でか

わす。

私の方がお留守になっていたので腹部に拳打を数発お見舞いしてやった。固い！

ドラゴンは炎を吐くのを止めてこちらを見た。ドヤ顔だ。ムカつく。

普通にやったのでは私でもゲレゲレでも勝てない、ということはどこかにきつと弱点がある。

全身をくまなく観察する。

一か所、喉元にあるウロコ、ドラゴンは全身を堅で強化しているが、さらに攻撃時も守備時もそこを常にオーラを上乗せして守っているのが分かった。

おそらくはあそこが弱点、ただしピンポイントで守られているので生半可な攻撃は効かないだろう。

炎を吐いている時は首を向けられれば即アウトなので、炎だけは吐かせるわけにはいかない。

牙も怖い。前足は短いので懐に潜り込めれば爪は届かないだろう。

「ゲレゲレ、五秒時間稼いで！」

「ミイ！」

ゲレゲレの特攻。ドラゴンが炎を吐くオーラを貯めるスキを与えずに顔面に超ネコパンチを連打する。

私はその数秒でオーラを練って、右手のオーラを硬にする。

守備力はゼロだ、ダメージを食らえば死ぬだろう。

けれど私はゲレゲレを信じている。

ドラゴンはゲレゲレの猛攻を抑えるのに必死になっている、行ける！

素早くドラゴンの喉元に近寄り、一枚だけ逆向きに生えているウロコを右手ではぎ取った。

すさまじい悲鳴を上げて、ドラゴンは倒れ込む。

私が手にしたカード『C—50 ドラゴンの逆鱗』と、地面に落ちたカード『C—3
5 咆哮のドラゴン』

いずれも指定ポケットカードではないけど、マサドラでの情報通り高値で売れるのだらう。

アカンパニー
同行を使ってマサドラまで戻るかとも思ったが、せっかくなのでモンスター狩りながら戻らう。

「驚いた、お嬢ちゃん本当にあのドラゴンを退治してきたのかい！」

酒場で情報をくれたお客さんに再度話しかける。

カードショップでの売買金額は意外と安かった。

その時に懸賞金がかけられているといったコイツの言葉を思い出したのだ。

「懸賞が掛けられてるんでしよう？ どこに持っていけばいいの？」

「ああ、アントキバの役所に持っていけば懸賞金が支払われるよ。しかしお嬢ちゃん、本当にすごいなあ」

NPCとはいえ、褒められると嬉しい。ゲレゲレも鼻高々だ。

その時、突然バインダーが開いて「他プレイヤーがあなたに対して「コンタクト交信」を使用しました」という機械的な声が聞こえた。

『よお、オレだ、フィンクスだ。』ホーリーウォーター「聖 水」二枚持ってねーか？ 殺す奴らがいちいち呪文カード使ってるやがって手持ちの食料や水をどうこうしてくるのに嫌気がさしてな。オレとフェイタンの分と二枚だ』

「ありますよ。どこで渡せばいいですかね。私は今マサドラにいて、これからアントキバに向かう所だったんですが」

『じゃあアントキバの食堂で待ち合わせだ。オレたちも今その辺に居るからな』

通信を切る。 ホーリーウォーター 聖 水は三枚あるので何の問題もない。

待ち合せならモンスター狩りはナシにして、まっすぐアントキバへと向かおう。

あの二人を待たせるのは、ちよつと怖い。

でも寄り道をしないのであればカードを使うほどの時間でもないだろう。

そしてアントキバに到着し、食堂を探す。大きな食堂が一件だけ、この街にはあった。

「遅いー！」

「ごめんなさい」

二人は先に到着して、てんこ盛りのパスタを食べていた。

あれか、ガルガイダーのパスタか。

「はい、これ、ホーリーウォーター 聖水 二枚です」

私はこんな山盛りのパスタを三十分以内に食べるなんて無理なので最初からあきらめてクリームソーダを注文する。

「確かに。せっかくの殺し合いゲームなのにこんなしちめんどくせーもんチマチマ使うんじゃないよな、どいつもこいつも」

ゲームの根本を揺るがしかねない発言をしつつ、二人はそれぞれにホーリーウォーター 聖水を使用する。

「で、礼は何がいい？」

「え？ 別に何も。もともと私は旅団の皆さんの為に動くつもりだったので」

「これがたとえ旅団員同士だとしても見返り必要よ。ワタシたち旅団として動いているわけ違うからね」

んー、でも別に本当に欲しいものなんてないしなあ。カードもいらぬし。

「じゃあ、ここでの飲食代を奢ってください。私の分と、ゲレゲレの分」
「そんなもんでいいんならお安い御用だぜ」

私はチーズたっぷりシカゴピッツアとさっきのクリームソーダ、ゲレゲレには羊肉の串焼き調味料抜きジュレソースがけ二人前をそれぞれ御馳走になる。

私たちの注文がテーブルに届いた頃には二人の皿は空になっていた、すごいな。

「じゃあ、オレたちはもう行くからな。支払いは済ませておく。また何かあったらよろしく頼むぜ」

「はい、お二人もお気をつけて」

「誰に向かって言てるね」

気に障ったかと思つたが、ただの冗談だったらしい。フエイタンさんは笑つていた。

二人はガルガイダーを受け取つて店を出るとすぐに呪文カードで別の街へと飛んできた。
いった。

「私たちも御馳走にありつけてラッキーだったね、ゲレゲレ」

「ミイ！」

食べ終わつたら、次は役所かな。そして今度はここでお金儲け兼修行方法を探しますかね。

第三十話

役所で懸賞金五十万ジエニーを受け取る。

……が、フリーポケットにそんな金額は入らない。

役所内に居る間はお金がカードから現実化することはないらしいが、残念ながら店と違い貯金は出来ないようだ。

仕方なく役所内に居たプレーヤー片っ端からあたって、高値でカードを買い漁った。

指定ポケットカード

- ・黄金天秤

- ・顔パス回数券

フリーポケットカード(呪文含む^{スベル})

- ・ガルガイダー七枚

- ・裏表コイン (F-200)

- ・猫を駄目にする箱 (G-400)

- ・交信コンタクト三枚

- ・漂流ドリフト二枚

- ・再来^{リターン}三枚
- ・同^{アカンパニー}行三枚
- ・反^{リフレクション}射二枚
- ・城^{キャットスルゲート}門三枚

特にカード集めをするつもりもないので、主に必要な呪文^{スペル}カード（よく利用するものと自分を守備するもの）をメインに交換した。

ガルガイダーは高値で売れるらしいのでお金の代わりにそのまま持っていようかと思ふ。

猫を駄目にする箱はゲレゲレがいたく気に入ったので、ゲレゲレをその中に入れたまま持ち運んでいる。

正直ただのダンボール箱だとは思えないのだが。

さて、修行を再開したいところだが入り口に近いこの街では正直強力な敵にはお目にかかれそうにない。

なので街の入り口まで行って一旦^{ドリフト}漂流で別の街に飛び、すぐに再来^{リターン}でゲレゲレの元へ戻る。

二度やってみて恋愛都市アイアイと城塞都市キネイルに飛ぶことができた。

今度はゲレゲレと一緒に同^{アカンパニー}行でアイアイへ飛ぶ。

私はダンダ団にケンカをふっかけるのだヒヤッハー！ 汚物は消毒だ！

そして何故か、助けた女の子に纏わりつかれている。困った。

ちなみに絡んでいた奴らはいずれもランクFの雑魚だった。

「大丈夫です！ わたし、男性でも女性でも強い人が好きなんです！」

何が大丈夫なんだ、何が。

この子、私だけではなくゲレゲレにもハートマークを飛ばしまくっている。

ゲレゲレはまんざらでもないらしい。しよせんオスカ、けっ。

「ダンダ団に喧嘩売ってきたのはてめーらか」

おっ、ボス格きたー？ レイザーさん並みの巨体が一人と、雑魚っぽいのが数人で私たちを取り囲んだ。

「だとしたら？」

「お頭がぶっ潰す！ この街の裏の顔役でもあるお頭はな、そんじよそこらの強者くらい屁でもねーんだぜ！」

雑魚、偉そう。強いのはお頭であってテメーじゃないだろうに。

女の子は後ろで震えている。この子を守りながら全員ぶっ倒すつてのがミッショ
ンってところかな。

お頭は確かに強そう。NPCだとは思うけど普通に纏でこちらをじっと見ている。とりあえず、全開の練を浴びせかけてみた。雑魚の半数はカードになって、半数は逃げた。

お頭は微動だにしない。

「……女子に乱暴狼藉を働くのはダンダ団の趣旨に反している。失礼なことをしてすまなかつた。団を代表してお詫びする」

あれ。戦うんじゃないのか？

ちよつと予想外の展開になってきた。

「非常に練達した猛者とお見受けする。君のような者を探していた。良ければついてきてくれないだろうか」

なんかよくわからないけどついて行くことにした。女の子も私の服の裾をつまんで一緒について来る。

アイアイ中央にそびえ立つ城へと案内される。てっぺんで何かがアイーンアイーン言ってるけど気にしない。志村か。

「っつちだ」

城の裏口から中に入り、案内されたのは玉座の間。ただしそこには誰もいない。

後ろで震えていた少女が玉座の前に出て、静かに腰を下ろした。

「控えよ、女王の御前である」

えつなに、あの子がこの街の女王だったの？

ひとまずお頭を真似てひざまずく。ゲレゲレにもお座りをさせた。

絨毯がとでもフカフカしているのでひぎは痛くない。

「顔を上げてくれ……騙すような真似をしてすまなかつた。表向き城とダンダ団は何の関係もないことになっているのでな、このような形を取らせてもらった」

震えていたのも演技だったってことか。まあNPCだろうしその程度はお手の物か。

「妾は強き者が好きだ。性別人種種族を問わぬ。エイラ、ゲレゲレ、その方方も強き者だ。そうであろう、ダンダ団の頭よ」

「はい、少なくともこの身よりは上であると思われませう」

「よかろう、それだけで条件は満たした。エイラ、ゲレゲレ、その方方は妾の夫あるいは妻となりてこの街を共に支えるのだ」

……ナンデスト？

「この街は多夫多妻制を採用している、何の問題もない」

お頭の適切なフオローが入る。多夫多妻制ってそういう制度だったっけ？

「すでに妾には十二人の夫と八人の妻がおる。遠慮するでない、今後の生活はすべて城で面倒を見よう。当然、妾と結婚してくれるな？」

私はお頭と集まってきた大量の衛兵をぶっ飛ばして、全力で逃げた。

多分これ指定ポケットカードのイベントなんだろうと思うけど、女の子の嫁になるのは嫌だ。

衛兵はそうでもなかったけどお頭はそれなりのレベルの念能力者（念獣？）だったので、いい修行になったと思うことにしよう。

なお、アイアイはほぼ出禁になったことを付け加えておく（入ったら衛兵が駆けつけてくるようになった）

第三十一話

「他プレイヤーがあなたに対して「コンタクト交信」を使用しました」

初めての時はびつくりしたけど、二度目ともなるとさすがに慣れた。

右手で宙に出現したバインダーをキャッチして相手を確認する。

「こちらシャルナーク。除念師を発見した。まだ接触はしてない。ひとまず全員集合してもらおうと思つて。今すぐ来れる？」

「はい、大丈夫です」

もうグリード・アイランドに入つて一か月以上たつのか……早いなあ。

そういうえばゲレゲレがどんどん大きくなつてきている。おもにタマ。

だけでなく、体も大きい。もう猫と言つても通用しないサイズになつてきている。

バインダーから同アカンバニー行を取り出して唱える。行き先はシャルナークさん。

私にはまったく覚えがないんだが、フィンクスさんもシャルナークさんもどこかですれ違つていたらしい。

もしかしたら向こうが意識的に近づいていたのかもしれない、コンタクト交信その他を利用するために。

……来た時はそんなことすっかり忘れてたもんなあ。

本当は最初の地点で全員集合するまで待つてるべきだったんだろうけど、無視してア
ントキバまで行ってしまったからな。

「お久しぶりです、除念師は？」

「マチが糸で追跡してる。まだ僕たちは接触してない。接触は……できればエイラ、君
に頼みたい」

私？ ヒソカじゃなくて？

「ヒソカと団長の契約が無効になれば、団長はヒソカとタイマンせずに済む。少しでも
危険は取り除いておきたい」

……接触するのは構わないけど、そんなことであのピエロの執着が消えるとも思えな
い。

それに、私が団長さんのもとに戻るのにはリスクな気がする。勘だけだ。

「勘か……マチとエイラの勘はなかなか馬鹿にできないからな」

フィンクスさんは私の占いの能力を肌身に染みて感じているはずだ。

今、ここには団長さんとフランクリンさんを除いた旅団員全員と私が居る。

「……当初の目的通り、ヒソカを介して団長さんと除念師をつなげるべきだと思います。

私ですすでに団長さんと旅団員の接触到抵触する恐れがあります」

私自身は旅団員ではないけど、旅団員との接触回数があまりにも多すぎる。

クラピカの念の鎖がどこまで許容するかはわからないけれど、団長さんの命を賭けてまで実証する必要はないはずだ。

「……その通りだね。フィックス、ヒソカを迎えに行ってくれる？」

「ああ、わかった」

フィックスさんにマグネティックフォースアキャンパニ磁 力と同行を一枚ずつ手渡す。

「磁 力 オン、クロロールシルフル！」

すぐにフィックスさんは飛び立った。そう時間をかけずに戻ってくるだろう。

ということは、今はツエズゲラと爆弾魔ボマイの鬼ごっこタイムあたりかな、原作だと。

「あの、私ちよつと別行動してもいいでしょうか」

「いいよ、エイラはそもそも旅団員でもないし。何か状況に変更コンタクトがあつたら交信で連絡

とるから」

「ありがとうございます、あとゲレゲレも預けたいんですけど」

「ミイ!？」

しばらくの間だけだから我慢してよね、ゲレゲレ。

「わかった、私が預かる」

箱ごとシズクさんにゲレゲレを渡して、準備完了。

「別行動するのは一週間弱程度だと思えます。じゃあ、行つてきます。磁気力」オ
ン、ツエズゲラ！」

私はカードでツエズゲラの元へと飛んだ。

「……君は？」

警戒されている、当然だろう。交信コンタクトも使わずにいきなりここを訪れた。

「私は、ゴンとキリアの知人です。あなた方が今から何をしようとしているのかを知っています。そして私は占い師です。呪文カードスベルでいうところの追跡トレースの能力を持っています。……取引を、しませんか？」

「取引？」

「時間を稼ぐのに、ただ逃げるだけでなく攻撃を加えることも必要。私の能力を使えば相手がどこに居ようと敵に知られることなく近づくことができます。最初だけ、彼らの顔を視認する必要がありますが、それはあなた方について行けば簡単に叶うでしょう。報酬はクリア報酬の二%十億。私は攻撃的な発をほとんど持っていないのでバトル自体には参加しませんが、手持ちの必要な呪文カードスベルも提供します。たとえば同行アキャンパニー十一枚。いかがですか？」

ツエズゲラ組、ゴレイヌを含めて五名が話し合う。そう悪い話ではないはずだ。

「わかった。私が君とともに同行アカンパニーで彼らの顔を視認させよう。その際に攻撃を加えれば敵もまさか視認が目的だとは思えない。君はカードを手に持つておいて、私が攻撃次第再び同行アカンパニーでここへと戻る。それで大丈夫だろうか」

「はい、問題ありません。取引は成立と解釈して構いませんね?」

「ああ。では早速行くのでしょうか。呪文対策はしてあるか?」

「指定ポケットカードはほとんど手持ちがありません。フリーポケットに関してはホーリーウォーターホーリーウォーター聖水を使用してあります」

うむ、問題ないな、そうつぶやくと彼は同行アカンパニーのカードを取り出す。私も取り出した。

「同行オン、ゲンスルー!」

到着と同時にツエズゲラは三人に向けて矢のようなものを放つ。具現化系か、放出系か……私は三人の顔を視認する、問題ない。

彼らがツエズゲラの攻撃を防ぐ間に私たちはゲンスルーたちから三步ほど後退する。

彼らも同行アカンパニーの範囲内から外すためだ。

「同行オン、ゴレイヌ!」

そして戻る。問題なく手続きが終了した。

「それで、どうやって奴らの位置を特定する?」

「地図でおおよその位置が確認できます。直径一キロ以内であれば地図がなくとも方向

距離ともにわかるので、多少カードを使うことになりましたが私もともに行つて具体的な場所を提示します」

私は彼の目の前で絶を行う。

「私の絶で、彼らの五百メートル以内に気付かれず侵入することは可能でしょうか」

「その距離であれば問題はないだろう。具体的な場所さえわかれば後は私たちが単独で攻撃する。奴らがこちらの能力に気付くまでだから、そう長い間ではないと思うが……
これから、よろしく頼む」

「(こちら)そ」

そうして、私はツエズゲラ組に協力することにした。

『愚者』の能力、意外と役立つ。

第三十二話

地図を使ってゲンスルーたちの最寄りまで行き、絶で近付いて場所を特定し、私はその時点で本拠地に戻る。

三日ほどはそれで時間を稼げた。

やがて彼らがドツブルや私の能力の存在に気付く。

三人はマサドラへ移動した。

通信コンタクトを使いマサドラで呪文カードスペルを買い集めていたゴレイヌに忠告する。

私の能力で、爆弾魔ボムマが二手に分かれたことを確認する。

私はゲンスルー・サブ・バラの三人の顔を認識しているので、彼らが二手に分かれたことを容易に確認することができたからだ。

「ドツブルの能力があるから取引は不要かとも思ったが、君と契約していてよかつたよ」
私は引き続きゲンスルーたちへの攻撃を提案する。ツエズゲラはそれを拒否した。

呪文カードスペルは今後一切無駄にできない。確かにその通りだ。

これまでに使った分を除いて、同行九枚アキャンパニー、磁マグネティック力フォース五枚リターン、再来十枚リターンをツエズゲラ

に渡す。

「今から使う磁マグネティックフォース力を除いて、使える私のカードはこれで全てです。私は戦線離脱します、武運を祈ります」

「ああ、助かったよ。すべてが終わったならこちらから連絡をしよう」

そして私は磁マグネティックフォース力を使い、旅団員の元へと戻る。

「ミイオイイアアアアア！」

ゲレゲレが全身堅で体当たりをぶちかましてきた。やめる強化系の愛が重すぎる。

「お帰り、用事は終わったのか？」

「はい。こちらはどうになりましたか？」

フランクリンさんがここにいるということは、もうヒソカとは接触したんだろうけど。

「ああ、今アイツが除念師と交渉中だ」

つまり全員が特にすることもなく待機中、と。

ゲレゲレは私が居ない間シズクさんに遊んでもらっていたらしく、シズクさんにもずいぶんと懐いていた。

そして爆弾魔ボムマーを捕まえたのち、ヒソカとアベンガネが二人でグリード・アイランドを出る。

旅団メンバーと彼らが合流しなかったのも、団長さんと旅団員との接触とカウントさ

れないため、念のためだ。

「さて、あたしにも戻るかね」

「これ以上ここに居る必要もねーしな」

私も現実世界に戻るとするか。

一度は攻略を目的としてグリード・アイランドを遊んでみたい気もするけれど、それは別に今じゃなくていい。

私にとって最重要なのは蜘蛛だ。団長さんにもまた会いたい。

旅団員が持っていた分に私の持ち分を加えて全員分の枚数の離脱リリーフがある。問題ない。

……ん？　　そういえばゲレゲレは離脱リリーフを唱えられないな。

ということは私たちはまたマサドラ西の港から出なくちゃいけないってことか。面倒。

旅団員たちとはそこで一旦別れ、マサドラに向かう。

使えるカードは全部ツエズゲラに渡してしまったので、徒歩でだ。面倒。

「ハイ」

対照的に、ゲレゲレは私に会えずいぶんご機嫌だ。

また一回り大きくなった？　　気のせいかな。

猫を駄目にする箱はもうかわいそうなくらいギユウギユウに押し広げられている。

そして港に行き、二人それぞれに所長をぶつ倒す。所長すぐ復活するのウケる。

チケツトを一枚、ゲインしてゲレゲレに渡す。そしてもう一枚も自分用に。そうやって、遠回りしつつ私達も旅団の本拠地へと戻っていった。

短くて長いグリード・アイランドの旅、楽しかったな。

少しは私（とゲレゲレ）の修行になつてるといいんだけど。

「おう、おかえり」

旅団メンバーは全員、本拠地に残っていた。

おそらくは念を取り戻した团长さんをここで待つのだろう。

私もそうさせてもらうか、それともどこか修業の場を探すか……。

修行するとしたら天空闘技場かな、おそらくあそこが一番手っ取り早い。

私には対人戦の経験値が少なすぎる。

さすがに非念能力者に負ける気はしないけれど、爆弾魔を見た時にヤバイと思った。

ツエズゲラもそうだが、私では到底一対一で彼らに敵わない。ゲレゲレを足してもかなり怪しい。

ゲレゲレは天空闘技場で選手として登録できるんだろうか？

こればかりは行ってみないとわからないか。

「シャルナークさん」

「ん?」

「私、修行のためにちよつと天空闘技場に行つてこようかと思ひます。団長さんが戻つてきたら連絡もえませんか?」

「いいよ、ホームコードか携帯の番号教えて」

その両方をシャルナークさんに伝えて、私たちは本拠地を出た。

歩いて三日、最寄りの空港へと到着する。そこからパドキア共和国へ向かう。

私の分の飛空船運賃は無料だが、ゲレゲレは手荷物扱いで有料だった。ただしキャリアバッグで持ち込めた。

猛獣ということでは最初はゴネられたがライセンスを見せて何かあつたら責任を取ると明言したらおさまった。

キャリアバッグは新たに買い替えた中々大型犬用の頑丈なものだ。

扉も半透明中ではほとんど見えないので他のお客さんを驚かせることはないだろう。

個室はペットと共用で泊まれる部屋を確保したので、中ではゲレゲレを放し飼いにしても問題はない。

船旅はのんびりと十日ほど。私も基礎修行を除いてはのんびりとすることにした。

第三十三話

余談だが、私は自分で自分を占うことをしない。

何故かまるで当たらないからだ。

これまでに何度も試した、前の世界でも、この世界でも。

そのいずれもが嫌がらせかのごとく、でたらめに外れるのだ。

他者への占いは前の世界であつてもそれなりに当たつた。

今の世界では原作知識もあつて重宝している。

結果。

私はゲレゲレと二人つきりの時はしよつちゆうゲレゲレのことを占つていた。

飛空船の中でゲレゲレが引いたカードは『戦車』の正位置。

ドラクエでいうところの「ガンガンいこうぜ」だ。

前にコルトピさんを占つた時にも出たカードだね。

とても前向きなカード。勝負運の良さも垣間見える。

多分だけど、天空闘技場でゲレゲレも選手として認めてもらえるかもしれない。

そんな気がする。勘だけ。

「ゲレゲレ、ごはんだよー」

機内食、ルームサービスのなものを頼むという手もあったが、ゲレゲレは意外とキャットフードが嫌いではないらしい。

人間にとつてのスナック菓子みたいな感覚なんだろうか。

私の食事は乗船料の中に含まれているので、レストランまで食べに行けば無料だ。

ついでにテイクアウトでお金を払って味無しステーキ肉を持って帰ったりもしてる。

ゲレゲレの食費も馬鹿にならなくなってきた。

食べる量は出会った頃の二倍だ。

……：天空闘技場より山籠もりでもした方が、食費には困らなかつたかもしれないなあ

……。

その辺りも考えて、少しでも自力でお金を稼いでおこうとツエズゲラ組に協力したりしたんだけどね。

私のホームコードはツエズゲラに伝えてあるので、バッテリーのキャンセル料を受け取り次第連絡をもらえるだろう。

そこらへん、彼は律儀で冷静で礼儀正しいと思う。

星付きハンターはその辺も見られるのかな？

もう少し強くなれたら、星付きハンターを目指すのもいいかもしれない。

何かしらの功績を残せばいい。……占い師で星付きを目指すのは無理があるか。

だとしたら私は何をしたい？ 賞金首ハンター？ 興味ない。

美食ハンター？ 美味しいものは好きだけど別にそこまでして求めない。

私には自分がしたいことがよくわからない。

何故ならこれまででしたいように出来たことが一度もなかったから。

考えることすら、ずっと放棄していた。

そんな私が初めて願ったやりたいこと、それは旅団の力になることだ。

パクノダさんの件を経てその願いは一層強くなった。

私に星は必要ない。私はただただ強さを求めて旅団の手となり足となろう。

そう結論付いた。

「ハイー」

はい、おかわりですね、すいません気が利かなくて。

飛空船を降りるまで買い置きのカットフード、もつかなあ……。

もたなかったら厨房から魚を丸ごと買い付けてこよう。

私には格闘技経験がない。

天空闘技場の登録では大嘘ぶっこく予定だ。

船の上で、基礎的な知識は団長さんから学んだ。

船がひっくり返らない程度に手ほどきも受けたが、それは本当に最小限。

論理的に体系を学ぶことに意味はあっただろうが、実戦経験はNPC相手のみでほぼゼロに等しい。

なので天空闘技場では、念無しで二百階を目指す。

ゴンやキルアにも出来ていたので、キルアとある程度同等に戦えた私でも決して無理な目標ではないだろう。

これはゲレゲレも同様だ。もちろん選手として登録できればの話だが。

できなかつたら……：ペットホテルにでも預ける？ 預かってもらえるかなあ。

ツエズゲラさんからの入金が間に合えばいつそ家を買ってもいいかもしれない。

船の上での空き時間に、私は団長さんからハンター文字も教わった。

今では自由に読み書きができる。

基本的には日本語の表記を変えたただけなので覚えやすかった。

きつかけは団長さんが貸してくれた小説本だった。私はそれを読めないと答えた。

それで団長さんが修行の合間の休憩時間を使って文字を教えてくださいました。

おかげで船旅の後半の休憩時間は小説に没頭することも出来た。

今思えばいい気分転換になっていたと思う。

団長さんには感謝しかない。もちろん、旅団のメンバーさんにも。

本来は異質な存在である私を、利用価値があつたとはいえ受け入れてくれた。

受け入れられた、それはこの世界に来て生まれて初めて味わった経験。

私はそれを手放したくない。だから強くなる。

……ゲレゲレは、巻き込んだ形になつちやつたね、ごめんね。

そう言う不思議そうにミイと鳴いた。

自分がついて行きたいからついて行っているだけだ、そう言っているように思えた。

勝手な私の妄想だとわかっている。

それでも、ゲレゲレにも、感謝。

そうだ、到着まで感謝の正拳突きをしよう。

祈り、突いて、再び祈る。それを幾度も繰り返す。

神が居るのかどうかは知らないが、この世界に連れてきてくれたことに、感謝を。

第三十四話

十日と半日をかけて、パドキア共和国に到着した

ただし、天空闘技場があるのはパドキアではなく、その南東にあるソレイル共和国だった。

勘違いしてただけで、あそこパドキアじゃないのね。

この大陸はパドキア・ミンボ・ソレイル三つの共和国から成り立っているらしい。そのソレイル共和国のほぼ中心部に、天空闘技場はある。

地上二百五十一階、高さ九百九十一メートルで、世界第四位の高さを誇るらしい。

上の方はもう雲がかかっていて見えない。

そして私は受付に……行かない。

まず最初に向かったのはケータイショップだ。

そして、衛星電話対応のスマホに買い替える。

お次は銀行。ハンター試験を通過した時に、ハンター協会が所有している銀行口座も一緒にもらったのだが、そこに五億振り込まれていることを確認した。

飛空船に乗っている間にツエズゲラさんから連絡があり、キャンセル料から逆算交渉

して五億をいただいたのだ。

もうちよつと吹っ掛けられたかもしれないけど今はとりあえずこの辺でいいので、この金額で手を打った。

お次は不動産屋。

念の為だけど、やっぱり自分自身の本拠地もここらで手に入れておこうと思ったためだ。

ちようど天空闘技場からも空港からもそれほど離れていない中古の物件があったので一括ニコニコ現金払い（銀行振込）

建物はめちやくちや古いため実質はほとんど土地の値段だけだ。

手続きは全部不動産屋さんにお任せした、名義変更とか。

3LDK平屋、築45年。縁側付き。お庭も広め。

ついでに不動産屋さんにお願ひして建築系の会社を紹介してもらって、外壁と門だけは新しく厳重に、高さもそれなりにした。

これは自分自身のためというよりも周辺住民にゲレゲレのことで怯えられたくないからだ。

せめて庭くらい自由に走り回ってほしい。

ゲレゲレ自身はキャリアバッグでも飛空船の個室でも満足しているようだったので、

これは私のワガママに近い。

ゲレゲレには、自然が似合う。

庭には桜や椿やグミ、ベリーの木なんかが植えられている。

ゲレゲレは果実には興味を示さないので勝手に食べることはないので大丈夫だと思う。
う。

近付くだけで毒だつてことはさすがにないだろう、多分。

芝はボサボサだけれども、逆にそれがいい。

一目で気に入って、この物件に決めた。

価格は諸々費用合わせて五千万ジエニーちょっと。

都心部にほど近くはあるもののこの辺りに住む人自体は少ないらしく（ホテルはめちやくちや多い）、住宅として売られていたこの家はあまり高値で売られていなかったことも幸いした。

前の持ち主が『家を取り壊さないこと（リフォーム可）』『庭に増築しない（潰さない）こと』を条件にしていたのも一因だ。

なんでも、大事に飼っていたペットが庭に埋められているらしい。

お気持ち、わかります。私ならゲレゲレ埋めたらその一帯は保護区にする。

やだ、想像したくない。ゲレゲレと死別するなんて考えたくもない。

まだ子猫だから先は長いと信じよう。

「ミイ?」

そして引き渡しを終えて、私は縁側にゲレゲレとともに座っている。

ああ、いいなあ。木々が日差しを遮ってキラキラと適度な光をここまで届けてくれる。

……残金だけで、ここで隠遁生活を送るのもいいかもしれないなんて、ちよつと思つてしまった。

ゲレゲレの食費的に、無理だろうなあ。私が稼がなきゃなあ。

よし、当初の目的通り天空闘技場に行きますか。

そこでまた少しお金を貯められる。

そして受付で、やっぱりゲレゲレは選手登録できないことがわかった。残念。

私の勘だつてたまには外れる。

牙や爪が武器扱いになつてしまふらしい。そもそも魔獣を含め獣の登録は認めてないらしい。

私だけ登録をして、最初の試合の日付だけは自由に決められるらしいので、少しあの家でゆっくりしてから戦おうと思つて一週間先にした。

毎日が楽しい。

毎日袋ラーメン食べても誰にも何も言われない。

お野菜たっぷり入れる贅沢もした。キャベツとモヤシが至高。アクセントにコーンも悪くない。

焼豚も自分で作ってみたりした。楽しい。

カレーも作った。

自分で作ったカレーを食べたことはこれまでなかったけれどとても美味しかった。

母が好きだったの、今ならちよつと理解できる。これはいいものだ。

なお、感謝の正拳突きは続けている。一日百回程度だけ。

そしてタロットを扱う時間を増やした。

特質系ではない方の具現化タロットの名前も決めた。

『乱れ飛ぶ二十一二の使徒』
シューティングメジャーアルカナ

結局特殊能力はまだ二枚しか決めてないけれど、『太陽』と『世界』だけ。

他のはまだ思いつかない。

カードの意味から連想ゲームしたりして、一生懸命考えている最中だ。

いずれにせよ二百階に到達するまでは使うつもりもないし、おいおい考えていくとしよう。

二百階を越えたら、念能力者とのバトル。

もちろん経験を積むことも一つの目的ではあるんだけど、もう一つ目的がある。
『お前の物は俺の物』^{ジャイアンツ エゴイスト}による念能力の奪取だ。

条件の一つは敗北を認めさせること。これは天空闘技場の舞台がちょうどいい。
他にもたくさん条件はある。

例えば私の持っている（具現化したのじゃない、本物の）タロットカードを相手に触れさせること。

相手を占ったことがあるということ。

この辺りは……二百階受付カウンター周辺で占い師稼業させてもらえないかなあ。
ライセンスちらつかせつつシヨバ代支払うことで何とかならないだろうか。

私の占いに意味があるということ、天空闘技場全体に知らしめる必要がある。

向こうから占ってほしいと言ってくるような状況を作り出す。

試合初日から、試合の時以外は片隅で占い師稼業させてもらえるよう頼んでみよう。
最初は無料か格安で。

原作知識がなくても、私は自分の占いにそれなりの自信を持っている（ただし自分を占った時を除く）

そして戦いに身を置く者たちは、意外とゲン担ぎを重視する人が多い。

私の占いが、その人たちの心のスキマお埋めします。

そうやって、占い師兼選手として、地位を確立していこう。
そんな感じで、私は試合初日までの間を過ごしていた。人生で今が一番楽しい。

第三十五話

一週間を、主にわくわくふわふわもふもふと過ごし、私は最初の試合の日を迎えた。

「じゃ行ってくるから、ゲレゲレいい子で留守番よろしくねー！ 夜には帰ってくるからー！」

「ぐるうー！」

最近ゲレゲレはミイだけじゃなくなって、表現方法が増えてきた。

だんだんと低音になってきているし、これも一種の声変わり？

こうやってどんどん成長していくのだろう、ちよつと寂しい。

大きなボウル一杯てんこもりにキャットフードと新鮮な水を置いて、私は家を出る。

占い師稼業に関しては、ライセンスを使わずともあつさりオーケーをもらえた。

一階ロビーには客に向けた露店的な店がたくさん出ている。

月十万ジエニープラス売上げの十五%を納めることによつて出店が許可されるそ
うだ。

そつちもきつちり登録申請をする。

場所の空きもあり、最初の十万ジエニーさえ支払えば今日から出店可能らしい。

もちろんすぐに支払った。

そして第一試合目。私の選手番号は1158、イイコヤ。

相手は力自慢っぽい巨漢の大男。

原作に出てきたトードーって人に似てる。

髪型は違うけど。全体的に少し長めに刈ったキンパツを重力に逆らうように立てている。

「なんだあ、こんなお嬢ちゃんが天空闘技場に来るなんて、オレあ一試合目からラッキーだったなあ！」

やめようよ、そういう弱者ムーブ。無駄にフラグを立てているよ。

観客からも私に対してヤジが飛ぶ。

うるさいなあ、全員まとめて黙らせたい。

でもそんな無駄なことはやらない。私にとって大切なのは強くなること。

「ここ一階のリングでは入場者のレベルを判断します。制限時間三分以内に自らの力を発揮してください」

了解。目の前の男は打撃系より投げや締め技を使ってきそうだな、勘だけど。

「では、始め！」

男は私の服を掴もうとしてきた、やっぱり。

柔道とかそういった格闘技の使い手さんなのかな？

スピードはそうでもないの、手の甲を使って近づく相手の腕の手首から二の腕あたりを狙って跳ね飛ばす。

それを数回繰り返す。

「チヨコマカうぜえガキだな」

男は急に私の顔面に向かって拳打を繰り出してきた。

それも相手の手首を弾き軌道を変える。

拳は私の右横をすり抜けて空を切った。

「何だよ、お嬢ちゃん相手に手加減してるのかー!」

外野からのヤジにイライラしているのが手に取るようにわかる。

まずはその感情の乱れを落ち着かせることから始めた方がいいと思うよ、お兄さん。

男は大きく足を振り上げる、ストンプか。

私はあえて避けず、その足を両腕でただ受け止める。

微動だにしない。後ずさることもない。

その場で力を全て受け止め、文字通りしつかり足止めできている。

「ハッの・・・」

おそらく今度は全力全速で私を掴みにかかる。遅い。

私は伸ばされた彼の腕を片方掴んで、投げ飛ばす。

軽々と放り投げられて男は場外へと吹っ飛んでいった。

目を白黒させている。草生える。

「そこまで！ 1158番、君は三十階まで行きなさい」

「押忍！」

心源流の真似をして、構えを取る。

運悪く強者に出会わない限り、二百階まではこうやって受ける修行をしていこうと思っている。

次の試合が組まれたら、その時点でスマホに通知が入ることになっている。

私は闘技場近くのホームセンターで店を構えるにあたって必要な材料を買いそろえると、自分の店に向かった。

そういえば初めて持つ自分のお店だな。出店とはいえなんだか嬉しい。

事前に買っておいたスケッチブックに『タロット占いはじめました、一回五百ジエニー』とマジックで書いてテーブルの端に立てて置く。

テーブルには薄紫色の布をかけてテーブルクロス代わりにした。

テーブルをはさんで向かい合わせに椅子を一つずつ置く。自分用とお客様用だ。

作業をしている間も、そのあと椅子に座った後も、チラチラと横目で見ながら人が通

り過ぎてゆく。

まあ、そう簡単に客はつかないか……。最初は仕方ない。

すると、ドカツという派手な音を立てて、いかついピンクモヒカンのオッサンが椅子に座った。椅子壊れなくてよかった。

「嬢ちゃん、占いは当たるのかい？」

「さすがに100%とはいきませんが、それなりには当たると自負しています」
「にしては随分と金額が安いな」

見た目と違い、案外気さくなオッサンのようだ。

「これで稼ごうとは思っていないので。私は選手登録しているので、試合がない時の暇つぶし兼タロット修行です」

「なるほどな、じゃあいつちよ占ってもらおうかい。俺はマジリクだ」

マジリクと名乗ったオッサンは五百ジェニー硬貨をテーブルに置いた。

「わかりました、マジリクさんは何か占ってほしい事柄などありますか？」

「おう、俺も選手登録してこの闘技場に居るんだがよ。この先俺はどこまで行けるのか占ってほしいかな」

「わかりました」

私は箱からタロットカードを取り出してシャッフルする。

重ならないようにカードを広げて、一枚をマジリクさんに選んでもらった。

そして彼自身に開いてもらう。

『星』の正位置ですね。このカードは「希望」を表していて、明確に明るい兆しが見えています。鍛錬を怠らなければ目指す場所へ向かうことも可能でしょう。恐らく、二階まではそれほど問題なく進むことができるかと思えます」

多分だけこの人、強い。凝もせずに見ただけなのではつきりと断言はできないが、垂れ流されているオーラが普通の人よりはるかに多い。

「二百階以上は？」

私はわざとらしく顔を曇らせる。

「あまり良い感じはしません。二百階を目安に戦いをあきらめるか、あるいは自身ももう一段階先へと進む必要があります。現状だけでは二百階で手痛い洗礼を受けることになるでしょう」

「なるほど……じゃあ、これならどうだい？」

するとマジリクさんは、その場で纏をした。くそ、騙されたか。

纏をしたマジリクさんのオーラは私の纏より多い。かなりの手練れなんだろう。

「……問題ありませんね。わかってて私を試したんですか？」

「なに、占いつてのがどうやっているのか知りたかっただけさ。本当に普通に占つてい

るのか、それとも『能力』なのか、あるいは人を見ているのか、とかね」

「占い師はそれらを複合して診断を下しますからね、尤も能力は私の場合は使用していませんが」

「そいつは見てりやわかる。ところで俺は今百五十階にいるんだがな。嬢ちゃん、俺が二百階を過ぎてからも占ってくれるかい？」

「一か月以内の占いだとの的中率が下がりますが、それでもよろしければ。私自身が二百階に到達したら店は二百階ロビー周辺に引っ越しする予定なのでお気をつけて」

ガハハと豪快に笑いながら了解と告げて、マジリクさんは去っていった。

すると数人の人たちが私のテーブルに集まってきた。

「あんた、あのマジリクの知り合いなのかい？」

「いえ、ただのお客様ですが。有名な方なんですか？」

集まってきた人たちによると、マジリクさんは指一本・一試合三秒以内で百五十階まで上がったといった猛者なんだそうだ。

まあ当然だわね、あのオーラ量と筋肉なら念能力を使わずともそのくらいやれるだろう。

彼が常連になってくれると言っていたことを告げると、占ってほしいという客が急増した。しめしめ。

それからしばらくの間『あのマジリクが信頼している占い師』という噂がガンガン広まって、少々値上げをしてもお客様に困ることはなかった。ウハウハ。

無名の占い師にハクをつけてくれたマジリクさんにも感謝の正拳突きを捧げよう、そうしよう。

ノーダメージだった私はこの日もう一試合組まされて、四十階まで上ることができた。

第三十六話

基本的に、私は夕方五時には店を閉め、毎日家に帰っていた。

ゲレゲレをそんな長時間ほっとくわけにはいかない。過保護万歳。

試合は毎日組まれる。複数試合のこともある。

基本受けや流しの修練をしていた私は十フロアずつ歩を進め、三日で七十階に到達した。

そしてその三日の間に、店を訪れた原作キャラが現れた。

独楽使いのギドだ。ゴンに破壊されたであろう一本足は綺麗に修復されている。

「……オレはこのままでいいのか、占ってほしい」

「このまま、というのは？」

「現状に限界を感じている。オレは二百階闘士だがフロアマスターには程遠い、そう実感する出来事があった……。このままここでフロアマスターを目指すべきか、あるいは違う道を進むべきか、ずっと悩んでいる」

「……なるほど、では占います」

いつも通りカードを引いてもらう。『力』の正位置。

「先ほど悩んでいるとおっしゃいましたが、カードには強い信念と決意が見受けられます。本当は諦める気などないのでしょうか？　ただ、今は少し自信を失っている……」

「確かに、そうかも知れないな」

「あきらめる必要はありません。あなたの戦闘を録画で拝見しましたが、『力』のカードが示すまま、すなわち己を強化する竜巻独楽はともあなたに向いた戦い方なので、それを続けてさらに磨き上げることをおすすめします。逆に戦闘円舞曲や散弾独楽哀歌はあまりおすすめでできない戦い方です、実際の独楽を使用するよりもむしろオーラを練り上げてそもそもの独楽自体のようなものを作り上げて放つ方が向いているんじゃないでしょうか」

原作知識、久々に使ったな。

原作とかけ離れたところに居るからなあ、时期的に。

確かギド自体は強化系だったはずだ。

メモリの、これ以上能力を作れるかどうかは微妙なところだが。

多分ムリ。でもそれは言わない。

「……アンタはどうやら、信頼できる占い師みたいだ。オレも自分の戦い方をもう少し考えてみることにする。アンタ自身も選手なんだろう？　もし二百階まで上がってることがあれば、是非お相手願いたい」

「はい、そのときは是非」

実際に信頼されているかどうかはともかく、対戦出来たら素敵かな。

ショットガンブルース
散弾独楽哀歌、ちよつと欲しい。

操作系とは相性もいいから私ならうまく使いこなせるだろう。

スマホに通知が届いた、今日二回目の試合だ。

手を抜いてるのがバレ始めたかな。正確には抜いているのとは違うんだけど。

テーブルの真ん中に『ただいま戦闘中』と書いたスケッチブックを立てて、私は会場へ向かった。

八十階、九十階、問題なく勝ち上がる。

翌日。百階、百十階、初めて心源流の人と戦った。勉強になった。ぶつ倒した。

そしてさらに翌日、百二十階の試合。

「押忍！」

……またしても、原作キャラ。彼の背後にはメガネをかけた師匠もいる。

「よろしくおねがいします」

私も頭を下げる。挨拶は、大事。

そして私は垂れ流していたオーラを身に纏わせる。

当然彼も、その師匠も気付いただろう。

師匠から「ズシ！ 纏のみ許可します！」という声が届いた。

電光掲示板にオツズが表示される。

ここまで無敗の私と、この辺りをウロウロしているであろうズシくん。

私の方がほんの少しだけ倍率が優勢だった。

「それでは三分三ラウンドポイントアンドK O制、始め！」

素早く彼に駆け寄り腹部に強い掌底を食らわせる。

彼のガードは間に合わず後ろに数メートル吹き飛んだものの、ダメージはそれほどな

いようだ。

やはり念能力者との対戦、そう簡単には終わらない。

今度はズシくんの、正面からの正拳突き。

纏のまま両腕を交差して受け止める。一メートルほど後方に飛ばされる。

さすがに非念能力者の拳とは段違いに重い。

とはいえ倒されるほどではない。

ポイントは動かない。互いにダメージを与えていないと審判が判断しているのだから。

「戦う占い師さん、すごいッス」

『戦う占い師さん』それは私がこの闘技場でつけられた二つ名。そのまんまじゃん。

まあ、占い師としても選手としてもそこそ有名なようになってきたつてのは、悪くない。

ズシくんの下段への正拳突き、をフェイントとした顎へのアッパー攻撃。位置距離ともに見切つて頭部を背面へ逸らし、かわす。

スピードはこれまで対戦した選手と同程度かむしろ遅いくらい。

彼は片足を後ろに引いた。これは蹴りが来るな。

引いた右足がそのまま浮いて横薙ぎに私の側頭部を目がけてくる。

私は左腕一本でそれを受け止めた。今度は飛ばされることもなかった。

「さて、ズシくん。悪いけどそろそろ終わりにさせてもらおうよ。占い師さんはそっちのお仕事もあるからね」

私は全力の練を開放する。彼もそのオーラを受けて反射的に練をしたようだが師匠からのストツプはかからない。

彼の背後に回つてその首筋に手刀一閃。ズシくんはその場に倒れ込んだ。

試合は私のKO勝ちとなった。

手加減したからすぐに気が付くとは思うんだけど、ちよつと心配。

拳を握つて身体の左右に置いた腕に力をこめる。

「押忍！　ありがとうございました！」

いい勉強になりました。いやマジで。

そして試合を終えた私はすぐにお店に戻った。すでに数名の行列ができています。今は占い一回三千ジェニー。それでも行列が途切れることはない。ありがたやー。昨日あたりからちらほらと、占いではなく選手としての私自身目当てのお客様も出てき始めた。

戦う占い師さんのサインが欲しいんだとか。サインは占いのサービスにお付けした。「今日も危なげない勝利だったな、戦う占い師さんよ！」

「これで三日連続ですよ、正直これ以上占いが当たる気がしないんですが」

「はっはっは、そう言うなって。オレはあんたのファン第一号を自認してるんだからよー！」

ここ三日、毎日店を訪れてくれるお客さんだ。名前は知らない。

気乗りしないが商売なので、当たる気のしない占いを始める。

カードを引いてもらう間に彼の着ているシャツにサインを書いた。

『『隠者』のカードの正位置ですね。落ち着いて孤独に己の行状を見直してください。悪いカードではないですが……』

「なんだいそれはイヤミかい？ まあ気にするな！ オレの唯一の趣味みたいなものだ。オレの稼ぎじやめつたに二百階以上の試合なんて見られないからな、先行き有望な

選手にツバつけといて、将来自慢するんだからよ！ アンタもオレが見たところ、もうすぐ二百階闘士サマだろうからな！ 期待してるぜ！」

言いたいことだけ言つて、お客さんは帰つていった。

次のお客様は……と。見覚えのある寝ぐせにメガネのお師匠さんだ。

「初めまして、あなたが今日対戦したズシの師匠にあたるウイングと申します」

「はい、存じ上げています。心源流の方ですよね」

ウイングさんは椅子に腰かける。話をしに来たのか、占いをしに来たのか。

答えは両方だった。

ズシくんはあの後すぐに目覚めて、特に後遺症もなかったらしい、一安心。

「ズシの育成に関して、現状のままでもいいかどうかを占つてほしいのですが」

「わかりました……カードを引く前に、ちよつと手をお借りしてもいいですか？」

手相を見るように、ウイングさんの手を取る。

これは私が一昨日気付き昨日から実践しているもう一つの占いだ。

私は昨日からあらかじめ『女教皇』を使用している。

「ウイングさんは、彼をどのように育てたいとお考えですか？」

手を取つたお客様の記憶を読む。

それによって、お客様の隠された望みを認識する。

その内容とカードの占いを組み合わせた結果を、お客様に提供する。

ひとつつ占い師としての情報源が増えたといった感じかな。

そしてこの方法を取り入れることによって、私に知られていないことまで当たると感じるお客様が増える。

客が客を呼び、都度値上げしてもこの行列だ。ウハウハ。

「そうですね、彼はたぐいまれな才能を秘めた子供です。だからこそ、丁寧に堅実に育てていきたいと考えています」

彼のその言葉に嘘はない。時間をかけてゆつくりと、才能の花を開かせたいと考えているようだ。

「ではシャッフルしたカードの中から一枚を選んで手元に引き寄せてください」

手を離し、カードを引かせる。出たカードは『法王』の正位置。

「基本的にこのカードは保守的なカードです。それは別の言い方をすると、現状維持が最もよい道だということですよ。逆位置の場合は現状のままだとよくないという意味なのですが、正位置の場合は維持が何より最善です。迷うことなく今のまま突き進んでください」

カードを集め、番号順に並べ、箱に仕舞う。

このルーティンはたとえ客が並んでいようとも時間がかかろうとも、絶対に崩すこと

のない私の中の制約。

特に意味はないんだけど。

そのまま次の人を占うとなんか前の人の運命を引きずってしまうような気がするのよね、なんとなく。

「なるほど、安心しました。私の育て方は間違っていないということがわかって……とところで、あなたはプロハンターですよね？」

「はい。ご存じでしたか」

「私もそうですから。ネテロ会長からあなたのことはうかがっていましたよ」

なん……だと……。まあ暴れまわったからな。主にキルアとゲレゲレが。

「あなたであれば二百階以上に行ってもひとまずの問題はないかと思われませう。ですがあそこは魔境、とんでもない強者も控えていますので、くれぐれもお気をつけて」

「はい、ご忠告ありがとうございます」

これにてウイングさんの占いタイム、終了。

あつ、もう五時過ぎてる、帰らなきゃ！

残っている並んでた皆さんに日付を書いた番号札を手渡してから、片付けに入る。

エイラ印のこの番号札を持ってくれば、優先的に占ってもらえるのです、翌日のみ有

効。

さあ今日も帰ってゲレゲレをモフモフしよう。
最近ちよつと毛がゴワゴワし始めたけど。一回シャンプーしとくかね。

第三十七話

ズシくんとの対戦以降、私はコンスタントに階を登っていく。

百九十階も危なげなくクリアした。

そして、二百階登録。声をかけてきたのはギドだった。

「二百階おめでとう。アンタの試合、あれからずっと見ていたよ。正直アンタに敵う気はしないが、是非手合わせ願いたい」

初心者狩りではなく、相応の敬意を払ってくれている。

ズシくんとの対戦で、私の顕在オーラ量を見せたからかな、多分。

普通の人には何も見えなかっただろうけど、念能力者のギドには間違いなく見えただろうから。

「(こ)ち(ら)こ(そ)、そう言ってもらえて光栄です。私は九十日ギリギリまであけて登録する予定なので、そちらで合わせていただけると助かります」

「わかった、じゃあ六月の十八日だな。オレもその日に合わせて登録するでしょう」

最低限のあいさつを交わして、ギドは去っていった。

私は当初の約束通り六月十八日に希望日を設定して申請を終える。

そして今度は二百階ロビーの露店の申請だ。

必要金額は跳ね上がり、月百万ジェニープラス売り上げの二十パーセント。

その代わり二百階全店共通のポイントカードがあり、ポイントで支払われた場合は一点ポイントにつき一ジェニーで天空闘技場からバックされる仕組みだ。

電子マネーなどを含めた支払いシステムはすべて向こうが用意してくれている。

その使用料込みの値段というわけだ。

特に問題はなく、そちらの登録手続きも終えた。明日から開店できる。

四月いっぱいまでは一階の店もあるので、そちらには『二百階C—38地区に引越しました』という看板を置かせてもらうことにする。

占いの代金は現在一回五千ジェニー、それでもお客様には困らない。

二百階へのお引越しに合わせて六千ジェニーに値上げすることにした。

占いつてのはいいいね、元手がほとんどかからない。

飲食店なんかとは違って利益率ほぼ百パーセントの商売だ。ボロ儲け。

使っていて気付いたのだが、オーラを纏った私のカードは通常よりも少しだけ傷みにくくなっているみたいだ。

ここに来てずいぶんたくさんの人たちを占ったが、チャチでペラペラだったはずのカードなのに折れたり破れたりする気配がない。

これはこれでありがたいことだ。

このカード破れたら泣いちゃう。

……本当は操作系としてこのカードを操作したらずいぶんな力を手に入れることができるんだろうけどもそれは絶対にやらない。

ところで、一階で占っていた時は毎日試合が組まれるので必然毎日占っていたのだが、二百階以降では少しのんびりゆったりすることにした。

週休二日。休みの日は最近甘えたれになったゲレゲレをしつかりがつりモフることしよう。

ちゃんといい子でお留守番しているのだが、私が帰宅した時はまわりついて離れない。

うっかり蹴飛ばしそうになったことも一度や二度じゃない。

食事と一緒に、トイレも一緒に、お風呂まで一緒に、寝るのも一緒に。

ただし濡れるの嫌いなゲレゲレは私がお風呂に入っている間は離れて眺めているだけなんだけれども。

監視されている、そう感じる（笑）

一度、お風呂のフタに飛び乗ったらフタが壊れて湯船にドボンしたこともある。

ついでにシャンプーしたら死にそうな声でフミイアオウ言っていた。草。

人間語に訳するときつと「ぼくいまころされそうですう〜！」に違いない。大草原不可避。

ドライヤーもかけて、ほのかにいい香りのするフカフカ猛獣、いっちょよ上がりだ。

あとはもう一つ、私は髪を切った。肩でばっさりと同髪無しボブヘア。

髪色は違うけれど、パクノダさんと同じ髪型だ。

髪が長いと戦う時に色々と不便だ、掴まれたり、引つ張られたり。

二百階まではそう困ることはなかったけれど、ここから先は魔境だとウイングさんも言っていた。

これは私の、二百階闘士としての覚悟のしるし。

あと頭洗うのがすごく楽になった。使うシャンプーの量も減った。

心なしか身体も軽い。いいことづくめだ。

占い師としての神秘的な雰囲気は少し損なわれる気がしないでもないけれど、まあそこはそれ。

今の私はなんてったって『戦う占い師さん』

この街ではそんじょそこらの占い師よりはるかに有名になっている。

天空闘技場に興味がなくてもわざわざ占ってもらいにくるお客様も出てき始めた。

一回テレビにも出た。

『天空闘技場面白選手大特集』

イロモノ扱いだった。

取材の時はそんなこと一言も言わなかったくせに。ちっ。

九十日。まだまだ時間はたくさんある。

この間、午前中は感謝の正拳突きと念の修行、午後は具現化系修行兼占いショップ、天空闘技場からの帰り道に買い物をして帰宅。

主にそのルーティンで毎日を過ごしていた。

あ、ゲレゲレのために大型の業務用冷凍冷蔵庫も購入した。

キヤットフードだと一日二キロ近く食べるので、他にも色々食べさせるために。

牛や豚を一頭全部買い付けて解体して持ってきてもらったり、ブリを丸ごと買ってきたり。

普通のお肉は常に冷凍して保存してある。

いざとなったらこの中にお肉が入ってるからね、そう言い聞かせるとゲレゲレは器用に冷蔵庫の扉を開けた。

勝手に食べたからお仕置きだからね、そう言うとき「ふにゃん」とかわいい声を出して凹んでいた。

ああもう可愛いなこの野郎。食べちゃいたいくらい可愛いな。

ちなみにゲレゲレはガスの点火もマスターした。相変わらずのこの賢さよ。

これでいつでも自分で火を出して焼いて食べることができる。

私に万一のことがあっても、しばらくは食いつなぐことができるだろう。

二百階登録にあたって、私は公正証書で遺言も残してある。

当然、おもにゲレゲレのことについてだ。

私が死んだ場合、すみやかにこの家に居るゲレゲレを保護してカキン帝国の奥地に放つようにとの指示が書いてある。

資産はその費用として費やし、もし残ったらハンター協会へ寄付するようにと。

そしてその公正証書を、役所ではなくハンター協会に預けた。

ハンターは命を落とすこともまれではない職業のため、そういうシステムが事前に準備されていたのだ。

これでひとまず一安心。

そうそう簡単に負ける気はないけれど、ヒソカみたいなのが出てきたら勝てる気もしないからね。

死にたくはないけど、念の為。

ゲレゲレにもちゃんと言い聞かせた。硬のネコパンチが飛んできた。

これはきつと彼なりの励まし。死ぬんじゃねーぞと。

そう簡単に死んでなるもんですかい！ 何てったって今が一番楽しいんだ！

そうして楽しい九十日はあつという間に過ぎ去った。

六月十八日、天空闘技場二百階初戦。相手はギド。

ギドはすでに一度フロアマスターに挑戦してコテンパンにのされたそうだ。

そして挑戦権を失い、改めて二百階闘士として再スタートを切ったらしい。

そんな彼の現在の星は三勝一敗。

原作での描かれ方はアレだったけど、なんだかんだここではそう弱くはない方なのだ、彼も。

一方私は上がってきて初めての試合。オッズは圧倒的にギド有利。当然だろう。

とはいえ、ファン第一号のおっちゃんを試合最前列に招待している手前、私もそう簡単に負けるわけにはいかないのだ。

金銭的にそう裕福ではないと言っていたおっちゃんは、試合を観戦するだけでなく重なる値上げにもめげずに毎日店まで来てくれた。

それは、占いのためではない。純粹に私を応援してくれていたとわかった。

そんな彼が今、私の試合を観ている。しかも最前列で。

応援は、間違いなく選手の力にもなるのだ。絶対に負けられない。

「よろしくお願いします、押忍！」

「こちらこそ、よろしく頼む」

互いに頭を下げる。これは殺し合いではなく、手合わせ。

「ここまで無敗で勝ち上がってきた『戦う占い師さん』ことエイラ選手、能力は未だ未知数です！ 一方の、皆さまご存じギド選手、十勝三敗でフロアマスターへと挑戦したこともある猛者『人間独楽』、現在は三勝一敗、一敗は前回の試合に来なかつたための不戦敗となっています！ さあ、この試合どうするどうなる!!」

「では、始め！」

二百階最初の試合が、スタートした。

第三十八話

「オレはアンタを尊敬している！ だから、最初から全力を出す！」

ギドは開始即竜巻独楽を繰り出してきた。

しかも、原作とは違って細かく移動をしている。

これはおそらく、ゴンに石板ひっくり返して攻略されたためだろう。

一か所にとどまっていたのは危険と判断したギドによる回避行動。

……油断は、出来ない。

「戦闘円舞曲！ 戦いのワルツ そして続けて散弾独楽哀歌！ ショットガンブルース」

まず最初に戦闘円舞曲で独楽をステージ上にバラまき逃げ場を無くし、散弾独楽哀歌 ショットガンブルース を私目がけて放ってくる。

しかしやはり、ギドにこの戦い方は合わない。一つ一つの独楽の威力が段違いに弱い。

いずれも私は纏のみではじき返す。ダメージはゼロだ。

「やはり無理か、まあ予想はしてたがな……ならばこれだ！」

ギド自身の竜巻がどんどん大きくなっていった、周辺の空気を巻き込んでいく。

「アンタのアドバイスをもとに改良した新技！ 『台風輪舞曲』！」
タイフーンロンド

凝で目をこらし、しっかりと確認をする。

大きな台風の中で、輪舞曲ロンドの名の通り本人は前後左右に繰り返しリズムを取って大きく動きながら竜巻を拡大再生産している。

遠めに距離を取っている私の周辺にまで風は届いている。

中央部分が圧縮されて周辺の空気を吸い込んでいくようだ。

これは強い。直接攻撃を仕掛けても、私の強化能力じゃ弾き飛ばされるのがオチだろう。

とはいえこのまま近付いてこられたらそれだけでもジ・エンドだ。

こちらから攻撃を仕掛けるしかない。

私は二十二枚のカードを具現化する。

その中の、普通のカード一枚にオーラを纏わせギドに向かって投げてみた。

カードは一旦台風の中に吸い込まれ、弾き飛ばされて場外へと落ちる。

『太陽』でも同様だろう。炎が彼の元まで届くとは思えない。

ならば使うべきはもう一枚。

『世界』
ワールド

左手に持っていたタロットの束から右手で引いた『世界』ワールドのカードが消える。

消えた瞬間からおよそ一秒間、世界は動きを止める。

別の漫画から着想を得た能力だが、特質系能力にあたるため私にとっては費用対効果が非常に高い。

戦闘中の一秒は、黄金よりも貴重^{レア}。

もちろんギドも止まっている。空気の流れも止まるから強い風も今の私には意味がない。

その一秒を使って、私はギド本体へ足払いをかけた。

世界が止まっている間、私は任意に動くことができる。

ギドの倒れ込むであろう位置の床に『太陽^{サン}』を差し込んで、その場を離れる。

そして一秒が経過した。

台風は動きを止め、ひっくり返ったギドが罫の上に転がる。同時に『太陽^{サン}』を発動。

炎上したギドはその場で転がって炎を消し止めようとする。

私はそんな彼に馬乗りになってマウントを取った。

ひっくり返されないように股間部から足にかけておよそ攻防力三十、右拳に攻防力七十と振り分ける。

「さあ、どうするっ？」

拳を大きく振り上げて、それ以外の部位はただの纏。これは彼に対する敬意。

彼自身がまだ独楽を持っているのであれば、それを使って私に隠れて狙い撃ちできないくもない。

けれど今の彼は武人。卑怯な手は使わない、拳を交えてそれを実感した。

「まいった、オレの負けだ」

最後の条件をクリアする。光がギドの体から放たれて私の中に吸い込まれた。三枚目のカード。

『ホイール オフ フォーチュン運命の輪』

彼自身が気付いたかどうかわからないが、私は彼の能力を手に入れた。

「そこまで！ 勝者、エイラ選手！」

大歓声が耳に届く。

その中でもひととき大きな声で、常連のおっちゃんやんが壁から身を乗り出して落ちんばかりに興奮しながら歓声を私に向けてくれている。

うれしい。人に信じてもらえるのは、こんなにも嬉しい。

「……『タイフーン ロンド台風輪舞曲』、あれは素晴らしい技でした。今後も精進すればさらに磨き上げることが可能だと思います」

私はギドに手を伸ばして、彼を立ち上がらせる。

「それはアンタお得意の占いかい？ まあ、実際に使ってみて確かに手応えはあったと思っている。アンタみたいなトンデモ闘士がいきなり現れない限りは、オレももう少しここにしがみついてみることにするさ」

そしてそのまま、固い握手を交わす。

いい試合でした、ありがとうございます、押忍。

私は再び九十日後に試合予定を組む。次は九月の十六日だ。

登録を終えると、急いで店に戻った。

いつものように、占い師稼業を再開する。

未だ興奮冷めやらぬ常連のおっちゃんも来てくれた。

招待券、想像以上に喜んでもらえたようで嬉しい。

さすがに毎試合招待するのは無理だけど、最初の試合はおっちゃんにぜひ観てほしいか。

……そういえば、まだ名前知らないな？ まあ、いいか。

翌々日の閉店間際、ギドが店を訪れた。

若干興奮気味に「実戦にはまだほど遠いが、アンタとの対戦の後、独楽のようなもの

を発射する能力を身に着けることができた」と話してくれた。

メモリ、まだ残ってたのか？

それとももしかして……私は考察する。

私の能力は他人の念能力（発）を奪う能力。

奪われた人間はどうなる？ ただ発を失うだけなのか。その場合メモリはどうなる

？

私の結論は『能力を奪われた分だけメモリに空きができる』

もちろん新たに発を習得するには努力や時間や思い入れや覚悟が必要になるだろうが、空いたメモリで新たな発を習得できるのではないだろうか。

それゆえギドは私と戦った直後に新たな能力を発現することができた。

おそらくはそれ以前、私が占った直後から努力と修行に時間を費やしていたのだろう。

カストロが死んでいることが悔やまれる。

彼がもし生きていたならば、私の能力で分身ダブルを奪っていけば、彼はその空きメモリを使つて己に合った能力を再度身に着けることが可能だったかもしれない。

もちろん私も能力を手に入れてウハウハだっただろう。

……まあ、無理か。ヒソカと戦つて無事に済むわけがないもんな。

週休二日。私は『運命の輪』を使ってみることにした。

ギドのどの能力を手に入れたのかわからないからだ。確認。

名前的に台風輪舞曲タイフーンロンドを手に入れてそうで、だとしたら嫌だなあ、などと思っていたけれどそれは杞憂だった。

私は無事に散弾独楽ショットガンブルース哀歌を手に入れていた。

しかも、前もって独楽を準備しておく必要はないらしい。

自分で独楽を具現化して、それを操作して、相手に放つ。

具現化系と操作系の複合技。その割には思ったよりオーラを使わなくて済んだ。

放出系にあたる『女教皇』のマグナムや、放出系や変化系に近い乱れ飛ぶシューティングメジャー二十二の使徒の『太陽』の方が使うオーラの量が多いくらいだ。

そして岩程度なら明確に方向性をもって意図的に破壊できることも確認した。

今のところ、技術としても威力としても申し分ない。

あとはもつとうまく使えるよう、己のオーラに磨きをかけるだけだ。

そして休みの日は、午前中の修行を除いてゲレゲレとのイチヤイチャタイム。

曇り空の多いこの季節には稀な太陽の下で、芝生に寝転んで、彼の両足を掴んで仰向けにして胸毛に顔をうずめてモフモフを堪能する。

ゲレゲレはすでに私の体と同じサイズにまで成長している。

筋肉量は私以上だろう。ネコ科の動物はしなやかな筋肉を持っている。うらやましい。

ゲレゲレの胸毛からお日様の匂いがする。草の匂いと土の匂いと太陽の匂い。

彼の全身の毛は割と短いのだが、何故か胸だけはモフツと長毛種のような長い毛をしている。

なので必然的に、私はしょっちゅう彼の胸に顔をうずめる。至福。

やりすぎると硬のネコパンチがとんでくるのはご愛嬌。

とはいえ随分と大人になったゲレゲレは、以前ほど遊びを求めなくなった。

むやみやたらとじやれついて来ることもなくなった。ちよつと寂しい。

時々庭に来る鳥やトカゲを狩ったりもしているみたいだが、基本的には彼ものんびりとここでの生活を享受しているらしい。

桜の木に爪を立てたときには嚴重に叱っておいた。絶で遠い目をしていた。

腐つちやうからね、桜の木は傷付けちやダメなのだよ、ゲレゲレ。

爪とぎ用には丸太を数本庭に放り投げている。以降はそれで爪を研いでいるようだ。

トイレは自分で用を足す。

穴を掘って、出して、しっかりと埋める。器用なものだ。

きちんと深く掘ってきちんと埋めているので、臭いの問題も出ない。

濡れるのは嫌いなくせに、トイレの時は雨でも気にせず外に出て用を足す。

……あ、濡れるのが嫌いなんじゃないやなくて、シャンプーが嫌いなのか。

それとも、そのあとのドライヤーが嫌なのかもしれない。

「ぐんぐん」

声も随分と低くなった。猛獣っぽい。そりやそうだ、そもそも彼は猛獣だ。

でも私の中ではゲレゲレはやっぱり猫感覚。

ピイピイ言っていたところが懐かしい。

もつと写真を残しておけばよかった。カキンの秘境にそんなもの無かったけど。

もういちど胸毛をもしやもしやして吸い込む。極楽。

第三十九話

いつも通り毎日を修行とお店に通う日々。

七月の初旬ごろ、唐突に変化は訪れた。

電話の相手はシャルナークさん。

団長さんが戻ってきたのかと思ったが違うようだった。

「強制ではないけど、もしよければ手伝ってほしいことがある」

往復の貸切飛空船を出してもらうことを条件に、私は旅団の手伝いをすることにした。

さすがにこのサイズのゲレゲレを公共交通機関で連れて行くことはできないから。

どうやら流星街は、深刻な危機に見舞われているようだ。

これは原作にもあつた記述。

流星街といつてもとても広く、中心部にはたくさんの人が住んでいる。

その中心部に、蟻が本拠地を構えて人間を攻撃・捕獲しているらしい。

……もう、原作はそこまで進んでしまったのか。

ということは王は産まれたんだな。……あの界限には関わりたくないなあ。

団長さんと旅団員との再会はまだ果たされていないようだ。旅団メンバーも全員集まっているわけではない。

正式に流星街の議会から依頼されたわけでもないらしい。ただ、旧知の人間が苦境に立たされている。

流星街に住み、流星街出身（全員ではないが）の幻影旅団が動くのに、理由はそれだけで充分だった。

流星街に空港はない。離着陸できるような場所も存在しない。

天空闘技場そばの空港から流星街最寄りの国の空港まで約一週間。そこから陸路で三日。

以前にも、旅団の本拠地を訪れる際に使用したことがある空港へ私とゲレゲレは向かった。

修行の成果が出てるのか、徒歩で二日で本拠地にたどり着いた。

「おかえり、エイラ。団員でもないのに協力してもらって感謝するよ」「とんでもないです、詳細を聞かせていただけますか？」

シャルナークさんの口から詳細を聞かされたが、おおむね原作準拠であるようだ。

女王と名乗るキメラアントが流星街中心部の一角に巣を建設し、人間に繰り返し投降を呼びかけているらしい。

捕獲された人間は女王の選別を経て、異形へと姿を変えられる。

その際に大半の人間は死ぬが、一部は女王に忠誠を誓いその巢の周辺でさらなる人間確保の為に動いているらしい。

「バカバカしい話だよな。そいつらがどうであろうが全部ブツ潰せば話は終わりだろうがよ」

フィックスさんの言葉にも一理ある。根源を叩けばそれで終わりだ。

「それで、皆でアリ退治に行こうかと思つてね。一応全員に連絡は入れたんだけど、ノブナガとフランクリンは手が離せない用事があるらしいしマチは興味を示さなかった。コルトピは自分は戦いに向いてないと言つて不参加」

「私でも倒せる相手なんでしょうか」

「女王格のキメラアントに関してはこちらよつとまずいかもしれないね、だから巢の中では誰かと一緒に行動した方がいいと思う」

あるいは巢周辺の異形の者退治。それくらいなら私でも出来そうだな。

……流星街の報復対象になったらやだな、目立たないところでやろう。

そうして私たちはその場に居た全員で、流星街中心部を訪れた。

中心部を訪れるのは初めてだが、瓦礫と廃墟のような建物が交互にあるのは順に並んでいる。

中心部の中でもさらに中心部にある教会には異形の遺体が無数に並べられていた。これらのすべてが元住人であるらしい。

「つい先日まで、普通の人間だった」

「……アリの仕業か」

「だが”死者”には違いはないだろう？ 何が問題なんだ？」

ガスマスクを付けた住民が返答する。

「生きて奴らに加担するものがある……！ このとおり異形の姿になってな。彼らを元通りにする術があるか否か……現在議会はその点を「死」の境とする意見が大勢となっている」

「報復しようにも仲間が死んだのか改造されただけかでもめてるってわけか」

なんて面倒な……フィンクスさんじゃないけど、今そんなごちゃごちゃしたことを考えるよりも、少しでも早く大元の全てを断つてから考えればいいだろうに。

「ホント、変わらねエな。ずれたとこで迷走してやがる。オレたちは勝手にやるぜ、邪魔する奴は倒すだけだ」

流星街において、幻影旅団はそれなりの地位を確立しているらしい。

まあ単純に持っている力が大きいってのもあるかな。

フィンクスさんのその言葉に文句を言う人間は一人もいなかった。

そして私たちは巢へと向かう。

「正面突破で」

「異議なし」

そして私たちは正面から堂々と中へ入る。

女王はおろか、そこには人つ子一人ありんこ一匹いなかった。

「……ご自由にお入りくださいってか」

「それじゃ、わたしはこっち」

「じゃ、ワタシこちね」

旅団各自、バラける。

「……みんなバラバラ？」

とまどうカルトちゃん可愛いですハアハア。お人形さんにして愛でたい。

「当然ね、誰が女王を殺るか、競争」

「お前だつてオレたちに知られたくない能力とかあるだろ？ 向かってくる奴は全部始

末しろ。もしも女王を倒せたらお前が団長代理でいいぜ」

「……了解」

さて、私はどうすべきか……シャルナークさんは誰かと一緒に居ると言ってたな。

「エイラ、僕と行く？」

そのシャルナークさんから、誘いの声がかかった。

「お邪魔になるかもしれませんが、よろしければ」

「何言ってるの、帰ってきてからのエイラのオーラ、なかなかのもんだと思うよ。もうマトモにやったら僕よりエイラの方が強いんじゃないかな」

何をご冗談を。

私の力は未だ旅団メンバーに遠く及ばない、カルトちゃんを含めてもだ。

とはいえせっかくのお誘い。断る理由はない。

私はシャルナークさんと一緒に行くことにした。

「あ、もうみんな行っちゃったね。……じゃあ、あっちに行ってみようか」

二人と一匹で進んで割とすぐ。巨大なカナブンのような敵が現れた。

私は知っている、奴は操作されたモンスター。

「シャルナークさん、『早い者勝ちに注意してください』」

「それも占い？ 了解」

それだけで、彼には伝わる。

「ゲレゲレも、警戒！」

「があう！」

私は二十二枚のタロットカードを左手に具現化した。

「何それ新しい能力？　どんなの？」

「今からお見せしますよ、あいつは私が倒します。シャルナークさんは『私とゲレゲレを含めてお気をつけて』」

私自身が戦っている隙に敵に操作される恐れがある。

それを防ぐための目。彼とゲレゲレにはそれになつてもらおう。

敵が襲い掛かってきた。私はそれを紙一重でかわす。

切れ味が鋭そうだ。爪先だけではなく腕にも刃状の突起が見える。

纏っているオーラもそれに合わせて刃状に変化している。

本来は変化系なのかな。それとも強化系？

一枚のただのカードにオーラを纏わせて関節を狙う。

ちよつとだけ突き刺さる。カルトちゃんの紙切れみたいに。

特にダメージはなし。すぐにはじき返されて地に落ちた。

このカードがダメなら、強化系はもつとダメだ。近接格闘になつたら勝ち目はない。

私は敵から距離を取りつつ、一枚のカードを右手で取り出した。『死神^{デス}』のカード。

天空闘技場での休戦期間に、私は新たなカードの能力を発現することに成功してい

た。

「私は魂を刈り取る死神」

『死神』のカードが消えて、私の右手には大鎌が具現化されていた。
「わおー！」

シャルナークさんが感嘆の声を上げている。照れる。

私は鎌を振り回す。自分で具現化したものはしつくりと手になじむ。

大鎌のサイズは私の身長より大きい。

棒の中央部分より少し刃から離れた位置を握りしめて、私は敵に駆け寄った。

『周』を鎌の刃部分に纏わせて、敵の片足付け根の関節を刈る。成功。

大鎌のリーチがあれば、相手が強化系あるいは変化系ならば私が攻撃を受ける可能性は少ない。

鎌、直接手に持っていればそれは放出系ではなくあくまで特質系と具現化系。

あと、ちよっぴりスパイス程度の強化系。

鎌一振りにつき敵の足を一本ずつもいでゆく。二度で敵は動けなくなった。

油断は大敵。残った足で移動が可能かもしれない。

続けざまに残りの足も刈ってゆく。ダルマ状になった甲虫がそこには残された。

最後にとどめを刺す前に。私たちはもう一匹を逃がさない。

「シャルナークさん！」

「はいよー！」

シャルナークさんはとある箇所に向けてアンテナを投げる。

それは私が戦っていた敵とは全くの別方向。

逃げようと羽を飛ばたかせていた別の敵の背中にアンテナは突き刺さり、そいつはシャルナークさんの支配下に落ちた。

そして私は甲虫の腹にとどめを刺す。

「ありがとうございます。これでひとまず問題はないと思われそうです」

「エイラの占い、さすがだね。これもう百パーセント当たると言ってもいいんじゃない？」

「いえいえ、たまには外しますよ。さて、コイツどうします？」

私は鎌を持ったまま、アンテナを刺された巨大ゴキブリのような敵を指さした。

「先ほどのようにロボットのなものを操作しない限り、コイツ自体は弱いと思われませんが」

「うーん、そうだよな。だったら回収しておいた方が得策かな。いいよ、壊しちゃって」

大鎌一閃。ゴキブリの頭と胸は泣き別れになり、私は鎌とタロットを消す。

そしてシャルナークさんも自分のアンテナを回収した。

「エイラのカード、もしかして奪った能力で全部揃えたの？」

「まさか。そんなにその辺に念能力者は落ちてませんし、奪うのも簡単じゃないですか

ら。これは別の能力で乱れ飛ぶシューティングメジャーアルカナ二十二の使徒と言います。カードの一枚一枚に特殊能力を付与することができますが、今のところまだ付与できているのは三枚だけですな」

「ふうん、具現化系と特質系のコンボか……エイラに合つてると思うし、いい能力だね。もし僕一人だったらアイツが操作されてるなんて気づけなかつただろうし、助かつたよ」

「いえ、こちらこそ。私一人だったら私自身が操作されていた可能性がありましたから」
念能力の相性、ほんとに不思議。運の要素も合わせたら、よほどの差がない限り実際の強さなんてほとんど関係なくなる。

「全部のカードに能力が付与されたら、団長が欲しがらるだろうな。……エイラ、もし君が良ければだけどさ、ウボオーとパクの抜け番がまだ空いてる。興味があれば、メンバーになることも考えておいて欲しいな」

その言葉は、すごくうれしい。けれど私にはまだ能力が足りない、そう思う。

「……団長さんが戻ってきたら、その時に考えます。私は彼の一番弟子ですから」
「なるほど、了解」

私たちはバラバラになった二匹の死骸をそのままに、先に進むことにした。

『シューティングメジャーアルカナ
乱れ飛ぶ二十一二の使徒』

- ・タロットカードの大アルカナ二十二枚を具現化する
- ・タロット一枚につき、一つの能力を付与することができる
- ・現在能力付与されているカードは『太陽』『世界』『死神』の三枚のみ
- ・能力を付与されたカードは一枚につき一日一回しか使えない
- ・現在のエイラのオーラ量では、全てのカードに能力を付与するのは不可能

第四十話

そのまままっすぐ進むと、他の敵に出会うことなくフェイタンさんとザザンの戦っている場所へとたどり着くことができた。

兵隊蟻の数は、意外と少ないのかもしれない。

私達より先に、フィンクスさんとボノレノフさんがここに到着していたようだった。「どうだった?」

シャルナークさんがボノレノフさんに尋ねる。

「楽勝、そつちは?」

「エイラがほとんどやってくれたよ。僕は何もしてない」

「なんだよ、一人だけラクしやがって。他はどうしてるかね」

フィンクスさんがボヤク。

観戦しながらそんなくだらないことを話しているうちにカルトちゃんやんがやってきた。

フェイタンさんの戦いを見て呆然としているようだ、可愛いねえ可愛いねえ。

やがて服がボロボロになったシズクさんもやってきて、この場に全員が揃った。

私もゲレゲレを撫でながら観戦する。

フエイタンさんとザザンのスピードは目では追えているけれど、実際に追いつくのはまだ無理だろうな。

身体能力が足りない。

前言撤回、カルトちゃんよりは目で追える分だけちよつぱり私の方が上かもしれない。

とはいえ念能力を使えばその序列は簡単にひっくり返るだろうけれど。

フエイタンさんの仕込み銃によって傷付けられたザザンが自分の尻尾を引きちぎり、変形する。

オーラ量も格段に増えたし、見るからに硬そうだ。

「全身スキだらけ、これ見逃す程ワタシお人好しないね」

フエイタンさんが硬で放った渾身の刃は、ザザンのオーラの前に折れる。

見た目だけじゃなく、オーラも硬いな。

そして体勢を崩したフエイタンさんにザザンが腕を振るう。

辛うじてかわしたが、手のひらから小さな念弾が飛び出して絶状態のフエイタンさんの胸部に直撃した。

「オーラを硬で一点集中させたのにノードメージつてのはフエイタンの想定外……」

！ 計算違いで念のガードが一瞬遅れてる。オーラの使いどころをよく知ってやがる

な」

「伊達に女王を名乗ってないね」

あれでザザンが放出系だったら、おそらくフェイタンさんはノックアウトだっただろう。

まあ、その前に放出系だったらフェイタンさんの刃から身を守ることなんてできなかったかもしれない。

私ならザザンに勝てるか？

……多分ムリだな。具現化系でも特質系でも、あの装甲を破るのは不可能だろう。

可能性があるとすれば『太陽』による燃焼。それも現在の私程度の力で焼き殺すことはできない。

なんだかんだ、私の知る限りフェイタンさんの能力が彼女との相性が一番いいのだ。

以降はフェイタンさんとザザンの殴り合い。見るからに強化系っぽいザザンに分がある。

一定は防いでいたフェイタンさんの左腕に一撃が加わる。

「イツたな、左腕」

そして……フェイタンさんが、キレル。

見たいカルトちゃんの気持ち、今ならとてもよくわかるけど、それも命あつての物種。

「ヤベエ、逃げるぞ」

みんなして射程範囲外まで逃げた。

すべてが終わった頃に、再び合流する。ザザンは消し炭になっていた。

その先は一本道。広間のような場所へ続いていた。

そこには、元流星街住人と思われる、変形生物が数十体。

あるものは呆然と座り込み、あるものは柱に体を打ち付けている。

「やはり女王が死んでも体はもう元には戻らねエようだな」

「女王の支配からは解放されてるみたいだけどね」

フィンクスさんが最初に気付いた。

離れたところからこちらに寄って来る、獣のような一つの影。

「ゴ……ポ」

彼もまた、住人の慣れの果て。

「ゴロシ……デ……ク……デ……」

タノム……オレ達ヲ……

徐々に他の住人達も近付いてくる。

人でなくなつた今、生きているのも辛い。

精神まで半分侵されつつある、それでも人間として死のうとする住人達。

「いやだね」

笑いながら、フィックスさんが応える。

「慈善で殺しなんざまっぴらだ。かかって来いよ、クソ共」

そして、腕を回し始め、腕がオーラを纏ってゆく。リップバー・サイクロトロン 廻の発動。

「おめーら、腐っても流星街^コの住人だろうが!! 最期まで根性見せやがれ!!!」

私たちもそれぞれに戦闘態勢を取る。

私も二十一枚のカードを具現化した。

獣のような元住人が、にやりと笑ったような気がした。

派手に、逝けや……

私たちは、流星街の中心部へと戻った。

今度は議会で報復対象を本当の女王蟻の方にまで広げるかどうかで揉めているらしい。

つくづく、馬鹿らしい。

「つたく、つきあいきれねエバカ共だな。テーブル囲んで出来もしねエことばっかピーチクパーチク囀りやがって」

「それでもここに残るんでしょ？」

シズクさんがフィリンクスさんに尋ねる。

「だって他にやることねーしよ」

どうせやることがないのなら、天空闘技場に誘ってみようかな。

でも上の方ならともかく二百階以下は馬鹿らしくてやってられなさそうだな。やめとこう。

「今度ア리가来たらソツコー始末してやる。二度とあんな後味のワリー殺しはしねエ」

その時、シャルナークさんのケータイが鳴った。

「団長か!」「団長さん!？」

フィリンクスさんと私が同時に反応する。

「……いや、ノブナガだった。こっちの仕事手伝わないかってさ」

「ちっ、なんだよ。誰がやるかバーカ!!」

そういう原作にもあったな、こんなシーン。反応してしまった自分がちよつと恥ずかしい。

「あーあ、ウゼエ。ただ待つ身はつれーな」

さあ、皆のおちよくりがスタートするぞ。ワクワク。

「フィリンクスてば、何か片思いの女のコミたい」

「乙女ちくね」

「なっ、なんだとテメエら、もっぺん言ってみろ!!」

フィンクスさんはその辺に落ちてるガレキだのゴミだのを片っ端から拾い上げて二人に投げつける。

原作と違い怪我をしていないシャルナークさんは負けじと投げ返していた。

ああ、面白い。やっぱり旅団はこういった、わちやわちやとじゃれ合う展開が一番好き。

私もその中に混じれている。それが何より一番うれしい。

「があう?」

ゲレゲレが不思議そうに私の顔を見上げていた。

私たちもここで少しゆっくりしていこうかね。

ゲレゲレにとっては久しぶりの外。

念能力者の私たちには、纏をすればこの場所程度の毒ガスは効果がないのだ。

そして猛獣もここではそう珍しくないらしく、一緒に歩いていても変な目で見られない。

何でも飼いきれなくなった猛獣を捨てる人も意外というらしい。

ライオンやワニ、ゾウを飼っている人なんかもいるそうだ。

意外と居心地がいい、流星街。

私たちもリードを外して一緒に走り回ることにした。楽しいねえ、嬉しいねえ。

旅団メンバーさんたちと別れ一週間ほど流星街中心部に滞在し、私たちは家へと戻った。

七月末、青い空に太陽が照り付ける真夏の景色。

一つ分かったことがある。

ゲレゲレは、セミが好きだ。食べ物的な意味で。

庭にセミがやってくる、何を差し置いてでも飛んで行って捕まえて頭から足まで残さずボリボリと食べる。

セミは樹液を吸うから、甘いのかもしいな。想像したくないけど。

なのでゲレゲレは食事や水を飲むときを除き、ここ最近お天気の日ほとんど毎日庭で暮らしている。

セミの他にも、夏は虫が増える。他の生物も活発になる。

ゲレゲレにとって、やっぱり外の方が居心地がいいようだ。

……ここに連れてきたのは間違いだったかも、そう思わなくもない。

「ゲレゲレ、カキンに戻る？」

「ぐみい!？」

私に捨てられると思ったらしい、彼は全身で拒絶の意を示した。

庭石にしがみついている。これはこれでけっこう可愛い。

「いや違うよ、捨てるわけじゃない。次の私の試合まで、カキンじゃないにしてもどこか自然の多い場所に行こうかなと思ってさ」

その間お店は閉めることになる。期間限定ならまあ問題はないだろう。

試合まではまだあと一か月強ある。久しぶりの山籠もり修行もいいかもしれない。

ただし今度は準備を万端にして。スマホの充電池とか。

日付を間違えでもしたら致命的だ。カレンダー持っていくかな。

「ぐるう」

ゲレゲレは、どっちでもいいようだ。私の杞憂だったかな。

まあ、何日か考えてみることにしよう。出来るならお店は続けたいからね。

第四十一話

山籠もりするかどうかをうだうだと悩んでるあいだに、原作は途中の展開を随分スツ飛ばしてしまつたらしい。

鳩がスコーンと私の額に突き刺さつたのだ、おろろー。

その鳩が持つてきたのは、第十三代会長総選挙の通知書。

八月八日。

ゲレゲレにはお留守番してもらつて、ネテロ会長のお別れ会兼選挙に行くことにする。

長くなりそうなので、出発前にペットシッターさんを雇つておいた。

やることは、毎日ウチの庭に新鮮な豚の死骸を一頭丸ごと放り投げるだけ。時々鶏も。

その際ゲレゲレには姿を現さないよう念を押ししておいた。

ビビられるのはよくないからね。途中でキャンセルされても困るし。

もしそれで足りない時には冷凍庫の中のものを食べるように言い含めておいた。

契約は私が帰宅するまでの間。恐らく一か月にも満たないだろうとは思ふ。

お店はその間休業だ。

スケッチブックに「しばらく休業します」と書いてテーブルの真ん中に立てて置いた。行かないという手もあつたけど、私としては行く一択。

それほどは危険もないだろうし、十二支んや、なによりジンをこの目で見てみたい。

お会いしたことはなかったけれど、ネテロ会長にも会って話をしてみたかった。

アルカとナニカにも特に触れない。あつちはあつちで何とかしてくれるだろう。

シャルナークさんが来ていたら、伝え忘れていたことを伝えようかとも思っていたんだけど、彼は来ていなかった。

正直、今の私の気分は単なる物見遊山だ。

油断していたんだろうね。

私は忘れていた……『十二支ん』が、どんな存在なのかということ。

「初めまして、あなたがエイラさんですね？」

「は、はい」

献花と投票を終えた私の目の前にいるのは、貼り付けたスマイルがとてもよく似合う伊達男。

パリストン＝ヒル。

ハンターにもなりたてで、大した活動もしていない私のことを知っているなんて予想外だった。

「第288期合格の新人ハンターであるにもかかわらず、キャンプタイガー飼育の成功、グリード・アイランドでの活動、A級首の集団である幻影旅団との共同行動……いや、すごいですね、とても新人ハンターとは思えませんよ」

「私のこと、よくご存じですね」

「もちろん！ おっと、天空闘技場での活躍も忘れちゃいけませんよね！ 『戦う占い師さん』といえば、もはや世界中の格闘ファンを虜にする美人占い師なんですから！」

パリストーンが何を考えて私に接触してきたのか、さっぱりわからない……原作でチードルが彼に感じていた得体の知れなさ、それを今私は眼前にして全力で混乱している。そんな私の心中を知ってか知らずか、パリストーンは笑顔のまま言葉を続けた。

「僕も占いには興味がありましたね、一度は占ってもらいたいものです！」

とても本気とは思えない言葉を並べ立てる。だが私に対して興味を持っているというのは嘘でもないようだ。

……なんで？ まさか本当に私が美人だからじゃないだろうし。そもそも美人じゃないし。

なんか嫌な予感しかしないぞ……。

私がそう思うほど、パリストンの笑顔はひたすらに不気味だった。思わず身構える。

警戒する私を見て、パリストンはさらに笑みを深めた。

そして、一步距離を詰めてくる。

反射的に、一步下がる。

「嫌だなあ、怖がらないで下さいよ。別にとつて食いやしませんし。選挙はもう終えたんでしよう？ おそらく今回の投票は無効になるでしょうが、別に今後ボクに入れてほしいとも言いません」

何故、私に接触してくる。

幻影旅団が目的か？ それなら私よりシャルナークさんに近付くだろう。

彼の口ぶりからすると、特にそういうわけでもないようだった。

マジでパリストンの目的が読めない。

こいつは何なんだ。何を考えてるんだ。

少なくとも、友好的な関係を築きたいと思つてはいないことは確かだけれど。

パリストンは相変わらずの笑顔で、私との距離をまた一步詰めた。

私の背中が壁に当たる。これ以上は後ろに下がれそうもない。

何か言おうとして口を開けば、その瞬間に喉元にナイフを突き立てられそうな気がし

た。

そう感じていたのは私だけかもしれないが、そんな息苦しいほどの緊張感の中、パリ
ストンは言った。

「ボクはですね、良し悪し強弱関係なく、全てのハンターそれぞれに影響力を持っていた
んですよ……それは単に、すごく面白そうだから。あなたの存在もまた、とても面白
そう。ただそれだけなんです。もしご興味がありませんら協専ハンターへの登録もオ
ススメしておきますよ、それじゃ」

それだけを言うと、パリストンは踵を返して去っていった。

……なんだったんだ、あれ。この世界に来て今までで一番緊張したかもしれない。

ある意味、ヒソカと同類の変態だな。私の中ではそう結論づいた。

自分の興味やシユミの為には他者を玩具にすることを屁とも思わない人種。

他の十二支んは、きつともつとまともな人たちだろう。

投票の時に見たカンザイやギンタ、ピヨンにこんな不気味さや底の知れない嫌悪感
は
覚えなかった。

……背中を、一筋の冷や汗が流れ落ちた。

第一回の選挙は条件不達成により、再投票が決定された。

再投票は数日中に行われる予定だ。私はその間、この街にホテルを取ることにした。選挙は繰り返すけれどそう長くは続かない。

パリストンが十二支んの直接の演説を提案するから。私はそれを知っている。選挙の結果をひっくり返そうとは思わないし、できるとも思えない。

私にできるのはただ自分の一票を誰かに入れることだけ。

パリストンだけはない。今日、私はそれを実感した。

あ、ヒソカもありえないです。快樂殺人鬼いくない。

旅団とお近づきになって私に言えた義理じゃないか。

ホテルを出て、適当な居酒屋に入る。

ホテルにもレストランはあるし、ハンター協会が本拠地を構えているだけあってとても栄えている街なので、飲食店には困らない。

メニューを見たけれどよくわからないので、適当にお任せで注文した。それと、ビール。

未成年なんじゃないかって？ オレの国は十六からアルコールOKだぞ（嘘）

私に吞ませてくれる父もいたので問題はない。ビールおいしいね。

テーブルに届いたのは十本ほどの焼き鳥と軟骨のフライ南蛮漬け風、それにピクルスの盛り合わせ。アテにびったり？

私は美味しくそれらをいただき、ビールも三杯ほど飲んだ。はー満足。豚バラでも焼き鳥っていうのはなんでなんだろね？ まあいいか。

そしてホテルに戻る。部屋はシングル、小さなデスクに鏡とテレビが備え付けてある程度の狭くてシンプルな部屋だ。

小さな冷蔵庫も設備にあつたので、酒を含む飲み物をいくらか購入して持ち込んだ。た。

ゲレゲレが一緒なわけじゃないし、私にはこの程度で充分。

窓からは街が一望できる。ハンター協会の建物もここから見える。特に問題が起こることもなく、私は次の選挙の日を待った。

第四十二話

一日を置いて二日後、二度目の選挙が行われた。

二度目の選挙も投票率の不足で無効となった。

三度目の選挙も中一日を置いてその二日後に行われた。

これも投票率の不足、しかも前回より増えた。

ここで、パリストンが十二支ん全員での演説を提案するはず。

そして私たちは今、一つの巨大なホールに集められている。

十二支ん全員の顔、それから同じ室内に見つけたビスケやノヴ、ハンゾー、メンチな

ど原作キャラの顔もしつかりと確認した。

これでいつでもこちらから接触できる。

副会長のクソ爽やかな演説のあと質疑応答に移り、レオリオがマイクを握った。

原作のあのシーンだ、ワクワクしかない。

「287期のレオリオだ。そのジンって人に聞きたいことがある」

ゴンのことを尋ね、それに対してジンが返答し、その返答にレオリオがキレる。

「ゴンの……クソ野郎!!」

机を叩き壊したレオリオの拳は床にかすかな軌跡を残してジンのテーブルへと届く。ジンの実力からいつてかわせないはずはないんだけど、それはジンの顎へと見事にクリーンヒットした。

場内割れんばかりの大喝采。

「いっぺん死ぬ!!」

超新星の誕生である。

全員がスタンディングオベーション。もちろん私も手が痛くなるまで拍手した。

その結果、浮動票がレオリオに一気に流れ、投票率は97.1パーセントを記録。初めて95パーセントをクリアした。

よって、次の第五回選挙は上位十六名による選挙となる。

この中で私が入れるとしたら……レオリオかな、やっぱ。

それか、良識派っぽいミザイストム。ちなみに今まではウイングさんに入れていた。翌日、テラデインとルーペ、ブシドラによる共同声明が発表された。

主な内容は『清凜隊』の再結成とテラデインへの票の集結、それにイルミ退治。アクラツヒドーナシヨギョーとか、なんとも大げさな表現ウケる。

まあ確かに悪辣非道ではあるんだけど。

一般人大量に巻き込んでるしね。

キルアとアルカに關しても原作通りに進んでいるようだ。無視無視。

ゴンが帰ってきた時にでも気が向いたら接触しようかね。

そして第五回の総選挙。

上位から順にパリストン・テラデイン・チードル・レオリオ・イツクシヨンペ・ボトバイ・ミザイストム・モラウによる再選挙が決定した。

原作と何の変更もない。

そして、この内テラデインはもうすぐ死ぬ。

一日を開けて、再びの選挙。

狩りに出ているハンターたちがそのまま棄権となり、投票率でアウト。

さらに一日を開けて、七回目の選挙。

投票率はかろうじてセーフ。

上位から順にパリストン・レオリオ・チードル・ミザイストムの四名が次の選挙に残る。

原作通り、何も変更はない。

そして一日を開けて、第八回の十三代会長総選挙。

ホールには六百七名の参加が確定しており、投票率はクリアだ。

立候補者全員の演説を聞いて、そののちに質疑応答のあと投票、といった流れだ。

候補者の主張演説の前の注意点、今後十三代会長が決定するまで、このホールに残つてもらふとのこと。

何時間、いや、何日かかるうとも。

この日を迎える前日、私に接触してきた男がいた。

パリストンⅡヒル。また来やがったコイツ。

彼が来た時はお互い一対一。路上での邂逅だった。

「前に言いましたよね？ ポク、あなたに占ってもらいたいんですよ！」

……あーやだやだ、関わりたくない。

嫌いなタイプは占いたくない。全身の毛が逆立つ。

「一回十億ジエニーでいかがですか？」

「ハイ喜んで！」

私は彼を占うことにした（どーん）

だ、だってゲレゲレの食費が本気でバカにならなくなってきてるんだもの！

このままじゃ破産する！ もう天空闘技場でもお金もらえないし！

ゲレゲレの食費に比べたら、占いの収入なんか正直微々たるものだし！

大事な可愛いゲレゲレに比べたら私のトリハダくらい、なんてことない！！

私たちは近くのカフェに入った。

タロットで占うためにはテーブルが必要だ。

まあ公園のベンチとかでもいいんだけど、せつかなので彼のお誘いにのることにした。

「で、占いたいことは何ですか？」

「そりゃあもちろん、この選挙の行方ですよ！」

本気じゃないな。彼に結果は見えている。

知りたいのは……私の占い能力かな。念能力かどうか、どの程度当たるのか。

お金をもらっているからには私はプロ。知っていることにはお答えしましょう。

テーブルの上にカードを広げてシャッフルする。

彼はそれを興味深げに眺めていた。

「この中から、一枚引いてください。引いたカードは向きを決めて自分の前においてください」

『女教皇』は使わない。能力を使えばそれは即座にパリストンにバレるだろう。

念能力だけのおかげで占い師として大成したとは思われたくない。

それは私の、占い師としての、ほんの小さなプライド。

彼は言われるがまま一枚のカードを引いた。

そして私の指示でカードを開く。

『恋人達』の逆位置。カードのテーマは『選択』

「……何かを選ぶ、それがこのカードが表していることです。恐らくは選挙のことを示しているのだと思います。けれど逆位置で出ている。あなたの予測は甘い。あなたは神じゃない、全てを見通せるわけじゃない。『時間稼ぎ』をおすすめします。予定は予定通りにはいかない、遅れることもあるでしょう」

彼は目を閉じ私の言葉を反芻しているのだろう。

端正な顔立ちだ、モテるだろうな。私は好きにはなれないけれど。

「……わかりました、さすが稀代の占い師ですね。先に予言しておきますが、あなたの占いは当たっている。……今のところ、ボク自身が断言できるのは半分だけです」

彼は立ち上がって伝票を手にする。

「支払いハンター銀行の口座で構いませんね？ 今日中に振込しておきます。……また、気が向いたら占ってもらえますか？」

「この金額でよければいつでも喜んで」

「よかった、最初は断られるかと思って戦々慄々だったんですよ？ これはボクの本心です。いやあ、僥倖だったなあ」

「帰られる前に一言だけ……お悔やみを、申し上げます」

「えっ？」

「……あの会場に居た中で、あなたが一番ネテロ会長の死を悼んでるように見えましたから……私の、気のせいかもしれませんが」

意表をつかれたような表情で、彼は私をじっと見る。

今は以前のような嫌な感じはしない。

ぺこりと頭を下げて、彼は先に店を出た。

私は残ったオレンジジュースを飲み、この店の人気ナンバーワンらしいクラブハウスサンドをパクつく。

プロとして、私は彼を占った。それは間違っていない。

伝えたことも、カードが示した内容及び原作通り。恐らくその通りの展開になるのだろう。

そして場面はハンター協会総本部中央ホールへと戻る、いや、進む。

第八回目の総選挙は、パリストーンとレオリオが勝ち残った。

ゴンは、まだ来ない。

第四十三話

候補者が残り四人になった時、パリストンは最初の時間稼ぎをした。

それは、パリストン↓ミザイストム↓チードル↓レオリオという円環を生み出したこと。

パリストン直下ともいえる協専ハンターでさえ混乱するだろう。

誰に入れればいいのかわからなくなる。

パリストン派はおそらく二つに割れる。パリストンとミザイストムに。

結果、ミザイストム派もまた二つに割れる。ミザイストムとチードルに。

それによってチードル派も二つに割れる。チードルとレオリオに。

その結果どうなるか。レオリオの得票率はおそらく五十パーセントを下回る。

上位二人、すなわちレオリオとパリストンの一騎打ちとなった。

まず一つ目の時間稼ぎは成功に終わった。

次は、二つ目の時間稼ぎ。

「ではこれより、緊急動議を発令いたします!!」

会場がざわめいた。

場内に居る人間はみな選挙のことを考えていた。

そこに突然全く別の提案がなされたからだ。

「はい？　えーと、何言ってるの？」

「緊急動議です。これから皆さんには、ハンター十ヶ条の第八条・九条に則って信任投票をしていただきます!!」

未だ会場はどよめいている。この場に居るほとんどの人が現状を把握できていないのだらう、私を含め。

私はこの状況になることを知っていた。

けれど彼が何故ハンター十ヶ条と試験制度に拘ったのか、そこがわからない。

私には頭が足りないのです、これ以上を理解することができなかつた。

ジンが全て説明した後でも、だ。

せいぜい、十ヶ条の変更がなされなかつた場合、繭から孵化した五千匹を次のハンター試験に全投入するつもりなのかなー？　とか、その程度。

おそらく原作ではその前にビヨンドが現れてしまったのだろう。

そして物語の流れが変わる、暗黒大陸編に向かつて。

んー、暗黒大陸には行きたくないなあ、生き残れる可能性を微塵も感じない。

なんかパリストンがめっちゃ演説して、割り込んだチードルがレオリオへの全面的協

力を約束し、そしてその時が訪れた。

「レオリオ!!」

扉を開けて入ってきたのはモラウ。涙を流しながら親指を立てている。

そしてその後に入ってきたのは……ゴン。

「うオオオをちくしょオオオオ、心配したぞ!!!」

「レオリオ!!!」

レオリオが駆け寄ってゴンと抱き合った。

パリストンが拍手をし、その音をマイクが拾い、それから少し遅れて会場中から拍手が沸き起こる。

「今から立候補しろー!!」

「ステージで何か話せー!!」

ゴンへ向けられた温かい拍手と歓声。

そんなゴンの目に、一人の人物が止まった。

「……ジン……!?!」

ゴンがわちやわちやしている。ジンがあたふたしている。ウケる。

原作ではとてもいい話なのだが、残念ここは広いハンター協会本部の中央ホール。

二人の会話はほとんど聞こえず周囲の「血も涙もねーのかお前には!!」だの「ジン最

低!! ジン最低!! ジン最低!!」だのしか聞こえてこない。草生える。

まわりからのブーイングにジンがキレて、直後にチードルがブチギレた。

「み・な・さ・ん!!! 静粛に!!!」

耳がキーンとする。周囲の人たちも一様に耳を押さえていた。

「まだ!! 選挙は終わっていません!!!」

チードルの、最後のあがき。それすらもパリストンは奪い去る。

「ゴンくん!! 直感でいいんです!! 心に偽る事だけせず……!! どちらか選んで下さい!!」

そしてゴンは、パリストンを選んだ。

レオリオには学業があるというシンプルかつ明確な理由で。

「ジン!! 行ってくるね!!!」

「……おう!」

そしてまた会場がわちゃわちゃになる。

「行つてらっしゃいだろーが!! 常識ねーのか!! ぐおっ」

「わージンが切れた!! ぶほっ」

「誰かこの育児放棄のクズ止めぼ!! げほっ」

「ムリだつて!! 十二支ん!! 笑つてねーで何とかしろ!!」

私は少し離れたところからその様子を観戦してゲラゲラ笑っている。十二支んも同様に笑っていた、パリストン含め。

そうしてしばらく時間が経って、ようやく選挙が終わった。

第九回、十三代会長総選挙。

総ハンター数六百三十六名、有効得票数六百十六名。

投票率96・8パーセント。

一位、パリストン。四百五十九票。

二位、レオリオ。百五十七票。

チードルとミザイストムの票の大半が、レオリオに流れたのだろう。

それ以外のハンターは、ゴンとレオリオの意思を尊重してパリストンに入れた。

十三代会長は、パリストンに決定した。

「皆さん、十三代会長のパリストンです!! 早速ですが重大発表です!!」

新しい会長の壇上演説。ハンター皆が見守る中で。

「私パリストンは副会長にチードルさんを指名し!! この場で会長を辞する事といたします!!」

デスヨネー、知ってた。

以上、選挙編、終了!

細かいことはシラネ、私は十二支んでも協専ハンターでもないし。

政治的なことはさっぱりわからん。

私はただの占い師さん。

思わぬ副収入もあつたことだし、あとは早く帰ってゲレゲレをモフりたい。

「ゲレゲレ、今帰ったよー！」

「ぐるあいあおうおうおうおうおう」

!!!!!!

ゲレゲレの堅での突進。

サイズもあつてさすがにそろそろ受け止めきれなくなってきた重い重い強化系の愛である。

こちらら特質系なので、もう少し手加減してほしい。

ペットシッターさんに帰還と契約終了の連絡を入れて、数日の間私はゲレゲレをモフリ倒した。

占いもその間はお休み！ 修行は……まあ、そこそこに。

ゲレゲレも寂しかったのかひたすらに甘えてきた。ベタベタに甘やかした。

今回の件を経て以降、私は闘技場での週五の占いの時間（現在一回八千ジェニー）の他に空いた時間を使って、一回一億ジェニーでのみ順番待ち無しで占いをすることを公

言した。

条件はこの街に来てもらうか、あるいはオンラインでの占い。

対面でない精度は少し落ちることを付け加えて。

一億はさすがに金銭的にデカすぎるのか、あるいは並びさえすれば八千ジエニーで占ってもらえるからか、意外と依頼は少なかつた。月にせいぜい一件程度。

それでも、もうこれでゲレゲレの食費に困ることはない、多分。

現在八月中旬。次の試合まで、あと一か月。

第四十四話

私は事前に対戦相手の情報を仕入れることをしない。

何故なら実戦においては前もって相手の能力を知ることなど不可能に近いからだ。

とはいえ、天空闘技場で占い師なんて稼業をしていると、どうしてもお客様のうわさ話は耳に入ってくる。

なんでも、私がない間に一階から無敗で勝ち上がり、すでにフロアマスターに王手をかけている男。

そんな奴が、次の私の対戦相手らしい。

ちなみに二百階以上では三人殺しているんだとか。

ヒイ、怖い。

「なあに、アンタならいいセン行けると思うぜ、まあ勝てるとは言わねえがよ」

閉店後に店を訪れてくれたピンクモヒカンのマジリクさんが、そう言ってくれる。

マジリクさん、ついに店の行列のあまりの長さに並ぶのをあきらめたいらしい。

彼だったら店と同じ価格で別に占ってあげてもいいんだけどな、そう伝えたが特別扱いは良くないと諫められた。

見た目に寄らず生真面目なオッサンである。

マジリクさんは一度だけその男の試合を観に行ったことがあるそうだ。

当然だが彼もすでに二百階闘士の先輩だ。

私と同じように準備期間をぎりぎりまでおいて登録しているため、彼自身もまだ二勝しかしていないらしい。

「あいつは強エな。それは断言できる。この二百階でも上位クラス、そのさらに上澄みなんじゃねえかな。フロアマスターどころかバトルオリンピックでもいいところまで行けると思うよ」

そんな強い人と戦うのやだなあ……。

「それだけヤバい奴だよ、クロロルシルフルつて男は」

私はマジリクさんの襟首を締め上げていた。

「今なんて言いました？」

「おい、やめろつて。クロロルシルフルつったんだよ。なんだお前さん、知ってるのか？」

マジリクさんに軽く振り払われる。

そりやそうですわ、強いはずですわ。

三人くらい殺しますわ、当然ですわ。むしろ少ないくらいですわ。

「……私の師匠です」

マジリクさんが嘔き出した。

「マジか！ 師匠って……あんな奴を師匠に持つって、どういう神経してるんだお前さん」

「そういう神経ですよ、マジリクさん。私はあの頃どうしても、すぐにでも、強くなる必要があつたんです。そんな時に彼が目の前にいた。ただ、それだけですよ」

あーあ、マジかー、団長さんかー。

本気出さないでくれないかなあ、勝ち星は献上しても構わないから。

でもそんなこと言ったら逆に怒り出しそうだしなあ。

……私の修行の成果を見せるチャンスだと思ふことにしよう、そうしよう。

私のことは殺さないでくれると信じたい。

ゴコられるのはすでに覚悟完了した。

選挙から帰還しての一月の間に、私はもう二枚乱れ飛ぶ22シューティングメジャーアルカナの使徒の能力を付与すること成功した。

『月』

空に浮かぶ三日月に見立ててオーラを刃状に変化し、相手を切り裂く。

変化系はどちらかというと苦手なので、それほど強くはない。

とはいえ『死神』ですでに鎌を具現化できているので、具現化系ではない何かの能力が欲しかったのだ。

それゆえ私は変化系を選んだ。

刃の大きさは、ギリシア神話でペルセウスがゴルゴンの首を切り落としたハルパーという短刀程度の長さ、まっすぐ伸ばしてもせいぜい三〜四十センチだ。

それが三日月のように曲線を描いてゲレゲレの爪のようにカーブした鉤状に変化する。

そしてこの剣には二つの能力が付与されている、生と、死と。

この能力が付与されたのは、最初に形を見た時に、先述したハルパーを想像したからだ。

その結果自動的に付与されることになった。

ゴルゴンの首。

その流れる血からは名医アスクレーピオスによって二つの効能の薬が精製された。

ひとつは死者をよみがえらせる薬、そしてもうひとつは他者を殺すことのできる毒。

私は任意でカードを使用した際にその効能を切り替えることができる。

他者を殺そうとする毒か、あるいは治癒の力。

ただし、私のオーラは伝説級にはほど遠いので、レベルのたかは知れているのだけ
 だ。

そしてこのカードを作っている間に、もう一つ能力が出来上がった。

こちらは全く意識していなかった。

『月』の能力を考えている間に勝手に出来上がった対の能力だ。

『星』
スター

発動すると、石ころ大のオーラの流星群が相手に降り注ぐ。

こちらにも放出系に当たるので、威力はそれほどない。だが目つぶしには多少有効だろ
 う。

シューティング メジャー アルカナ
 乱れ飛ぶ22の使徒の本当の強みは一枚一枚に付与された能力ではなく、連続して発

動できるところにある。

最初に二十二枚を具現化しておかなければならないし、それによつて左手をふさぐり
 スクもある。

けれど一旦具現化さえしてしまえば何枚でも続けざまに使うことができる。

『星』で相手の目をくらませ近付き『月』で切り裂く。

『太陽』で相手をかく乱し『死神』で屠る。

……まあ、団長さんにはどれも通用しないだろうけど。

団長さんはおそらく私の乱れ飛ぶ22の使徒の方の能力はまだ知らないだろう。
そこが、つけ目！

……いや、ムリムリムリ。勝てる気がしない。勝てるわけないって。

私は現実逃避のために帰宅し、ゲレゲレを思う存分モフった。

最近は何れゲレパンチはかわすようにしている。

ゲレゲレの硬のネコパンチはもはや私にとって即死レベルだ。

もームリ。この愛は受け止めたら死ぬ。

ひらりひらりとかわしながら、隙を見て頭や胸をモフる。

それも一つの、私たちの間のゲーム感覚。

はい、おしまい、たとえばゲレゲレはそれに納得し、食事や睡眠など自分の用事へと戻る。

私と一緒に寝ることも多い。ベッドの大半は彼に占領される。

猫は夜行性だというのがゲレゲレは私に合わせてくれているのか割と昼行性だ。

もつとも、私が留守にしている間はどのようにして暮らしているのか知らないけど。

一回監視カメラでもつけてみようかな。面倒だな、まあいいや。

私は現実逃避していた。ボコられたくないでござるるる。

第四十五話

「エイラ……お前、いったいどこにいた？」

再会第一声が、それだった。

「選挙です、ハンターの」

「何度も店を訪れたがいつ行っても留守だったんでな」

「それは申し訳ないことをしました」

私たちは、現在天空闘技場の二百二階バトルステージ上にいる。

「試合が終わったら、どうしてもお伝えしたいことがあります。できれば、二人きりになれる場所で」

「わかった、オレの部屋で問題ないだろう、では、始めるぞ」

団長さんが構える。私も構えを取った。

「ポイントアンドKO制!! 時間無制限一本勝負!! 始め!!」

私たちは互いに纏状態で相手の動きを見る。

「エイラ、まずは体術だ。能力は纏のみ許可する」

「イエス、サー」

敵うはずもない。相手は幻影旅団の団長。

とはいえ何もせずに負けるわけにもいかない。そんなことしたら呆れた団長さんが私を屠る。

十メートルほど離れた距離から私は一足飛びに団長さんの懐へと飛び込み、テンブルを目かけて裏拳を叩き込む。

わずかな残像を残して団長さんは消えた。違う、移動した、私の背後！
団長さんのかかと落としを私はかろうじて回避する。

「スピードは、悪くない。ただ狙う箇所が間違っているな。あの場合はこめかみではなく顎あるいは喉を狙うべきだった。あるいは内臓破壊を狙っても構わない」

今度は団長さんが飛び込んできた。目では追えている。

左右にステップを踏んで最後に私に到達した時、私から見て右側！

私はガードを下ろしてあばらを守る。

寸前で団長さんはターゲットを変えた。

右足による私の後方からの足払い。

ジャンプして避ける。結果、私は無防備になる。

団長さんはそのまま右足で私を蹴り上げた。

股間に激突し上空に吹き飛ばされる。男性ならその場で悶絶死。女だって痛いもの

は痛い。

骨盤にひびが入らなかつただけでももうけものだ。

「クリーンヒット！ クロロ！」

若干内股気味になりながら、私は着地する。団長さんはそれ以上攻撃しては来なかつた。

「まあまあだ。修行はさぼっていないようだな。ではこれからが本番だ、念能力の使用を許可しよう。無論、オレも使う」

互いの纏が練となる。膨大なオーラの差がそこにはあつた。

あーもーやだよー今すぐ降参して逃げたいよー。

私は二十二枚のカードを具現化する。

「……能力を揃えたのか？」

「さあ？ どうでしょうね！」

私の能力を推察される前に決着を！ ……つくわけないってこんな無理ゲーだべ。私の右手は『世界』を取り出す。唯一可能性のあるカード。

使用した時、世界は動きを止める。

ただし範囲は半径五十メートル以内に限られる。

能力としてはデイオの世界ザ・ワールドよりもミサイストムの密室裁判クロスゲームの警告カードに近い。

団長さんは正確にその範囲を見切り、場外である範囲外に逃れていた。

カードを発動している時間に範囲内に居なければ効果はない、アウェイアンドヒット。

一秒経過後に団長さんが迫ってくる。

団長さんがアンテナを持っているのが見えた。

シャルナークさんの能力だろう。すでにこの時受け渡しは終わっていたのか。

ならば決して、私はここで死ぬわけにはいかない。

全力でそのアンテナをかわし、次いで私は『死神』を引く。大鎌の具現化。

距離を取って団長さんと対峙する。

鎌の最も刃から離れた位置を持って、最大のリーチをとった。

「なるほど、カードの具現化自体は傍目から見れば舞い踊る二十二の使徒と変わらない

が、これは全く別の能力だな。今までの期間でこれほどまでに能力を集めることは不可

能だろう。それに、すでにいくつもの能力を使っている。制約では

舞い踊る二十二の使徒は二十四時間につき一つだったはずだ」

大鎌を持っている間、私は乱れ飛ぶ二十二の使徒を使えない。

何故なら両手がふさがっているからだ。

団長さんの葉のテーマと違い、私は左手にカードを全て具現化し右手で引くことをし

ないといけないので、完全に同時に能力を使うことはできない。

ただしそれは、乱れ飛ぶ二十二の使徒に限った話！

私の前方一メートルの位置に独楽を具現化し、一斉に団長さんに向けて飛ばす。

『運命の輪』！ かーらーの、全力大鎌どーん！』

具現化した二十枚のタロットを消し、両腕を使って遠心力をつけて独楽ごと団長さんを薙ぎ払う。

上空に逃れた団長さんを追って、私は手首を返した。刃が空へと向かう。

団長さんの体を鎌の刃先がとらえたと思った刹那、逆に大鎌の刃が真っ二つに折れていた。

はつきりとは見えなかった。だがおそらく、団長さんは鎌を足で蹴り割った。

具現化系の破壊。それは心の破壊そのものを意味する。やはり私では団長さんに敵わない。

おそらくだが、団長さんは能力を除き両手を使わないという縛りプレイで私と対戦してくれていた。

圧倒的な差。

「まいりました。私の負けです」

少し早いかもしれないが、私の手札は出し切った。

これ以上戦うのは無意味だろう。

「新たな能力の開発、修行の成果。見せてもらったよ、エイラ」

「ありがとうございます」

私はペコリと頭を下げた。

内心号泣だ。殺されなくてよかったあああああ！

新たなフロアマスター挑戦権を獲得した闘士の誕生に、会場は大いに沸いていた。

そして試合場から離れ、団長さんに与えられた一室。

私は団長さんと二人でここに居た。

互いに円でフロア周辺を警戒しながら、私たちは話をすることにした。

「それで、お前が伝えたいことというのは何だ？」

「……占いの、結果です。今すぐシャルナークさんとコルトピさんに能力を返し、旅団を全員集合させてください。場所はここでもなくとも構いません」

団長さんは、眉を顰める。

「何故お前がそれを知っている。それも占いに出たとでもいうのか？」

「はい。……このままだとシャルナークさんとコルトピさん、二人が死にます。手を下すのは、これから団長さんと戦って死ぬはずの奇術師の黄泉返り」

聳めた眉間の皺がさらに深くなった。

「まず今すぐ能力を返す、それは出来ない。オレはヤツに勝つために必要な手札を揃えた。旅団を集結させることは可能だろう、今すぐシャルに連絡を取る」

「それだけでも、生き残る可能性は格段に上がると思います。ヒソカは基本的にソロプレイヤー。集団で固まっている旅団にはうかつに手を出すとも思えませんから、お二人に能力を返すまではそのまま一緒にいて守ってもらえばいいかと」

「お前の占いは大したものだな、まるで本当の未来を知っているかのようだ」

それは、誉め言葉ではない。彼は私を責めている。隠し事があるのだろうか。

けれど私も話すわけにはいかない。

彼らが創作物の登場人物だなどと、誰が言えるだろうか。

何より私自身が、そう思いたくない。

これまでに目の当たりにしてきたたきさんの人たち。

彼らが架空の人物だなんて、絶対に思いたくない。

「……これ以上は、私からは言えません。けれど私は知っています。このままだと、二人が死んでしまう。私はそれを避けたい。旅団員が死ぬのは、もう嫌だ」

私の本心。それは団長さんにも伝わったようだ。

「オレとヒソカのタイマンがメンバーを巻き込むこと自体は避けたいからな。了解し

た」

団長さんはケータイを取り出す。シャルナークさんたちに連絡を取るのだろう。

「オレだ。旅団員全員をただちに天空闘技場に集結させろ。これは命令だ。理由？ エイラの占い、それが根拠だ。今すぐ全員に伝える」

電話を切ると、団長さんは私に向き直った。

「お前はメンバーと合流しろ。そしてその口から、ヤツらにその理由を説明するんだ」

「わかりました。ヒソカと団長さんが戦うまでの間は、おそらく彼らに危険は及びません。その間に私は全旅団員に情報を共有します」

「それでいい……お前の、その予知能力。念能力であれば欲しいところだが、違うんだろ
うな」

「はい。あくまでもただの占いですから」

団長さんのノートはデスノート。できるならば載りたくない。

そして原作知識、これは念能力ではない。

私たちはそれで会話を終了し、別れた。

彼はそのまま自室に残り、私は自分の店へと向かう。

まだ時間は残されている。パクノダさんの時とは違う。

少しは私も力を入れた、誤差の範囲かもしれないけれど。

それでも私は旅団を守りたい。それだけは、嘘偽りのない私の本音。

第四十六話

占い稼業をしながら日々を過ごし、十日ほどで旅団が天空闘技場に全員集合した。

「一体何だつてんだよ……こちとら仕事でだつたんだぜ」

私はノブナガさんに頭を下げる。

「ごめんなさい、でもどうしても必要なことだつたんです」

普段は使わない、天空闘技場の私にあてがわれた部屋。

私たちは今そこに居る。

私は知っていることを話した。

団長さんとヒソカが間もなくタイマン戦すること。

そのための手札として、シャルナークさんとコルトピさんの能力を一時的に奪っていること。

そのタイマンデスマッチで団長さんは勝利を収めるが、殺されたはずのヒソカが蘇ること。

ヒソカがその時点から時と手段を選ばない殺人鬼となつて幻影旅団を襲い始めること。

それを防ぐために、団長さんに意見を具申したこと。

「そもそも、タロット占いでそこまで詳細にわかるもんなの？」

皆が皆、私を不信そうな目で見ている、当然だ。

「占い方にも、いろいろな方法がありますから。基本的に私は面倒なので皆さんもご存じのワンオラクルというカードを一枚だけ引くやり方でしか占いません。けれどその結果、シャルナークさんとコルトピさんの死が出たので、占い方を変えて詳細に占ったんです。これは、その結果です」

私に話せるのはここまで、あとは信じてもらえるかどうかは運しだいだ。

「オレは、信じるぜ。団長がエイラの占いを信じている。それだけで、信じるに値する」
「オレもそうだな。団長の命令は絶対だ」

「あたしも信じるね、蘇りつてのがにわかには信じられないけど、ヒソカなら自分が負ければそのくらいはやりかねない」

フランクリンさんとノブナガさん、マチさんは信じてくれた。他のメンバーさんはどうだろうか。

「団長は、普段ならみんなを集めることはしなかったと思う。でも今はシャルナークとコルトピがノーガードだから……だから二人を守るために、蜘蛛の足を失わないためにみんなを集めた。私は、そこを信じる」

シズクさんも、信じてくれた。

「ワタシ反対ね。団長に能力を貸したこと含めてそれでヒソカに殺されたとしても自業自得よ」

「同感だな、そしてオレたち一人一人が襲われたとして、それで死んだとしてもそれも自業自得だ」

フエイタンさんとフィンクスさんは反対……なんとなく、予想はしていたけれど。

「オレはその状況を想定していなかった。ヒソカに今もし狙われたら、残念だけど勝てる気がしない。だから、オレはエイラの意見には全面的に賛成するしかない」

「同じく」

シャルナークさんとコルトピさんは賛成。そうするしかないだろう、彼らの立場なら。

「ボクはどちらでも構わない。ただ、集まるように言われたからここに来ただけ」

「オレも団長の命令だからここに来ただけだ。その内容は団長の口からじかに聞くまではどうでもいい」

カルトちゃん和ボノレノフさんは中立。

多数決なら私の勝ちだけど……この場合は、どうなるんだろう。

「確かに団長に聞いてみる一番ね。団長直々の命令なら多少不服でも従うよ」

「おい、エイラ。団長今どこにいる？」

団長さんは、出来るだけ短期間にフロアマスターになることを求めていた。

「団長さんは今から試合です、フロアマスターとの。チケットは私が人数分融通しますので、皆で試合を観戦してから、その後で団長さんを訪ねればいいと思います」

この言葉には、異論は出なかった。

チケットの融通。二百階闘士にはそれぞれ数枚程度の各試合へのチケットの割り当てがある。

もちろん有料だが、並ぶことも抽選を受けることもなく定価で試合を観戦することができるのだ。

枚数は試合によって違う。フロアマスターの試合の場合は三枚。

マジリクさんとギドが自分の割り当て分三枚をそれぞれ譲ってくれた。

シャルナークさんとコルトピさんには、巻き込まれる恐れがあるため部屋で待機しておいた方がいいと告げ、了承を得た。

そして、団長さんのフロアマスター挑戦。

試合は、一秒で終わった。

対戦相手の首がねじ切られていた。まさに、瞬殺。

うわー、こんな人相手に私よく死ななくてすんだよな。

団長さん、どれだけ手加減してくれてたんだろう。

「当然ね、ささと団長の所に案内するよ」

そりやそうですよね。

私はシャルナークさんとコルトピさんにケータイで連絡を入れ二百階ロビーで待ち合わせ、団長さんの部屋へと向かった。

団長さんにもこれから何う旨メールを入れてある。

そして全員で団長さんの部屋を訪れた。団長さんはすでに部屋に戻ってきていた。

「何だ、ぞろぞろと」

「私の知っていることはすべて皆さんにお知らせしました。その結果、フェイタンさんとフィックスさんが『能力の譲渡含めてヒソカにやられることは自業自得だ』と」

「……確かに、これはオレがヒソカとタイマンするにあたって能力を譲り受けた結果であって、あくまでオレのワガママだ。絶対とは言わない、命令も取り消す。だが可能であればオレが能力を二人に返すまでの間、二人を守ってほしい。そしてこれ以降は命令だ、決して単独行動はするな。この命令は今から以降、命令を取り消すまで有効だ」

この言葉により、ボノレノフさんとカルトちゃんがこちら側に付いた。八対二。

「オツケ、わかったよ。単独行動さえしなきゃいいんだな。それなら文句ねーよ」

「仕方ないね」

これで、十人全員の許可を得た。

少なくとも、旅団メンバーの単独行動は防ぐことができた、一安心だ。

「団長さんとヒソカのタイマンが終わるまでは大丈夫だと思いますが……念の為、皆さんには天空闘技場に残ってもらいますか。二人のタイマン、見たい方もいるでしょう？」

「あ、私見たい！」

シズクさんがいの一歩に手を挙げる。

あの会場にいるとモロに巻き込まれそうだけど、シズクさんなら大丈夫だろう。

私は見ない。怖い。あとで録画だけ見る。

「オレはまだやり残した仕事があるからなあ、そいつをチャットと片付けてくるからよ、誰かついてきてくんねーか？」

「じゃあ、オレが行こう」

ノブナガさんには、フランクリンさんが付いて行くことになった。

二人には、団長さんの次の試合までには戻ってくるように伝えておく。

団長さんもその点を踏まえ、試合の日程を予定より少し遅らせることで合意した。

ヒソカもタイマンできるなら文句は言わないだろう。

天空闘技場に残る皆さんには私の部屋を提供した。どうせ使っていない部屋だ。

「エイラ、お前はちよつと残れ」

解散が告げられた後、店に戻ろうとした私を団長さんが引き止める。なんだろう？

「……エイラ、お前に命令だ。パクの抜け番に入れ」

それは、旅団員になるということ？ 私が？

「私には、まだ力が足りないと感じます」

「旅団はいくつかの部隊に分けられる。お前は情報班に所属することになるだろう。戦闘は、それが得意なものに任せればいい。……まだお前は旅団員ではないから、命令の拒否権はある」

だとしても、最低限の力すら、私は身につけられていない。

「それは謙遜か？ ……あるいはエイラ、お前は幻影旅団を人格化しすぎている。オレたちはただの盗賊集団だ。隠したいことがあるなら隠したままでいい。ただしオレが頭、オレの命令は絶対だ。意味はお前ならわかるな？」

「……わかりました、今からタトウーを入れてきます。ナンバーは……」

「9だ。今後とも、よろしく頼む」

「はい」

念願の旅団員。けれど私の心は微塵も踊らない。

私には、圧倒的に力が足りない、たとえ情報班であったとしてもだ。

団長さんは、いったい何を考えて私を団員に選んだのだろう。

どんなに考えても、答えは出なかった。

タロットカードのナンバーナインは『隠者』、テーマは「真理の究明と孤独」

私は自分の心に深く潜る。望むものは何か、必要なものは何か、逆に不要なものは何か。

私は何を求めているのか。

店に戻る気がしなかった。

私は家に戻り、瞑想した。

ゲレゲレもそれに付き合ってくれた。

第四十七話

私は左胸の上部中央よりの位置に刺青タトゥーを入れた。

心臓に最も近く、人に見せるにもそこまで面倒ではない位置。

ナンバーナイン。今度こそ、パクノダさんの遺志を継ぐ。

旅団のメンバーさんたちに伝えに行った。

着ていたTシャツの胸元を広げて左胸を少し見せる。

そこには五センチほどの、九の数字を抱え込んだ蜘蛛の刺青。

誰も驚くことはなかった。

「ようこそ、旅団へ」

「逆に今更つて気もするな、結構一緒にいたからなオレら」

「エイラはこの街に家を持つてるんだろ？ あたしは今日からそこに泊めてもらおうよ。」

……今日からエイラも旅団のメンバーだ、単独行動は許されない」

私もそこはどうしようかと思っていたが、マチさんが先に名乗り出てくれた。

「何でお前なんだよ、別に他の人間でもいいだろ」

「お前はバカか。女一人の家にヤローなんか泊められるわけないだろ。必然的にあたし

かシズクの二択になるんだよ」

「あ、じゃあ私もそつちに泊まろうかな」

「是非そうしてください、なんか女子会みたいで楽しそうです」

キヤツキヤしている女子三人を横目に、フィンクスさんがふてくされている。

「あーあーあー、どうせオレらは信用ならないよ。いいさ、オレたちもこつちで野郎だけの男子会しよーぜ」

「フィンクス、それ自分で言つててむなしくならない？」

シャルナークさんのツツコミが冴えわたる。

「ゲレゲレ用を買った牛肉からとったフィレ肉があるからそれを焼いて、私用にフオアグラもいくつか冷凍してあるんで、それで豪勢にディナーしましょう！」

「いいね、野菜はある？ ニンジンとジャガイモ、それにインゲンでもあればあたしが付け合わせを作るよ」

「あ、ニンジンは切らしてますね、バターも残り少ないです。じゃあ帰りに買つていきましよう」

「みんなで面白い物、スーパーでも楽しそうだよね」

「酒も忘れないようにしないとね。そのメニューならワインかな」

女子三人キヤツキヤ。すごく楽しい。

「おい、オレたちもビール買いに行くぞ」

フィנקスさんが負けじとメンツを集めに走り、皆から呆れられている。

「フィנקスさん、この闘技場は露店の飲食が充実しますから各フロアを巡るのも楽しいと思いますよ、もちろんビールも売ってます」

「おつ、そいつはなによりだ」

ようやくフィנקスさんの機嫌も直ったようだ。

「じゃあ、私は一旦自分の店に戻ります」

「あたしも行くよ。単独行動禁止」

え、でも人を占ってるのを見るだけって……つまらなくないかな。

それに、お客さんの中には自分の相談事を聞かれたくない人もいるだろう。

「アンタの弟子の占い師で勉強させてとでもいえばいいさ。もちろん口は挟まないし、興味はないこともない。アンタが他人にどんな占いをするのかってのがね」

マチさんが構わないのであれば私に断る理由はない。

私たちは連れ立って、二百階ロビーへと向かった。

行列が、天空闘技場を一周している。

最後尾の人が『戦う占い師さん最後尾はこちら』と書かれてある看板を持っている、誰

だあんなの作ったのは。

『ただいま休業中』って書いて出してるのに、何でこんなことになるんだろう。

「それだけアンタの占いかアンタ自身が人気なんだってことだろうね、『戦う占い師さん』」

笑いを含んだ口調で、そんなことを言われる。

二つ名って、何でこう、こんなに恥ずかしいんだろう。

黒歴史をほじくり返されてるみたいだ。

本人の前ではその名前で呼ばないでもらいたい、切にそう願う。

行列を辿って、店にたどり着く。

その最前列に居たのは、私たちがよく知る人物だった。

「やあ?」

「何でアンタがここに居るんだバカピエロ」

最前列に居たのは、ヒソカだった。

「やだなあ、そんなにつれなくしないでよ ♣ 今流行の『戦う占い師さん』に占ってもら

いに来たただよ、他意はない ◆」

そして彼は、私を見る。

「エイラ……だったよね、たしか? あれから二百階クラスで勝てるレベルにまでなる

なんて、だいぶ修行したんだろうね◆」

「修行はしましたね。さあ、後ろに待っている人も多いことですし、さっさと占いましょうか。ヒソカさんは何を占いたいですか？」

「そうだね、次に戦う相手との勝敗……かな◆ 念願だったからねえ♥」
次の試合、すなわち、団長さんとの戦い。

「わかりました」

私はTシャツの上から、占い師用の衣装を羽織る。

サテンで作ったマント。

それと、ウインプルやヒジヤブのような形の、頭からかぶるベールのような半透明の布。

その上からシンプルなティアラみたいな頭飾りをつけて布を固定する。

これで、準備完了。

テーブルの上にシヤツフルしたカードを広げる。

「……じゃあ、この中から一枚のカードを引いてください」

奇術師が一枚を選び、私が伝える間もなくそれを開いた。

「これは……『愚者』の逆位置だね◆ エイラ、キミはこれをどう解釈する？」

「愚行、気まぐれ、独りよがり。愚者は正逆ともに楽観的な状態を意味します。あなたは

団長と戦うにあたって、非常に、樂觀的。ただしそれは、とても独りよがり」

ヒソカのニヤケ顔が気持ち悪い、早くこの占いを終わらせたい。

「うーん、当たってるねえ？ それで、戦いの行方はどうなる？」

「愚行。あなたに勝ちの目は一つもありません」

ニヤケ顔がさらに笑みを増す。

「なるほどなるほど……それは、団長を信頼するキミ自身の言葉なのか、それとも」

「馬鹿にしないでください。お金をいただいている以上私はプロフェッショナル。占いに出たことをそのまま口に出しているだけです」

占いに関して嘘は言わない。それが私のプライドであり誇り。

そこを曲げてしまったら、私は私ではなくなる。

「わかったよ、そこは信じよう◆ キミの占いには、団長が勝つと出ているんだね◆」

「正確には『あなたの愚行による敗北』です。団長に喧嘩を売ること自体が、あなたの愚行」

「うーん、なるほど◆ よくわかったよ、ありがとう？」

すぐにヒソカは席を立った。

「あ、ちよつと待ってください」

「なに？」

「……最前列に並んでいた人はどうなりました？」

「快く譲ってもらったよ？ ボクの顔を知ってたみたいだね？」

「……会場外での殺しは、店の存続に関わりませんから。そうじゃなくてよかったです、それでは」

私は視線でヒソカを追い払う。彼も素直にそれに従った。

二人目。三人目。マチさんはじつと私の占いを聞いていた。

そして午後五時を迎える。

「マチさん、手伝ってください。この紙に番号と今日の日付を記入していきます」

私の印はすでに押してある紙切れ。それに手分けして数字と日付を記入していった。

本日の、占えなかったお客様、三百八名。

……そろそろ、また値上げを考えた方がいいかもしれない。

値上げをすれば、客は減る。

でも最近、多少値上げしたくらいじゃ客は減らなくなってきた気がする。

飲食店なんかと違ってフランチャイズってわけにもいかない。

店の、閉じ時かもしれないな。

以降はオンラインでのみ受け付ける。

費用も一億とまではいかないにしてもそれなりに値上げして。

私はテーブル隅に置いてあるスケッチブックを手に取り、マジックでこう書いた。

『ただいま時間外　なお当店は、十月一杯を持って、閉店させていただきます』

そして次のページにはこう書いた。

『一回一万ジェニー　なお当店は、十月一杯をもって、閉店させていただきます』

そのスケッチブックを中央に据えて、私たちはシズクさんを迎えに行つた。

そして合流し、買い物をしてから家へと向かう。

ゲレゲレの堅での突撃が、今日は私ではなくシズクさんに向かつた。

久しぶりだもんね。そりゃ私よりシズクさんに向かうよね。

いや別に、すねてなんかないですから！

そしてみんなで料理して、みんなで食べて飲んで、みんなで就寝。

使う予定のなかった寝具にも出番が来てよかったよかった。

楽しいひと時。そう長くは続かないことがわかっていても。

第四十八話

二週間ほどで、ノブナガさんとフランクリンさんが戻ってきた。

そして店の最終日、いつにもまして行列が長い。

すでに現在並んでいる人の大半が占ってもらえそうもないのに。

それでも並んでいる。

「エイラ、ここではホントに大人気だよね」

傍らに立っているシャルナークさんが呟く。

私を実際の占いと『女教皇』を併用して占っているのを見て、とても感心していた。

「なるほどな、そういう使い方もあるのか……そりゃ当たるって評判にもなるよ、ただで

さえエイラの占いは当たるのに。無敵だよ、これは」

そして午後五時。私は店を閉じた。

結局占えなかつた人たちからも、拍手が送られた。

有り難し。最初の頃からは想像もできなかつた光景だ。

「今まで、ありがとうございました」

以降は電腦ページを作成し、オンラインでのみ、一回二十万ジェニーで受け付ける。

これまでに引き続き、一億ジェニーなら順番飛ばしで受け付ける。対面でも占うことができるのは一億ジェニーの方だけだ。

より当たるといふ付加価値。

それによつて一億の方に客を誘導する。

一方で例の常連のおつちゃんやマジリクさん、ギドなど私が心を許している人間には直接の連絡先を教えてある。

彼らには、今後も一万ジェニー程度で占うつもりだ。

そういつた人間は、今後が増えるかもしれない。

もちろん蜘蛛なら無料で占う。

自分がやりたいように出来るだけの名声と権利を得た。そう思う。

十一月二日、運命の日が訪れる。

団長さんとヒソカのタイマンの日だ。

私に割り当てられたチケットはシズクさん、フェイタンさん、フィンクスさんに譲る。私？ 怖いですつて見たくないですつて。

私は録画で充分だよ、展開知ってるし。

と思つていたけれど、やっぱり観に行つておけばよかつたとちよつぴり後悔した。

録画（正確にはライブ視聴だが）はいくつかのカメラが固定で、ほとんど闘技場のス

ステージだけしか映していない。

つまり、客席での場外乱闘部分はほとんど映っていなかった。

『ヒソカを壊せ』

実況のマイクの声により、客席の人形たちが一齐にステージ上のヒソカに向かって駆け出す。

ヒソカが場外に跳べば、もう映像では観られない。

実況の言葉に耳を傾けるにも限度がある。

あー、怖がつてないで観に行けばよかった！

やがて、上層階で大爆発が起きる。

ヒソカの、死。

コルトピさんとシャルナークさんは止めて、マチさんと私で彼の遺体を確認しに行く。

私の占いが軽視されているわけではない。

軽視されていればコルトピさんとシャルナークさんともに確認しに行っただろう。

未来は、私の知っている展開とはズレてきている。

「思ったより損傷してないんだね」

「爆破役の人形が近づく前に、壊す命令を受けてた人形が群がって緩衝材の役目を果た

「したみたいですよ。死因はおそらく窒息死」

マチさんがヒソカの遺体に近付いた。

「……確かに死んでるね。本当に、蘇るの?」

「見ていればわかると思います……ほら」

ヒソカの遺体がオーラを纏う。死後の念。

両腕がそれぞれ心臓と肺をマッサージし、やがてヒソカが飛び起きた。

「……やあ、マチ……? ボク……今、ちゃんと死んでた?」

「ああ……完全に死んでたね」

「そう……?」

奇術師は狂ったようにくくくと笑う。

「やっぱリクロー級クラスと闘ると、相手十分の条件で勝つのは難しいな……◆ 現実 is 厳し

いね?」

「座りなよ、縫ったげるから」

「いや、大丈夫……◆」

ヒソカはガムを傷口に当てて血を止め、ドッキリテックスチャイ薄つぺらな嘘で破壊された部分を再現する。

鼻も、顎も、左手も、右足も。

見惚れるほどの速度で、見た目を再現。

「あたしは用なしだね。じゃ、帰るよ」

「マチ、逆だから……♪」

ヒソカが、マチさんを呼び止める。

私はヒソカがマツサージをしている時点で逃げていた。

原作通りにしようと思ったわけじゃない。

あの不吉で凶悪なオーラに晒されることに耐えられなかった。

「闘う時、相手と場所を選ばないことにした。旅団は……ね♪」

ヒソカがガムを使ってマチさんをその場に固定する。

「旅団全員に伝えてくれる……？　今からどこで誰と遭ってもその場で殺すまで闘うと

ね？」

「ざっ……けんじゃねエ!!!　今あたしが殺してやる!!」

「イエスってことね♪」

ヒソカはゴムで再生した足や指の調子を確認しているようだった。

見た目からは全くわからない。本人も違和感はないようだ。

「待て!!　戻れテメエ!!!　これ解け殺すぞゴラアア!!」

「甘えてんの？　自分で解いて止めてみなよ？」

「……………!!!」

「その子もね、関わりたくないなら旅団には近づかない方がいいよ◆ 今だけは見逃してアゲル？」

私の隠れている方を一瞥すらせず、彼はそう言って去っていった。ヒソカが去って少し経ってから、私はマチさんのところへ行った。

「ごめんなさい……」

「いいよ、あたしも少し頭が冷えた。これ解くの手伝って」

私はカードを具現化して、オーラで纏いガムを少しずつ削り取る。

こんなことをしている間にもヒソカがみんなを襲っているんじゃないかと気が気じゃなかった。

上半身が解けた。下半身を解きにかかる。

「あなたが隠れたのは仕方ないよ。アレはあたしの手にも負えない」

下半身も外れた。あとは地面とマチさんを引きはがすだけ。

「団長が単独行動を禁止したのは正しかった」

マチさんの体に絡んでいたガムを全てはがし終えた。オーラの残り香に吐き気がする。

「みんなのところに戻ろう。伝言を伝えなきゃ」

「はい……」

「あんたはあたしたちと別行動した方がいいかもね。まだアイツに蜘蛛と認識されてないみたいだった」

「それは嫌だ！」

自分でもびっくりするほどの大声が出た。

マチさんも驚いている。

「へえ、あんた、そんな大声も出せるんだね。……嫌いじゃないよ、そういうの」
私たちは多少小走りに、皆が待つ団長さんの部屋へと戻った。

「カキンのお宝？」

「ああ、カキンの王族の物だ。王と王子が新大陸を目指すんだが、相当大事なお宝みたいで船内に持ってくらしい。それをいたたく」

団長さんの部屋では、次のターゲットに関する会話がなされていた。

原作通り。ただし電話ではなく対面で。原作とは違う。

「旅行も出来て一石二鳥だね」

「そうだな」

「……ちよつと、あたしたちにもそろそろ気付いてほしいんだけど」

マチさんが焦れたように話を遮り、それをフイックスさんからかう。

なんて、平和。

そしてマチさんから、ヒソカの伝言が皆に伝えられる。

「ヒソカが動いているからといって、オレたちがそれほど行動を変えることはあり得ない。ターゲットはカキンの船と、そこに載っているお宝だ」

「そこですが、団長さん。私の占いに、ヒソカもその船に乗るとの暗示が出ています。警戒は、しておいた方がいいんじゃないかと」

団長さんはフム、と頷き、少し言葉を変えた。

「単独行動禁止、この命令は引き続き有効だ。それ以上の警戒は特には不要だろう。興味があるものがいれば、積極的にヒソカを狩りに行っても構わない」

「じゃあ、まずは船のチケツトだね。正規ルートでは全員分揃えるのはまず不可能だ」「カキンはあらゆる面において杜撰です。恐らく電脳ページに潜り込んで改ざんしてもアシはつかないかと」

チケツトの確保はシャルナークさんが担当することになった。

これで恐らく最下層には潜り込めるだろう。

……やだなあ、暗黒大陸行きたくないなあ。

とはいえ私はもう旅団の一員、抜けることは許されない。

願わくば、あくまで（仮）新大陸までですみますように……！

(あと王位継承戦にもカキン系マフィアの揉め事にも関わりたくない)

第四十九話

ブラックホエール
B・W1号。

カキン国王と王子たち、それに大量の客を乗せた、一番最初の新大陸への船。私たちは、それまで特に何事も無く、その第五層に入船することができた。

旅団員、あらためて全員集合。その中には、イルミも含まれている。

ゲレゲレは特注のハーネスを着させてリードでつないでいる。

私たちの会話には特に興味もないみたいで、私の足元でダラダラしているようだ。

「イルミ、自己紹介ついでにヒソカの動向予測をしてくれ」

「ボクも詳しくは聞いてないよ。鬼ごっこの最中だからね」

一つのテーブルを皆で囲んでいる。

シャルナークさんとコルトピさんが殺されていないせいか、原作のような殺伐とした雰囲気はない。

「ハーイ、ボクはイルミ。ゾルディック家の長男でキルアやカルトはボクの弟。今回ヒソカの依頼で旅団クモに加わった」

ナンバーイレブン、ウボオーギンさんの抜け番。

ちなみにタロットのナンバーイレブンは『正義』ジャスティス

意味はそのまま、正義や正当性。イルミが正義とか、ウケる。

「彼とはもちつもたれつだったけど、最後はどちらかがどちらかを殺すと思つてた。今回、それが叶う」

集団が近づいてくる。私を含め全員がそれに気づいている。

「彼が依頼した標的ターゲットはヒソカ自身。彼が死ねばボクに報酬が入る」エンゲージメントリング「婚前契約」。彼もボクも本気だ。だから具体的な場所はこの船に乗っているということ以外わからない」

集団を仕切っていると思われる坊主に髭の男が声をかけてくる。

集団の多数の人間の見える位置に薔薇の刺青が入っているようだ。

おそらくは私たちの蜘蛛と同じ、所属の表明。

「悪いな、ここは貸し切りだ。どいてくれ」

「ココはオレたちが使う。お前たちが他へ移れ」

「ゲレゲレ、待て」

私は敵意を持った人間に対して威嚇をしようとしたゲレゲレを抑える。

銃を構える他の人間たちを、中央の男が収めた。

「あんたたち、幻影旅団だろ。この業界じゃ有名人だ。ヨークシンでの大暴れでマフィ

アの勢力図を一変させた」

誰も反応せず、ただし警戒は怠らず、話を聞く。

「そのドサクサでオレたちは労せず新大陸の占有権を手に入れた、いわば恩人だな。モメたくないが商売柄なめられる訳にもいかねえ」

団長さんも、話を聞き続けている。動くことも、手を出すこともせず。

「黙ってどいてくれたら悪いようにはしない。この船に乗った理由があるはずだ……協力するぜ」

そこでようやく、全員が席を立ち、団長さんが言葉を発した。

「目的は二つ……一つは、ヒソカという人物だ。身長百九十センチ以上の忌まわしい雰囲気纏っている男。こいつを探してもらいたい」

「国王軍の乗客リストをチェックさせよう。オレたちみたいに非正規乗船客もいるから期待はするな」

男は言葉を続ける。

「この層を探し回るのは構わんが第三・第四層への出入りはチケットが必要だ。表向きは国王軍への一枚だが実際はすぐ横でマフィアも切符を切ってる。シャ一家に入ればフリーパスだぞ」

「随分と親切だな、遠慮しとく。まだそつちの条件を聞いていないが……？」

男は視線を外した。敵意がないことを明確に表している。

「言っただろ、どいてくれるだけでいい。『揉め事』は他でやってくれ」

「……ついであしな、いいだろう。もう一つ、第一層に行く方法は？」

今度は明らかに、男が団長さんをにらみつけた。だが彼の手下も私たちも動かない。調子に乗んじゃねえ。オレの気が変わらねえウチに早く消えろ！」

団長さんは苦笑して、私たちに視線を寄越す。彼について、私たちは移動を始めた。

「シツポを出したな」

「ん……？」

フィックスさんの言葉に、団長さんが疑問符の付いた相槌を打つ。

「上の層の話で目の色が変わった。かなりデカイお宝秘のニオイがするぜ」

「それは先の話だ。害虫が飛んでいたら仕事にも影響が出るだろう。まずは、ヒソカだ」

団長さんは振り返る。

「情報カードは出し合った。後は単独行動以外、何をしても自由だ」

そして、額に巻いた布を取り払う。

「パーティーをしたいがケーキが無い。中央にすえる特注品。手に入れたら又集まつて、あのテーブルで食事をしよう」

それは、合図。

ヒソカの首を獲って来い……!!

旅団がばらける。

団長さんとシズクさんとボノレノフさん。

イルミとカルトちゃん。

ノブナガさんとフィンクスさんとフェイタンさん。

フランクリンさんとシャルナークさんとコルトピさん。

「さて、あたしたちも行くかね」

そして、マチさんと私とゲレゲレ。

「私なんかとのコンビでいいんですか?」

「あんた、自分で思ってるほど弱くはないよ。それが、天空闘技場での録画を見たあたし

の感想。行く前にひとつ占ってもらおうかな」

その辺の空いているテーブルを見つけて向かい合わせに座る。

雑然とした周辺の雰囲気。私たちを気にかける者は誰もいない。

「じゃあ、どうぞ、一枚引いてください」

マチさんが引いたカードは、『審判』ジャッジメントの正位置。

「長くかかった展開に審判が下されます。状況の改善や、最終的な勝利を意味します」

「アイツとの腐れ縁が断ち切れるって意味かねえ。だといんどけど」
カードの絵図では終末のラツパを吹く天使の下で死者が蘇り、イエスのもとで裁きが下される。

裁きを受けるのは、おそらく蘇りを経たヒソカ。

裁きを下すのは……私たちのいずれかだといひ。

私が気になるのは、終末のラツパ。終末。何を意味するんだろう。

考えながら、カードを順番に並べる。そして、しまう。

「とりあえず、動こうか。この階層は他の奴らに任せてあたしたちは上を目指そう」
私はその言葉に頷く。

戒厳令が敷かれる前に上層部、できれば第三層より上に行っておきたい。

私たちは階段を使って、第五層と第四層の境界へと移動した。

入り口は二つ。正規の入り口と非正規の入り口。

私は非正規の方に向かい、札束をひとつ差し出す。

そしてゲレゲレも含めて無事に、第四層へと行くことができた。

第五十話

第五層と第四層は、雲泥の差だった。

第五層はスラムに近かった。

眠る場所もなく床に座り込んでいる人、石のようなカンパンをかじり続けている人。

喧嘩も日常茶飯事。殺し合いも日常茶飯事。

それをシャリア一家が、一家にとって問題のない程度にまとめているような状況。

密航だったりあるいは莫大な借金・自分の内臓を質に入れたりして新大陸に最後の夢を見た人間たちの吹き溜まり。

第四層は割と平穩。ただしそれは第五層と比べての話。

人類の標準に比べればまだ少し下だろう。

それでも最低限の衣・食には困っていないようだった。

これはおそらく各フロアを束ねている一家にも関連してくる。

第五層は主にエンジンルームと倉庫。よってシャリア一家は物資の融通が主な収入源となる。

第四層を束ねているシュウウ一家は第三層と第五層の両方と取引をしている。

それは物資であつたり、人材であつたり、その両方であつたり。

それゆえ物資は割と豊富。金さえ払えばいいものも食える。

おそらく面積的にもこの第四層が一番広い。

それゆえ多人数がここに居る。人材となる人間も。

第三層以下はわりと行き来が緩い制限であるために、このような形になるのかもしれない。

それに、シュウウ一家のケツモチであるチョウライ王子、彼は三つの一家のケツモチの中では表向き最も人道的だと言えるだろう。

その考えが、意識的無意識的に、あるいは忖度的な意味で、シュウウ一家の中にも入り込んでいるのかもしれない。

まだ私たちは行つてはいないが、第三層はエイエイ一家が仕切っている。

原作で出てきたあの組長。とても私によく似ている。

違つた。昔の私によく似ていた。

『私は私も含めてこの世の全てがどうでもいい』

私には彼女(?)のようなカリスマはないから、ついて来る人間はいなかつたけれど、考え方は確かに似ていた。

この糞溜めみたいな世界を壊すために、頑張ろうとした。

私の均衡を保ってくれたのはタロットカード。彼女の場合は顔の傷。

そして私は幸運にも、幻影旅団に出会うことができた。

彼女はまだ、それに出会っていない。故に壊そうとする、なんとなくて。

会ったこともない彼女に、わずかな親近感と決定的な差異を感じていた。

私とマチさんとゲレゲレは階段を上る。第三層へ向かって。

その途中で国王軍の兵士ともすれ違う。

まだ警戒厳令にはなっていないようだった。特にチケットやIDの確認もされたりはしない。

「いったん休憩にしようか。このフロアに食堂があるらしい」

別にそれほど疲れてはいないけれど、マチさんのすすめで食堂へと向かう。

カウンターに一万ジェニー札を数枚出して、三食分（一食分は肉のみ味付け無し）を手に入れた。

「……あんた、一体いくら持ってきたのさ」

「多分電子マネーや振り込みは使えないと思ったので、それなりに。バッグの中、見ます？」

「いや、別にいい」

私がついていてもおかしくない程度。すなわち、ポストンバッグ一杯の紙幣。

いくらになるかは私も数えていない。

何もせずに済むのなら、お金で済むのならそれが一番いい。

「ゲレゲレ、ごはん足りる?」

「があう!」

とりあえず足りるそうさ。……だんだん理解できて来たな、キャンプタイガー語。

浅い紙皿に水を少しわけてもらおう。ここでは水も有料、当然だ。

猫には水がとでも大事。泌尿器の病気にでもなつたらお金が湯水のごとく流れていくからね。

キャンプタイガーの治療なんて、それこそいくら万円かかるか見当もつかない。

ついでにペットボトルの水を追加で二本購入した。私とゲレゲレの分と、マチさんの分。

中身はただの水道水。船ではそれも貴重な資源だ。

「あたしはいいよ」

「まあ、そう言わず。飲み食いは出来るときにしておかないと。今必要なくても後で喉が渴いたときにでも飲んでください」

私のボストンの中身を見た輩に絡まれたりもしたけれど、何も問題はない。

大事になる前に二人で片づけた。

シユウウ一家に付け入るスキを与えない、それも、重要なこと。

私たちは階段を上る。特に何事も起こらない。

大きな爆発でもあれば、団長さんや他のメンバーがヒソカと遭遇したかもしれないと考える。

あるいは王位継承戦においての何かしら重要な出来事。

……それは、ないか。国王軍がまだ警戒していない。

ということはおそらくまだ私の知っている原作の最後の、ほんの少し手前。

これまで歩いて見た限り、下層に兵士はほとんどいない。

考えながら階段を上っているとすぐに第四層の最上部に到達した気がした。

入り口は第五層と第四層の間と同じ、正規と非正規の二つ。

私は迷わず正規の入り口へと向かう。

「ちよつと?」

マチさんの静止を意に介せず、私は交渉を開始した。

「第三層に行きたいのですが、IDとチケットはおいくらですか?」

「何を言っている。第三層のチケットを持たないものはここを通ることはできない!」

「はい。だから聞いています。私たち二人と、この子が一匹。おいくらですか?」

カキンは、杜撰。裏金も横行する。

私が欲しいのは通行手形ではない。そこに滞在するための手形。

「……耳を貸せ」

言われるとおりに耳を貸す。耳打ちされた金額をポストンから取り出し、兵士に手渡す。

私の分とマチさんの分の、チケットとIDがその場で発行された。

「……で、なんでわざわざ正規のチケットなんか手に入れたんだい？ 別に非正規でも構わないだろうに」

マチさんの分のチケット兼IDカードを手渡す。

「もうすぐ事件が起きます。最初は、小さな小さな火種。それが徐々に大きくなっていく。それによって乗っている国王軍とハンター協会が警戒する。私たちが安全に揉めることなく第三層にとどまるためには、IDとチケットは必須です」

それも占いか？ なんて無粋な質問は今更マチさんもしない。

通れることには変わらない。黙認。

私とマチさんとゲレゲレは、堂々とゲートを通過した。

第五十一話

廊下に無機質に同じように並んだ客室の扉。

第三層の全体図を示した地図を見る。

イルミとカルトちゃんがいる。

それに、十二支んの大半もこの三層にいる。レオリオも。

それ以外の旅団メンバーはここにはいないようだった。

「で、どうするんだい?」

「しばらくはこの第三層に居ましょう。チケットを手に入れたことで私たちにも客室があるはずなので、そこに居るか、あるいはヒソカを探してウロウロしましょう。やがて騒動が起きて、準戒厳令が敷かれます。上に行くのは、それ以降のどさくさ紛れがいいと思います」

最初に私たちにあてがわれた客室に向かう。ツインの一部屋。

ゲレゲレをそこに待機させて、私たちは第三層をざっと見て回った。

できれば十二支ん、特にミザイストムには鉢合わせたくない。

犯罪ハンタークライムの彼はおそらくマチさんの顔を知っている。

当然、プロハンターである私の顔も。

併せて考えると、私が幻影旅団と何らかの関係を持つていることはすぐにばれる。なんならすでにばれている可能性の方が高い。

揉め事を、起こしたくはない。

よつて私はこの第三層に来た時に『愚者』を発動した。ごく自然な流れである。

私のそばに来れば、円でなくともその存在を把握できる。

そしたら逃げるだけだ。面倒は出来る限り避けたい。

第三層には、デッキや病院、映画館、大食堂も複数あるし、バーやマッサージ施設なんかもある。

イメージは大きい都市にあるようなホテルだ。

一般人が予約し泊まれるレベルの高級ホテル、その感じに近い。

警察や裁判所などの政治特区もこのフロアにある。

ここを中心に下層を警護・管理するのだろう。

第二層より上はたぶん例外。

そこに滞在する個々人が警護や主治医をそれぞれに付けているような、そんな世界。ヒソカを探して訪れた大食堂の一角で、私の目の端に映った人物。

フードを深くかぶり、隠れるように移動している。

「ちよつと？ どごいくの」

マチさんから離れ、私は彼女に近付く。ボストンに入れた水を取り出す。

キャップを開いてわざとではないふりを装って彼女に水をかける。

「あつ、ごめんなさい！ 私の部屋が近いのですぐに乾かしませう！ 本当にすみません！」

近付いて、顔を覗き込み、口の前に人差し指を立てる。そして小声でささやく。

「大丈夫、お味方です。一旦私たちの部屋にご案内します。ここでは目立ちすぎる」

彼女は私の顔を見て、深く頷き、そして私の隣についてきた。

「知り合いかい？」

「ではないですが、似たようなものです。こちらはマチさん、私の知人で信頼できる人です。さあ、行きましょう」

そして彼女を連れて三人で部屋へと戻る。

室内に入ると最初はゲレゲレに怯えていたが、おとなしいとわかるとすぐに落ち着いた。

「改めて。初めまして、^{フワッ}第十一王子。私はエイラと申します」

ドライバーで彼女にかけた水を乾かしながら、私は挨拶をした。

「知ってます、戦う占い師さん。一度占ってもらいたいと思ってきましたから」

まさかの私が知られていた件について。

だからおとなしくついてきてくれたのか。

「王族の方とお話しする機会などないので、何かしら失礼な点があったら先にお詫びしておきます」

「いえ、私もまさかこんなところであの戦う占い師さんにお会いできるなんて思ってた、嬉しいです」

その呼び名はやめてほしい……けど、今はそんなことを言ってる場合じゃない。

「フウゲツ王子、私は上層部で現在何が行われているかを知っています。そして、王子が何を求めているのかも。ここは第三層。王子は『魔法の抜け道』^{マジックワーム}を通ってここへ来られたのですね」

彼女は無言で頷いた。

「ちよつと、話が見えないんだけど」

「ひとまず、私たちの会話を聞いていてください。質問は後で受け付けます」

マチさんには悪いけれど、今は彼女^{王子}にとって緊急事態だ。

少しでも早く話を進めたいだろう。

『魔法の抜け道』^{マジックワーム}から完全に出てしまったら、どうなりましたか？」

「出口は、消えました……多分だけど、あのトンネルは一日一回しか出すことができない

みたいで、さつきこのフロアに来てからは、何度念じても出せません」

恐らくは一日一回の制約。あるいはそれが王子のオーラの限界値。

念獣らしきものは、彼女の周囲には見えない。

「それでは王子はきつとお疲れでしょう。見つければ大騒ぎになるでしょうから、この部屋を提供しますので、明日までここに隠れてお過ごしください。……狭い部屋で、恐縮ですが」

「とんでもない！ 感謝します」

「そして明日、私たちも一緒にその『魔法の抜け道』^{マジックワーム}について調べましょう。たとえば複数人通ることができなのか、状況によっては複数回出すことができるのか、抜け道の先を選ぶことは可能なのか……それが出来れば王子の目的は達成しやすくなる」

王子は目を大きく見開いて口に手を当て……そして、涙を流し始めた。

「あなたは……本当に、私の状況がわかってるんですね。すごい……」

「それでも、占い師なので。でも、何もなくてもわかるのはほんの少しだけ。だから、王子の口から、王子が異変を感じ取ったことを教えてください。……王子の主観で、何でも構いません」

私はあえて笑顔を見せる。

「王子のお話を聞いたなら、私のカードで占いしましょう。王子が詳細に話してくださいるほ

ど、きっと私のカードは詳しく教えてくれるはずです、今後の指針、どうすればいいかを」

フウゲツ王子は改めて、深く頷いた。涙はもう止まっていた。決意の眼差し。

「最初に変だなと思ったのは半年くらい前です……以前は、なんていうか、もつと自由でした。警護はついてはいたけど、他の国に旅行もできたし。その、数か月前に、あなたに占ってもらいたいと思ってソレイユ共和国……天空闘技場に行きたいと伝えたんですが、にべもなく断られました。それ以後、カキンからは出ていません」

私は頷いて、話の続きを促す。

「この船のことは、その前から聞かされていましたが、私たちが乗ることも。それで、二か月ぐらい前に変な儀式を受けて……」

「壺中卵の儀ですね。壺の中に血を垂らして、手を差し込む……」

「そうです。それ以降、目に見えて警護が厳しくなりました。私だけでなくカーチン……あ、カチヨウ王子も。他の王子は知りませんが、多分似たような状況だと思います」

王子は大きく息を吐きだした。疲れているのだろう。

「……王子、今日はゆっくりお休みください。占いはまた明日にしましょう。私たちはここに居て、王子をお守りさせていただきます。お目覚めになるまで、ずっと」

「があう！」

ゲレゲレの相槌と、フウゲツ王子の足元へのスリスリ。彼のモフモフで王子の緊張が少し解けたようだった。

「わかりました……ありがとうございます」

王子が寝付くまで、私たちは黙ってそこに居た。

やがて寝息が聞こえてきた。そしてマチさんの小声。

「……で、どういうことなんだい？」

私はカキン王子同士の殺し合い、壺中卵の儀の説明をする。

上層階で今行われていること、寄生型の念獣の存在。

「この子には念獣はついてないみたいだけど？」

「その理由はまだわかりません。けれど彼女の得た能力、あれはおそらく移動型。あれを使えば私たちが第二層より上に行くことも容易になるはずです」

三層に残るべきか、上に行くべきか、私はまだ決めかねている。

王位継承戦にはできれば関わりたくない。とはいえ、上層部に行くためには千載一遇のチャンスであることもまた事実。

「……イルミ」

「え？」

「イルミ。アイツ、どうも気になるんだよね……第三層コにいるんだろ？ アイツ放つと

いて大丈夫かね」

……？ マチさんのカンは当たる。原作知識のない私のカンなんかより、はるかにだ。

そのマチさんがイルミを気にしている。そこには一体、何がある？

「まあ、ひとまずはこのお姫さんだね。この子が上に戻るまで守ることに異存はないよ。確かに話を聞いた限りでは目立つことなく上に行けそうだ」

明日、彼女が起きたら魔法の抜け道マジックワームについて色々調べてみることにしよう。

まずは、そこから。

第五十二話

フウゲツ王子が目覚めるまで私たちは起きて過ごし、特に何も問題は起きなかった。

目覚めた後は、改めて魔法の抜け道マジックワームについて色々尋ねた。

「最初に出した時はカーちんの所に繋がって……その時は、頭しか出さなくて完全に出なかったからか、出口が消えることはなかったです。二回目が昨日で、今度は身体が全部出た時点で出口は消えました」

やはりこれは移動式の念能力である可能性が高い。

マジックワーム……ワーム……そのトンネル自体が念獣？

じゃないな。だって王子にも見えている。

「最初の時と二回目の時、トンネルが出たときに何を考えていましたか？」

「二回目の時はただカーちんに会いたいって……二回目の時は、ここじゃないどこかに行きたいって念じました」

念じた場所に行ける可能性は高い。

ただし範囲はおそらくそれほど広くない。

ここじゃないどこかが、あくまで船内だったから。

「……わかりました。じゃあ王子、トンネルの検証をする前に占いをしましょうか」

私はタロットカードを取り出してデスクの上でシャッフルする。

王子はこの時、初めて笑顔を見せた。

「わあ……なんだかドキドキします。私もカーちゃんも占いが大好きで……戦う占い師さんのことを最初に教えてくれたのもカーちゃんだったんです」

「では王子だけではなく、カチヨウ王子とお二人の運命を占いしましょうか」

「はい、ぜひ!」

シャッフルしたカードの中から一枚を引いてもらう。

『恋人達』の正位置。

「お二人の選択が正しいことを意味します。『恋人達』はその名の通り恋人同士を意味しますが、同時に友情など他の様々な愛情も意味します。カチヨウ王子とフウゲツ王子の想いはおそらく同じ……ただ、その表現方法が違うだけ。お二人のコミュニケーションを密に取ることができれば、おそらくはその選択を成功に導くことができます」

「コミュニケーション……」

フウゲツ王子が顔を曇らせる。

カチヨウ王子の突然の態度の変化。恐らくはそれを思っているのだろう。

「……先ほども言いましたが、カチヨウ王子とフウゲツ王子の想いは、きつと同じ。どう

かそれを信じてください。カチヨウ王子の態度には理由があるはずですよ」

「占い師さんは、カーちんのことともわかるんですか？」

しまった、知らないはずのこととも話してしまった。占いに混ぜ込めばいいか。

「直接占ったわけではないのでフウゲツ王子を通して見た限りですが、悪い感じはしません。きっと今も、カチヨウ王子はフウゲツ王子のことを大切に思っています。それは、フウゲツ王子も同じ、そうでしょう？」

「はい。私はカーちんが大事。殺し合いなんか絶対にしたくない。かといって、自分も死にたくない。私は、カーちんと私、両方生き残りたい」

そこが、カチヨウ王子とフウゲツ王子の少し違うところ。

カチヨウ王子は万が一自分が死んでもフウゲツ王子を守りたいと考えている。

それは、どちらが優れているとか素晴らしいとか、そういったことではない。

それぞれに、お互いを、違う方法で、同じくらい想い合っている。

……ちよつと、うらやましいな。私にはそういう存在がいなかったから。

「それでは王子、『魔法の抜け道』について調べていきましようか。きっと今頃、王子の部屋は大騒ぎになっていると思います、王子がいなくなつたから。なので、一旦お部屋に戻りましょう。そう念じて、魔法の抜け道が出てくるように祈ってください」

フウゲツ王子はベッドの上に正座をして、指を組んで祈り始める。

やがて祈りは形になり、王子の目の前に扉が現れた。

「まずは王子おひとりで行っていただきます。このワームの先がどこへ繋がっているのか。ご自身のお部屋でしたら、そのままワームから出て、信頼できる護衛たちに私たちのことを話してください。恐らくその場合は、距離に制限はあるかもしれませんが念じた場所に自由に行けるんだと思います。そして明日、改めてこの部屋にワームを繋いでください。もしお部屋でない場所に繋がった場合は、ワームから出ることなくここに戻ってきてください」

「わかりました。それで、まずは願った場所に行けるかどうかを調べるんですね」

「はい。それができるならば次は、私たちもそのワームを通れるかどうかを試してみましょう。時間はかかりますが、一つずつ確実に可能性を模索していきましょう」

王子は正座したまま、深々と私に頭を下げた。

「ありがとうございます……可能性があることが見えた、それだけでも、私にとって大きな希望になります」

「まだ早いですよ、王子。王子とカチヨウ王子が無事であること、全てが終わったら、お礼はその時に言っていたいただきます」

私たちは笑顔でお互い頷き合って、そして彼女は魔法の^{マジック}抜け道の扉をくぐっていった。

……数分ほど時間が経って、扉自体が消える。

おそらくは、自分の部屋にたどり着くことができたのだろう。

「これでいい。次はあたしたちがあれを通り抜けられるかどうかだね。一人だけという制約がついてたらお手上げだ」

「それでも、上層部の情報を仕入れることができるだけでも、私たちにとつては大きなアドバンテージになります。上で何か異変が起これば、それに紛れて潜り込める」

「それまでは待ちつてことだね。仕方ない、あたしはヒソカを探しに行きたいけど、あんたはどうする？」

「私はここに残ります。万が一、一日経たずに王子が戻ってくる可能性もありますから」
「……ま、仕方がないね。単独行動禁止。あたしもここに残るよ。あんた、先に寝る？ それともあたしが先に寝てもいい？」

「お先にどうぞ」

マチさんはベッドに入って数秒で寝息を立て始めた。早い。

この部屋には（おそらく各部屋全てに）第三層の見取り図がある。

避難経路などを掲示したものだろう。

その地図を見ながら、私は『愚者』を発動する。

昨日は、十二支んと旅団しか調べなかった。

私は今、ヒソカ的位置を確認する。

……ヒソカは、第三層に居た。

マチさんが探しに出なくてよかった、昨日鉢合わせなかったことも幸いだった。

マチさんには申し訳ないが、おそらく彼女ではヒソカに勝てない。

私とゲレゲレを足しても無理だろう。

ヒソカは団長さんたちか実行部隊トッに任せて、私たちはお宝を先に探っておきたい。

部屋に引きこもっていれば、問題は起こらないだろう。

他の旅団員の位置も確認した。それぞれ昨日とほぼ変わらない場所にいるのだろう、

イルミとカルトちゃんを除いて第三層にはいない。

違和を感じた。

もう一度ヒソカを調べる。第三層展望エリアにいる。

そしてもう一度、今度はイルミを調べる。……第三層、展望エリア！

二人とカルトちゃん（イルミとカルトちゃんが一緒にいるのはさつき確認した）が同

じ場所にいる？

これだけそばに居て気付かないわけがない。

衝突が起こっている気配もない。

もしかして二人とヒソカは組んでいる？

マチさんの違和感の正体はこれかもしれない。

私はイルミとカルトちゃんとマチさんを除く全員にメールをした。

『イルミ・カルトとヒソカは組んでいる可能性有り、注意せよ』

第五十三話

少し考えて、私は追いメールをした。

『ヒソカは現時点で第三層に居ます』

すぐに、団長さんからメールが返ってきた。

『『愚者』だな。そのままヒソカの動向を逐一把握して報告しろ、オレが殺る』

私たちは明日、魔法^{マジックワーム}の抜け道の検証をする。

場合によっては第一層に移動する。

ヒソカの位置を把握するためには地図が必要。

寝ているマチさんを起こさないように、こっそりと部屋を出た。

その辺にいる従業員らしき人を捕まえて、紙の地図がないかと尋ねる。

その従業員さんは快く、スタッフルームから全フロアの見取り図のコピーを持ってきてくれた。

そして、準戒厳令が出るから今すぐ部屋に戻るようにとの指示も共に。

無事に地図を手に入れて部屋に戻ると、マチさんがすでに起きていた。

「単独行動禁止、忘れたんじゃないだろうね」

「すみません、起こしたくなかったもので……これを手に入れてきただけです、遠出しません」

地図を見せる。第三層だけじゃない全フロアの図面だったのはラッキーだった。

これで皆の居場所を把握できる。

「ああ、『愚者』ね」

「はい、それと……ヒソカとイルミさんとカルトさんは組んでいる可能性があります、注意しておいてください」

「それは占い？ それとも何か別の確信できることがあった？」

「さきほどこの地図で、三人が一緒にいることを確認しました。衝突が起こっている気配はありません。つまり、そういうことなんじゃないかと」

実際に調べた。今、三人は第三層政治特区の近くに居る。

でも三人がこの第三層に居ることは言わないでおこう。

言ったらマチさんは自分たちが行くといい出しかねない。

私たちはフウゲツ王子に集中していきたい。少なくとも今は。

「それ、みんなに伝えた？ ていうかヒソカの居場所もわかるんじゃないか」

「はい、メールで皆さんに伝えました。彼らは今第二層にいるようです」

「そ。それじゃ今のところどうしようもないね。今度はあたしが見張りをしてるから休

みなよ。ただしフウゲツ王子が来たら叩き起こすからね」

お言葉に甘えてベッドに横になる。

ゲレゲレが隣に来て、抱き枕になってくれた。

ノドがグゴログゴロと、すごい音を鳴らしている。

その温もりのおかげか、私はすぐに眠りに落ちることができた。

夢を見た。

私は一人で泣いていた。

私は小さい。子供だ。

私は無力で、何もできない。

周囲は真つ暗で、何も無い。

私は一人で泣いていた。

そしたら、誰かが手を引いてくれた。

ピンクの髪の毛の、釣り目の綺麗な女のひと。

そしたら、誰かが頭をなでてくれた。

黒い髪の毛の、優しい気な男のひと。

フランケンシュタインみたいなひと、ミイラみたいなひと。もいた。

他にもたくさんひとがいた。

みんな笑って、私の手を取り頭をなでてくれる。

私はもう泣いていない。

私は一人じゃない。ひとりぼっちじゃない。

暗闇はもう怖くない。

特に何事も無く、私は目覚めた。

「……マチさん、私どのくらい寝てました？」

「そんなには寝てないんじゃないかな。まだ日付も変わってないよ」

「そうですか……」

ゲレゲレに、ベロンと顔をなめられた。

ザリザリしててちよつと、いや、結構痛い。

「食事はどうする？」

「ルームサービスを頼みましょう。今は準戒厳令下らしく、部屋から出ないようにと言われましたので」

部屋に備え付けてあったメニューからそれぞれ料理を選び、内線電話で注文する。

ゲレゲレ用には別途で塊肉を焼いたものを。

……栄養、偏っちゃうかな？ キヤットフード持ってくればよかったかな。でもすぐに無くなっちゃうしな。荷物にもなるし。

すぐに料理は運ばれてきて、私は料金とチップを支払った。

一番高い料理はゲレゲレの塊肉三キロだ。このゴクツブシさんめ！

でも美味しそうにかぶりついてるのを見てると、それだけで癒されるんだよなあ

……。

マチさんは厚切りトーストにスクランブルエッグとサラダのセット。

私はお野菜たっぷり具沢山の中華粥。

お野菜とらないと団長さんの真顔が浮かぶようになってしまった。トラウマ。

夕飯としては簡素だけれど、お互いに消化の良いものを、適度な量。

特に私は寝起きだからね。

ゲレゲレみたいなの食べたら胃がびっくりしちゃうよ。

食事をとっている間に日付が変わり、変わるとほぼ同時にピンクの扉が現れた。

王子もまた少しでも早く先へと進みたいのだろう。

そして、願った場所へと魔法の抜け道を繋げることができるとは、ほぼ確定。

ついでに私の舞い踊る二十二の使徒のように二十四時間縛りではなく、日付変更が制

約だつてことも。

「あつ、ごめんなさい……お食事中でしたか」

「すぐに終わるから心配ないですよ。申し訳ないですが王子はそのまま、トンネルから出ないでください」

「はい、わかっています」

実際、私たちの食事はほとんど終わっていて、すぐに全員食べ終わる。

そして私たちは、トンネルの出口の前に集まった。

「次は、お二人も一緒に通れるか、ですよね」

「護衛たちに話をしてもらいましたか？」

「はい、今私に直接ついている護衛は二人とも信頼できる人たちです」

「ならば突然部屋に私たちが現れたとしても問題はありませぬ……では、参りましようか」

さてさて、私たちも通ることではできるのか……。

まずは王子が奥に入り、次いで私……の前に、先にゲレゲレがトンネルに飛び込んだ。全身が見えなくなる。どうやら入ること自体に問題はないようだ。

私とマチさんがそれに続く。中は真つ暗で、手探りで先へと進む。

それほど立たずに、出口の明かりが見えた。

明かりは徐々に大きくなり、全員が出た時点で扉は消えた。

「王子、ここは王子のお部屋で間違いないですか？」

「はい、私のベッドです。リヨウジ！ バチャエム！」

王子はベッドの天蓋を開いて警護を呼び出す。

二人の男が即座にベッドの前へと仁王立ちした。

「このお二人が、先ほど話したエイラさんとマチさんです」

「初めまして、エイラです。時間がないので率直に伺いますが、現在フウゲツ王子の警護体制はどうなっていますか？」

二人は信頼半分、不信半分といった様子で私たちを見ている。

だが黙っていても埒が明かないと判断したのか、素直に回答してくれた。

「直属の護衛は我々二人、他五名は全て上位王妃の所属兵だ」

「ハンター協会員は？」

「フウゲツ様にはついておられない」

「わかりました……可能であれば、カチヨウ王子に従事しているハンター協会員を一名こちらに融通するようにセイコ王妃に嘆願してください。それから、『ネンジュウ』というワードについてはすでにご存じかと思いますが、お二人は念能力者ですか？」

「ネン……ノウリヨク？ 知らないな」

「私も知らない」

念能力については二人とも知らないようだった、ということとはフウゲツ王子は実質無防備に近い。

私は念能力のことを掻い摘んで二人に説明した、念獣のことも。

私たちが突然、誰もいないはずのフウゲツ王子のベッドからわらわらと現れたのも、その念能力の一端であると。

相手の知らない重要な情報を無償で提供する。これも、信頼させる一つの手段。

「実際に見てしまつては、疑いようがないな……その、移動能力でフウゲツ様を船外に逃がすことは？」

「おそらく無理だと思われれます。距離に制限があるのか、詳しくは調べてみないとわかりませんが」

「ネンジュウとかいうのは？ フウゲツ王子にも憑いているのだろうか？」

……それは……さつき、見つけた。

ベッドの片隅でぶるぶると震えている、二足歩行の真っ白なロツプイヤーラビットのような生物。

ゲレゲレを見て失神しそうになっていた。

あれが恐らく、王子の念獣。片手に星型のステッキを持っていた。

「僕と契約して、魔法少女になつてよ！」とか言われたら困るなあ、そんな感じの生き物。

に、しては、ずっとビクビクしっぱなしだ。こんな念獣もいるのか。

「我々がその『ネン』をこの場で警護もしながら覚えることは可能か？」

「可能ですが時間がかかります。恐らくすでに非戦闘員が二名、1014号室へと行っているでしょう。あちらの手段は特殊なもので、私が教える場合は命の危険を伴うもので一週間弱、そうでなければ半年から一年はかかります」

「それでは意味がないな……しかし、『ネン』が無ければ王子をお守りできないこともまた事実」

「私とこちらのマチ、それに獣ですがこのゲレゲレも念が使えます。少しはお役に立てるか」と

護衛二人の視線がゲレゲレに集中する。ぐるると鳴いて鼻高々である。

「しかし、それほどの方々が何故フウゲツ王子を……う？」

「こちらにも事情があるのと、偶然フウゲツ王子を第三層で見かけたからです。事情がある故、常に王子をお守りするわけにはいきません」

警護のうちの一人、黒髪の男が一步前に進み出た。

「命の危機に晒されようと構わない。『ネン』の伝授を頼みたい」

「おい、リヨウジ……」

「必要があることはお前もわかっているだろう。無ければフウゲツ様をお守りすること

もできない。何のための王室警護兵だ」

黒髪の男は、覚悟を決めたらしい。

「ああもう、わかったよ、お前の言うとおりで。オレにもそつちで頼む」

私の知る方法は、ウィングさんがやっていた手段のみ。無事で済むかはわからない。

「……上着を脱いで、私の前に後ろ向きに立つてください」

彼らは言われたとおりにする。そして、私は彼らのうなじに手を当てる。

「ここから『オーラ』と呼ばれるものを送り込みます。温かいと思いますので、それをしっかりと感じ取ってください」

出来るだけ弱く、出来るだけ静かに、私は彼らにオーラを送り込む。

彼らの体から、オーラがほとぼしり噴き出し始めた。

「こ、これは……!」

「これがオーラ、生命エネルギーとも呼べるものです。このまま吹き出し続ければお二人はエネルギーが枯渇して死んでしまうので、そのエネルギーが己の周囲を衣服のように纏うよう念じてください。身体はリラックスして、力を抜いて。集中して、オーラをとどめてください」

さすがに原作のゴンやキルアほどまではいれないが、それなりのスピードで二人もオーラを纏うことに成功した。

「かなり集中力が必要だな、気を抜くとすぐにオーラが霧散してしまう」

「ああ、こうして会話をするだけでも精いっぱいだ」

「まずは、意識せずともオーラを身に纏うことができるようになるまで、それを続けてください。その間は、私たちで王子をお守りします」

「……ちよつと」

マチさんが私を小突いてくる。

「何でこんなことになってんのさ。あたしたちの目的は王子を守る事じゃないだろう？」

「そうですが、私はせっかく出会ったフウゲツ王子をむぎむぎ死なせたくはないです。

マチさんは違いますか？」

マチさんはぐつと言葉を飲み込む。なんだかんだマチさんも優しいのだ。

「……念能力の伝授が終わったらお宝探しに行くからね。それまでの間だけだ」

「はい、わかっています」

ゲレゲレが二人にちよつかいを出して集中力を乱れさせている。

これもいい修行になるだろう、多分。

「あの……お話は、終わりましたか？」

天蓋の隙間から、王子がそつと顔を出した。念獣も顔を出す。

「はい。王子はどうぞお休みください。ここは私たちがお守りします」
「ごめんなさい……ありがとう、ございます」

頭を下げる王子の下で、ウサギもどきも頭を下げる。かわいいな、おい。

纏をマスターすべく奮闘している二人に、後で他の上位王妃兵への顔?ぎをお願いし、私たちは警護を始めた。

何もなければ特にすることはない。円で室内、特に王子周辺を警戒し、あとは突っ立っているだけだ。

第五十四話

護衛兵二人の様子を確認しながら、寝室で待機。

待機中に地図を確認して、団長さんにメールを送っておいた。

『ヒソカは第三層政治特区周辺にいます』

特に返事はない。別に必要ともしていない。

二人はまだまだ自然に纏をするのには程遠いようだ。

ゲレゲレがちよっかいをかけるたびにオーラが噴き出している。

やがて交代要員の二人がやってきた。

「その二人は？」

明らかに敵意のある眼差しを向けられた。

まあ現状では仕方ないだろう。

「フウゲツ王子の新たな護衛だ」

「エイラと申します」

「……マチ」

「があう」

私たちは特に念能力を隠しているわけではない。未だ纏の修行中である二人も同様だ。

やってきた二人のうち、一人は念能力者。現状にも気付いているだろう。私たちがこの二人の精孔を開いたこと。

「……………」のお二方は？」

「ドゥアスル第二王妃所属兵のカラムとカットロー第四王妃所属兵のタンティーンだ」

「……………カラムだ」

「タンティーンだ」

「おそらく第二王妃所属兵が念能力者、紹介を受けその推察が正しかったことを知る。ドゥアスル王子個人から眠っている間、そばに居てほしいと命令を受けています。よって、王子がご就寝の間は私たちが警護を担当させていただきます、交代は必要ありません。私たちと、そこにいるリョウジとバチャエムがお二人の代わりをしてくれます」

上位王妃所属兵は特に不平や非議を述べることもなく、警護待機室へと戻っていった。

シンプルに考えれば自由時間が増えるわけだしな。

二人一組だから暗殺も難しい。

己が捕まり殺される覚悟であれば可能だろうが、そこまでの忠誠心はなさそうだ。

よって今は、警護に時間を取られるよりも、私たちという特異な存在が現れたことによる上位王妃への現況の説明や作戦の練り直しなどに時間を使いたいだろう。

両者の利害が一致した。

ベシヤミン

第一王子の私設軍隊が相手だったらこうも楽にはいかなかったかもしれないけど。

バチャエムの方が、リヨウジより筋が良いようだ。

ゲレゲレのお邪魔にもずいぶん耐えられるようになってきた。

なお、さすがのゲレゲレも凝や硬でのネコパンチはしない、そのくらいは心得ている。

彼らの足元にちよいちよい手を出しているだけだ。

リヨウジはまだ集中力に乱れがある。疲労感是他の方が上だろう。

「お二人は、まだ続けられそうですか？」

「続けねばならんさ、王子をお守りするためにはな」

「まだ問題ない……この程度であれば……」

リヨウジはそろそろ限界かな？

まあ、さつきは死ぬとか言っただけで脅したけど実際は絶状態になって回復するまで寝ちやうだけなんで大丈夫だろう（経験者は語る）

「あ、あと、この手段で得られるのは念能力の基礎的な部分だけなので、そこはご承知おきください。『ネン』とは奥深く、難しい。出来得る限りのお手伝いはしますが、最終的

に物を言うのはあなた方自身の資質と心構えです」

資質はともかく、心構えは大丈夫そう。

さすがに王室警護兵だけあって、心技体いずれも私なんかよりはるかに鍛えられているようだ。

フランクリンさんが出会ったばかりの頃に「容器が頑丈でなければすぐに壊れる」みたいなことを言っていたのを思い出した。

この二人なら、そこはきつと大丈夫だろう。多分。

そしてさらに一時間後、ついにリヨウジが倒れた。

「リヨウジ！」

「大丈夫です。すべてのオーラを使い切って、現在『絶』と呼ばれる状態に強制的に陥っています。後でリヨウジさんにもご説明しますが、これはこれで一つの技能として重要な役割を果たすため、バチャエムさんもこの状態になるまで修行を続けていただきませう。この状態の間は無防備ですが、そのお二人を守ることも私たちの役目だと思っておりますのでご心配なく」

……とはいえ、バチャエムはもう纏をマスターしてそうなんだよな。

だとすると絶は別枠で教えた方がいいか。

目の前に実例がいるわけだし、先に絶を教えよう。

「バチャエムさん、現在、オーラを感じますか？」

「あ？ ああ、見えている」

「そうじゃなくて、自分のオーラを感じていますか？」

少し考えこんで、それでもすぐに彼は答える。

「そうだな……ぬるい風呂の中に浸かっているといった感じか」

「オーケーです、バチャエムさん、纏は合格です。後は意識せずその状態を常に保てるように普段から修行してください。次は絶の修行にうつります」

「？ リヨウジのように倒れるまでこれ続けるんじゃないのか？」

「纏をマスターしてしまえば、オーラを不必要に使うこともありません。つまり、倒れることもなくなります。なので、倒れているリヨウジさんのようにオーラを全て遮断する……体の表面に在るオーラを全て消すことをイメージしてください」

精孔の存在を説明し、それを閉じるイメージを。

私は彼の前で、実際に絶を使って見せた。

「なるほど……これも一つの技能とあなたが言った意味がよく分かった。これは気配を消す手段に近いな」

「はい、それにわずかですがオーラを回復することもできます。ただし先ほど言ったように完全に無防備。ゆえに無作為に理由なく絶を使用することはお勧めしません」

「完全に無防備ゆえ攻撃されたら一般人と比べてすらひとたまりもないということか。了解した。それでは修行に入らせてもらおう」

理解が早い。バチャエムさんも、おそろくりヨウジさんも、非常に優秀な人なのだろう、一般人の世界では。

そうじゃなきや王室警護兵なんて名誉で重要な任務まかされないか。

それでも、私ごとき若輩者の言われるがままに素直に受け止める度量も持っている。

フウゲツ王子、意外とあなたは人材に恵まれているかもしれないよ？

フウゲツ王子はお休みになられているようだが、天蓋の隙間から念獣がソワソワとこちらを時々覗いてくる。

そしてゲレゲレの視線を浴びると慌ててサツと隠れる。

さすがのゲレゲレも念獣は食べないと思うけどな。

……さてよ、グリード・アイランドの時に食べてたな、そういや。

後であの念獣食べちゃダメだってすっかり言っておかなきゃ。お肉おいしいもんね。

第五十五話

やがてフウゲツ王子の目が覚める。

ゲレゲレには念獣を食べないように言っておいた。

ちよつと残念そうな顔をしていた。

バチャエムは絶をほぼマスターしつつある。

リヨウジも途中で気が付き、引き続き纏にいそしんでいる。

ノックとともに寢室の扉が開かれ、ベッドで食事をとりたいという王子の要望に応え

て従事者の方々が王子の食事を運んできた。

バチャエムとリヨウジ、それになんと我々の分まで一緒にだ（ゲレゲレ含む）

ちよつとゲレゲレのモツ煮込みつぽいのすつごく美味しそうなんですけど！

でも味がついてないから人間には美味しくないのかな。

ゲレゲレは大喜び。

私たちのことは、従事者たちもすでに知っていた。

……カラムとタンティーノ（あるいはそのいずれか）が周知してくれたのだろう。

ということはすべての王妃警護兵が私たちの存在を知っている。

さて、どう出てくるかな。ドゥアズル 第二王妃は控えめな方だったと思うんだけど、他の王妃はよく知らない。

問題は第一王子ベンジャミンの私設兵だ。

この時期にはすでに、王妃警護兵に変わって私設兵が各王子についているはずだ。私たちの情報はすでにベンジャミン王子に渡っていると聞いていいだろう。

向こうがどう動くか、あるいは動かないか……考えていると、ちようど向こうからやってきた。

「お食事中失礼いたします。ベンジャミン 第一王子私設兵、ロデノイルと申します」

戦闘体勢は見られない。直立不動でこちらに向かつて敬礼をしている。

「本当は昨晩伺いたかったのですがフウゲツ王子のお休みの時間を邪魔してはいけないと思います、この時間に参りました」

「初めまして、昨晩から警護に加わったエイラです」

彼は敬礼を解き、私、マチさん、ゲレゲレと順番に見る。そして、リヨウジとバチャエムも。

「状況は、おそらく把握できたと思います。お二方はこの二人リヨウジとバチャエムと今後とも行動を共にしたいと思われているでしょう。今後シフトをこの二人と一緒に組ませてくださいかと思えますがいかがでしょうか」

「お氣遣い感謝します、ですがフウゲツ王子をフリーにすることに一抹の不安があるため、私かこちらのマチ、いずれか一名を常に王子のおそばにつけておきたいと考えています。故にそちらのシフトには私たちを組み込まないでいただきたいです」

「我々もフウゲツ王子をお守りする兵士でありますが？」

「あなたがそうであつても全員がそうであるとは限りません。来たばかりの私たちに、未だ判断する術を持たない。少なくとも一週間は、別でお願いします」

「……委細承知しました。それでは、これから私と第^{トウチヨウレイ}三王妃警護兵のミレンクが交代で警護にあたります」

合図とともに、ミレンクと思われる人物が部屋に入つてきた。事前に打ち合わせでもしていたのだろう。

「わかりました……マチさん」

私は振り返つてマチさんを見る。

「オーケー、あたしが王子を見張る。あんたはあの二人に付いててやんな」

「ゲレゲレも、ここをお願いしていい？」

「がうあ！」

まだモツ煮込みを頬張りながらだが、ゲレゲレもちやんと返事をする、賢い子だよし。

おなかを満たされたら念獣食べたいなんて言い出さないだろう。

「ではリョウジさん、バチャエムさん、行きませう。案内をしていただけると助かります」

「承知した」

二人に連れられて、私は部屋を出る。

王子の縋るような視線が見えた。

大丈夫、そこに居るマチさんは私の万倍強い。

無言で頷いて、そう伝える。王子も無言で頷いた。

二つほど部屋を出て、わきの部屋へと入る。ここが警護控室らしい。

二段ベッドが三台。自由に使って構わないそうだ。シャワールームやトイレも併設している。

ひとつ前の部屋の、正面の扉、あそこがこの部屋（1011号室）の入り口。

私たちのいる部屋の反対側のわきの部屋が、従事者たちの控室と台所に繋がっているらしい。

寝室から一つ出た部屋がリビング兼ダイニングルーム。

大きなテーブルやソファが数台、テレビなども据え付けられていた。

その部屋から風呂・洗面台のあるバスルーム・トイレへとつながる扉がある。

入り口から入ってすぐの部屋が応接室だろうか、テーブルとソファが準備されていた。

それぞれが豪華絢爛ではあるが、思ったよりもシンプルな間取りだな。

王子それぞれの部屋ごとに、間取りが違うのかもしれない。

ジムを併設したり、警護控室が広かったり、寝室が広かったり。

王子が在室中以外は各部屋を自由に移動して構わないそうだ。

食べ物も、自由に台所に取りに行って構わないらしい。

ただし、王子専用の冷蔵庫と食品庫がありそれには手を触れないことが条件。

そろそくだわな、毒が入れ放題なのは駄目だ。

少し台所を覗きに行つて、すぐに控室に戻る。

リヨウジは纏を、バチャエムは絶をそれぞれマスターした模様。

早いな。二人とも才能があるのかもしれない。

次は二人に練を教える。ただしリヨウジは絶をマスターしてからだ。

説明だけ、二人まとめての方が効率がいいから。

控室には他の王妃警護兵もいるので、説明は応接室で小声で行った。

リヨウジはぶつ倒れた経験からか、すぐに絶をマスターして練の修行へと入る。

バチャエムはなかなか練に苦戦しているようだ。

けれど二人とも伸びが早い。これなら基礎修行は一週間かからずに終わられるかもしれない。

今日は……木曜日。来週の頭ごろまでには、発を除いてマスターしてもらえとずいぶん助かる。

とりあえずこの二人に教えることは今のところ何もない……私は入り口に向かう。

入り口横の電話機。交換台へ接続をお願いする。

接続先は「1014号室」

『こちら1014号室、協会員クラブピカだ』

ビング、一撃でクラブピカを引き当てられた。

とはいえあそこはそもそも人数が少ないからな。当然と言えば当然か。

『こちら1011号室、協会員としてではないですが第十一王子フウゲツの警護をしているエ

ラと申します。第288期のプロハンターでもあります』

『何の用だ』

「情報交換と協定……あまりお役に立てる情報は持っていないかもしれませんが、こちらには協定を結ぶ準備があります」

第十一王子は下位、協定を結ぶ必要性は薄い。とはいえ下位同士での協定により上位王子たちへの牽制となることもまた事実。

おそらく、クラピカは釣れる！

『……こちらは『ネン』の伝授と警護の兼ね合いもあり部屋を離れることができない』

「もちろん、こちらから伺わせていただきます、私一人で。今からでも大丈夫ですか？」

『ああ、一人だけなら構わない。それではお待ちしている』

私は懐から地図を取り出して広げる。

第一層にはヒソカもマチさん以外の旅団メンバーもいない。

単独行動禁止、破つてごめんなさい。

私は部屋を出た。

第五十六話

バチャエムとリヨウジからはすでに王子の警護について一任されている。

念能力のことをよく知っている私の方が、警護を管理するにあたって適任だろうと信じてもらったのだ。

よって私は1011号室の警備責任者として1014号室へ行く。

クラピカと対等に会話できるかどうかは甚だ微妙だが、私はまだ彼に会ったことがない。

顔を合わせて、『愚者』の影響下に置いておきたい。

できるなら、第八王妃オイトと第十四王子ツッブルも。

地図を見ながら1014号室へ向かう。

監視カメラはあるが、不審なくらい人影が見当たらない。

警戒厳令下ということもあり、変に疑われないように、みんな最低限の外出しかしてないのだろう。

そしてすぐに1014号室へとたどり着く。

私は一度深呼吸をし、インターホンを鳴らした。

『はい』

「1011号室^{フウゲッ}第十一王子警護、エイラです」

『鍵は空いている、入ってくれ』

扉を開く。

今日の念のレッスンが終わっていることは1011号室の従事者が戻ってきたことからわかつている。

よつてこの部屋に居るのはクラピカとサカタの二人。顔は確認した。

王妃と王子は奥に居るのだろう。これはまあ仕方ない。

「初めまして。故あつて非正規ルートで第十一王子^{フウゲッ}の警護にあたることになったエイラと申します」

「クラピカだ」

「サカタだ」

それぞれに、名乗る。

初対面の信頼がおけない相手にフルネームを名乗らないのは、この業界では常識。フルネームを知る事が操作系の条件になることもあるかもしれない。

古今東西、真名なんて言葉もあるくらい名前は重要だ。

グリム童話のルンペルシュテイルツヒエンや、日本にも大工と鬼六という似たような

話がある。

……まあ、私はもともと名前なんてエイラしか持たないんだけど、それはただの識別名であって、真名なんかではない。

前の名前はとつくに捨てた。

「まずは情報の方から……こちらは、完全ではないですが第十一王子フウゲツの念獣の能力が把握できています。対価の情報によってはそれをお知らせすることができます」

クラピカがすぐに答える。やはり主導権を握るのはクラピカか。

「こちらにはまだ同様の情報は手に入っていない。そちらの求める情報は特には何かあるか？」

「各王子の警護状況、特に第一王子から第五王子までの私設兵及び念獣がどの程度の規模で、またどんな能力を持っているか」

「それもこちらは情報をもたない……」

「では取引は破棄ですね。一旦この情報は持ち帰ります。今後取引できるような情報が出そろったらまたその時にといいことで」

一方的に主導権は、握らせない。

「もう片方の、協定というのは？」

「休戦協定です。第十王子カチヨウと第十一王子フウゲツはすでに休戦協定を結ばれておいでです。よつ

て、第十一王子フウゲツだけでなく第十王子カチヨウとも敵対しないことが休戦協定の条件になります」

「それは構わない。現在チヨウライこちらは第三ツベツバ・第五ハルケンブルグ・第九各王子と協定を結んでいるが……」

「できればその中に第十一王子フウゲツも加えていただけると助かります。無論、そちらの返事は今すぐでなくて構いません。こちらカチヨウも協定の中に第十王子が入ることができるとどうか調整してみます」

私はちらりとサカタの方を見る。クラピカが気付くように。

「それができるならばありがたい。……サカタ、王妃の警護の方に回ってくれるか？」

「いや、『ネン』に関する情報を交換するのであれば私も同席させてもらう」

サカタ、うざい。

「であれば、第三王子チヨウライの警備体制を直属兵・念能力者の数を含め詳細にこちらに情報提供願います。それであれば、同席されてもこちらは構いません」

彼はしばらく悩む。悩め悩め。

「……わかった、私は奥に行くこう」

サカタは奥の部屋へと向かった。

「君はサカタが何者か知っているな」

「私は、占い師です。未来のほんの一部を予見できます」

「知っている。『戦う占い師さん』を雇おうとしたマフィアの組は一つや二つじゃない、

「そうだろう?」

クラピカも知ってたか。想像以上に有名になってたんだな、私。

「あなた以外に他言無用という条件で、フウゲツ王子の念獣の能力をお話しする準備があります。この部屋は盗聴・念能力その他で情報が洩れる心配はありませんか?」

「それは心配ない、私の能力で調べてある。……しかし、いいのか?」

「構いません、おそらくそれは、あなた方にとっても重要な情報足りえますから。私は信頼を得られる……それだけでも、十分です。しいて条件を挙げるならば、第十二王子モモゼの死によって宙に浮いた協会員を何名か、出来るならばで構わないのでこちらの警護に回していただけると助かります。事情は合わせて説明します」

「わかった、現実とは言えないが伝えるよう努力しよう」

私はフウゲツ王子の念獣の見た目、そして移動能力をクラピカに説明した。分かっている範囲内での制約も。

「なるほど……確かにその能力は魅力的だ、王位を狙うわけでない我々にとっては千載一遇の好機ともいえる。それで、事情というのは……?」

「フウゲツ王子には私ともう一人を除いて、念能力者の警護がいません。信頼できる直属の二人にこちらでも念を教えるはいますが、現時点で戦闘力のある念能力者は二人と一匹だけです。それ以外はすべて、上位王妃の所属兵」

「一匹?」

あ、ゲレゲレの説明忘れてた。

「私のペットの虎で、念能力者です」

「たしかに、魔獣の存在を考えれば念を使える獣の存在も無いとは言えないな……」

「それに、王子ご自身の念獣に攻撃力防御力がないというのも大きな、ある意味では致命的な欠点です。なので、戦闘力のある念能力者の補強はこちらの急務ともいえます。出来るだけ信頼のおけるハンターを複数名、こちらに回していただけると助かります」

「了解した。複数人とはいかないかもしれないが、私の紹介という形で信頼できる人間をそちらの部屋に向かわせよう。情報の提供、感謝する」

多分これで、ハンゾー辺りを回してくれるかな? と思う、多分。ダメカナ?

本当はビスケだと一番うれしんだけどさすがにそれは無理だろう。

違っても念能力者なら万々歳だ。

マチさんがいるからクラピカ自身に来られると逆にこっちが困るけど、まずそれはないだろう。

クラピカの丁寧な礼を背に、私は1014号室を後にした。

急いで1011号室へと戻る。

部屋に入る、誰にも気づかれてないようだ、よかった。

1011号室全体に円を展開する。特に異常もなさそうだ。

……警護控室でグツタリしているリヨウジとバチャエムを除けば。

特に攻撃を受けた気配はない。

きつと練の修行でオーラをほとんど使い果たしたのだろう。よしよし。

練の修行がうまくいっているようであれば、明日あたり、水見式をやってみるかな。

はてさて、どんな能力になるのやら。

第五十七話

警護室で休んでいると、つかつかとマチさんが入ってきた。

えっ、王子の警護は？

疑問に思っている間に頬がジンジンした。殴られたらしい。

殴られたことにも気づかなかった。さすが。

ビスケに殴られた時のキルアの気持ちは今分かった。

「どこ行つてた？」

「え？」

「とぼけるんじゃないよ。あんたが部屋を出て行ったことはわかってる。単独行動禁止だつて言つてあるだろう。あたしは同じ1011号室に居ると思つたからあんたの別行動を許したんだ」

……でも、私は危険の位置を把握してるし……。

「それは関係ない。団長が単独行動禁止といえは禁止だ。あんたももう旅団の一員だろう。文句があるなら団長に直接言え。そうでないなら必ず従え」

ごもつともです。全部私が悪いです。

「……王子は？」

「ゲレゲレに『不審な動きしたらそいつ食つていい』って命じてある。言われなくともあたしもすぐに戻る。あんたも、せめて単独行動するならその理由をあたしに言え。あたしだって何の理由もなしにあんたを縛り付けたりはしない、正直なところ本当に必要ならアリだと思つてるからね、個人的には」

「はい……ごめんなさい」

「謝るのはあたしにじゃないし、今後の態度でそれを見せな。じゃあ、あたしは戻るよ」
叩かれた頬はまだジンジンする。これは私のせい。反省。

二時間ほど経つて、バチャエムとリヨウジはほぼ同時くらいに目を覚ました。

二人とも纏状態を保っている。素晴らしい。

少し早いかもしれないが、二人を応接室の方に呼び出し、水見式をしてもらうことにした。

台所からコップを三つ借りてきて、まず私が見せる。

葉っぱは部屋にある観葉植物の葉っぱ。これはガジュマルかな？

私の水見式の結果は以前と同じ通り、千切れて分裂しながら大量の切れ端になった。

「これは……？」

「見たとおり、水に向かつて練をすることによって己の大まかな系統を識別することができます。水の量が増減すれば強化系、葉が動けば操作系、水の味が変われば変化系、水に不純物が現れれば具現化系、水の色が変われば放出系、それ以外の変化が現れたら特質系になります。私の場合が特質系ですね。念の系統は基本的に生まれつき。ごく一部の例外を除いては系統が変わることはありません。詳しくはお二人が水見式をした後に説明します」

二人はそれぞれに水見式をする。

まだ練が少し甘いのか、練ったオーラが若干飛び散っているようにも見えた。

「……オレは具現化系だな」

リヨウジの水には藻のような濁りが見え始めた。

「オレは強化系だな、水が減った」

バチャエムのコップは水面ぎりぎりまで入れていた水が明らかに減っている。

「具現化系は、何らかの物質や生物などをオーラを使って具現化する能力、強化系はもともと己の持つ力を強化する、まあどちらもそのままの意味ですね。この系統をもとに発……必殺技と呼べる能力を作ることになります、それはまだ先の話。今はこの水見式を続けて、己の練を安定させつつ変化がより顕著になるように修行してください。これも、練の修行たりえます」

「わかった」

二人とも、素直だなあ。素晴らしい。

逆の立場だったらこんな小娘にここまで素直に教えを請えるだろうか。

素直なのはいいことだ、それだけ伸びも早くなる。

二人には水見式をひたすらさせて、私は王子の寝室へと向かう。

王子は居間でくつろいでいたようで、失礼しましたと慌てて頭を下げた。

「マチさん、そろそろ交代しましょうか？」

「いや、別にいいよ。あたしは言葉もへただし教えるのには向いてない。あんたがあいづらについてやって、あいづらが警護の順の時に休ませてもらうよ」

それだとマチさんの負担がかなり大きくなると思うんだけど……。

「ゲレゲレがいるから大丈夫さ。この子、意外と利口だよね」

トイレ交代もちゃんと二人別にそれぞれ行っているらしい。

ゲレゲレは、なんと洋式トイレで大も小も済ませることができると、賢い。

ちゃんと水も流すしフタもしめる。賢すぎて引く。

「があうあー！」

このドヤ顔である。

王子も落ち着いているようだし、こちらは問題ないだろう。

応接室へ戻って二人の様子を見る。集中している。素晴らしい。

私も初心に戻って修行しようかな。

この船に乗ってからは何もしてなかったし。

少し離れたところで、感謝の正拳突きを始めた。

従事者の人たちがこつち見てなんかヒソヒソ言い合ってる。キニシナイ。

二時間ほどして従事者たちが王子に昼食を持っていき、リョウジとバチャエムがぶつ倒れた。

私はその間に台所に行って自分と二人のための食事を準備する。

ハムとレタスとチーズをはさんだトーストサンドとアイステイ。

トマトは水分が出ちやうから食べる直前に入れよう。

数時間後に二人が起きて、遅れた昼食を一緒にとる。

「念というものは難しいが……やればやるほど力がついて来ることがわかる、これは楽しいな」

「筋トレよりもわかりやすく目に見えるからな、やりがいがある」

二人が楽しんで修行してくれているようで何よりだ。

でもやりすぎないようにと釘は刺す。

休息と休養と修行は三分の一ずつ。

状況的にそれが許されないってのはあるけど、休む時間は意識して入れていかないとね。

あ、オーラ使い果たしてぶっ倒れてる時間は休息に入れてますのでご了承ください。
「ところでエイラ殿、『発』についてだが……」

「ああ、そろそろそれについても考えてもいいかもしれませんね、まだ考えるだけですけど」

「それなんだが、オレの『発』について相談に乗ってはもらえないだろうか」

バチャエムはすでに、自分の『発』について考えるところがあるらしい。

「練をして水が減ったのを間近で見た時に思った。攻撃した時に相手のオーラを吸い取り、そのオーラを乗せて己を強化しさらに攻撃する、といったことは可能だろうか」

「結論から言えば可能ですね。吸い取るといった部分が難しくはあるでしょうが他の部分は強化系の範疇に入ります。能力の幅を広げるためにも、逆に己のオーラを相手に送り込むと言ったこともできるとなおよいかもしれません」

ピンときた発想つてのは何より大事なものね。

オーラを送り込んで他者を超回復つてのも出来ればかなりの戦力になる。

「すごいな、オレはまだまだ目の前の練の修行だけで精いっぱいだ」

「それぞれのペースがあるのでそれで構いませんよ、リョウジさん。焦って能力を作ろ

うとしてしまう方がかえって変な能力になってしまいかねないですから」

「そういうものなのか……」

第一層だけあって、私たちの分の食材ですら超一流品だなコレ。うまうま。

所属兵たちのシフトは基本的に毎日八時間労働。休みは無し。

八時間警備して、十六時間は自由時間だ。

毎週シフトを組み立て直し、休日は適宜間に入れていく。

一人だけが警護をする時間帯を作らないためにこれまではかなり変則的なシフトだったそうだ。

私たちが来たことよって王子直下の警護兵が一人だけであつても単独警護になることがなくなつたため、現在は上記の形におさまつたらしい。

なお、この部屋は警護兵の人数が少ないため、扉の前に警護兵は置いていない。

王子の命令がある場合を除き、王子の就寝時間中は寝室から出て居間にて警備を行う。

はーやくこいこい協会員……。

そうすれば、マチさんの負担を減らすことができる。

第五十八話

インターホンが鳴った。

現在応接室に居るのは私だけで一番近くに居たので、そのまま出る。

『クラピカからの紹介で来た、ハンター協会員ハンゾーだ』

ハンゾーキター！

喜んで迎え入れる。理想的な展開だ。

「初めまして、と言っても選挙の時間にお見かけしたことはありませんが。私は」

「『戦う占い師さん』だろ！ あとでサインくれよな？」

……神様、私はいつまでその二つ名にまとわり続けられなければいけないのでしょうか……。

「状況はおおまかにクラピカから聞いている。オレは何をすればいい？」

「まずは王子の警護。これは現在警備兵二名と私たち能力者が一名、計三名で行つていきます。この後者のシフトに入つていただきます」

「警護兵の数は？」

「第一王子の私設兵一名、第一以外の上級王妃それぞれの所属兵四名プラス第十一王子

直属の兵が二名。その二名は現在念能力の修行中で私が面倒を見ているため、私たちのシフトは同時刻に合わせていただきます。なので、ハンゾーさんにはそれ以外の兵士とともに警護にあたっていたりだということになります」

「了解した。他に何か情報交換しておいた方がいいことはあるか？」

「……忍術を、見てみたいでござる」

半分本気である。興味があることは否めない。それは認める。異論はない。

「何だアンタ、忍術に興味があるのか、そいつは有難いな。オレは忍術を世界に広めることも活動の一環としてしているからな。よし、喜んで開示するぜ」

彼は壁に向かって立つ。

「手裏剣の術！」
ハンゾースキル2

彼の両手から手裏剣が具現化し、壁に向かって飛んで行って突き刺さる。お見事。

「手裏剣ですか、じっくり見せていただいても？」

「ああ、構わない。手裏剣を知られてるってだけでもうれしいもんがあるな。あ、毒が塗ってあるから触るときは注意しろよ」

忍術って本来秘するものじゃなかったっけ……ハンゾーがそれでいいのならいいんだけど。

四方を向いた四つの刃が中央で繋がっており、真ん中に穴が開いている。

私たち日本人が想像する典型的な平型手裏剣。素材は鉄かな。まきびしとか苦無とかも具現化できるんだらうか。

尋ねたら嬉々として教えてくれそうだから聞かないでおこう。

バチャエムとリヨウジは控室で寝ている。

オーラを使い果たしたわけではなく、純粋な睡眠時間だ。

王子の警護をしながらまた修行になるだろうから、私も寝ておこうかな。

「ハンゾーさん、私は少し寝ますので、ご自由になさっててください。何かわからないことがあったら従事者か警護中の者に聞いてください。最悪叩き起こしてください」

「了解した、アンタとはうまくやれそうな気がするぜ」

私は別にそんな気はしないけどな？ 変だな？ まあいいや。

うまくやれるに越したことはない。

ニンゲンは嫌いだけどニンゲンが好き。寂しがりやの人嫌い、それが私。嫌いキライだけじゃ人生やってけないからね、いろいろやるけどさ。

数時間後、交代の時間に目覚める。

私もマチさんと交代した。

「ゲレゲレも向こうで休んでいいよ？」

「あ、そいつさつきまで爆睡してたから今元氣いっぱいだと思おうよ」

何……だと……。仕事しなさいよゲレゲレ。

あつ色々察したのか絶しやがったコイツ。

「……すごいな、纏からの絶への移行が見事だ」

「ああ、今ならその虎の凄さがよくわかる……」

ほら、二人も呆れてるじゃないの！ ちゃんとしなさい！

「がうん……」

王子は夕食のお時間なので、居間にいる。

私とゲレゲレのやり取りを見てケラケラと笑っていた。

そうそう。本来は箸が転げてもおかしいお年頃。笑顔の方が良く似合う。

守りたい、この笑顔。

その結果、三人並んで水見式することになった。

ものすごい絵面である。

ゲレゲレもやりたがったが、部屋がビショビショになるのでやめさせた。

非常にしよんぼりしていた。すねて部屋の隅でまるまってしまった。

「やはりエイラ殿の練は美しい……格が違うとはまさにこのこと」

「そんなに違うの？ 私もネンノーリヨク、覚えてみようかなあ……」

まさかの王子覚醒ルートがクルー!?

命の危険などもつてのほかなので、王子にはシンプルに瞑想から始めていただくことにした。

何かが自分を包み込んでいるような、そんな想像をしながら、目を閉じて静かに座り続ける。

出来るだけ考え事をせずに、温度や風、音、空気の変化、自分の鼓動、呼吸、そういったものだけを感じるように。

現状の王子には少し難しい課題かもしれないけど……これができるようになれば、少しは王子の心の安寧にもつながるだろう。念はともかく。

ステッキを持ったフウゲツ王子の念獣がふよふよと浮いて、持っていない方の手でぽふぽふと王子の頭をなでている。

あのモフモフ……欲しい……!!　せめて触りたい……!!

不穏な気配を感じ取った念獣はさっと王子の背中の中の向こう側に隠れてしまった。ちっ。

今日は金曜日。日曜には晩餐会。

そろそろカチョウ王子からグラスハープのお誘いがきてもおかしくないのだが、まだ来ない。

できればそのタイミングで第三・第五・第九・第十四王子との休戦協定の話をしておきたい。

第一層全体に音楽を流す予定なのは、きつとセンリツの念能力。

聞いた者を眠らせる能力でもあるんだらう、多分。おそらく操作系。

その間にルートを確保し逃げ出す。

ただ、その作戦だとすると第一王子の私設軍隊には効果がない可能性がある。無論

王子自身にも。

ということとは逆にカチヨウ・フウゲツ両王子が危険になる。

私たち警護兵は王の許可が無ければ晩餐会の会場への入場は認められない。

それは第一王子警護兵であっても同じ。

とはいえ、センリツとカチヨウ・フウゲツ両王子対ベンジャミン王子になれば、圧倒

的に後者が有利。

他者が眠っているのであれば殺害も容易。センリツに両王子殺害の罪を擦り付けて

屠る事すら可能。

ついでに言うなら第九王子御一行にも効かない可能性あり。ハルケンブルグ

あの羽のマークの刻印は、念獣に操作されている印のような気がする。早い者勝ち。

……なので、そこまでセンリツたちもアホじゃないと思うんだけどねえ。

私の想像だとこれが限界。センリツにもっと強い能力でもあるのかな。

それとも他に手段があるのかしら。トガ神どうするおつもりだったのかしら。

とはいえ着実にフウゲツ王子の能力の詳細が明らかになってきつつあるし、カチヨウ王子とのコミュニケーションは不可欠。

カードにも出てたしね。

なのでお早めに向こうからの連絡をお願いしたい。

双子であつても下位王子側から連絡は出来ないのだ。階級制メンドクセ。

カチヨウ王子と接触ができ次第、1014号室（クラピカ）に休戦協定の準備完了のお知らせもしなきゃならない。

こっちはこっちで、こちらから連絡を取らなければ向こうから連絡することはできないので先に進めようがない。

クラピカとは一応の信頼関係は得られたと思うんだけど。

うまくすればマラヤーム王子も含めて下位王子全員脱出なんて離れ業もやってのける、フウゲツ王子の能力があれば。

それをするためには、各王子の連携が必要。

下位王子の母親に上位王妃がないことも好材料。

王妃ごとまるめこんでみんなで仲良く脱出……したところで追っかけられそうな気

もするけど。船の中だけだと。

フウゲツ王子の能力、船の外につなげられないかなあ。

王子自身が念能力を覚えてオーラ増やせば可能になったりしないかな。

真剣に考えてみるか、王子の念能力獲得。命の危機にならない程度にね。

第五十九話

水見式をしながらの王子との雑談で、得た情報。

お宝を持つていそうな筆頭は、当然ながら国王。

ベンジャミン王子はそう言ったことには無頓着らしく、持つている可能性は極めて少ない。

カミーラ王子は宝石・衣類関係のレアモノを持ち込んでいる可能性がある。

チョウライ王子は自分が上に扱われることには執着を示すが、物に対しては執心しないらしい。

ツエリードニヒ王子は人体関係のレアモノに興味あり。

そっぴや緋の目持つてるのもこの王子だったよな。

ツベツパ王子以下の王子は購入できる以上の物に興味はなさそうだ。

お宝情報、以上。旅団が狙いそうなのはやはり国王のお宝だろう。

フウゲツ王子の上位王子に対する感情も少しだけわかった。

ベンジャミン：とても怖い

カミーラ：ちよつとだけ憧れるけど怖い

チヨウライ：よくわからないけどそんなに悪い人じゃなさそう

ツエリードニヒ：一番怖い、関わり合いたくない

ツベツパ：優秀だけど厳しい

タイソン：優しい

ルズールス：見かけより優しい

サレサレ：気持ち悪い

ハルケンブルグ：とても厳しくてとても優しい

カチヨウ：何より大事

モモゼ：亡くなつてしまつて悲しい

マラヤーム：守つてあげたい

ワブル：守つてあげたい

フウゲツ王子は夜更かしさんだ。というのも、例のトンネルの検証をしなければなら
ないから。

別に翌日でも構わないのだが、王子自身がすぐにでも調べたいのであろう。

日付が変わるまでにはまだ少し時間がある。

引き続き水見式しながら王子から情報を引き出すことにしようか。

ふと思ひ出して、私はトイレに行くと言つて席を離れた。

ゲレゲレに王子を守るよう入念に言い聞かせて。

一人で満員の個室で地図を取り出す。

団長さんの位置を調べてみた。第四層に居る。移動したのか。

ヒソカの位置を調べてみた。第三層の政治特区のあたりから動いていない。

イルミの位置を調べてみた。ヒソカと同じあたりに居る。

カルトの位置を調べてみた。上記二人と同じあたりに居る。

……何故に、政治特区の近く？

そういえば原作ではイルミとカルトは中央警察署の居住区に行っていた気がする。

ヒソカもそこに行った？ 原作では描かれていなかった。何故？

そもそもミザイストムがヒソカを見逃すか？

メイクがなかったとしても見逃すとは思えない。変装？

団長さんに『ヒソカは変わらずイルミ・カルトと共に第三層政治特区近くに居ます』とだけメールした。

不確定な情報は送らない方がいい。

今はまだ、私の想像でしかない。

居間に戻る。

バチャエムが力尽きていた。コップの水も空になっていた。

せつかなので水を足してきてあげよう。気が付いたらまたすぐに修行に戻れるように。

リヨウジは引き続き練に勤しんでいる。藻のようなものの濁りが少し増えたか。

王子はゲレゲレを撫でまわしていた。

「王子は虎が恐ろしくはないのですか？」

「最初は怖かったけど、おとなしくていい子だってよくわかりましたから、今は怖くないです」

ゲレゲレはフウゲツ王子にお耳をカシカシしてもらってご満悦だ。

おとなしくても普通は虎は怖いと思うけどな……その辺が王族の器なのだろうか、よくわかんないけど。

わたしもリヨウジの隣に座り水見式を再開する。

葉っぱがちぎれては増え、それを取り払ってちぎれては増え、繰り返す。

王子は興味深そうにそれを眺めていた。

「あつ、私も瞑想の修行をしなきゃですね！」

えいえいむん、と気合を入れて、王子も瞑想を始めた。

静かな部屋。

空調の音だけが響く。

ゲレゲレが大きくあくびをした。

それらを王子は感じ取っているのだろう。目は閉じているので、耳と皮膚で。やがてリヨウジがコップを倒してテーブルに突っ伏した。

藻がテーブルに散ったのでキレイに片づけておく。

派手な音がしたが王子は微動だにしない。意外と才能あるのかな、瞑想の。

リヨウジのコップにも水を満たして葉を一枚浮かべておく。

私はひたすら葉を小規模再生産しては除ける作業の繰り返しだ。

一枚がミジンコみたいなサイズになってしまったので、改めて葉っぱを取りに行く。そして十二時を過ぎた。

「王子、日付が変わりました」

フウゲツ王子はゆっくりと目を開く。深い瞑想状態に入っていたようだ。

私はマチさん呼びに行つて、合わせて魔法の抜け道の検証に入る。

「少しお休みになられてからの方が良くはありませんか?」

「いえ、すぐにでも大丈夫です。少しでも早く色々調べたいですから!」

「では、まずは船の外に、カキン王国の御自分の部屋にトンネルを繋ぐように念じてください」

王子は念じる。しかし扉は出てこない。

「え……何で」

おそらくそれは無理だから。カキンまでトンネルを伸ばすことができない。それは王子の限界値。

オーラ鍛えたら伸びるかもしれないけれど、少なくとも今しばらくは無理。

「それでは……今夜は、カチヨウ王子の部屋にお邪魔しましょう、ただしこれを持って私が手に取ったのはメモ帳と付属のボールペン。」

「カーちゃんや相手の護衛さんを驚かせないようにですね、了解です」

「今日は私に行きます。相手の護衛と鉢合わせした場合は最悪私を置いて逃げてください」

「そんな」

「了解した。その時はあたしが王子を引きずり戻す。ただしあんたも無事に帰ってきなよ」

「はい、その場合トンネルは繋いだままにしておいてもらえると助かります」
メモ帳に最初の文字を書く。

『フウゲツ王子の使いです』

そして王子にトンネルを繋いでもらう。今度はすんなりと扉が開かれた。

狭い道を通って、私は進む。

センリツと、一緒に居た人には間違いないとされる。それも込み。

マンホールのようなふたを開けて、外に出た。

カチヨウ王子のベッドにたどり着いた。幸い外からベッドの中は天蓋で見えない。

すぐにカチヨウ王子にメモ帳を見せる。

王子は黙ったままでいてくれた。

メモ帳に筆を走らせる。

『ここに居る現在の護衛は信頼できる者たちですか？』

カチヨウ王子は頷いた。

「王子！」

飛び込んできた女の人の声。

「大丈夫ですか、王子！」

同時に駆け込んできたと思われる男性の声。少し年がいつているか。

おそらく原作でセンリツと共にいた人。キーニとかいう名前だったか。

「大丈夫よ、心配しないで」

「しかし……」

私は口の前に人差し指を立てたまま、ベッドの天蓋を開いた。

「！」

そして再び戻り魔法の抜け道の出口に小声で声をかける。

「大丈夫です、どうぞ。ゲレゲレはトンネルの中に待機！」

改めて天蓋の外に出て、メモ帳に文字を書く。

「盗聴、監視カメラ、念能力その他による情報漏洩の可能性は？」

それには男が答えた。

「大丈夫だ。王子の寝室にカメラを設置するなどありえないし、その他についても慎重に調査してある」

その言葉で、ようやく私は一息ついた。

「私はフウゲツ王子の警護でエイラと申します。恐らくお二人はすでにご承知でしょうが、フウゲツ王子の能力でここへと来ました。私はフウゲツ王子の御意向で、カチヨウ王子も共にお助けしたいと考えています。そちらはいかがですか？」

今度はセンチリツが口を開いた。

「私たちも、そう考えていたところですよ。明日の朝、そちらに連絡をする予定でした。カチヨウ王子とフウゲツ王子と合同で、日曜の晩餐会にグラスハープの演奏会をしよう」と

「そこに、あなたのフルートが加わる……そして、第一層全体にそれは流される」

センリツが息をのむ。何故情報がばれていると思ったのか。

私がそれなりに著名な占い師であること、念で軽い予知能力を持っていることなどを説明する。

割とすんなり受け入れてもらえた。念って何でもありだものね。

「センリツさん、あなたのその能力はおそらく操作系ですね？ その音楽で第一層の人間を眠らせるかどうかして逃げだす……それには、ベンジャミン王子とハルケンブルグ王子が障害になると思われたのですが、いかがでしょうか？」

「……私の能力の一つ『子守唄』^{Sleep}は、全部で八時間の楽曲です。その能力は、強い念能力者であればあるほど効力を増す」

「……それは、お聞きしても？」

「普通の間が聴くと、おっしやる通り眠くなります。気付いた念能力者はおそらく耳に凝をしてその音を遮断しようとするでしょう。私の曲は、オーラを媒介にしてより浸透するように出来ている。その動作をした結果、より深い眠りへと誘われます」

なるほど……それならおそらくベンジャミン王子と私設軍隊は無効化できる。

「方法はお教えできませんが、防ぐ手段もある。両王子にはその方法で防いでいただくつもりでした……あの、カミーラ王子ならまだわかるのですが、何故ハルケンブルグ王子なのでしょう？」

「ハルケンブルグ王子はすでに念獣によって操作されている可能性があります。よって、あなたの能力が操作系であるならば早い者勝ち理論によってハルケンブルグ王子には通用しない。……あくまで、可能性ですが」

センリツの顔が青くなる。

通常の意識を保ったまま操作されている人物の想定まではしていなかったというところか。

「こちらの提案ですが、現在フウゲツ王子は第三・第五・第九・第十四各王子と休戦協定を結ぶよう進めている最中です。その中に、カチヨウ王子も加わってはいただけないかと。当然、フウゲツ王子にカチヨウ王子を害する意図はありません」

……返事は、ない。この場で決められるようなことではないかもしれないな。

「カチヨウ王子、あなたはすでにセンリツさんから念能力について知らされておられますね？」

「ええ、それが何か？」

「私たちはフウゲツ王子の念獣の能力でここまで来ました。王子にはそういった能力の心当たりはございませんか？ 何でも構いません、今までと違った何か……」

「残念だけど何もないわね。何も変わらないわ、嫌になるくらい」

少しは何か役に立つ能力があればいいのに、彼女の表情がそう物語っていた。

「フウゲツ王子の能力を使つて第三層までなら抜け出すことも可能です。私たち二人とあなた方二人で、両王子を守るならば第三層へ逃れるのも一つの手でしょう……私には、それは不可能だと思えますが」

二人は顔を見合わせて、確かにと頷き合っていた。

船の中では、王子たちの安全は担保できない。

外へ、しかも（仮）新大陸以外へ逃げないと意味はないのだ。

少なくとも、上位王妃の護衛の目からは逃れられる。ただしそれは一時的。

私の『愚者』のような能力を持っている人間がどこかに居れば一発アウトだ。

だとしたら、現状のままを維持していた方がいい。逃げ寄りの守り。

「もう一人の協会員と王妃の警護兵は信用ができませんか？ フウゲツ王子の警護兵二人は信用できるので、こちらで念を教えている最中です」

「協会員はこちら側だ。王妃の警護兵も大丈夫だろう」

「それではそちら側でも、王妃の警護兵に念能力の伝授をお願いします、少しずつでも構いません。無防備であるよりかははるかにましでしょうから」

それと、グラスハープの会はあくまでただの演奏会に。

全員を眠らせられないのであれば意味がない。

センリツも頷いてくれた。

「それでは、他の警護兵とも相談して、他王子との休戦協定の件をご検討ください。結果が出たら1001号室の私宛にご連絡いただけると助かります、こちらからは連絡ができませんので。あるいはグラスハープの打ち合わせの際でも構いません」

「了解しました。私たちも、他の手段がないか模索してみます」

「それでは、カチヨウ王子、深夜に失礼いたしました。私たちは戻ります……フウゲツ王子」

むん、と気合を入れて、フウゲツ王子は口を開いた。

「カーちゃん、一緒に逃げだそうね！」

意表を突かれたのか、カチヨウ王子はうつむいて顔を隠す。

「バカね、あんたたち……」

そして私たちはフウゲツ王子のお部屋へと戻る。

「ゲレゲレ、いいこだったね」

言われた通りトンネルで待機していたゲレゲレをひと撫でしてから、王子に休むように伝える。

今日は土曜日。明日は晩餐会。それまでに誰かまた王子の中に死者が出るのか、あるいはそのままか。

第六十話

フウゲツ王子の自室に戻って、王子はすぐにお休みになられた。バチャエムとリョウジの二人は引き続き水見式に勤しんでいる。

王子の意向と私たちの提案で、ゲレゲレのみを寝室に残し私たちも居間へと移動する。

ゲレゲレには命じてある。異常があれば何よりも王子をお守りしろと。彼は誉れ高そうにがううと返事した。

「じゃあ、あたしは休憩に戻るよ。1010号室から連絡が来た時はあんたにつなげばいいんだろ？」

「はい、よろしくお願いします」

マチさんは応接室の方へと出て行った。

私はどうしよう。水見式か、感謝の正拳突きか……とりま後者で。

正拳突きをしながらも円は欠かさない。

1011号室全体を円で覆う程度なら私でも出来る。

明け方に私はハンゾーと警護を交代し、リョウジとバチャエムも疲れ果てて控室の

ベッドに突っ伏した。

「電話、あつたよ。朝九時以降いつでもいいので直接部屋まで来いってさ。別に急ぐ連絡でもなかっただろうからあたしが伝言だけ受け取つといた」

1010号室からの連絡。気を使ってマチさんが受けていてくれたらしい。

「ありがとうございます。1010号室に行くときは一緒に行つてくださいますか？」
「当たり前だろ、単独行動禁止。今度単独行動したら縛り上げてしばき倒すから覚悟しとくんだね」

そう長い時間になるとも思えないので、リョウジとバチャエムの二人は置いていこう。

目が覚めればそれぞれにまた練の修練に戻つてくれるだろう。

「マチさん、朝ごはん食べました？ 私何か作つてきます」

「あー、適当でいいよ、そんなの」

適当でいいと言われたつてなにより私が食べたいのだ。

冷凍庫からパンを取り出してトースターにセットして、鍋に湯を沸かしてポーチドエッグにオーロラソースを作つて添える。

あつ、お野菜、刻みキャベツでいいか。トマトもつけよう。

だつてこここのゴハン美味しいんだもん。

食べれるときに食べておく。ハンターにとつて重要なことだぜ？

マチさんの分と自分の分を作つて応接室に持つていく。

ゲレゲレ？ 彼の分は従事者の方々が作つてくれるでしょう。

何故わかるかつて？ 冷凍してあつた牛スネ肉の塊がキッチンカウンターの片隅で

常温に解凍されていたからさ。

多分あれ、ゲレゲレの朝ごはん。

「あんた、結構食事にはこだわるよね」

「食べることに、大好きですから。以前は食べたくても食べられないこともありましたがね」

「……ああ、ね」

マチさんには拾つてもらつた恩がある。いつかはお返ししたいと思つている。

まだ叶わない。敵わない。

でもいつか。必ず。

「王子が起き次第1010号室に行きましよう。警護は私とマチさんの二人で。特に問題が起ころうとは思いますが、万一のことがあれば王子をお守りすることを最優先で」

「了解。本来の目的に戻れるのはいつになるやら」

「王子からお宝の情報も聞けたしいいじゃないですか」

フウゲツ王子は九時より前に目覚めた。

なので先に朝食をとっていただく。ゲレゲレも一緒だ。

「ゲレゲレ。王子のお食事が終わったらちよつと王子とマチさんと一緒にお出かけしてくるからね。ゲレゲレはお留守番。他の奴らが変な動きしないかどうか見張っておいて、いいね」

「うがう！」

焼かれただけのスネ肉をかじりながら、ゲレゲレは律儀に返事をする。

賢いねえ、いい子だねえ。

王子に打ち合わせのことを伝え、地図で危険がないことを確認し、私たちは部屋を出た。

広くてふかふかのじゆうたんが敷き詰められた第一層の廊下。

第五層とはまさに雲泥の差。同じ船とは思えない。

私たちは円をしながら王子を前後に挟み警護する。私が前、マチさんが後ろ。

そして角を曲がり、私は誰かにぶつかった。

「あつ、すみ……」

とつきに謝りそうになった後、すぐに臨戦態勢をとる。

私もマチさんも円を使用していた。にもかかわらず相手は私にぶつかつた。

「あつゴメン、ヒトがいるなんて思わなかつた……知つてたけど」

「イルミ……さん」

私がつつかつた相手はイルミだつた。何故ここに!?

さつき地図で確認した時は第三層に居たはず!

「何でアンタがここに^{ビジネス}いるんだい」

「んー、しいて言うなら仕事? 先に言つとくけど今回、オレは初回を除いて旅団とヒソ

カ、どちらにも肩入れしない。それが最初からの約束。初回だけは代金もらつちやつた

から仕事したけどね」

イルミは何を言っている? 旅団とヒソカ、まるで他人事。イルミは旅団に入つたは

ずなのに。

嫌な予感ほど当たる。私は昨日想像した。ヒソカはすでに旅団に紛れ込んでいる。

不確定だから団長さんには伝えなかつた。情報が今確定した。

第三層に居るイルミは偽物^{ヒソカ}!

私は本物のイルミの顔を見たことがない!

故にイルミを想像した時に『愚者』が発動した対象はヒソカ!

ヨークシンに居た時に見たイルミはヒソカの顔だった！

故に『愚者』はイルミをイルミと認識しなかった、できなかった！

「イルミさん、どちらにも肩入れしないということは、どちらにも敵対しない。そう解釈して構いませんか？」

「いいよ、それで。だいたい合ってる。オレの仕事の邪魔をしない限り敵対はしない」

私は携帯を取り出してイルミとカルトを除く全団員にメッセージを送る。

『ヒソカはイルミに化けて第三層に居る。本物のイルミは第一層に居る。第五層の時点ですでに入れ替わっていた』

「王子、マチさん、行きましょう。彼に危険はないと思います」

「うん、危なくなんかないよー。現状だとヒソカにだけ肩入れしたみたいで気分悪かったからさ。じゃね」

彼はこちらを見ることもなくスタスタと行ってしまった。

確かに彼の仕事ビジネスの対象は私たちではないらしい。

「……あの時から、すでに入れ替わってたってことか」

「はい。そして蜘蛛がばらけるのを待っていた。ただし団長さんが単独行動禁止を明言していた、それはヒソカにとって計算外。なので誰一人やられることなく見つけることも出来ずここまで来てしまったんでしよう」

フウゲツ王子がオタオタしている。

「申し訳ありません、王子。これは私たちの問題で王子には何ら関わりのないことです」
「常に私の警護だけをするのができないと言っていたのは、先ほどの方の関係ですか？」

「はい。それもあります。他にもありますが……今はまず、カチヨウ王子の元へ行きましょう。今の私たちの任務は王子を守ることです、それに変わりはありません」

王子はこくりと頷いて、私たちは1010号室を目指す。

隣の部屋なのでそう遠くはないはずだが、距離にすれば五百メートル以上は歩いただろう。角も二回曲がった。

1010号室のインターホンを鳴らす。

「フウゲツ王子警護、エイラです」

「今カギを開けます」

かちやりと音がする。センリツが扉を開いてくれた。

「お待ちしました、フウゲツ王子。こちらへどうぞ」

彼女の案内で応接室へと通される。作りはフウゲツ王子のお部屋と似ているか。

カチヨウ王子とフウゲツ王子、それにセンリツは晩餐会で何の曲を演奏するかを話し合っており、マチさんも警護としてそちらに加わっている。

私はキーニと協定の件について話をしていた。

「例の件、カチヨウ王子も加えてほしい。詳しくはここでは……」

「承知しました。話は進めておきます。他に何か伝えたいこと、希望することなどはありますか？」

「いや、情報共有さえしてもらえれば詳細はそちらに任せる。……ああ、今後は他の協会員と直接連絡を取ることもあるだろうから、話が済み次第一言連絡を入れてもらえると助かる」

「わかりました。それは電話で構いませんね？ 毎朝定時連絡を入れていただけると助かります、こちらから連絡することはできませんので」

「ああ、わかった」

王子たちは実際にグラスハープを準備してリハーサルをしているようだ。

カチヨウ王子も、口は悪いけど楽しそう。

王位継承戦には関わりたくないなんて思ってた時期もあったけど。

王子たちに出会ってそんな気持ちは消え失せた。

二人を、守りたい。私にとって個人的に、これはヒソカより優先すべきこと。

第六十一話

フウゲツ王子はカチヨウ王子としつかり話せたせいか、心なし嬉しそうだ。
グラスハーブの演奏会、私も聴いてみたいな。

でも第一層全体に流すのは中止になったので聴くことはできない。しゃーない。

私たちは1011号室へ戻り、王子は居間へと移動した。

居間ではハンゾーとゲレゲレ、それにロデノイルと第 スインコスインコ 五王妃所属兵アカシが警護

している。

あからさまに軍人っぽくいかつい外見のロデノイルに比べアカシは線が細い。

念能力者でもないようだ。

警護兵だからそれなりの実力はあるはずだけどね、一般人の世界においては。

応接室ではバチャエムとリヨウジが水見式をしていた。

よしよし、私の指示がなくても自発的に修行している、素晴らしい。

私は電話をかけた。相手は1014号室。

「こちら1014号室、協会員クラピカだ」

「1011号室、エイラです。本日カチヨウ王子警護と話し合い、ともにそちらの協定に

加えていただけはないかという方向でまとまりました。そちらはいかがでしようか？」

「我々はもちろん、他の王子も歓迎することだ。ただし明日の晩餐会で、第三・チヨウライ第五・ツベツ第九・ハルケンブルグ第十四各王子が休戦協定を結んだことを他の王子たちに公示する。それにお二人を加えても構わないということでもよろしいか」

「はい、構いません。ご尽力に感謝します」

「いや、それはいい。……それよりも、君自身に尋ねたいことがあるのだが、構わないだろうか」

「？ なんだろう。」

「君はクロロシルシルフルを知っているな」

いきなりそう来たかー!!

うすうすバレてるだろうなと思っではいたけれど、やっぱりうまくはいかないか。

ここは正直に全部話すしかない。

「はい、知っています。天空闘技場で対戦しました」

「それ以前から知り合いです。先に言っておくが私に嘘は通用しない」

知っています。変な疑いをもたれないためにも全力で正直に答えますよ。

「クロロシルシルフルは私の師匠です。ですが現在は別行動中。彼は第四層……下層にいるはずですよ」

まだ今日は位置確認してないからね、これは嘘じゃない。すでに移動はしているかもしれないけど。

「旅団がこの船に乗っているというのか」

「はい。全員集合しています。ただし目的はあなたではなくカキンのお宝のようですが」

クラピカ、多分今興奮状態。何だつたら緋の目にまでなつてるかもしれない。

あくまで私は冷静に。

「旅団はヒソカとも敵対しています。狩りたいなら今が好機といえは好機。ただしその場合は王子の警護を放り出すことになってしまいます。それは望まないでしょう……」

あなたも、私も」

「ああ、そうだな」

「もし目の前で師匠とあなたが戦っていたならば、私は師匠側につきまます。そうでなければ、王子の件については私たちが手を組むことは別枠で可能かと思えます。私もあなたも、互いに直接思う所があるわけではない。私は旅団についてあなた方にこれ以上の情報を漏らすことはしません。代わりに私の眼前でなければあなたの邪魔もしない。そういう形での休戦協定は、いかがでしょうか？ それぞれの王子を守りたいという点において、私たちの利害は一致しているはずですよ」

「……その通りだ。君がこれまで嘘をついていないことも承知している。そこから、君が本気でその提案をしているということがうかがえる。いいだろう。蜘蛛が眼前に現れない限り、我々の休戦協定は有効だ。王子の休戦協定とはまた別の話になるが」

「はい、承知しました。今後は蜘蛛についての内容は黙秘させていただきます」

会話を終えて電話を切る。だーっ、あせった！

バレてる目算は大きかったけど向こうから切り出してくるとは思わなかったな。

クラピカのことだから黙ったままこつちを監視してくるかと思ってた。

……黙秘したところで、シロかクロかあつさりばれそうな気がするけどな、まあいいや。

団長さんたちもこの程度の情報が漏れた程度でどうこう言う人たちじゃない。

そういううちまちましたもんを全部力でねじ伏せるのが蜘蛛だ。良くも悪くも。

……クラピカの能力、欲しいなあ。あの薬指の鎖だけでも。

敗北を認めさせるとか絶対無理だけど。

シューティングメジャーアルカナ
乱れ飛ぶ二十二の使徒のどれかに似たような能力を付与できないかな、考えてみよう。

あれが出来たら占い師としてもまた一歩階段を登れるよねー。

振り返ってリョウジとバチャエムを見る。

二人の練はいい感じに練れてきている。オーラが飛び散ることもなくなっていた。まだ戦力に数えるのは無理だけど、ものすごいスピードで伸びている。

「エイラ殿！ お願いがあるのですが！」

バチャエムが立ち上がって私の前にやってくる。

「ちよつと、私のパンチを受けてはもらえないでしょうか」

「なんだなんだ？ とりあえずオーケーを出す。」

手を開いて前に出す。バチャエムがそれに軽いパンチを放つ。

私の手のひらの表面を覆っていたオーラが全て絶へと変わり、バチャエムのごぶしのオーラ量が増している。

「おお。すごい」

「もう一度お願いします！」

手のひらを前に出す。パンチを受ける。

取られたオーラが私の手のひらに戻り、再び手を包む。

「どうでしょうか！」

「いや、びっくりした……素直に、めちやくちやすごいです。ここまでとは。私の想像よりはるかに速く、念能力を習得できたようですね。あとは修行で、やり取りできるオーラの量を増やすこと……練の修行が最も適しているかと思えます。それと、この能力に

名前を付けてあげてください。名前を付けることによって己の中で技を認識し、発動が容易くなったたり能力を底上げする効果が期待できます」

知らんけど。でもみんな名前つけてるよね。

みんなやつてるといふことは、なにかしらの理由があるということ、だと思ふ。

「念力強盗……いや、貸借念力……」

ブツブツいいながらバチャエムはテールに戻っていった。

何だこの才能。ハンター世界つてのはこんな才能がその辺にゴロゴロしてるのか？

リヨウジはちよつと悔しそうに横目でバチャエムを見ている。

焦らない焦らない。それが普通です。

でもリヨウジは具現化系だから、そろそろ具現化したいものの候補を考えさせておこなうかな。

それを伝えると、リヨウジも水見式とともに考えることに集中し始めたようだった。

居間をのぞいて見る。王子が滞在しているので、もちろんノックをして頭を下げながら、だ。

「があうー！」

何だこれ。ゲレゲレとウサギ念獣がイチャイチャしていた。

あおむけになったゲレゲレの胸のモフモフを堪能しきった念獣がうつとりとモフモ

フに背を預けともに空を仰いでいる。

知らん間に仲良くなつたのか。

これをずっと延々見てたのかハンゾーとロデノイル。ウケる。

王子は瞑想中だ。お邪魔をしないように引つ込んだ。

特にすることもないので従事者の方々のお手伝いをする。

特に料理をメインにお手伝いしながら色々教えてもらう。楽しい。

今のところ従事者に念能力者はいない。

1014号室に行っている従事者もまだ目覚めていないようだ。

皆バタバタと王子たちのお昼ご飯の準備をしている。

私は自分とマチさんとゲレゲレの分を請け負った。

鶏をオーブンで丸焼きにしながら、横目で従事者さんたちの様子を確認する。

王子専用の冷蔵庫と食品庫は、開けるために従事者二名以上のカギが必要なようだが、なるほど。

王子一名分の食事を作るのに最低二名がつきつきりになり、残りの者で警護や従事者たちの食事を作る。

食事の用意の際は今日が休みの人間を除いて従事者全員が厨房に集まっているようだ。

それだけの広さがあるので特に問題はない。

複数人が集うのは監視の意味も込めてだろう。毒を盛られないように、不審に思われ
ないように。

基本的に常時、身内だけでない複数人で行動する。

ゲレゲレはともかく私やマチさんも今後気を付けるべきだろうな。

オーブンで焼いている間に、私は鍋で冷凍のゴハン（炊いたもの）をぐつぐつ煮込む。
ルームサービスで食べた中華粥が美味しかったので再現を試みるのだ。

鶏骨の出汁も冷凍されていたので、鍋にそれも放り込む。

キャベツにニンジン、タマネギにワカメ、あと何が入ってたかな……。

あつ、確かキノコ入ってた！ シイタケみたいなものがあるからこれ刻んで入れよう！
全部細かく刻んでまとめて軽く炒めて、それからおかゆに放り込む。

食べたときにしようがの風味がしたので、仕上げにおろししようがと塩をちよつぴり
加えて、完成！

我ながらうまくできたし、マチさんにも好評だったのでまた作ろう。

鶏の丸焼きもゲレゲレは喜んで食べてくれた、嬉しい。

お料理、楽しい。

美味しいものを食べて自己肯定感アップしつつ、現実逃避にもびつたり。

第六十二話

昼食を終えて、それぞれの仕事に戻る。

従事者の皆さんはゆったりと掃除や後片付け。

ロデノイルとアカシ、ハンゾーとゲレゲレは引き続き王子の警護。

マチさんは控室で王子オススめの漫画を読んでいる。

後の三人の各王妃警護兵も控室に居るようだ。

リヨウジとバチャエム、それに私は応接室で修業の続き。

最近タロットを触ってなかったので、意識的にタロットをシャッフルすることにした。

これ、本当に具現化系の修行になってるのかなあ？

「エイラ殿、それは？」

「占い師である私の商売道具です。私の能力でもありません」

具現化系であるリヨウジの参考になるかと思つたので、私は乱れ飛ぶ^{シューティング}22の使徒^{メジャーアルカナ}を具現化して見せた。

「具現化系の修行には、具現化したいものを扱うことも含まれます。なので、私はこう

やってタロットカードを扱うことを修行の一環として行っています」

出したカードを消して、本物のカードの方に向き直る。

「ということとは、エイラ殿は具現化系なのか？」

「いえ、私は水見式の通り特質系です。ただ、隣り合って相性の良い具現化系の能力をひとつ、己の念能力としました」

ちようどいい機会なので二人に六性図の説明もしておく。

「ふむ、自分が強化系であつても絶対に強化系の能力にしなければならぬわけではないということか」

「はい、ですがもつとも能力を引き出せるのは強化系であることに変わりはないので、よほどの場合を除き他の能力をメインにしようとは思わない方がいいと思います」

私がタロットを具現化したのはあくまで特質系である舞ダンシング踊る22メジャーアルカナの使徒の補助としての能力だもんな。

最近は色々能力付与出来たおかげで乱れ飛ぶ22シユーテイニングの使徒の方が使い勝手がいいけど。

特質系つてすごいと思われがちだけど、相当内容を考えて絞らないと他の系統に比べて強力な能力を作ることが難しい系統だと思う。

ま、私の場合は最初から持ってたからどうしようもないんだけどさ。

メモリは多分いっぱいいっぱい。後はどれだけ能力を奪取あるいは付与できるかが

勝負だ。

修行もだけど、現状で出来るのは乱れ飛ぶ^{シューティング}22の使徒の能力付与、これを考えていた方がいいかもしれない。

全部終わったらバチャエムの能力も欲しいな。でも強化系だから私が奪ったらヘタレ能力になっちゃいそうだな。

それにリョウジとバチャエムは私の弟子みたいなもんだ。

弟子の能力奪うのイクナイ。団長さんですら、そんなことしなかった。

ふと思い立って、私はヒソカを占ってみることにした。

当人がカードを引かなければ的中率は落ちる。けれども占えないことはない。

そういうオンラインで受けている依頼ものぞいてみなきやなあ、見たくないなあ、溜まってそう。

ヒソカを占った結果は『魔術師』の逆位置。魔術師ではなく奇術師だという解釈もある。

ヒソカにピッタリのカードだね。

私もしヒソカの念能力を奪うことができたなら、きっとこのカードになるだろう。

不適當、不安定。ヒソカは何か悩んでいるのかもしれない。

狙うタイミングを逃すという意味もある。まさにその通りの現状だろう。

準戒嚴令によつて位置的な拘束もされている。抜けると無駄に敵が増える。カルトちゃんはいルミがヒソカだと知ってるのかなあ？ 知ってるよねえ？ だとしたら蜘蛛は一枚岩ではない。今度は蜘蛛を占つてみよう。

『悪魔』の正位置。意味するところは邪な欲望。

暴力、破壊、墮落、逆境。あまり良いカードではない。

とはいえ多分、これは旅団同士の衝突を意味していると思われる。

カルトちゃんの裏切り。というかそもそも彼は蜘蛛に思い入れがない。

裏切りというほどのことでもないだろう。

欲望を意味するこのカードが示すのはお宝の奪取。それに伴う暴力と破壊。

私のカードが示すのは一か月以内の運命。

一か月以内に旅団同士が衝突し、旅団はお宝を奪うだろう。

つまりそれは、二か月以内と予測される新大陸（仮）への到着よりも手前。

お宝って何だろね？ 国王以外のお宝は正直蜘蛛が狙うほどの物とも思えない。

国王が持ち込んだお宝とは何なのだろうか。

個人的には、思い当たる節が一つある。大外ししてる可能性も高いけど。

国王は死んだ王子の棺を用意していた。

カキンの礎となり今も生きている。

すべて繋がれた棺。全部を埋める必要はない。

繋がった棺は中央へ集められる。

命と快樂の等価交換。

厄災と呼ばれるが決して災厄だけではない。

快樂とは、ただの意識の中だけの快樂だけではない。

死んだ王子を貢ぐことによって等価交換の利を得ることが出来る。

それこそが、カキンの根本であり王位継承戦の本当の意味！

……全部私の妄想だからね？

ただ、それなりの何かがあそこにはあると思う、勘だけど。

タロットカードをワシヤワシヤとシャツフルしながら色々考える。

まだ知っていることが少ない。

晩餐会に参加できればもう少し情報も集められるんだろうけれど、さすがにそれは無理。

有名占い師さんとして参加できないかしら。出来たとしても国王には近づけないな。

誰か王子が死なないかな。そうすれば国王の位置からあの棺の空間の位置が割り出せる。

国王の顔は前夜祭の時に確認したから『愚者』で位置を把握できる。

国王と王子全員（第十四王子を除く）、顔は認識している。今のところ何の役にも立っていないけれど。

モモゼ王子とカミーラ王子以外それぞれ各部屋から出ていないから、特に確認するまでもない。

上層の部屋割りは警備上の理由か地図には記載されていないから、各王子の位置とともに後から記入した。

1001号室から1015号室まで。1015号室は予備の空室。

国王の部屋は1000号室、というかワンフロア。多分このフロアのどこかにあの部屋がある。

第一層の一番上が国王の部屋。その下に各王子の部屋が二フロアに分けて配置されている。

その下に晩餐会の会場を含む様々な設備。その下にV5要人たちの部屋が三フロア分（たぶん）

これがおおよそその第一層の構成。デッキとか他にもあるけど。

晩餐会には第二層からも出席が可能、ただし前もって国王が許可を出したりリストに載っている者のみ。

故に第一層と第二層の間の警備は割と緩め。

残った金積みめば準戒厳令下でも第二層に行き来することはできるだろう、意味はないからやらないけど。

考えても仕方ないな。

私はカードを順番に並べて箱に仕舞った。

スマホを開いて依頼を確認する。

一億の案件が一件と二十万の案件が四百件ほど。うんざりする。

とりあえず一億の方だけでも片付けておくか。

詳細を開く。依頼人はパリストンⅡヒル。テメーかよ。

多分あの人もこの船に乗ってるだろうから、直接占えないかな。多分第一層だろうし。

記載されている連絡先に電話をかける。

わざわざ非通知にはしない。どうせ私の番号知ってるだろうし、教えてないけど。

「お待ちしていましたよ、戦う占い師さん！」

ホラネ。

「依頼拜見しました。こちらは現在^{ブラックホエール}B・W一号の第一層に居るんですが、直接とオン

ライン、どちらの占いをご希望ですか？」

「ええ！ 第一層だなんて、占い師さんは超VIPなんですわね！ ボクは第二層なので

直接は占えませんね、オンラインでお願いします」

おや意外。第一層じゃなかったのか。地図を開いて『愚者』を発動する。確かに第二層に居る。

「今すぐでも大丈夫ですか？ それとも改めて日付を決め直した方が？」

「今はちよつと取り込んでまして、あさつてなら一日中あけられます、それでいかがでしょう？」

「わかりました、あさつてまた電話しますので、よろしくお願いします」

電話を切る。地図を開いたついでにジンとピヨンドの位置も確認する。

ジンは第二層、ピヨンドは第三層政治特区に居る。んー、ピヨンドはまだ繋がれてるのかな。

王子付きでない準協会の数は想像以上に多い。それが今のところ第一層と第二層にほとんど配置されている。

ミザイストム、はやいとこ下に送り付けてくれないかなー。

人が多いとなんか予想外の事態が起こりそうで嫌よね。敵か味方かわからない。多分敵と認識して動いた方がいいんだろう。

交代。第二王妃所属兵カラムと第三王妃所属兵ミレンクが居間に入っていく、口

デノイルとアカシが入れ替わりに出てくる。

「お疲れ様です、何か飲まれますか？」

「いや……そうだな、水をもらえるか」

「自分も水をいただけますでしょうか」

水差しに水を汲んで二つのグラスとともに二人の元へ持っていく。本来なら従事者の仕事だけどここのくらいはいいだろう。

「あの虎は何者なのか聞いてもいいか？ ただの虎じゃないだろう」

「いえいえ、ただの虎ですよ。私がカキンで修業している時に出会った、ただの虎」

角は一度も出していない。キャンプタイガーだとぼれているかどうかはわからない。念能力者だということはロデノイルにはばれている。

それ以外はばれていようがいまいがどうでもいい。

ゲレゲレはゲレゲレ。それ以上でも以下でもない。

……最近甘やかしてないな。次に一緒になった時は甘やかしてあげよう。

「アカシさんは第^{スイニコスイコ}五王妃所属兵でしたよね。サレサレ王子ってどんな方なんですか？」

警戒は……されてるな、若干。

ロデノイルの方は警戒をしたうえで雑談をするだけの余裕がある。

「まあ……女好きですね。王子とはいえノリのいい普通の若者ですよ」

おべんちやらは下手くそ。馬鹿正直に真面目なタイプなのかな、アカシは。

「あらやだ、じゃあ私なんかもしかしたら王子のお手付きになれるかも？」

「あつそれは無理ですね。巨乳好きなので」

おっぱいか。全てはおっぱいが物を言うのんか。チクシヨー！

第六十三話

ロデノイルとアカシの交代から数時間遅れて、ハンゾーとマチさんが交代する。

念能力者の人数が少ないので、どうしてもこちらは変則的なシフトになってしまうのだ、仕方ない。

私はリヨウジとバチャエムのシフトの時に警護も担当しているので、実質稼働時間はあとの二人の方が長い。

来てくれたお礼におやつのおにぎりをハンゾーに持って行ってあげる。

具はウメボシとゴマ入りシヨウユオカカ、刻み佃煮昆布を添えて。

職業病だと言つて食べてはもらえなかつたが、想像以上に喜んではもらえた。

つかお前もジャポン出身なのかと尋ねられた。一応違うと答えておいた。

でも興味津々で色々調べたとは伝えた。さらに色々教えてもらった。

郷土料理は日本と大差なし。

「ジャポンもああ見えて広いからな、オレも全部知ってるわけじゃねーけどよ」

とか言いながら、ホウトウだのアナゴメシだのガメニだの、そこはかとなく聞き覚えのある名称がずらつと出てきたぞ。

どんな食べ物なのかまでは知らないけど。今度ハンゾーに作ってもらおう。ていうかこの食品庫すごいよね。梅干しまで完備してるなんて。

—小国のマイナーなお漬物でしょ？

「いや、少し前からジャポンの料理が世界各国で流行し、かなり定着してきた感があるからな。その辺のスーパードでも品そろえのいいところには置いてあるぞ」

なん……だと……。

帰ったら色々とスーパー巡りしてみよう。

あつちなみにリヨウジはお父上がジャポンの出身なので、小さい頃はよく食卓に出てきていたそうだ、ウメボシナツトウオミソシルとか。

この部屋は窓がないので時間がわかりにくいけど、現在夕方。

もう数時間したらバチャエムとリヨウジの交代の時間が来る。

毎日うまく日付変更の時間帯に合わせてシフト組んだのだ。組んだの私。シフト係私。

二人は着実に力をつけてきている。

リヨウジの藻モツサーは見た目美しくないけど。

ちよつと前に、リヨウジには「生物を具現化することは可能なのか」と尋ねられた。

それこそがまさに『ネンジュウ』であると答えておいた。

ただし念獣は具現化系と操作系の複合能力。

よく考えて能力にしないと役立たずトンデモ能力が完成しかねない。

完全自律型フルオートタイプだったら操作系能力はそこまで使わないけど、その代わりこちらの意図通りには動かない可能性がある。

リヨウジの系統とオーラ量から考えたら、完全操作型マニユアルタイプは多分割に合わない。

なので、簡単な命令のみ受け付ける半自動タイプがオススメだろう。まだ言わないけど。

リヨウジは能力含めじっくりこつてり育てていきたい。ウイングさんの気持ちも今ならわかる。

修行の速度はバチャエムの方が圧倒的に早かった。

強化系は練がそのまま強化系の修行になるっていうのもあるんだろうけど。

でも底が深いのは多分リヨウジの方だ。下手な能力にはさせたくない。

警護に入る前に、改めて地図を開き各者の現在地を確認する。

一番人数が多いのは第三層政治特区。十二支んの大半がここに居る。

ビヨンドも最初は第一層に居たはずだが、準戒厳令による下層の監視に合わせて第三層に移動させたのだろう。

ビヨンド一人の監視に十二支んを数名使うよりも、より流動的に出来るように。

少なくとも十二支ん同士の移動交代は容易くなる。

ヒソカとカルトちゃんも政治特区のそばに居たまま動いていない。

準戒厳令の様子見をしていると言ったところか。

各王子は自室から動いていない。

1014号室にクラピカがいることから第十四王子もそこに居ると考えられる。

旅団の方は……実行部隊が第四層、団長さんたちは第三層まで昇っている。

ヒソカと団長さんたちの衝突は時間の問題か。

イルミ（本物の方）は第一層をウロウロしている。彼の仕事とは一体何だろう？

おそらくは国王かいずれかの王子の暗殺。後者の可能性は非常に高い。

だとすれば依頼主は誰だ？

第一王子ではありえない。彼は自分の軍隊に絶対の信頼を置いている。

第三王子以下はそこまで事前に考えていただろうか？

可能性が最も高いのは第二王子（とその周辺）。

完全迎撃型の第二王子は攻撃に弱い。

第二王子自身は己の能力に自信を持っているが、その弱点に気付いた周辺の人物があ

るいは。

……意外とあの第二王妃が食わせ物かもしれないな。

だとしたらターゲットは第一王子^{ペンジャミン}。

いくらイルミでも一人では手こずる相手だろう。タイミングを見計らっているのかもしれない。

彼は旅団とヒソカの対立を知っている。双方がこの船に乗っていることも。

激突するタイミングで船は動く、物理的にも人流的にも。

そこで人手の薄くなった第一王子^{ペンジャミン}を暗殺にかかる……。

うーん、どう考えても妄想の域を出ないな。

もうちよつと頭良かったらなあ。どうも昔からおつむの出来はよろしくない。

わからないことはカードに聞こうかと思っただが、交代の時間が先にやってきた。

「リョウジさん、バチャエムさん、行きましよう。睡眠は足りてますか？」

「ああ、バツチリだ」

「体調も共に申し分ない」

二人とも纏はほぼ身につけられているようだ。オーラが崩れることもない。

無意識での纏はまだもう少し時間がかかるかな。それでも想像以上に習得が早い。

私は居間への扉を開いた。

念獣がだらしなくマタを開いて寝転がっている。ゲレゲレも以下同文。

攻撃力も防御力もないんだから、もうちよつと警戒しなさいよ、私たちが来た時みた

いに。

私が怒っているのに気付いたのか、念獣はぴやつと起き上がってゲレゲレの陰に隠れてしまった。

うっ、モフモフに嫌われるのは辛い。

「お二人は引き続き水見式を続けてください。王子は、瞑想の方はいかがですか？」

「とても穏やかな気分になれます。まだ、ネンノーリヨク？　つていうのはよくわかりませんが」

「はい、それで大丈夫です。次はオーラについてお教えします」

警備二人が水見式をする横で、私はマンツーマンで王子にオーラについてや精孔の存在、六性図などを叩き込む。

手のひらを合わせて、近づける。その中間に存在するオーラを感じ取る。

「……このへん？　ですかね？　なんか温かいようなものを少し感じます」

両手を一センチ程度の距離まで近づけてようやくオーラの存在を感じ取る。

それでも最初にしては充分だ。

「手のひらで感じられたなら次は指先でやってみましょう。人差し指同士を先ほどと同じように近づけて、同じような温もりを感じるまで近づけて……」

今度は五ミリほど。それを交互に何度か繰り返す。

ツエリードニヒ王子ほどの才はないにしても、血のつながった一族。才能はあるかもしれない、ないかもしれない。

あつたらもうけもの。無くても構わない。私たちがお守りすればいい。

「それでは王子、しばらくはこの作業を続けください」

私は（円は怠らず）ゲレゲレの方に向かう。

「ゲレゲレ、おりこうさんだねー！　ずっと王子を守ってくれているね。いいこちゃんだねー」

そう言いながらゲレゲレの頭を撫でた。

気のせいか、ゲレゲレが引いている。おかしいな、褒めたはずなのに。

「それと、その念獣さん。念獣だとアレだから名前つけてもいいかな？　キュウベえって名前でもいい？」

全力で首を横に振られた。まあそうだよね、私もそんな名前は嫌だ。

「じゃあ、ロップ。私の国にはね、ロップイヤーラビットっていうあなたによく似た生き物があるの。ロップっていう名前はどうか？」

今度はかすかに頷いてくれた。決まり。

「ロップは、私たちの言葉がわかるのよね？」

ゲレゲレの陰に隠れながらだが、私の言葉にいちいち反応して頷いてくれる。

少し警戒を解いておきたいな。

「王子の魔法の抜け道はあなたが出しているの？」

今度も、しっかりと頷く。やはりこの念獣の能力なのか。

「じゃあ、ロップもあのトンネルを通ることはできるの？」

今度はふるふると首を横に振った。

トンネルを出すことはできるけど、自身がそれを通ることはできない。これは重要な情報だ。

もしかしたら各王子の念獣は第一層から移動できないという制約があるのかもしれない。

だとすれば他の上位王子を下層に引きずり込んで戦うといった戦略もありだ。出来るだけ戦いたくはないけど。

「ロップには、他にも能力はある？ トンネルを出す以外の」

こくこくと頷いて、手に持ったステッキをくるりと一回転させた。小さな虹が出た。

「……きれいだね、すごいね」

ロップ、どや顔。内心使えねーと思ったことは内緒にしておこう。

これにも王子のオーラ使ったりするんだろうか。使うんだろうな。

「ロップとゲレゲレは仲良しになったの？」

二匹が顔を見合わせて、返事をする。

「があう！」

これは想像以上に深い仲になっているとみて間違いない。間に挟まれない。

私の殺気を感じたロップがまたゲレゲレの陰に隠れてしまった。

ごめんって、妄想だけにとどめておくから顔出してよ。

しばらくとりとめもない話をしているうちに、ロップの警戒も薄れてきたようだ。

そうそう、少なくとも私は危害を加えたりはしないからね。

指先を差し出すと、フンフンと匂いを嗅いでいる。

反対の手はゲレゲレのオデコをガツシガシしている最中だ。

きみ、オデコ好きだね。角を収納してるからムズムズするのかな？

それとも猫みたいにフェロモンを出す臭腺があるんだろうか、知らんけど。

ロップは言葉を話せない。でもゲレゲレと同じでボデイランゲージは豊富だ。

基本ビビリ。大きな音がしたりすると王子以上に飛び上がって頭を抱え込む。

そして残念ながら、やっぱり攻撃力防御力ともにゼロに等しい。

まあ、王子が危機的状況に陥ったら発動する能力とかあるかもだけど、期待はしない

方がいい。

基本的に王子の性質を受け継いで生まれる念獣、フウゲツ王子の性質をそのまま受け

継いでいるのだろう。

ということとは意外と土壇場に強いかもしれない。私は王子をそう見ている。弱く、臆病。けれど大事なもののためには力を発揮できる人。

振り返って王子を見る。一生懸命にオーラを感じようとしている。生きるために、カチヨウ王子と共に生き抜くために。

第六十四話

突然、船が大きく揺れた。

「王子ー」

私は王子を抱きかかえ支えて掴まれる場所を探し、倒れてくる家具を避ける。

リヨウジとバチャエムはそれぞれに何とかしてくれ。

ロツプは最初から浮いているので問題なし。

ゲレゲレは猫らしく華麗に壁を蹴って着地した。

「王子、お怪我はありませんか？」

「はい、大丈夫です、ありがとうございます」

揺れは一度で済んだ。

どこかで何らかの衝突が始まったのかもしれない。

第一層の念能力者同士か、第三層の団長さん対ヒソカか。

あるいはそれ以外の可能性も無きにしも非ず。

抗争なんてセンもある。

この船問題抱え込みすぎだろう。

リヨウジもバチャエムも怪我はなさそうだ。よかった。

王子の警護をゲレグレに任せて応接室の方を覗く。

従事者たちは部屋の片づけに大忙しだ。

数名に居間と寝室の王子周辺を片付けるよう依頼して居間へ戻る。

「何だったんでしよう、さっきの……」

「さあ、大したことが起こらなければよいのですが。念の為大きな揺れには警戒しておいてください。おそばに居る間は無論私がお助けしますけれど」

従事者が四名ほど居間へと入ってきて、うち二名は寝室の片付けに入った。

居間も家具類がしっちゃんかめっちゃんかだ。

私たち警護も大物の移動を手伝い、従事者の二人には細かい掃除をお願いする。

厨房は偉いことになってるだろうな。

ゲレグレは少し興奮状態で周囲を警戒している。

「ゲレグレ、待て。大丈夫だから」

何が大丈夫なんだろう。発信源は突き止められていない。

私は自分にも言い聞かせる。大丈夫、問題ない。

少なくとも1011号室を、フウゲツ王子をターゲットにした攻撃でないことは確かだ。

ひとまずは王子の身の安全さえ確保できれば、私としてはそれでいいのだ。

「リョウジさんとバチャエムさんも、水見式に戻ってください。この状態で集中するのは難しいかもしれませんが、それ自体も良い修練になると思います」

「ああ、わかった。申し訳ないが王子はお任せする」

「はい」

フンスフンスと鼻息荒いゲレゲレを抑えながら。

可能性を考える。

第一層での襲撃であればもつと大きな揺れや衝撃があるだろう。

おそらく第一層ではない。

第二層。パリストーンがいること以外情報はない。ので置いておいて。

第三層、ここが一番可能性が高い。

エイライ一家のゴタゴタあるいはヒソカと団長さんの衝突。

後者ならば一度で揺れがおさまったのはおかしい。

船ごとひっくり返ってもおかしくない高レベルの能力者の争い。

しかも周囲に気を使わないタイプ同士だ。一度で済むわけがない。

一番ありえそうなのは組同士の抗争か。

でも抗争でここまでの揺れが起きるかな？

船が沈むだけで世界は変わらない。誰も船を沈めようとは思わない。さすがの旅団やヒソカでもそこまでは考えない。

何らかの確実に助かる手段を確保していない限りは。

念のために地図で確認する。ヒソカと旅団は衝突していない。

フランクリンさん・コルトピさん・シャルナークさんは第五層から動いていない。

あとのメンバーはマチさんを除いて第三層。時間の問題。導火線は短い。

そもそもそれぞれの組に能力者はどのくらいいるんだらう。

エイ||イ一家の組長以下二十四名は、全員念能力者と考えていた方がいい。

原作に出ていないだけで末端の構成員が他にもいるかもしれない。

あとの二つの組も、組長と若頭はたぶん念能力者だと思っただけ。

それ以外は読めない。全員ってことはないと思うが。

準戒厳令になってだいぶ経つ。

そろそろ人材が第三層以下に送り込まれる頃だろう。

抗争の火種はそれによって消えるのか、それとも別のところで燃え上がるのか。

私がフウゲツ王子をここに連れてきてしまったことによる変化は？

最近、考えることが多すぎるな。仕方がないけれど。

団長さんくらい頭が良ければよかったな。そしたらもつと蜘蛛の役にも立てるのに。

情報班の私は各員にメールを配信する。

ヒソカは第三層政治特区周辺から動いていない。

周辺は十二支ん含め警備が厳重である予測がたてられる、注意されたし。

……注意なんかしない。行きたいところに行く。それが蜘蛛。

それだけの能力をもった盗賊チカラの集団。私を除いて。

とはいえ不必要なトラブルは団長さんたちも避けたいだろう。なので、念の為。

「あの……」

しまった、フウゲツ王子を忘れていた。

「王子もこの状況下で、瞑想の練習をしましょう。心を落ち着けることもできますし、動

じない訓練にもなります」

「はー……」

むん、と気合を入れ直して、王子は元通りの位置に戻されたソファに座る。

この王子、意外と肝が太い。太くならざるをえなかったのかもしれないが。

王の器。そんなものが存在するとも思えなかったが。遺伝なのか、環境なのか。

少なくとも私にはフウゲツ王子は王としての器を備えているように感じる。

「……」

問題は、その周りをオロオロパタパタと飛び回っているロップである。

王にふさわしい念獣なんだろうか。この子が？

私が見ていることに気付いてこちらを見て首をかしげる。かわいい。

かわいいは正義だ、何も問題ない。

バタバタと片付けて回る従事者さんにはお任せして、私も修行に入ろう。

水見式、そしてタロットの具現化。乱れ飛ぶシユテイソングメジャーアルカナ二十二の使徒の能力付与。

一枚ずつタロットを見つめる。『愚者』……旅人。

太陽を背に崖を行く荷物を持った旅人。犬の姿も見える。犬。犬を具現化？

どうせ具現化するなら『戦車』を具現化したい。

『戦車』……二匹のスフィンクスが牽く馬車のような乗り物と、その手綱を引く青年。

……ないな。スフィンクスだけならともかく人間まで具現化して操作する能力は私にはない。

これを具現化したら私の他の能力全部吹っ飛んでしまうレベルだ。

『愚者』に戻ろう。注意を促す犬の存在。そのまま進むと崖から落ちてしまうよという。

感知系の能力としてなら……いけるか？ 何を感知する？

乱れ飛ぶシユテイソングメジャーアルカナ二十二の使徒は常時展開するタイプの能力ではないため、長時間の探知には

向いていない。

一瞬で何かを感じ取り注意を促す、何かとは何か？ 隠されたナニカ。

隠で隠されたオーラの感知。瞬間的に、その時だけ、隠されたオーラを強い凝無しでも見ることが出来る。

……こんなところかな。隠されてなければ何の意味もない。

凝をしていればある程度の隠は見破れるけれど、相手のレベルが高かったり他に集中したい時には使えるかもしれない。

マチさんに協力してもらって、乱れ飛ぶシユレテイニング二十二の使徒メジヤールカナの『愚者』を使用する。

隠された糸を凝無しで見ることができた、時間は五秒ほど。

私はまた、新たな能力を一つ身に着けることができた。

役立つかどうかはまだわからない。

乱れ飛ぶシユレテイニング二十二の使徒メジヤールカナ（おさらい）

- ・発動すると、左手にタロットカード（大アルカナのみ）を具現化する

- ・ただし能力を付与したカードを使用した場合、そのカードは二十四時間経たないと再度具現化することはできない

- ・能力を付与していないタロットカードは、ただの具現化されたカードになる

・右手で束から一枚を取り出すことによって、能力を付与したカードの能力を発現することができる

・出すことも消すことも自在にできる

『0 愚者』

・隠で隠されたオーラを凝無しでも目で見ることができる

・発動時間は約五秒

『13 死神』

・柄の長さが百六十センチほどの大鎌を具現化することができる

・発動時間はオーラが続く限り有効

・いつでも消すことはできるが、消してしまくと二十四時間は発動できない
シューティング メジャー アルカナ
 (乱れ飛ぶ22の使徒の制約により)

『17 星』

・石ころ大のオーラの塊を大量に降らせることができる

・降らせる場所は任意、狭いほど密度が濃くなる

・威力は弱い

・持続時間は数秒程度

『18 月』

- ・ 鉤状の刃にオーラを変化することができる
- ・ 生（回復）と死（毒）、二つの能力を任意に使い分けることができる
- ・ 発動時間はオーラが続く限り有効

『19 太陽』

- ・ カードを任意のタイミングで燃え上がらせることができる
- ・ 発動時間は数秒程度だが、何かに燃え移った場合はその炎は消火するまで普通に持続する（特にオーラは使わない）

『21 世界』

- ・ カードを引いてから一秒、時を止めることができる
- ・ 範囲は本人を中心に球状に半径五十メートル以内に限られる
- ・ 範囲内部では術者本人のみ自由に動くことができる
- ・ 範囲内にいた人物などは、その間のことを認識できない（範囲外は可能）
- ・ 時間内に範囲外から範囲内に入り込んだ場合、同様に時は止まる

『ダンス・メジャー・アルカナ』
『踊る二十二の使徒（ついでのおさらい）』

- ・ お前の物は俺の物により奪取した能力の分だけカードを具現化する

- ・具現化したカードを引くことによつて能力を発動できる
- ・効果は二十四時間、その間は他の能力を使うことができない

『0 愚者』

- ・任意の個体の現在地を知ることができる
- ・対象の顔を実際に見たことがある必要がある（写真不可）
- ・半径五百メートル圏内にいる場合には何もなくともおおよそその方角と距離がわかる（完璧に正確ではないので攻撃は視認していい限り不可に近い）
- ・地図上などでは平面的にしか場所を知ることができないが、半径五百メートル圏内の場合には高さを含め立体的に居場所の方向を把握することができる
- ・同時に複数の人間を調べることができないが、都度切り替えて一人ずつ調べることが可能（二十四時間内に複数回可能）

『2 女教皇』

- ・パクノダの能力（記憶弾）
メモリーボム

『10 運命の輪』

- ・ギドの能力（散弾独楽哀歌）
ショットガンブルーム
- ・ただし独楽自体がなくても自力で具現化して操作することが可能

第六十五話

新しい能力を手に入れて、私は再び修行に戻った。

室内に円を展開しながら水見式。実は結構難しいのだ。

グラスに集中するオーラと円に割り振るオーラの量の微調整。

室内を把握できるギリギリのオーラを円に振り分けて、残りは全てグラスにぶつける。

分離、分離、また分離。葉っぱが次々と千切れゆく。

室内に異常は見られない。

まだ厨房付近でバタバタと従事者の人たちがあわただしい。

警護の人たちも手伝っているようだった。もちろんマチさんやハンゾーも。

モノが一番多いのが厨房だからな。タマゴとか無事だろうか。

王子も、リヨウジとバチャエムも集中している。

ゲレゲレも落ち着いた。

ロップは意味もなくふーよふーよと王子の周りをまわっている。

いつもより少し遅れて、王子の夕食が運ばれてきた。

ひき肉を入れたオムレツに添え物のお野菜。

パンの代わりに厚焼き玉子を挟んだたまごサンド。

トマトとタマゴの中華風炒め物にニラ玉。

やっぱりタマゴ、だいぶ割れちゃったんだろうなあ。

他の王子は基本一人で食事をとるらしいが、フウゲツ王子は王子の希望もあつて私たち警護の者も一緒に食事をとらせていただく。

私たちのメニューももちろんタマゴ祭りだ。

ゲレゲレは私たちと同じひき肉オムレツのお肉多め。

元々ゲレゲレは溜め食いができるので一日三食食べなくてもいいんだけど。

ここでは一回の量を少なめにして一緒に食べるようにしてもらっている。特に意味はない。

腹八分目。念能力者に満腹はよろしくない。

満腹すると無意識に胃袋の消化にオーラを振り分けてしまい、本領が発揮できないのだ。

多分念能力者じゃなくてもそうだと思うんだけど。

胃袋重たい状態で戦うのは無理筋よね。

そして再びそれぞれの修行に戻る。

私は『愚者』で、一人一人の位置を確認する。

一気にできれば便利なんだけど、一人ずつしか無理なんだよなあ、これが。

単に地図上が光って見えるだけだから、複数人だと光がたくさん見えるだけで意味不明。

なので一度に一人だけなのだろう。

旅団とヒソカはさつき調べたので除外して。

このフロアで私が『愚者』を使えるのは1011号室を除くと1010号室のセンチとキーニ、それに1014号室のクラピカとサカタ、そしてイルミ。

それと第十四王子ワッブルを除く各王子と国王。

1010号室と1014号室は特に変わらない。それぞれに自室から動いていない。

イルミは一つ上のフロア、上位王子たちのフロアをウロウロしている。

やはりターゲットは第一王子ベンジャミンなんだろうか？

上のフロアには第一から第六までの王子の部屋がある。

私たちが今いるフロアには第七以降の王子の居室だ。

王子たちはそれぞれの部屋に居る、モモゼ王子を除いて。

モモゼ王子の居場所はわからない。

おそらくそれは、この能力の限界値または制約。死者の居場所はわからない。

国王も基本的に一番上の階層の同じあたりから動いていない。恐らくその周辺が居間や寝室なのだろう。

第二層にはパリストンとジン。多分一緒に居るっぽい。

第三層政治特区にはポトバイ、クツクル、ピヨン、サイユウ。

ほんの少し離れた位置にギンタとサツチョウ、そしてビヨンド。

これはおそらくビヨンドの拘束室。

第三層医科学特区にチードルとゲル、そしてレオリオ。

第四層にミザイストム、第五層にカンザイ。

この二人は国王軍とともに行動しているのだと思われる。

カンザイが第五層まで行っているということは、下層の警備兵を増員出来たのかな、多分。

これで抗争はおさまってくればいいんだけど。ムリダロネ。旅団とエイ||イ一家をぶつける気満々だったもんな、原作で。

エイ||イ一家の念能力者、組長を除いても最低二十三人、ちよつと多すぎる。

喧嘩を売られりや買うのが旅団。ぶつかれば火花は散るだろう。

そして旅団の半分以上が第三層に集中している。

私のメールでみんな政治特区に向かつてるにしても、その道中で激突する可能性もあ

る。

さっきの揺れはそれだったのかもな、わかんないけど。

第二層と第三層の間はすでに行き来が出来なくなっていると思う。

(軍隊が潰せる旅団ならやろうと思えば移動できると思うけど)

第二層の情報がもう少し欲しいな。パリストンに探り入れてみるか。無理か。

パリストンにもジンにも頭脳で敵う気がしない。明確な実力差。

もちろん力でも敵わない。戦ったことないけど、多分。

国王軍がどこまで機能するかによっても違ってくる。

各一家はそれぞれに金の匂いを嗅がせてるだろうし、私たちもそうやって第三層まで

たどり着いた。

十二支ん直下の国王軍上層部及び王子たちの私設軍隊以外は烏合の衆と見ていいと

思う。

そーいや私のゲットした部屋はどうなったのかな？

鍵はかけてないからきつと勝手に中を搜索してくれているだろう。

王子の能力で、怪しいものは何も残らない。

念能力の痕跡を探知する能力とかがあれば話は別だけど。

時刻が午後から午前に変わった。魔法の抜け道のお時間だ。
マチさんが居間に入ってくる。

「王子」

「はい、今日はどこに繋がばいいでしょうか」

船内であれば恐らくはどこにでも行ける。第五層でも、第二層であっても。

けれど王子を伴わなくてはならないので危険は冒せない。

一度第三層に戻って旅団メンバーと合流するか……第三層の面子が王子の護衛なんか引き受けるわけがない。

合流するなら第五層の方だ。とはいえそつちも護衛？ 何で？ ってなる、絶対。

OK、合流は無し。

1014号室に行つてクラピカに能力を見せておくか？

危険、あそこにはサカタとハシトウ、あとスラツカがいる。

出口の繋がる場所によっては第三王子チヨウライや上位王妃に情報が筒抜けになってしまう。

第四層に行く意味はない。第二層は情報がなさすぎる。

1010号室に行くか？ それもあまりよろしくない。

他の上位王妃の所属兵が直接護衛についている場合があるからね。

この間みたいにならぬ私が先頭に立って行くという手もあるけれど、すでに情報交換を終え

た今、特に行く意味はない。

モモゼ王子の遺体の場所がわかれば、あの部屋にトンネルを繋いでもらうんだけど。それも無理。

結局、誰もいないはずの第三層の私たちの部屋に繋いでもらうことになった。

そして少しずつ調べる。

まずは、王子が一切トンネルに触れることもせず私たちだけでトンネルを抜けることができるのか。

私、マチさん、ゲレゲレの順にトンネルを通り、私たちの部屋へと到着する。

私がトンネルを抜ける、マチさんがトンネルを抜ける。

ゲレゲレにはトンネル内での待機を命令した。

万が一トンネルが消えちゃったら困るからね。

そして無事に部屋に出ることができた。

出してさえしまえば王子が直接魔法の抜け道マジックワームに関わらずとも他者のみで通り抜けは有効。

Uターンして王子の部屋に戻る。

その途中で、壁に硬のパンチをぶつけてみたけどびくともしない。

ヨコヌキも無理。

ゲレゲレとマチさんが出て、私が出るとトンネルは消えた。

王子が使用せずとも、誰かがトンネルを使用するとそれが一回とみなされる。

念のためにもう一度王子に私たちの部屋へ繋ぐよう念じてもらう。出入口は出ない。

一度は一度。

疲労困憊の王子にはお休みいただく。

ゲレゲレだけを寝室に残し、居間へと移動する。

マチさんには休憩に戻ってもらった。

私はリョウジとバチャエムの横に座って、修行の続き。

修行以外に出来ること、何かないかしら。そんなことを考えながら水見式。

今日の夜は晩餐会。王子たちの立ち位置に変化は現れてるのだろうか？

第六十六話

明け方、私たちは警護を交代した。

私とマチさん。

リヨウジとバチャエムと、カラムとミレンク。

ゲレゲレは引き続き王子から最も近い場所でお守りする。

「朝ごはん、パンとおコメどっちがいいですかー？」

いつも夜勤の私たち、仕事上がりに私が朝食を作って食べてから休むようにしている。

今日の朝食はごはんにお味噌汁。具は白ネギとお豆腐。

それに塩をよく効かせた焼き鮭。

リヨウジが一口食べて突然泣き出したのにはびっくりしたが、味噌汁が今は亡きご両親の思い出の味だったとか。納得。

引き続き水見式をしたがった二人を無理やりベッドに押し込めて応接室に戻る。

私も休みたいんだけど、その前にやっておかなきゃいけないことがあるからね。

そう時間はかからなかった。部屋の電話が鳴る。

交換台からは1010号室からだと告げられた。お願いしていた朝の定時連絡だ。

晩餐会での休戦協定の公示についてだけ伝え、電話を切った。

盗聴の可能性大だからね、余計なことは言わないに限る。

隣の部屋の上位王妃の警護兵が聞き耳を立てていないとも限らない。

公示の件それ自体についてはすでにばれている可能性が高いので言っても平気。

あとは今夜の晩餐会について少し考えておくべきかな。

晩餐会の会場に私たち警護は入ることができない。

出入り口で待っているだけなのだ。

出入り口まで誰が行くか……まあ、私とマチさんと、あとは誰でもいいか。

ハンゾーとゲレゲレにはこの部屋に残ってもらおう。

王子には、晩餐会の様子をよく見てきてもらわなければならない。

特に他の王子の様子。

通常の様子から、休戦協定を発表した直後の様子まで仔細に渡りその目で確かめても

らう必要がある。

王子の観察眼は当てになる。

初めて会った日、この船に乗る前の様子を聞いた時。

尋ねるまでもなくそれまでの細かな状況を説明してくれた。

贅沢を言えば念能力に目覚めてて他の王子の念獣がどういったものかまで見られれば良かったのだが、それは本当に贅沢。

幾人かの王子の念獣の能力は原作に載っていた。

とはいえ詳細は不明な部分も多い。

特に第一王子と第四王子の念獣についての情報が欲しいな。

あと第一王子と第二王子の私設軍隊。あそこも全員念能力者よね。

王子自身が念能力者なのは多分第一王子と第二王子だけ。

とはいえ超級ウルトラ才能持ちの第四王子がいつまでに能力を身に着けるかは不

確定。

テータちゃんさん、うまく王子の能力を明後日の方向に導いておくれよね（願望）

第二王子の暗殺未遂の件で、第一王子と第二王子は自由だけど外出時は監視付き。

国王軍の監視は念能力者かな？ 多分違うんだろうな。

ムツセはネルネルネルねで消されてしまったので発見される可能性はゼロ。

すなわち監視員は今後ずっと帯同することになる。

それによる状況の変化は？ 少なくとも両王子が直接大きな動きをすることは控え

るだろう。

やはり問題は私設軍隊。と、念獣。

ほぼ明確に念獣の能力がわかっているのは第五王子と第六王子（ただし禁忌事項については不明）、第七王子、第八王子。

第十三王子の念獣もおおよそ判明している。

第六王子、第七王子、あと第十三王子あたりと協定を組むことは不可能だろうか？
……ん？　そもそも1013号室。晩餐会の時はみんなあの部屋を出るよね。

その場合はあの部屋に戻ることは可能なんだろうか？　王子自身も一緒に出るから可能なのかな？

一時的に元通りに部屋を繋ぐのかな。多分その可能性が高いと思う。勘だけど。

晩餐会の時に他の警護兵との接触は可能だろうか、あるいは誰もいない（偽）1013号室の前で情報の提示をするか。

うまくすれば第七王妃ごと取り込めるかもしれない。

第六王妃ともコミュニケーションとっておきたいな。

カチヨウ王子を訪ねた際にはお会いすることができなかつた。

第七王妃の場合と違って、カチヨウ王子とフウゲツ王子に差別的な関係は見られない。

上位であるからカチヨウ王子のお部屋と一緒に居るだけであって、フウゲツ王子のことを見捨てているとも思えない。

ただ、良くも悪くも凡人。感情に左右もされやすい。

重要な情報は流さない方がいい。念能力のことを含めて。

そういえば第六王妃セイコにハンター協会員を融通するようにお願いしたはずだけど今のところ無視されてるな。

どちらかというとかチヨウ王子寄りなのかな、やっぱり。

カチヨウ王子、第十四王子ワッブルの念獣に関しては姿すら出てきていない。

特にカチヨウ王子に関しては、私もおそばに行つたにもかかわらずその姿を見ていない。

いないってことはないと思うけど……どこに居るのか、また、どんな能力を持っているのか。

1014号室を訪れた際にも念獣を見ることは叶わなかった。

ただしこれは第十四王子ワッブル自身のすぐそばに居た可能性が高いので仕方ない。

第十四王子ワッブルの念獣に関しては、何か情報がわかり次第クラピカからのお知らせを待つとしよう。

教えてくれるかどうかは微妙だが、先にこちらの能力を開示している。

蜘蛛のことさえ別にすれば、信頼関係は築けていると思う。大丈夫だといいな。

……念獣、基本的にどれもデカいけど、ロップみたいにこじんまりしたのもいること

が分かった。

ということとは、もっと小さい念獣の存在もあるかもしれない。例えば、ハムスターサイズ。場合によってはゴキブリサイズ。

そこまで小さな念獣だと視認も難しい。小さいからといって能力も小さいとは限らない。

考えること多すぎ問題。

人生で一番いろんなことを考えている気がする。

天空闘技場が懐かしい。ぶちのめしてはタロット占いするだけの日々。

あの頃はなーんにも考えてなかったな、楽しかったな。

かといって今が嫌だというわけじゃない。

王子は絶対を守りたい。正直ヒソカやお宝は二の次三の次。

マチさんの手前、お宝情報は意識的に集めるようにはしてるけれど。

あまり考え事ばかりしても脳みそパンクしちゃうので、私も少し眠ろう。

控室に行くとりヨウジもバチャエムも、ブツブツ言っていた割にはぐつぐつと眠れているようだ。

私も音をたてないように気遣いながら、ベッドに横になる。

どのくらい寝られたらどうか。

再びの大きな揺れで目を覚ます。

一度目は先日の揺れより小さく、二度目は先日の揺れより大きく。

部屋の中が何度もシェイクされる感覚。

振り回されているベッドを避けながら室内を見渡す。

ロデノイルとハンゾーは何の問題もなく揺れに身を任せている。

リヨウジとバチャエム、それにタンティーノとアカシは怪我はないようだ。

従事者の方は大丈夫だろうか。

それより何より王子！ ……は、マチさんが守ってくれと信じている。

七度か八度……揺れが一旦おさまった頃合いを見計らって応接室に出る。

グチャグチャである以外に異常は見られない。円に誰が入った形跡もなかった。

今回も1011号室をターゲットにした攻撃である可能性は低い。

「大丈夫ですか!？」

従事者控室の方に声をかける。数人がよろけながら出てきた。

怪我人も出ている。部屋の中にはまだベッドに押しつぶされた人もいるようだ。

急いで従事者控室に入り救出する。

命に別状はなさそうだが手当は必要だしすぐに仕事には戻れないだろう。

従事者八名のうち、小さな怪我のみでほぼ無事なのは四名。

全員に応急処置は施したが、四名は出来るだけ早く医師に見せた方がいい。

応接室の受話器を取り医科学特区に電話を繋いでもらおうとするが繋がらない。

^{ベリレック}
V-2である第一層からの電話すら取り次いでもらえないということは、おそらく他の層を含め多数の怪我人が出ている。

問題が一つ。大きな怪我をしたうちの一人が1014号室で念を教わっている従事者だということ。

二人ともじゃなくてよかった、せめてそう思おう。

抗争が始まったのか、あるいはヒソカと旅団がぶつかったか。

上層に居ると下層の情報が入ってこないのはもどかしい。

地図で確認する。旅団とヒソカではない。

十二支んのうち三名が第三層の一か所に向かっているので、発信源は多分そこ。旅団は関係なさそう。

エイ||イ一家の誰かかな。……今調べても仕方ないな、この部屋のこと集中しよう。

居間の扉を開く。居間もまた先日と同じようにめちやくちやになっていた。

「王子、()無事ですか？」

目視で無事を確認したものの念の為に声をかける。問題ない、そう言うように王子は頷いた。

「何だろうね、この揺れは……」

「わかりませんが、ヒソカ関連ではなさそうです、さつき調べました」

ロップがパニックで泡を食ってクルクルと宙を舞っている。ちよつと落ち着け。

「ゲレゲレも大丈夫？」

「がうう」

多少鼻息は荒いものの、ゲレゲレも無事。カラムとミレンクもそれぞれに身を守ったようだ。

「従事者の中に怪我人が多数出ています。医科学特区と連絡を取ろうとしましたが繋がりませんでした」

「エイラさん、第一層にも病院があります。そこなら多分通じると思います」

あ、そうか。そりゃそうだ。第一層に病院がないわけがない。迂闊だった。

慌てて応接室に戻ると交換台に第一層の病院へと繋いでもらい、医師の派遣を要請する。

するとほどなくして二名の医師と四名の看護師が部屋を訪れた。

……第一層がどれだけ手厚いか、この一件だけでよくわかる。

「骨折が三名、一名は流血がひどいものの止血さえしてしまえば意識ははっきりとしているので大丈夫です。あとの四名は応急処置だけで大丈夫です。三名は病院の方へと運びましょう、一旦入院といった形をとっていただきます」

王子の了承を得て、三名を運んでもらう。病院は第一層の上から五番目のフロアにあるらしい。

落ち着いたら第一層の設備も頭に入れておく必要があるな、脱出口含め。

「従事者が少なくなつてしまい残った方々には負担をかけることになると思いますが……よろしく願います」

私は頭を下げる。一緒に料理し掃除をした仲の従事者たちは、それを快く受け入れてくれた。

さあ、ひとまずはお部屋のお片付け。まためちやくちやになりそうな予感もひしひしとするけれど。

第六十七話

1011号室だけでもてんやわんやなのだが、これ晚餐会開かれるのかな？

……開かれるんだろうな、何としてでも。国王の面子がかかつてるし。

従事者の人数が少なくなったので、もう警備だの従事者だの言つてられない。

王子以外総動員で後片付けに入る。

王子ですら身の回りのものは片づけてくれた。

何もしてないのはゲレゲレとロップだけである。

とはいえ、ゲレゲレにはこのゴタゴタの中で王子に危険が及ばないようにしつかり見張つておいてくれとは伝えてあるのだが。

王子のそばをむやみやたらとソワソワ動いているので多分大丈夫だろう。

私やリョウジ、バチャエムは主に居間と応接室の片付けをしていた。大きな家具が多いからね。

元気な従事者の人たちには厨房をメインにお任せする。

食器棚は備え付けなので冷蔵庫だけ元の場所に戻すのを手伝ってきた。

マチさんとカラムとミレンクは王子の警護の当番でもあるので王子のおそば、主に居

間と王子の寢室。

残った警備で各控室を綺麗にしていく。

これ、他の王子の居室の警護や従事者、場合によっては王子自身が怪我してる可能性もあるんじゃないだろうか。

特に下位王子。周辺にハンター協会員（準会員含む）のいないサレサレ・ハルケンプルグ王子辺りが怪しい。

ま、それも晚餐会になってみれば多少はわかる事か。

少なくとも各王子の安否は判明する。

ぐちゃぐちゃの部屋も、人手が少ないなりに昼食前には綺麗に片付いた。

ただし全員朝食ヌキだ。おなががすいた。

王子用の冷蔵庫と食品庫の中身はカギのおかげで無事だったが、それ以外の冷蔵庫や食品庫の食品は床に投げ出されて汚染されてしまったものも結構ある。

従事者が下層に連絡を取り、物資の追加を依頼していた。

その間に私は、大きな鍋で袋ラーメンをぐつぐつ煮込む。

こんな時に使わないで何のためのインスタント食品だろう。

インスタントとはいえ生麺仕立てなので、あえての煮込みラーメン風。

具材はキャベツにニンジン、タマネギにシイタケ、ネギをたっぷり刻んでごま油で炒める。

タンパク質が無いけど、一食くらいは大丈夫だろう。

ゲレゲレ用には冷凍庫から飛び出して放置されていた豚ロース肉を軽く油抜きして与えることにしよう。

大丈夫、ゲレゲレなら多少汚染されてても火を通せばいけるいける。

丼をたくさん用意して、ひとつひとつに麺を入れていく。

上から炒めた具材をどんどのせていく。

従事者には基本王子のお食事の準備をお願いしている。

一人で調理は怪しまれるかと思って少し手伝ってもらったけれど、私の作った方はあくまで賄い飯だ。

「それ、おいしそうです……」

皆が黙々とラーメンをすすっている場面で、まさかの王子がインスタントラーメンにご興味を示された。

さすがにコレを食べさせるわけにはいかないのです、機会があつたら改めてお作りしますとだけ伝える。

王子用の追加の食材にインスタントラーメンを加えておいてもらおう。

こんなにおいしいものを食べられないなんて、王子つていうのも案外大変だなあ。

あれから船が揺れることはなかった。

特に異常もなく、晩餐会の時間を迎える。

フウゲツ王子には、あらかじめ伝えておいた。

通常時の他の王子の様子と、特に休戦協定を結んだと公示した直後の他の王子の様子をしっかりと観察しておいてほしい、と。

それと、国王の様子。

晩餐会会場まで付き従うのは私とマチさん、それにロデノイルとアカシ。

それ以外は部屋でお留守番だ。

私とマチさんだけだったら1013号室の様子をついでに覗きに行けたんだけど、不審な動きはしない方がいい。

リヨウジとバチャエムには引き続き練の修行をしておくように伝えておいた。

そして皆で王子を囲み、無事晩餐会の会場へと到着する。

会場は別に専属の警護で固められており、私たちは会場周辺でウロウロすることも許されている。

ただし不審な動きをすればそれは皆に筒抜けになってしまうということでもある。

王子は何事も無く入室し、私たちは外の廊下で待機だ。

私は愚者を発動して、クラピカの位置を把握する。

近付いたらさりげなく逃げる、それだけ。

マチさんを見つけられる訳にはいかない。

「で、どーすんのさ」

「待ちましよう、王子が戻られるまで。特にすることは無いと思います」

「……中に入ってお宝の情報でも手に入れられれば良かったんだけどね……」

その言葉を、ロデノイルが耳ざとく拾い上げた。

「お宝？ というのは？」

「王子の警護には何ら関係のないことです、お気になさらず」

彼の能力は知らないが、特に現在念を使用している様子も見られない。

記憶弾メモリーボムのような、相手の記憶を読み取る能力ではないのだろうと思う。

彼は不信そうな表情をしたものの、それ以上突っ込んで聞いてくることもなかった。

晩餐会は二時間ほどだっただろうか。

まず王子が退席する、第一王子から順に。

第一王子が退席する際、出入口口が見える場所に第一王子警護兵以外の人間が近づ

くことは禁止される。

そうして順に、第二、第三と王子が次々に退出し、やがてフウゲツ王子の順が訪れた。「お疲れさまでした、王子」

アカシが一步、王子に歩み寄る。

「フウゲツ王子、スイシコスイシコ第五王妃の階令により、私はここ以降王子から離れさせていただくこと、ご了承ください」

「わかりました」

アカシが離れた……サレサレ王子に何かあったのかな？

「では王子、お部屋に戻りましょう」

マチさん、私、ロデノイルの三人で王子を取り囲み警護しながら部屋へと戻る。

部屋の様子も、私たちが出た時と変わらないようだ。

「それではこれからは私とリョウジさんとバチャエムさんが警護に入ります。お疲れさまでした」

ロデノイルに向かって頭を下げる。向こうも礼を返してきた。

そして王子とともに、居間へと移動する。

「それで王子、何か変化はありましたでしょうか」

私のその言葉で、王子が挙動不審になった。何か、あったのか。

「まず最初に……モモゼ王子はもちろんですが、サレサレ王子も晩餐会には参加してな

かったです……」

やはりサレサレ王子に何かあったのか。

「スインコスインコ王妃がひどく取り乱しておられたので……おそらく、亡くなられたかそれに近い状態ではないかと」

揺れの時か。あるいはそれ以外に何かあったのか。

もしかしたら二度目の揺れがサレサレ王子への襲撃であった可能性もある。

「それ以外の王子は、普段どおりでした、少なくとも表面上は」

「休戦協定の公示をした後はどうでしたか？」

「休戦協定に参加している王子の変化は特にありませんでした。ベンジャミン、カミィラ、ツェリードニヒ各王子は特に反応を示さず、タイソン王子とルズールス王子は少し驚いていらつしやるようでした。第七王妃は焦っている感じだったので、うまくすれば休戦協定と一緒に入ることが可能かもしれません。実質の権限は第七王妃が持つていらつしやると思うので」

おおよそ、予想通りの反応かな……。

「他に、王子が気に留められるような出来事は起こりましたか？」

「ざつき言ったスインコスインコ王妃が取り乱しておられたのと……あとは、ハルケンブルグ王子が父上に継承戦の中止を直訴されました。中止することはない、といった

反応でしたが……」

それも、予想の範囲内。ハルケンブルグ王子が拘束されるということもなかった、と。「お父上の反応はいかがでしたか」

「休戦協定の公示をした時には、少し領いたように見えました。それ以外は特には……」
国王は休戦協定もひとつの搦手とみているのだろう。

協定を結んでいるからといって無条件に信頼できるものでもない。

単独行動が許されるなら、怪我した従事者の代わりに私が1014号室に行つて情報収集も出来るんだけど……それも、無理。

そもそも数日経つた今更人員の入れ替えなんてできるのかしら、無理かしら。

「……グラスハープはいかがでしたか？ うまくできましたか？」

晩餐会から帰つてきてから、王子はずっと緊張している。

軽くでも、緊張をほぐして差し上げよう。

「……失敗しちゃいました。グラスを強く擦りすぎてひっくり返しちゃつて」

苦笑いをする王子。

けれどそれは、きつとほほえましい光景だったのだろう。こんな殺伐とした状況でさえなければ。

「でしたら、次の晩餐会でリベンジするのもありかもしれませんね、それまでしつかり練

習して、今度は失敗しないように」

「ですね！……私が失敗した時、カーちゃんが笑ってたんです。私、それを見ただけでも今日の晩餐会でグラスハープをやって、よかった」

無理にでも行動を起こすことで、精神を安定させることもできる。

ただのグラスハープになってしまった演奏に意味はないけれど、カチヨウ王子とのコミュニケーションは少しずつ元通りになってきている、かな。カードが示した通り。

「それでは王子もお疲れでしょうし、日付が変わるまでお休みください」

「いえ、シユギョーします！ 私の魔法でカーちゃんも助けなきやいけないからー」

王子、強くなったな……最初に涙を流してた時とは違う。

そして私たちはまたテーブルを囲んで、水見式と瞑想をすることになった。

王子はまだオーラを感じ取れていないから、水見式をするにはちと早い。

リヨウジとバチャエムは、着実にオーラ量を増やしてきている。

水見式の変化も如実に表れるようになってきた。

他の王子の情報を知りたい。最も手に入れやすいのはやはり1014号室。

単独行動禁止、マチさんを連れて行くわけにもいかない。

何かいい方法はないだろうか……。

とりあえず、どんなことをやってるのか明日にでも1014号室に行っている従事者

の人に聞いてみよう。

第六十八話

夕飯の片付けをしに来た従事者を引き留める。

1014号室に行っている従事者さん（無事な方）はイラルディアさんというらしい。まともに話すのはこれが初めてだ。

「1014号室ではどんなことやってるんですか？」

「んー、未だによくわからないけど。皆で手をつないで、隣の人から来ると思われる温かいナニカを感じ取れ……みたいなの？ そんなことをずっとやっています」

まだオーラを感じ取らせる段階か……。

クラピカはどうやってそこから二週間（もう残り十日ほど）で念習得までもつていくつもりなんだろう。

チエーンの中に何か能力開花に関する技があるのかな？

でも、だとしたら王妃にそれを使うと思うんだけどな……。

「私も興味があるので、よかったらまたお話を聞かせてください」
「この程度のことでもいいなら喜んで」

フレンドリーな人だな。

現状では彼女から情報収集するしかない。1014号室に關しては。

少しの食休みを経てリヨウジとバチャエムには引き続き水見式をやってもらおう。

ゲレゲレは、ぐでんと転がっている。

それを真似してロツプもコロコロと転がっている。かわいい。

王子は手のひらを身体の前で合わせている。

以前教えたオーラを感じる方法、それをずっと試しているようだ。

「エイラさん、前より少し離れた状態でも感じるようになりました」

手と手の隙間は二センチほど。こちらもそれなりに順調。

まだ四大行を教えているわけではないのでオーラの揺らぎに変化はないが、体の表面を覆うオーラをその端ですでに感じ取れるようになったみたいだ。

「引き続き、続けてください。それ以上距離が開くことはないと思いますが、その温もりを忘れずに常に感じ取れるように。先では手のひら以外でも感じ取れるようになるとなお良いです」

「わかりました」

今度は人差し指を近づけている。

お教えしたことを忠実に守り、修行を続ける。

王子の魔法、これで少しでも距離を伸ばせばいいんだけど。できれば船の外まで。

「王子、一つお願いがあるのですが」

「なんですか?」

「……今夜の魔法の抜け道マジックワーム、私のために使わせてはいただけませんか」

返事は、少し遅れる。当然だ、王子は少しでも早く魔法の全容を知りたいはず。

それでも、王子は頷いてくれた。

「エイラさんたちがいなくなったら私はもうここにはいなかったかもしれません。あの大きな揺れの時に死んでたかもしれない。私とは関係のないナニカ、それに必要なんでしょう? 喜んで協力させてもらいます。その代わり、今後も私たちのこと助けてくださいね?」

最後は冗談めかして。

『私たち』と、おそらくはカチヨウ王子のことも含めて表現する。

王子はお優しくして強い、そして弱い。

お守りする、絶対に。

そして今夜も魔法マジックワームの抜け道の時間が訪れる。

王子は晩餐会でお疲れだろうが、その素振りを見せずに「どこに繋がみましょうか!」と笑顔を向けてくれる。

私は懐の地図を取り出して開いた。『愚者』を発動して団長さんの居場所を確認する。第三層政治特区にほど近い客室のうちの一室。

そこを指さして王子に魔法の抜け道を繋ぐようお願いする。

地図でも魔法の抜け道を繋げられるかどうかはわからない。

これも一つの検証にはなるのだろう。

扉は現れた。私が扉に手をかけると軽くドアは開かれた。

「私とマチさんが入ります。ゲレゲレは後から入ってきて、中で待機。いいね？ 王子

はこの部屋でお待ちください」

真つ暗な通路を移動する間、後ろからマチさんが尋ねてきた。

「今日はどこに繋いだんだい？」

「団長さんのところですよ。現状の情報を交換しておこうと思ひまして」

そう時間はかからずに、出口が見える。

出口のふたを開くと団長さんの膝蹴りが頭をかすめた。ヒツてなった。ひどい。

「なんだ、お前か」

私とマチさんは魔法の抜け道から這い出る。ゲレゲレは待機。

「現状の情報交換をしたいと思ひまして」

狭い室内には、団長さんの他にもシズクさんとボノレノフさんがいた。……多分。

ボノレノフさんはボノレノフさんの姿をしていない。

金髪巻き髪の超ゴージャスなナイスボディ美人に変メタモルフオーゼン容していた……びっくりし

た。

前もって『愚者』で一緒に居ることを確認していなかったら信じられなかっただろう。

「なるほど。これはお前の能力か？」

団長さんは私たちが通ってきたトンネルを指さす。私は首を横に振った。

「それも合わせて、これから説明します。団長さんたちはここで何を？」

「政治特区の内情の把握と十二支んの動向調査中だ。十二支んは面倒だな、多少大きな揉め事を起こすと飛んでくる。昨晚……もう今朝になるか、フィンクスたちがエイ||イ

一家とトラブって、無論拘束などされはしてないが少々身動きがとりづらくなつてしまっている」

……今朝の大きな揺れはそれだったのか。

「エイ||イ一家。詳細は不明ですが組長の能力は他者への念能力の付与です。組員上層部二十余名は念能力者だと考えていた方がいいと思います」

「お前たちは何をしている？ そのトンネルのことも含めて報告しろ」

「……あたしは正直なところよくわかってない。説明はあんたにまかせるよ」

「私たちは第一層に移動して、現在第十一王子の護衛として動いています。私の能力で

はヒソカに敵わないと思ったので、先にお宝の情報を調べるべく上層へ行きました」

護衛という言葉のところで、団長さんが少し眉を顰める。けれど言葉は挟まれなかった。なので私は続きを話した。

第一層における王位継承戦のこと、壺中卵の儀のこと、念獣のこと、第十一王子の念獣の能力で第一層へと移動したこと。

「念獣の能力を使えば他の旅団員が上層へ移動することも容易くなるかと思われます。ヒソカの件が終わり次第、この能力を使って全員第一層へ移動することも可能です。現在のところ、第十一王子の信頼は勝ち得ていますので」

団長さんは一つ頷いた。

「第二層と第三層の間を見てきたが、あれも少々面倒だ。下から上がってくるのと同じようにはいかないし、何より念能力者を含め警護が嚴重だ。面倒を厭わなければ通り抜けることは可能だろうが、あとのことを考えると揉めないに越したことはない。エイラ、お前は引き続きヒソカとカルトの動向を把握して移動しているなどの変更があれば連絡しろ、メールで構わない。マチはエイラとともに、第十一王子のそばでお宝の情報を集めておけ。オレたちが移動するまではそのトンネルの能力を失わないように対応しろ」

「あたしはヒソカを狩りに行きたいんだけど」

「単独行動禁止だ。シズクかボノレノフと交代するとまた一から第十一王子の信頼を得なければならなくなる。現状ではお前が適任だ」

渋々ながらも、マチさんは団長さんの言葉に了解との言葉を返す。

「では行け。可能であれば国王や上位王子との接触も試みてみる、無理をする必要はないが」

そしてトンネルを通過して、フウゲツ王子のお部屋へと戻る。

「やりたいこと、出来ましたか？」

フウゲツ王子は詳しいことを何も聞かないでいてくれる、有り難い。

「はい、ありがとうございます」

王子の横でロップがドヤ顔をしている。はいはい、ありがとうございますねロップ。

私がロップと会話しているのを見た王子が不思議そうにその空間を眺めていた。

「ネンノーリヨクを覚えても、私には私についているネンジューは見えないんですよ？」

「……はい。いずれの王子もご自身の念獣は見えないと思います」

「……会って、お話してみたかったな、ロップちゃん」

パタパタと耳を羽ばたかせてロップがくるくると回る。

王子にその存在を認識してもらえたのがとても嬉しいようだ。

「とても可愛らしい念獣ですよ。王子にぴったりの」

王子がぼぼぼと顔を赤くする。かわいいな、おい。

「ロップちゃん、いつもありがとうございます」

もうそこにはいないんだけど、ロップのいた場所に向かって王子が頭を下げる。

王子の横に、小さな虹が現れた。

第六十九話

「……エイラ殿」

王子にはお休みいただき、私たちは三人で引き続き修業をしている。水見式をしていたリヨウジから突然声をかけられた。

「何ですか?」

彼の方を向く。リヨウジは右手に一輪の赤いバラの花を持っていた。

「……?」

「……その、花瓶の花を見ていました。そうしたら、右手に、コレが」

リヨウジ、真顔だがパニックっているようだ。

えつ具現化系そんなところで使っちゃったの?

バラの花の具現化?　なんか意味あるの?

「……多分、バラの花を具現化したものだと思います。何か心当たりは?」

リヨウジの亡くなられた母上がバラの花をこよなく愛していたとかなんとか。

それで気になって、水見式をしながら部屋に活けられていた花瓶のバラをチラチラ見ていたんだとか。

で、気付いたら手にバラ持っていた、と。無駄に才能使っちゃいやがつて！

「具現化系は何らかの効果を付与するのがおすすすめです、私のタロットのように。リョウジさんの発想と勘で、ピンとくる何かしらの能力をそのバラに込めてあげてください……」

もう、なんも言えねえ。まさか花で来るとは思わなかった。

「バラを使った能力……花びらを刃に変えて舞わせ敵を攻撃するとか」

風華円舞陣だねえ。

「あるいはこのトゲを利用して茎を伸ばしてムチにするとか……」

ローズウイップ
薔薇棘鞭刃だねえ。

何だこの展開は。同じトガ神漫画だからかそうなのか。

リョウジがこんな必殺技獲得したら日本全国の蔵馬ファンだったり、初恋が蔵馬だったという（元）少女たちが大激怒するぞ、きつと。

……知らない。技としてはアリだとは思うから。

できれば花びらやムチに毒属性付与出来たらいいんだけどねえ。

水見式をやりながら色々考えてみてください。本人がじっくりくる能力が一番いいからね。

そして、月曜日の朝。

私たちは警備を交代し、応接室に戻る。

今日の朝ごはんは何にしようかな。昨日は和食だったからパンにしようかな。

厨房の食品庫を覗き込む。パスタもありだな……ナポリタン作ったろ。

ソーセージとピーマンとタマネギをきざみ、フライパンで炒める。

ケチャップにウスターソースを混ぜて塩コショウで味を調えたソースを加えてくつくと水分を飛ばす。

パスタ茹でなきや！ 細かいパスタなのですぐに茹で上げて水分をきる。

そして！ 和える！ まぜまぜする！

粉チーズと乾燥パセリは好みで。

二人に出すと、怪訝な顔でこれは何のパスタなのかと尋ねられた。

この世界にはどうやらナポリタンが存在しないらしい。

存在しないのか、二人が知らないだけなのか。

いいから食べろと強制し、私も食べる。うん、おいしい。

二人もきれいに平らげてくれた。

私たちの分だけではなくて、他の警護や従事者の分も作ったので持っていく。

従事者が減ってしまった分、お手伝いしたいからね。

ハンゾー以外は喜んで食べてくれた。そうだろうそうだろう、ナポリタンは良いものだ。

修行で疲れ切った二人をはよ眠れと控室に追いやって、私は1010号室からの朝の定時連絡を待つ。

特に話すことはなかったの、ご挨拶だけで終了。

さて、私も眠る前にもう一仕事済ませておくかな……スマホを取り出して、テーブルの上にタロットを広げる。

「もしもし、パリストーンさんですか。今は大丈夫ですか？」

「お待ちしてました、もちろん大丈夫ですよ！」

相変わらずの軽薄な口調。やっぱ好きにはなれないなあ。

「今占ってしまつて大丈夫ですか？ おそばにジンさんもいるのでは？」

「占い師さんはお見通しですねえ。大丈夫、それも含めて今占っていただいて構いません」

ええんかい。……というか、それも含めてつて、ジンさんもこの電話聴いてるのかな、もしかして。

「では早速占いましょう。占ってほしい事柄などはありますか？」

「そうですね。……占い師さんの占いは一か月が目安でしたよね？ でしたら『ボクは

今、恋をしているのでその人との相性を占ってください』

パリストンが恋とかハイハイ草草。多分ジンのことだろうなあ。

私は無言でタロットの一枚を選び、そして開く。運命の輪の逆位置。

「……出たカードは運命の輪の逆位置。状況の悪化が見受けられます。あるいはスレ違い。これらの不都合はおそらく外的な要因で現れるため、運氣が上昇するタイミングまで耐えることをおすすめします。今大きく動くのは得策ではありません」

「なるほど……確かに、今は少し身動きの取りづらい状況であることは確かです。繰り返し確認しますが、この占いは今後一か月の予想なんですよね？」

「はい、おおよそですが」

お前が占いなんてするとはな、って声が遠くから聞こえた。多分ジン。

確かに占い師の私が言うのもなんだけどパリストンと占いて似合わない。

この人、何で占ってもらいたがるんだろう？

「相変わらず人の現状をズバズバ当ててきますね……さすがです、占い師さん」

パリストンは私の名前を呼ばない。

ジンは私のことを知ってるのかな？ 知ってるんだろうな。

そろそろ知らない人に知られることにも慣れてきたぞ。

「ところでパリストンさん、一つ伺いたいことがあるんですが」

「何でしょう?」

答えてくれるかどうかはわかんないけど、一応聞いておくか。

「『繭』はどうなりました?」

少しの沈黙。背後の人も何も言わない。私も待つ。

「……羽化したおよそ六割は置いてきました。まだ羽化していない四割は密輸物資に紛れ込ませてこの船に載せています」

パリストンがクスクスと笑う。これは私に対してともう一つ、ジンに対しても聞かせる為。

この船にいずれ、二千体のキメラアントが現れるという現実。想像したくはないけれど。

「占い師さんは本当に何でもござりですねえ。どこでその情報を仕入れるのか、それともそういう能力なのか……」

「ござりの通り、占い師なので。人の未来はある程度予測できますよ」

「んー、そういうことにおきましようかね。占い、ありがとうございました」

電話を切る。

二千体のキメラアント。想像するだけで怖つ。

航行中に羽化したらマジで暴動起きそう。

王族と警護と軍隊と、各一家とキメラアントと旅団。ますます混沌としてきたな。

念能力者のハイパーインフレだ。

……とりあえずは、考えない。私が考えても仕方ない。

キメラアントはジンが何とかしてくれると信じよう。

さて。私の今朝のお仕事はこれで終了。

二十万の案件四百件はどうするのかって？ とりあえず放置、考えたくない。

次の晩餐会まで一週間。

王子を守ることに、お宝の情報をもう少し集めたい。

けれどとりあえずは、私も眠ることにしよう。

寝る前の考え事良くない。安眠妨害。

全部後回しにして、おやすみなさい……。

第七十話

何事も無く、夕方少し早い時間に目が覚めた。

……ぐっすり眠れたのは数日ぶりだな。

あ、いやハンターたるものどこでもぐっすり眠れるのだけれども。

邪魔が入らなかつたという意味で。

夜勤生活にもずいぶん慣れてきた。

バチャエムはまだ寝ている。

リヨウジは応接室でトゲだらけの鞭をふるっていた。見なかつたことにした。

厨房に入ると従事者さんたちが夕食の準備をしていたのでまかないのお手伝いをする。

今日のまかないはパンとグリーンサラダにチキンステーキ、スープはヴィシソワーズだ、おいしそう。

王子の「みんなと同じもの食べてみたい」というご要望によりメニューが同じになつたらしい。

もちろん食材の出どころは違うけど。

こういうところも、フウゲツ王子が愛される所以よね。王子本人にそんな気はないんだろうけれど。

「エイラ」

食事を終えて後片付けをしているとマチさんに呼び止められた。ちよつと待つてあとお皿二枚流すだけだから。

「……あのさ、あたしらはいつまでここにいればいいわけ？」

え。団長さんに言われましたよね、フウゲツ王子の能力を自由に使用できるように維持しておくって。

「それはわかっている。ただ、もつと他にやれることがあるんじゃないのか？ 他の王子に接触するとか、国王の居住フロアを探ってみるとか」

確かにそれも、出来れば理想的。

でも現実問題、カチヨウ王子以外の王子との接触は難しいし、国王のフロアなんてそれこそこれまでで最大級の警備が敷かれてるに違いない。

原作でもハルケンブルグ王子ですら国王との謁見が認められてなかったもんな。

カチヨウ王子に探りを入れたところで知っていることはフウゲツ王子とさして変わらないだろう。

「難儀だね。単独行動が許されるならあたしかあんだ、どちらかが調べに行くこともできらるうけどそうはいかない。二人で行くと隠密行動には向かないし王子を放つておくわけにもいかない」

「ひとまずバチャエムさんとリヨウジさんが念をしつかり覚えて、ある程度戦力になるまでは現状維持がいいかと思えます」

「いつまでもこのままというわけにはいかないからね。あたしらは蜘蛛だ。目的は別にある、それを忘れるなよ」

「はい……」

一度、ハンゾーが警護をしている時にフロアの探検を試みようかな、二人で。

1013号室を含めて様子をうかがいに行くのは悪くないと思う。

今日はもうすぐ私の警護の時間なので明日以降に。

地図を取り出して日課の居場所チェック。

団長さんたちとビヨンドがニアミス。警備が厳重だろうから中には入らなかつたのかな。

ミザイストムがヒソカたちと一緒に居る。何を話しているのか。

「^{トッ}実行部隊は一旦第五層まで戻っている。なんでだろう？」

フランクリンさんたちも第五層から動いていない。

それ以外の十二支んやジン、パリストーンもほぼ前に調べた時と変わらない位置に居る。

王子のトンネルは第五層まで繋がられるんだろうか。

出来るのなら一度他のメンバーたちとも顔を合わせておきたい。

でもそう何度もこちらの事情に王子を付き合わせるのも気が引けるな。

……私は蜘蛛。すでに蜘蛛の一員。何よりも最優先すべきは蜘蛛。

何度も心の中で自分に言い聞かせる。

私はどうして王子にここまで強い思い入れを抱いているんだろう。

どうしてこんなにも王子を守りたいと思っているんだろう。

きっと王子に共感してしまっているからだと思う、多分。

自分の望まない、自分では変えられない状況に振り回されて苦しんでいる。

私がそうであった時、誰かに助けてほしかった。でも誰も助けてくれなかった。

助けてもらえなかった自分の代わりに王子を救いたい。

心の中で、子供の頃の私が叫ぶ。わたしをたすけて。

私の心を救ってくれたのは蜘蛛。それは肝に銘じよう。

マチさんの言うとおり、忘れてはいけない。最優先すべきは蜘蛛。

それは私がメンバーだからだけではない。

応接室に戻るとリョウジがいかつい笑顔で駆け寄ってきた。

ドーベルマンみたいな大型犬に見えた。

「エイラ殿！ この通り、具現化したバラをムチに変化させることに成功しました！」

トゲトゲ、痛そう。でもこのままだと念能力者には通用しないだろうな。

「ただのムチであるだけでは念能力者に対抗するのにちよつと弱いです。以前見せた私の乱れ飛ぶシュレーディングメジャーアルカナの二十二の使徒のように、何らかの能力を付与することをおすすめします。具例を出してしまおうとそれに引きずられてしまうので、リョウジさん自身で色々と考えてみてください。後は、時間をかけずに自在に出し入れできるようにすることも必要です」

ようやく完成した（と思われた）発に対して私がダメ出しをしたせいで、リョウジはちよつぴりしよんぼりしていた。

けれどすぐに気分を切り替える。さすが王室警護兵。

控室に向かいながら、ウンウンと唸っていた。頑張れ。

私もその後を追って控室に入る。するとカラムに声をかけられた。

「エイラさんは、プロハンターなのか？」

……別に嘘をつく必要もないかな。頷きながらそうですと答える。

ついでにハンターライセンスも見せた。

「なるほど、しかしハンター協会員として雇われたわけではないのだな」

「はい。あくまで個人的に王子をお守りしているだけです」

カラムは念能力を使える。そして確か下位王子の監視報告をまとめるのは第一か第二王妃の所属兵。

第一王妃の所属兵はすべて私設兵と入れ替わっている。

つまりこの部屋の監視報告をまとめるのはカラム。

私たちのことを探っていると考えるのが妥当だろう。

「あなたと一緒にいた……マチさんもプロなんだろうか？」

「いえ、彼女はプロではありません。とはいえライセンスがないだけで能力はプロと遜色ありませんが」

ゲレゲレのことも尋ねられた。大切なペットだと答えておいた。

念能力者であることはばれている。

「私もお尋ねしたいことがあります。王族の中で、占いに強い興味を示される方をご存じありませんか？ 例えばカミーラ王子とか」

私の占いを使って、王族の誰かの懐に潜り込めないだろうか。

一般的に占いに興味を示すのは女性が多い。権力者にも意外と多い。

王妃の誰か、あるいは王子に取り入ることができればさらに情報は集めやすくなる。
「……何故そんなことを？」

「私は自分で言うのもなんですが結構有名な占い師です。そして王子に雇われているわけではないので金銭的なメリットは発生していません。単純に、お金を稼ぐためのコネを必要としているだけですよ」

無償で占うことは、この場合逆効果。フウゲツ王子を守るために他の王子や王妃を暗殺しようとしてると疑われること間違いなし。

逆に大金をせしめるような守銭奴を装っていた方が、金でカタが付く人種と思われてやりやすい。

あとシンプルにお金欲しい。

「私の知っているのはカミール様だけだな。カミール様は著名な占い師を自宅に呼びつけるほどの占い好きで有名だ。ただし使えない者に関しては容赦なくその命すら奪うお方だが」

「かまいません。もしよろしければ、私の名前と『戦う占い師さん』という名称とともに、カミール王子に占いの打診をしていただけませんか？ 費用は本来ならば直接占う場合は一億ジェニーいただきますが、コネを作ることの方が優先事項なので五千万ジェニーにいたします」

「……私は打診をするだけで、こういった返事が返ってくるかはわからないぞ？」
「はい、それでかまいません。よろしくお願ひします」

占い一回で一億ジエニーとは、信じられない世界だな……カラムはそうつぶやいて、
応接室に設置されている電話へと向かった。

報告と、打診をしてくれるのだろう。

これで、カミール王子に取り入ることができればいいんだけど。

したらそこからお宝情報ゲットだぜ！

……怖いことは考えない。疑われるのは百も承知。

それでも私は動く、全ては蜘蛛の為に。

第七十一話

「エイラさん！」

応接室から彼が出て行つてすぐ、私を呼ぶ声が聞こえた。カラムだ。

「どうしました？」

私も控室から応接室に向かう。彼は受話器を私に差し出した。

「カミーラ様だ。今すぐお話をされたいと」

いきなりか。まあしやーない。

かかった魚はでかいかな？

「……お電話変わりました。エイラです」

『あなたが戦う占い師さん？』

「はい。天空闘技場ではそう呼ばれていました」

『条件は聞いたわ。今すぐ私のところに来なさい』

今すぐ。もうすぐ警護の番なのに。

「二つお願いがございます。一つは間もなく私が警護につかねばならないため、交代要員を確保するまでの間三十分のお時間をいただくこと。もう一つは弟子の帯同を一人

お許しいただくことです」

『十分。それ以上は待てないわ』

「……承知しました、それでは十分後にお伺いさせていただきます」

私が受話器を置く前に電話が切れる。

急いでマチさんとハンゾーと情報共有しなくちゃ。

まず控室のマチさんに事情を話す。

お宝情報の探りを入れるためだと説明すると喜んでついてきてくれることになった。

次は警備中のハンゾー。どう説明しようか。

「あー、別に理由は話さなくていいぜ。そう長い時間じゃないんだろ？ ついでにあの

二人の念能力の方も面倒見といてやるよ」

ハンゾー、想像以上にいい人だった！

これで何の問題もない、あとは遅れないように1002号室に向かうだけ！

各王子の上のフロアと下のフロアの間には警備などはない。

ちらりと見た感じだが、部屋の前に警備を置いているのは上のフロアが1006号室

を除くすべての部屋。

下のフロアは1007号室と1009号室。

それ以外の部屋は皆室内で警備しているようだ（人数が足りないとところもあるだろ

う)

1006号室は……イケメンを自分の目の届かないところに置いておきたくないのかな、タイソン王子。

上位王妃の警護兵を下手に外に出して大量の敵を招き入れられても困るしね。時間がないので、得られた情報はその程度。

急いで階段を駆け上がり、廊下を小走りに1002号室へと向かう。

ひとまず顔だけ合わせて、あとは時間を稼ぐ。

あと30分ほど経てば私の舞い踊る^{ダンシング}メジャー^{アルカナ}の使徒の時間変更線になる。

そこまで時間を稼いで、『女教皇』を使用してカミーラ王子の内心を探ろう。

占いのためでもあり、情報のためでもある。

危険は承知、能力であると知られるのは構わない。他のカードの情報が洩れるわけじゃない。

能力を使用していることはばれるだろうけど、それがどのような能力かまでは知られないはず。

「待て！……ここに何用だ！」

1002号室の警備兵(おそらくカミーラ王子の私設兵)二人が私たちを呼び止める。

「カミーラ王子に呼ばれて参りました、『戦う占い師さん』ことエイラと申します。こち

らは弟子のマチ。カミール王子にお取次ぎをお願いします」
「そこでしばらく待っている」

一人が扉の中へと入る。間もなくして私たちは中へと招かれた。

「ちゃんと十分以内に来たわね、賢明ね。どちらが戦う占い師さん？」

「私です。こちらは勉強させている弟子です。特に口をはさむことはないですが占いを一部始終見学させていただきます」

「構わないわ……そこに座りなさい」

応接室の、カミール王子と向かい合わせの椅子、私はそこに、言われるがままに座る。
マチさんはその横に立った。

この室内には王子と私たち以外に人はいない。人払いされているらしい。

王子の念獣は彼女の横にいる。特に動く気配は見られない。

「戦う占い師さんの噂は知っているわ。まずはその力を見せなさい」

私は黙って立ち上がった。

「王子の……右手を見せていただけますか」

「手相？ いいわよ、こちらに来ることを許すわ」

私はまだ『女教皇』を使用していない。

王子は絶をして私を待つ。万が一の場合に備えた迎撃の準備カウンター。

彼女に近付いて、右手を取る。特に意味はない。危害を加えるつもりもない。

念獣も特に反応は示さなかった。

条件を満たしたものを意のままに操る念獣、一体どんな条件だろう？ 警戒はしておかないと。

私はゆつくりと元の椅子に戻り、そして口を開いた。

「王子はどこかお怪我をされています。それ以上に、お心が傷付いていらつしやる。怪我の原因は王位継承戦。恐らくは王子の納得のいかない状況となつたのでしよう、心中お察し申し上げます」

カミィラ王子の綺麗に整えられた眉がピクリと動く。

私はタロットをテーブルの上に広げた、ただし絵柄を上になを向けて。

それらしい、意味のない動作を随所に織り込む。時間稼ブラフぎと嘘を兼ねて。

わざと時間をかけて、タロットの中から魔術師のカードを手元に引き寄せた。

「怪我の原因は……ベンジャミン王子。それ以上の詳しいことはわかりかねますが、ベンジャミン王子が関わっている」

「もういいわ」

王子の表情から、感情は読み取れない。

もういいという言葉はいい意味なのか、それとも悪い意味なのか。

「それなりに当たるようね。じゃあ改めて依頼するわ。私の現状とこれからを占いなさい」

「……喜んで」

タロットを一旦全て順番通りに並べ、今度は伏せてシャッフルする、丁寧に。

「私がこのまま引いてもよいのですが、王子ご自身でカードを選ばれた方がよりの中率は上がります。どちらになさいますか」

「私を立たせるのね、いい度胸だわ。引いてあげるから貴方はそこに座ってなさい」

三メートルほど離れた位置に座っている王子からは、座ったままカードを引くことはできない。

立ち上がったって近付いてきた王子にカードを選んでいただく。それは無言で私の目の前に置かれた。

彼女が自分の椅子に戻るのを待って、カードを開く。

「まず現状……カードは『吊された男』の正位置です。テーマは認識。王子は誤った己の認識を改めるお心をお持ちです。修正し、未来を理想に近づけることができます。ただし現在は自由のきかない状態にある。忍耐のしどころです」

「忍耐、私の一番嫌いな言葉ね」

「けれどカミーラ様は聡明なお方。過ちは二度と起こらない」

私は言葉を紡ぎながら、テーブルの下で舞い踊る二十二の使徒を発動し、女教皇のカードを引く。

これで準備は整った。

「もう一度、カミーラ様の右手を拝見させていただけますか」

王子は無言で右手をテーブルの上に投げ出す。

今度は絶にすることもなかった、それなりに信頼してもらえたらしい。

再び王子に近付いて、右手を取る。手入れのされた、美しい手だ。

「カミーラ様は国王になることをお望みですね」

「それ以外ありえないでしょう」

カミーラ王子は心の底からそれが当然だと思っている。疑う余地もない。

その欲求を掬い取り、なおかつこちらの要望に沿った結論を引き出させるのが目標。

具体的には、フウゲツ王子の安全とお宝の在り処。

「現在の国王……御父上を敬愛していらっしゃいますか？」

「私に唯一命令できる存在よ、敬愛していないわけがない」

嘘は付いていない。父親を敬い尊いものだと考えている。それは事実。

「ではその他に……カミーラ様が尊敬できる方はいらっしゃいますか？」

「いるわけがないでしょう。御父様が唯一絶対。私と御父様以外はゴミのようなもの」

ここでカミール王子は嘘を吐いた。

王子の脳裏にはもう一人の人物の映像が浮かんでいる。

私はこの人物を知っている。……少々意外だったが、いや、納得というべきか。

この二人に接触があったこと自体が予想外。

今は下手につつかない方がいい。藪から蛇が出るかもしれない。

「……王子、私のタロットは今後一か月を占うものです。よって、王位継承戦の結末を占うことはまだできない。結論が出るのは、さらにその先です」

「一か月以内には終わらないということね、うんざりするわ」

タイミング

「もう少し、忍耐の時間が続きます。王子御自身で動かれる時はまだ先にある。王子は穏やかに、ゆったりと、他の王子たちが争う様をご見物いただくのがよろしいかと」

「あなたたちは休戦協定を結んだんでしょ。そうそう動きがあるとは思えないんだけど」

「それでも王子全員の半数にも満ちません。それに、休戦協定が本当に守られるかどうかも怪しいものです」

カミール王子の脳裏に、チヨウライ・ツベツパ・ハルケンブルグ各王子のことが思い浮かぶ。

それ以下の王子は歯牙にもかけていないということだろう。

そのうちあからさまに敵視しているのは同じ母から産まれたはずのツベツパ王子とハルケンブルグ王子。

だからこそ、思う所があるのだろうか。

王子たちのこれまでの生育状況を、私は知る由もない。

今ここで二人の名前を出せば女教皇の能力で知れることもできるだろうけれど、それに関心があるとも思えない。

「いつまで手を握っているつもり？ そっちの趣味でもあるのかしら」

「これは失礼いたしました」

あわてて手を離し、自分の椅子へと戻る。

眼前に広げられたタロットを集め順に並べ、箱へとしまい込んだ。

「他に何か、お尋ねになられたいことなどはありますか？ 私の能力の限度はあります

が出来得る限りお答えします」

「報酬は、本当に五千万だけでいいの？」

おや。てつきり王位継承戦に関わることを尋ねられるとばかり思っていたのだが。

「はい。あとは全てが終わったあかつきに、国王になられた王子のご紹介で占い師としての成功が約束されれば、それで」

「ふうん……欲がないのね」

いや、我ながらめっちゃ欲まみれやん。突っ込まないけど。

「それと、カミーラ様が国王になられた際には、フウゲツ王子とカチヨウ王子の恩赦をいただければ幸いです」

「考えておくわ。今後私が呼びつけたら何を差し置いてもここに来なさい。それが条件よ」

「それは構いませんが、私の占いは一か月以内に再度占うと的中率が格段に下がりますが……」

「問題ないわ。貴方、それとその弟子もそれなりの使い手でしょう？ 本当は私が直接雇いたいんだけど、すでに他の王子に雇われているから周囲がうるさいのよね。実質は私の配下として動きなさい、ママとカラムには話を通しておくわ」

「……かしこまりました、全てはカミーラ様の為に」

そして、私たちは部屋を辞する。

帰りは来た時と違ってのんびりと歩いて。

「お宝の情報は得られなかったね」

「それは今後に期待、ですね。面白い情報は得られたので、これを使ってカミーラ王子を揺さぶってみようかと思えます。うまくいくかはわかりませんが」

帰ったらカラムとも話をして、それから警備につこう。

ゲレゲレをモフっとしてからリヨウジとバチャエムをビシバシしごこうかね。
緊張しすぎですごいストレスたまった。発散。

第七十二話

1011号室に帰る時、少し遠回りをして1013号室の前を通った。

扉は開きっぱなしで、中にはぱっと見誰もいない。

そして、マラヤーム王子の念獣が中央に陣取っている。

明らかに警戒はされている。こちらを見て目を合わせて低い唸り声をあげている。

私たちは近づこうとはしない。

ひとまず伝える情報も整理されていないので、ただただ前を通り過ぎた。

「あれも念獣か？」

「はい、第十三王子^{マラヤーム}の念獣です。恐らく王子を含めたあの部屋の全員をどこか別の場所に隔離して守っていると思われまます」

「ふうん……」

それきりマチさんは黙ってしまった。

「……マチさんは、私が王位継承戦や王子たちについて色々知っていることが不思議ではないんですか？」

「それがあんたの能力なんじゃないのかい？ 念じゃない、占い師としての。別に疑問

には思わないよ。あんたが先のことを知っていたことは今までに幾度もあった。今更だね」

マチさんも団長さんも、他の団員も、私の占いとはちよつと違った『知識』をすんなりと受け入れてくれる。

敵対さえしなければ何の問題もないとでもいうかのように。

ある意味、感情に振り切つて寄つた集団。蜘蛛が全て、それ以上でも以下でもない。行動原理はすべて蜘蛛を中心。道理よりも快不快を重視する。

その偏つた思考回路を理に近付ける頭脳が頭の、団長さんの役割。

とはいえ団長さんもある意味ぶつ壊れて偏つてるのだけれど。まあそこはそれ。

1011号室にたどり着く。途中で誰かと会うことはなかった。

『女教皇』を使ったのでしばらく『愚者』は使えない。

その間は1011号室に引きこもろう。安全第一。

戻つてすぐにハンゾーと交代する。

「おう、戻ってきたな。あの二人、スジ良くて面白かったからちよつとやりすぎたかもしれない、スマン」

居間に入るとリョウジもバチャエムもぐつたりと伸びていた。

「大丈夫ですか……?」

「むり しぬ」

「かゆい うま」

二人は駄目らしい。私とゲレゲレだけで王子を守ることになった。何の問題もない。ハンゾー、何やってくれたんだろう……。ちよつと興味はないこともない。

夜。まだ日付は変わっていない。間もなく変わる。

私はノックをして王子の寝室へと入る。ゲレゲレは王子のすぐそばに控えている。

「王子、今夜の検証はどうしましたようか？」

私としては第五層に行つて旅団メンバーと情報交換しておきたい。

ただし愚者が使えないので居場所の特定ができない、のでこれは明日以降。

トンネルについて検証しておきたいことつてほかにあるかな。

「エイラさん、タイソン王子とマラヤーム王子を味方に引き入れることは可能でしょうか」

お？ 王子は晩餐会での二人の様子を見てきている。

その王子が言い出したということはそれなりに勝算があつてのことか。違うか。

「私はそのお二人を直接知らないのですが、何とも言えません……が、マラヤーム王子の居室にはフウゲツ王子の念獣の力では訪れることができないと思います」

多分だけどあのマラヤーム王子の念獣の前に放り出されることになっちゃおうと思う。そしてそれは、とても危険。

猛獣のオリの中に王子を飛び込ませるわけにはいかない。

猛獣のゲレゲレはすぐ横にいるけど。

「それは、マラヤーム王子の念獣の力ですか?」

王子の推察もだんだんと的を射るようになってきた。

少しずつ、王位継承戦に関する理解を深めているのだろう。

「はい、おそらく。なのでトンネルを使って交渉を進めるとすればタイソン王子が適切かと思われます。しかしそれには危険も伴うでしょう」

「タイソン王子なら大丈夫だと思います、とてもお優しい方だし」

「タイソン王子ご本人が大丈夫であっても、その周辺もそうであるとは限りません」

「私の知る限り、周囲の私設兵の方々も優しい方ばかりです」

……粘るな。王子がそこまで言うのなら、挑戦してみる価値はあるかな?

王子の念獣の能力がだいぶ外へと知れてしまったけれど、私たちがお守りすれば大丈夫。

それに、危険なところ（ベンジャミン王子とかツエリードニヒ王子とか、第一・第二王妃とか）にはまだ知られていない。

「それでは今夜はタイソン王子の元へと赴くことにしましょう。ただし私が先頭に立ちます、それは変わりません。いいですね？」

「はいー」

そして日付変更線。ロップがくるくると舞いながらこちらをチラツチラツと見てくる。

「ロップ、今夜はここに、タイソン王子のお部屋にトンネルを繋いでくれる？」

地図で私が指さした場所を覗き込み、無言でこくこくと頷く。

そして王子が願う前に扉が現れた。

「……王子が願わずとも、ロップにお願いすれば扉は現れるようですね。それってどうなの……」

「多分ですけど、私の意思がエイラさんのお願いと同じだってロップちゃんも理解しているんだと思いますよ」

そうなのかなあ。まあいいや、先へと進もう。

マチさんと呼んでくる。

カチョウ王子のお部屋に行った時と同じように、メモ帳とペンの準備をする。

そして私が先頭、次にマチさん、王子、最後にゲレゲレの順にトンネルに入る。

トンネルを抜けて出た先は居間か応接室だろうと思われる。人はいない。

マチさん以下にはまだトンネルから出ないように指示した。

円で監視されている気配もない。ざっと見た感じ監視カメラのようなものもない。

私の円を部屋全体に張りめぐらせる。三人、いや、四人がこちらの円に気付いた。

そしてまず一人が、続いて残り二人が私のいる部屋へとやって来た。一人は動こうとしない。

「何者だ!」

彼らは一様に私に銃を向ける。だが銃に頼っているわけでもない。

三人いずれも念能力者。それもかなりの腕前と見た。

「……」

私は無言で両手をあげ、メモ帳を見せる。

そこには『私はフウゲツ王子の使者です。この部屋にカメラ、盗聴器、念その他情報漏洩の危険性は?』と書かれている。

円もすでに閉じ、私のオーラは絶状態。これで迎撃カウンタータイプ型だと誤認してくれればいい。

銃のスピードであれば急所なら外せる。さすがに大怪我はするだろうけれど。

お優しいタイソン王子とその仲間たち。フウゲツ王子の人を見る目を信用しよう。

「……王子は己の私設兵を他人に見られることをひどく嫌っておられる。よって室内の

情報が洩れる可能性はない。念能力についても調べてある」

「了解しました、信じます。私はエイラ。あなた方は？ お二人はハンター協会のようですが」

まず一人が、銃をおろした。

「第二王妃ドウアズル様の所属兵リタリスだ。話はカミーラ様から伺っている」

おっ？ カミーラ王子、よその監視兵にも話を通しておいてくれたのね、有り難い。その後すぐに残った二人が同時に銃をおろした。

「オレはイズナビ、お察しの通りハンター協会員だ。アンタもそうだろう？ 名前を聞いて確信した。パリストンの信頼する未来予知能力者」

「私はただの占い師です……占いは当たるも当たらないも八卦。もうおひとりは？」

「オレはジュリアーノッス。同じくハンター協会員」

「ということは一人ここにきていない能力者がおそらくベンジャミン王子の私設兵。タイソン王子はもうお休みですか？」

「ああ」

「でしたら伝言だけお願いします。フウゲツ王子はタイソン王子との休戦協定を希望しておられます。条件はカチョウ王子も共に休戦協定を結ばれること。及びこちらはチョウライ・ツベツパ・ハルケンブルグ・ワブル各王子とも休戦協定を結んでおられる

ので、ご希望であればそちらとの繋ぎも致します」

私はトンネルの出入り口の方を向いて、二人を呼ぶ。

フウゲツ王子が出てきたのには三人ともさすがに驚いたようだった。

「返事は電話で構いません。話が決定次第1011号室あてに連絡をお願いします。

……王子」

ひとつ頷いて、フウゲツ王子は一步前に進み出た。

「私はタイソン王子との争いを望みません。タイソン王子も同様に考えておられると信じています。……よろしくお伝え願います」

そして、ペコりと頭を下げた。

マチさんを除いたこの場にいる全員が慌てる。王子の頭はそんなに簡単に下げているものじゃない。

けれどフウゲツ王子にそのような無駄なプライドはない。

「わかりました、お顔をあげてください、フウゲツ王子。このことは明日の朝タイソン王子に私から直接お伝えいたします」

あわあわしているイズナビがちよつと気の毒になるけれど、まあいいか。

タイソン王子の目玉ジャクシはイズナビとジュリアーノには憑いているけれどリタリスには憑いていない。

經典もらえてないんだな。タイソン王子はおそらく各王妃の所属兵を信用してない。

經典唯一の禁忌ってなんだろうね。気になるけど気にしても仕方がない。

「それでは私たちはお暇致します。夜分遅くに失礼しました」

トンネルの中で待機しているゲレゲレを奥に押し込んで、私たちはトンネルを通り部屋へと戻った。

「あとは、向こうからの連絡待ちですね。うまく休戦協定の枠の中にタイソン王子も入ることができれば、かなり大きなアドバンテージになると思います」

「たぶん、大丈夫ですよ。晩餐会で休戦協定の話が出た時、タイソン王子からは焦りと孤立に対する恐怖が見えました。ご自分もその枠の中に入りたいと考えていらっしやると思います」

王子……あなたは、念能力者より占い師に向いているかもしれません。

観察眼は占い師にとって必須事項。そして相手の不安をあおりつつ光への道筋を見せる、それが占い師。

……宗教家や政治家とやってることは大して変わらないだけだね。手段が違うだけ。

さて、トンネルを使用してお疲れの王子にはお休みいただくとして、リョウジとバ

チャエムは復活したかな？

「ふんぐるい むぐるうなふ」

「いあ いあ くとうるふ ふたぐん！」

あかん、まだ壊れてる。

ハンゾー、何やってくれたんだろう。

第七十三話

リヨウジもバチャエムも、結局明け方近くまで使い物にならなかった。

ハンゾー、どれだけ過酷な修行を課したのだろう。

「聞かないでください、思い出したくありません」

「冗談ではなくあの世が垣間見えました。ニンジャの修行とはあのよう熾烈なものな
のでしょうか」

ニンジャの修行とか知らんがな。こちとらJK占い師ですがな。

警備を終えて応接室に戻ってから、私は日課の朝ごはん作りに精を出す。

従事者が減ってしまったので出来ることからね、やらないとね。

ゲレゲレ用の豚ローストを焼きつつ、王子の朝ごはんを作る。

従事者さんに手伝ってもらって、リクエストがあつたインスタントラーメン王子専用
である。

叉焼も入れる。野菜炒めもたつぷりのせる。

でもインスタントラーメン。王子の食事なのに。

朝からラーメン食べて胸焼けしないかしら、大丈夫かしら。

杞憂でした。王子はニンニクアブラマシマシをペロリと綺麗にスープまで平らげた。「とても美味しかったです！　また作ってください！」

王子、細いのに意外と大食漢。

毎晩念能力使ってるから消耗が激しいのかしら。

もう少しカロリー重視した食事に変更した方がいいかもしれない。

ゲレゲレにもお肉食べさせて、私らの分はトーストだけ。

食事を終えたらリョウジとバチャエムの二人はとつと寝かせる。

ハンゾー何やったのか後で聞いてみよう。

今は、火曜日の朝。

カミール王子を占う前に、『愚者』で重要人物の居場所を調べていた。

晩餐会の時点ではまだ生きていたサレサレ王子は、月曜の時点で消えていた。

国王に動きはなかった。『女教皇』を使用していなければ今調べることも出来たのだ

が、それは仕方がない。

『愚者』がない。とても怖い。私はいつの間にか『愚者』の能力に依存していた。

誰がどう動くか予測がつかない。怖い。

怖がらない。閉じこもっていればひとまずは安全。大きな揺れには気を付けて。

ベンジャミン王子とカミーラ王子が直接動くことはまずないと言っていいだろう。チヨウライ王子はクラピカの方に気が向いている。

ツエリードニヒ王子……そろそろ念能力獲得してらるだろうな、どんな能力なんだろう。

出来る限り敵対せずに逃げ回りたい、王位継承戦の終盤まで。

ツベツパ王子もクラピカを気にかけていた気がする。

タイソン王子は……引き込めるか？ まだわからない。連絡はない。

タイミングよく電話が鳴った。相手は、1006号室。

「1011号室警護エイラです」

「1006号室ハンター協会員イズナビだ。例の件、王子から許可が出た。ただし条件がある」

「伺います」

「カチヨウ王子とフウゲツ王子、二人でタイソン王子のもとを訪れること。無論警護はつけて構わない。以上だ」

それは、タイソン王子ご自身のご希望なのかな？ かな？

「その通りだ。それを条件に、お二人との休戦協定を結ぶとおっしゃっている」

タイソン王子が直接王子たちに話したい何かがある。そういうことよね。

「カチヨウ王子側と連絡を取り、お互いが納得次第そちらの部屋に向かわせていただきます。時刻はいつでも構いませんか？」

「構わない。来ないまま午後三時を過ぎた場合は一度こちらから電話をかける。その時に状況を説明してくれ」

「わかりました」

電話を切る。タイソン王子は釣れたかな？

直接話したいこと、何だろう。

電話の元を離れようとする。再び電話が鳴った。

1010号室からの朝の定時連絡だ、ちようどよかつた。

タイソン王子の件を伝える。問題ないとの返事を得た。

今から準備をして十分後に王子居住区上層と下層を結ぶ階段の前で待ち合わせ。

あちらの警護はセンリツとキーニ、こちらの警護はマチさんと私。

現在警護中のロデノイルとカラムにはその旨説明して、部屋に残ってもらう。

私たちは部屋を出た。

以前と同じく、前を私、後ろをマチさんが守る。二人とも円をした状態で。

見えるより先に円に触れる。

階段のところにカチヨウ王子と、センリツとキーニが待っていた。

「待たせてごめんね、カーちゃん」

「別に待つてないわ」

そして私の円に触れる、さらに大きな円の気配。私たちのいずれのものでもない。

私は王子の前に立ち、その円の発信源の方を向く。センリツとキーニも同様にカチヨウ王子の前に立ちはだかった。

現れたのは、銃を手にした一人の男。見覚えはない。

左耳のイヤホン、第一王子私設兵か？

銃を向けられる。ターゲットは王子ではない。まず、私！

避けるわけにはいかない、王子に当たるかもしれない。

左手にカードを具現化。一枚を引く。カードを見る余裕はない。

恐らくは大多数の何の意味もないカード。

銃口を見る。狙いは額。銃自体はさほど大きなものではない。

カードと己を強化する。カードで脳を守る。

銃が放たれてカードに当たる。カードで防ぐことは出来なかったが勢いを殺した。

カードを突き破った銃弾が額に刺さる。堅が守る。弾いた。

私が守っている隙にマチさんが行動を開始していた。

敵の背後を取る。放たれた糸が敵の首を狙う。躲す。

糸が弧を描いて敵の頭を仕留めようとする。

同時にキーニから念弾が放たれて敵の腹部に当たる。ダメージは少ない。

王子は二人とも動かない、それでいい。センリツが二人同時に気にかけてくれる。

私は改めてカードを引く。『月』のカード。右手のオーラがナイフに変化する。

ナイフを振りかぶって敵に襲い掛かる。その敵の足元には隠で隠されたマチさんの糸の束。

つまづく。転ぶ。マウントを取って首にナイフを当てる。

「チエックメイト。銃から手を離さない」

男は答えない。男は銃から手を離す。男の腕が上がる。

男の首を掻き切る。しかしそれより先に男の腕からキーニの物とは比べ物にならない大きさの念弾が放たれてフウゲツ王子を襲う！

フウゲツ王子を、風船のようなものが包み込んでいた。

その風船の先には、星型のステッキを持った、黒いロツパイヤーラビットのような生き物。

『絶対守護』
マモリタイモノ

衝撃を全て吸収し、風船は破裂する。みんなは無事……

カチヨウ王子が、倒れた。

「王子……」

センリツが王子を抱き支える。息はあるようだ。

私も急いで王子に駆け寄る。フウゲツ王子に異常は見られない。

カチヨウ王子の容体を見る。怪我はない。けれどオーラが微弱だ、まずい。

右手のナイフを切り替える。私の『月』は生と死の能力を併せ持つ。

ナイフのオーラをカチヨウ王子の心臓に突き立てる。

センリツとキーニがびっくりしてるけど構うもんか。

『月』を通じて私のオーラを王子に注ぎ込む！

やがてカチヨウ王子のオーラが安定し、目を覚ました。

私は一安心して『月』と他のカードを消す。

パタパタと宙に浮いている黒いロップイヤールビットを見上げた。君がカチヨウ王

子の念獣なんだね。

そしてその能力は、守りたいものを、守る。すなわち、フウゲツ王子。

その代償はオーラ。己の生命力と引き換えに、フウゲツ王子を守る力。

「エイラさん、感謝します……!」

私の能力がちよっぴり二人にばれてしまったけれど問題はない。二人は味方だと思
う。

「どう思う?」

マチさんが私に話しかけてきた。

「電話でしょうね。私たちがここに来ることは盗聴でばれていた。第一王子私設兵を
疑ってはいませんが確信は持てません」

「だね。まあ、守れたんだから問題はない。早いところ用事を済ませて部屋に戻った方が
いい」

「そうですね……カチヨウ王子、立てますか?」

立つこと、歩くことには問題がないようなので、私たちは改めてタイソン王子の部屋
へと向かった。

男の遺体は、そのままにして。

第七十四話

「ようこそ！ 私の兄弟たち！」

宗教か？ 宗教か。

タイソン王子の部屋に入った途端にこのセリフと芝居がかった仕草でお出迎えされた。

王子二人及びイズナビとジュリアーノは慣れた感じだし、キーニとセンリツは引いている。

あつまちさんも引いてる。レアなもん見た。

自分では気づいてなかったんだけど、どうやら私の額に血がにじんでいたらしい。

ジュリアーノが自分のハンカチを貸してくれた。

有名なブランドの黒を基調としたメンズ向けハンカチをさりげなく出して手渡してくれる。

惚れてまうやーん。

何で私そのブランドを知っているかというのと、ウリやってた頃にお客さんにプレゼントとしてばらまいてたからです。てへ。

額の血を拭う。かすり傷。

ほんの少しだけ血が付いたのでクリーニングして返すと言ったら「いいっすよ、それくらい」と笑っていた。惚れてまうやーん！

「あなたたち、不安なのね？ 大丈夫！ 愛は世界を救います！」

タイソン王子は引き続き演劇かと言うくらいに仰々しい動作で愛を語っている。

……私、さつきカチヨウ王子にオーラめつちや使つて相当キツいんですけど、もう帰ったらダメカシラ。

「タイソン王子、あの、私たちとの休戦協定についてですが……」

「もちろんわかっています。兄弟だけでなく人類は皆愛し合わなければならぬ！ それなのに王位継承戦などといって争っているヒマは私たちにはありません！」

「じゃあ」

「あなたたちには、これを」

そう言つて懐から取り出された経典キター！

カチヨウ王子とフウゲツ王子にそれぞれ一冊ずつ。私たちにはないのか、残念。

「時間のある時にでも読んで。そして、あなたたちもタイソン教徒となり一段上のステージに行くのです！ 愛が全てを満たす！」

くるくると一人で踊っているタイソン王子の背後の念獣から目玉ジャクシが二匹、王子たちの肩にそれぞれ取り憑いた。

禁忌が何なのか、気になるな。聞いてみよう。

「タイソン王子、ひとつつよろしいですか？」

「なあに？」

「私もタイソン教に興味がありました……タイソン教に禁忌事項などはあるのでしょうか？」

それがイコール念獣の禁忌とは言えないかもしれないけど、同一である可能性はそれなりに高い。と、思う。

「禁忌事項はただ一つだけ、意図的に他者を傷付けることです。愛を育むタイソン教徒たるもの、その真逆とも言える傷付けるなんてことがあつてはならないもの」

……イズナビとジュリアーノは大変だな。王子を守るために厳しい罰が下される可能性がある。

カチヨウ王子とフウゲツ王子に関しては大丈夫だろう。

お二人の性格上もだし、念獣の能力的にも他者を傷付けるようなものじゃない。

「……よくわかりました、ありがとうございます」

「興味があるならあなたにも経典を差し上げましょうか？」

「いえ、少し考えさせていただきます、お気遣いありがとうございます」
はよ帰りたい。

無事に休戦協定を結び、私たちは各々の部屋に戻る。

その途中。階段の下にあつたはずの遺体は跡形もなく消えていた。絨毯のシミでさえも。
えも。

まるで最初から何も無かつたかのようだ。

国王軍が来た形跡はない。証拠隠滅。

やはりそれなりの強大な力が働いている。

ベンジャミン王子か？ 確証はない。決めつけは良くない。

カチヨウ王子たちに別れを告げ、自室へと戻つた。

……そういや、ロップはフウゲツ王子についてこなかつたな。

カチヨウ王子の念獣はついてきていたのに。

条件がよくわからない。ビビリだから部屋から出ない？ まさかね。

王子とマチさんは居間へ入り、私は控室へ行く。

少し睡眠をとろう。色々ありすぎて、疲れた。

睡眠を邪魔されることもなく、夕方に目を覚ました。

完全に疲労は取れてないけれど仕方がない。

夕食の準備のお手伝いをしてから警備へと入る。

リヨウジとバチャエムも睡眠充分。さーて、鍛えようかねー。

とはいえ私自身もそれほど強いわけでもない。

結局水見式。水見式万能。基礎大事。

オーラ尽き果てるまで練を続けてもらいましょかね。

二人には水見式を、王子には瞑想を続けていただいて、私は地図を取り出す。

『女教皇』を使ってから二十四時間以上が経過している。

『愚者』で一人ずつ、居場所確認のお時間だ。

旅団は変わらさずばらけている。フランクリンさんたちが第五層、フェイタンさんたちが第四層、団長さんたちが第三層。

ビヨンド拘束室にはビヨンドの他、ボトバイとサツチョウ、サイユウ。

監視が少し入れ替わってるな。

そのそば、政治特区にミザイストムとクツクル、ピヨン。

医科学特区にはチードル、ゲル、レオリオ。

第三層の少し離れた場所にギンタとカンザイ。

王と各王子たちはそれぞれの自室に居る。

クラピカとサカタも1014号室。

ヒソカとカルトは……ヒソカが政治特区から離れて単独行動している！

慌てて団長さんたちにメールを送った。

ヒソカの単独行動はチャンスとも言える。今のうちに退治してくださいお願いします。
す。

ちなみにマラヤーム王子のお部屋（空間転移している方）の場所はわからない。

選挙の時にビスケを見ているので『愚者』を使うことは出来るはずなのだが、少なくともこの地図の中にはどこにもいない。

すなわち、船のある空間のどこかに存在するわけではない。

全くの異空間なのか、それとも実存するどこか別の場所なのか。

そういうやベレインテはこっち側に居るんだよね？

講習が行われていない時はどこにいるんだろう。

探しに行つて接触するのもアリかもな。外出する機会が訪れればだけど。

「ヤッソ」

私は一通り考えを巡らせると、改めて地図に目を落とす。

他に何か調べておくことはないだろうか。

国王の居場所を確認する。いつもと同じ場所に居る。

モモゼ王子と同じ場所にサレサレ王子も眠っているのだろうか。

カミーラ王子の記憶を読むためにはいえ、丸一日調べることが出来なかったのは残念。

とはいえカミーラ王子からも重要な記憶を読むことは出来た。

彼女が尊敬する二人の人物。国王と、彼。

彼とカミーラ王子の関係はまだ不明。再び接触できる機会があれば探ってみよう。

もう一度地図を確認する。団長さんたちが動き出した。ヒソカの居場所へと向かって。

あとの二組（実行部隊トッとフランクリンさんたち）はまだ動いていない。

下層の情報を仕入れるためにも各一家上層部のメンツの顔を見たいな、無理かな。

……揺れていることに気付いた。

航海している船自体の揺れじゃない。それよりも大きく、ただし以前あったような揺れほどの大きさじゃない。

小刻みに、何度も。大きく、小さく。

どこかで何かが起こっている。それを知るすべは私にない。

もう一度地図を見る。団長さんたちはまだヒソカと接触していない。

フランクリンさんたち三人がわずかに動いた。震源は第五層？

抗争だろうか。それとも繭が孵化したか。

私には知るすべは、ない。無視。

大きな揺れにだけは気を付けて、引き続き修業をしよう。

私にはどうしようもない。

第七十五話

自分自身も修行をする。主に練。

出来得る限り多くの潜在オーラを身に着けたい。

どこまで伸びるのかはわからないけれど、まだ成長ストップはしていない、と思う。潜在オーラ量は自分じゃよくわからない。

ポットクリンがいたらわかるのかな？ 強制絶なんて絶対ヤだけど。

修行をしていると突然、どこからともなく光が飛んできた。

『ハイミット隠者』

唐突に『ジャイアニック エゴイストお前の物は俺の物』によつて手に入った新たな能力。

使ってみないとまだ内容はわからない。

でも多分、私の能力を知っている誰かが条件を満たした。

過去に占つたことのある念能力を持った誰かが偶然今条件を満たしたとは考えにく

い。

おそらくは団長さん、フィックスさん、フェイタンさん、コルトピさん、マチさんの
いずれか。

それ以外に心当たりがない。

私の能力を知っていて条件を満たせるのはこの五人だけ。しかしなぜ今なのか。
揺れはまだ続いている。

地図を取り出してこの五人を調べてみた。

……コルトピさんが、いない。

どこにもいない。

つまり、そういうことなのだろう。

一緒にいたはずのフランクリンさんとシャルナークさんを調べてみる。

二人は離れ離れになってそれぞれ第五層に居る。

単独行動禁止。それすら守れないほどの何らかの出来事。

第五層で何かが起きている、それはもう間違いない。

マチさんに相談しよう。そして場合によっては第五層へ行こう。

できれば実行部隊トッと団長さんたちも一緒に。

私の最優先は蜘蛛をその足ですらも失わないこと。

この二組にメールを送る。

具体的にはわからないが第五層で何かが起きていること。

コルトピさんが死んだであろうことと、もしかしたらその能力を受け継いだであろうこと。

シャルナークさんとフランクリンさんが離れ離れになっていること。

それがヒソカとは関連していないこと。

そして、二千体のキメラアントの存在。

すぐに団長さんから返事が届いた。

自分たちはヒソカへ向かうこと。実行部隊^{トッ}を第五層^{コイ}へ向かわせること。

そして私たちは今しばらく第一層から動くなという指令。

戦力を分散していて大丈夫だろうか。一抹の不安がよぎる。

とはいえマチさんはともかく私が行ってもお役に立てる場面は少ないだろう、むしろ足を引く張る可能性すらある。

ここは頭の指示に従おう。

全滅を避ける意図があるのかもしれない。

マチさんを居間に呼んで情報共有をする。

王子が聞き耳を立てているのがわかる。けれど聞こえたとしても意味はきつと分か

らない。

リヨウジとバチャエムもチラチラとこちらを気にしている。

小声で話しているなのであの二人に声は届かないだろう。

「団長の指示っていうのは本当なんだろうね」

マチさん最近疑り深い。こんなことで嘘つきませんよ……。

スマホのメールを見せる。ようやく信じてくれた。

「じゃああたしらはすることがないってね。向こうに戻らせてもらうよ。何か変化があつたらまた教えて」

そう言つてマチさんは部屋から出て行つてしまった。

念のために十二支さんも調べておこう。

調べてみるとやはり、ピヨンド拘束室のサツチヨウと医科学特区のチードルとレオリオ、それにクラピカを除いた全員が第五層に向かっている。

ミザイストムとカンザイはすでに第五層に居る。

十二支さんが第五層に気を取られている今が、第三層に居るヒソカを狩る好機といえは好機。

団長さんが別行動を指示した意味もようやく理解した。

問題はただ一つ。実行部隊トツとフランクリンさんたちだけで第五層での危機に対処で

きるのか。

ひとまず私にできることは、それぞれの位置を把握して合流を促す。

フランクリンさんとシャルナークさんは携帯なんて見る余裕ないかもだから、フィックスさんにメールするか。

第四層と第五層を繋ぐ階段に近いのはフランクリンさんの方だな、まずそつちに誘導しよう。それから、シャルナークさん。

……そうだ、もうすぐ日付が変わる。

王子にお願いして、今夜の魔法の抜け道を使わせてもらおう。

シャルナークさんは第五層の中でも中央より下のフロア、しかも端の方にいる。

実行部隊と合流してもらうより、私が迎えに行った方が早い。

もちろん魔法の抜け道が第五層まで繋げられればの話だけれど。

今夜の魔法の抜け道で私以上の実力者を一人連れてきたい旨を王子に話して許可を得る。

フェイタンさんやフィックスさんに比べたら、魔法の抜け道という明確な理がある分シャルナークさんの説得はしやすいだろう。

あとは、マチさん。

「マチさん」

彼女を再び呼んで、その旨説明する。

「マチさんにはトンネルのこちら側に居ていただいて、私やシャルナークさん以外のモノが出てきたら処分して入り口を閉めてほしいんです」

トンネルの中での待機係はゲレゲレ。

『愚者』があればシャルナークさんの居場所は具体的にわかるし、すぐに合流できるだろう。

そうしてトンネルに戻るまでの間。あるいは私たちが何者かにやられてしまった場合。

第一層にそのナニカを来させるわけにはいかない。

マチさんにはカメラアンのことも説明している。澁々ながら納得してもらった。

「ゲレゲレもね、トンネルに何者かが侵入してきたら全力でぶっ倒していいからね」
「がうー！」

狭いところだと戦いにくいだろうけれど、信じるよ、ゲレゲレの実力も。

日付変更の寸前ギリギリまで地図でフィックスさんたちを誘導する。

フランクリンさんはあちこち移動しているようだが、シャルナークさんは途中からほとんど移動していない。

もしかしたら大怪我しているのかもしれない。

そして日付が変わる。私はゲレゲレと共にトンネルへ入った。

第五層であつてもトンネルは繋がられた。

おそらく船の中であればどこでも繋げることは可能なだろう。

しばらく進んだところで、ゲレゲレを待機させる。

そして私だけさらに進み、出口から出る。

そこは、地獄絵図だった。

床一面の流血、元ヒトだったものの残骸。

部屋には扉が三つ。恐らく入り口であろう扉と、奥に左右一つずつ。

入り口の扉と左の扉は開いている。その奥にもヒトの慣れの果てが見える。

そして右の扉。ひしゃげて元の形を成していない。

その奥から何度も何かがぶつかるような激しい音が聞こえてきた。

愚者を発動する。シャルナークさんはこの中に居る。

扉に近付く。中を覗いた。闘っている。

一人はシャルナークさん。あとの数人は……キメラアント！

私は乱れ飛ぶ二十二の使徒を具現化して何も付与していないカードを数枚キメラア

ントに投げつける。

「このカメラアントは弱いのだろう、カードは彼らを裂いて壁に突き刺さる。」

「エイラー！」

私は『世界』を引く。

部屋はそれほど広くない、全てが『世界』の範囲内に収まる。

続けて『死神』を引いた。一秒間、私は部屋中のカメラアントを切り裂く。

一秒後、カメラアントは全て床に崩れ落ちた。

「助かったよ、思ったより数が多くて」

「シャルナークさん、一体何があつたんですか？」

聞きながら部屋を見渡す。部屋の中には無数にも思えるほどの数の、繭、繭、繭。

「見ての通り、カメラアントの集団に襲われた。僕は死体のあとを辿つてこの部屋にた

どり着いたんだけど……」

「ここはおそらくシャリア一家のアジト。」

さっきの部屋に家紋を掲げた額が飾つてあつた。

そしてこの部屋は、原作では嚴重に封鎖されていた部屋。

おそらくはここに、カメラアントの繭の一部が保管されていたのだろう。

改めて周囲を見渡す。

孵化した繭は半分ほどだろうか。まだ中身の入った繭の方が多い。

「シャルナークさん、ひとまず逃げましょう。安全な第一層まで案内します。このままここに居たら確実に十二支んがやってくる。面倒なことになる前に」

「了解。でもコルトピとフランクリンは？」

「フィinksさんたちと合流するように連絡を取り合っているので大丈夫だと思います」

詳しい説明は後で。ひとまず急いでトンネルに戻り、くぐる。

ゲレゲレ、お疲れさん。戻って戻って。

そして私たちは1011号室にたどり着いた。

まずはシャルナークさんへの事情説明だな。

壺中卵の儀について、念獣の存在、第一層の状況、ヒソカの動向、他の団員の動向。

コルトピさんのことも説明した。

そして逆に第五層についての情報を得る。

第五層ではしばらく何も起こらなかったが、現在はキメラアントが荒らしまわっている。

一匹一匹の実力は流星街に現れたキメラアントよりも弱い個体が多いこと。

ただし大量であったことと不意をつかれたことによつて、三人がバラバラに分断されたこと。

話しながら地図を取り出してフランクリンさんの居場所を確認する。

無事にフィリンクスさんたちと合流できたようだ。第五層の上の方にいる。

団長さんたちは……もうすぐにでもヒソカと接触するだろう。

改めて団長さんにヒソカ的位置をメールした、ついでにシャルナークさんを第一層に連れてきたことも。

「コルトピがやられたとなると、僕が出会ったような弱い個体だけじゃないかもね。さすがに四人もいて警戒していればやられるようなことはないと思うけど」

「キメラアントの他には異常はなかったんですか？」

「うん、警備が厳しくなっただくらいで、他には何も。エイラはどうしてキメラアントのことを知ってたの？」

黙っている理由は……特にないか。

私はパリストンのこととその情報源をシャルナークさんに語る。

「パリストン＝ヒルか……僕もそんなに詳しいわけじゃないけど、元十二支んつてだけでもその実力は把握できるうえに、聞いた限りだとなかなかの根性悪っぽいね」

旅団が言えた義理じゃないと思うけどな……。ここは黙つとこう。

「シャルナークさんにも、しばらくはここで第十一王子の警護を担当してもらおうかと思えます」

その言葉でシャルナークさんは、離れたところからこちらの様子をうかがいながらも黙っている王子の方を見た。

王子とロップが同時にぴゃつと反応する。かわいい。

「初めまして、僕はシャルナーク。エイラやマチの仲間です。これからよろしくお願いします」

「ハイ、こちらこそ！」

綺麗なお辞儀をするシャルナークさんに、慌てて王子が頭を下げる。

これで、1011号室の念能力者が四人（と一匹）

ひとまず最低限の守備体制は築けたかな。私設軍隊ほどとまではいかないけど。

……コルトピさんを失ったことが、とても悲しい。

でも泣いている場合じゃない。

下層の方は、それぞれに任せよう。私の任務は王子とその能力を守ること。

明日の時間変更線を越えたら『隠者』を使ってみよう。

今は『愚者』の能力よりそれを知ることの方が大事。

第七十六話

朝、警備を終える。

朝ごはんは従事者の人たちがサンドイッチを作ってくれてたのでそれを食べた。

バチャエムとリヨウジは控室に追い立てる。はよ寝れ。休め。

シャルナークさんを他の警護や従事者の人たちに紹介する。

カラムがアワアワしていた。また報告しなきゃね、頑張つてね。

1010号室からの朝の定時連絡を受ける。特に変わったことは無し。

そして私はがんばって起きていて、お昼前ごろ。

『舞い踊る^{ダンシング}二十二^{メジャー}の使徒^{アルカナ}』の日付変更線。

カードを具現化する。

『愚者』『女教皇』『運命の輪』そして昨日手に入れた『隠者』

『隠者』のカードを引く。

初めてカードを引いたときにそのカードの念能力の内容が私の脳裏に閃く。

『神^{ギョラ}の左手^{リー}悪魔^{フェイ}の右手^{イク}』を手に入れたことが、これで判明した。

私の『お前の物は俺の物』の条件の一つに「能力をじかに（映像などでも構わない）目

撃している」というものがある。

もしコルトピさんが他に能力を持っていたとしても、私が見たことがあるのは神キヤラリーフェイクの左手悪魔の右手だけ。

故に、必然的に私が手に入れる能力は神キヤラリーフェイクの左手悪魔の右手に限定される。

試しに部屋に飾つてある花瓶に手を触れ、神キヤラリーフェイクの左手悪魔の右手を発動する。

花瓶はそっくりそのままもう一つ増えた。

花瓶の場所を移動させる。

コピーの位置を具体的に見ずとも把握することができた。

円に関しては……まあ、これ以上調べるのは今度でいいか。そこまで大きなものを複製する機会が近々訪れるとも思えない。

「やつぱり、コルトピの能力みたいだね」

シャルナークさんが一部始終を見て、そう呟く。私は頷いた。

「コルトピさんが今際の際に、私に能力を遺してくれたんだと思います……」

悲しい。泣かない。悲しい。泣かない。歯を食いしばる。

「エイラ、僕を占つてもらえる？」

唐突に、シャルナークさんがそんなことを言い出した。

占うこと自体は、それは構わない。でも、このタイミングで。

「……シャルナークさん、まさか」

「念のためだよ。それに実際問題、未来の話も気になるしね」

念のため。万が一シャルナークさんが命を落とすような場面に遭遇した時に、私に能力を遺すため。

「占いを、それだけを求めているのであれば私は喜んで占います。でも、もしご自分の命が危うい時に私に能力を遺すためだと僅かでも考えているのなら、私は、占いたくない、です」

これ以上、蜘蛛の足は（もちろん頭も）失いたくはない。そのためなら私は何でもする。

パクノダさんのことを思い出した。

自分の能力を遺せるなら死んでも構わないと思われるのは困る。それは、嫌だ。

「そんなに深く考えなくていいって、念のためなんだから。僕は僕自身がこれからどうなるのかを知りたい。できれば、蜘蛛の行方も。そもそも、僕自身の能力は遺したところでそれほど役に立つ能力とも思えないしね。だから、シンプルに、僕はエイラに占ってほしい」

シャルナークさんと目が合う。彼は逸らすことなく見返してきた。

……私には、断る理由は、ない。

応接室のテーブルを挟んで向かい合って座り、カードをテーブルの上に広げる。

カードをシャツフルする。その間、シャルナークさんは黙ってその動作を見ていた。

「どうぞ、一枚引いてください」

そして彼が引いたカードを開いてもらう。

『塔』の、正位置。

「……このカードは、破滅を意味します。予期しない事件によって、滅亡が訪れる。二十枚あるカードのなかでも、最悪と言っているいいカードです」

「なるほど。じゃあやつぱりエイラに能力を遺す方向でも、ちゃんと考えておいた方がいいかもね」

シャルナークさんは懐から、ケータイを取り出した。

「これが僕的能力。これを使って……」

「やめて！」

失うのは嫌。もうこれ以上失うのはいや。

コルトピさんのことを思っただけで耐えていた涙があふれ出す。

「いやだ、もう聞きたくない。もうこれ以上団員がいなくなるのはいやだ。私は一人になりたくない。一人はいやだ。いやだ。いやだ！」

「エイラ」

冷たいシャルナークさんの声が出た。きつと私に呆れたんだろう。

呆れられたっていい。たったそんなことで、失わなくて済むのなら。

「エイラ、僕の能力を君が知った所で、僕が死ぬわけじゃない。そして、何よりも君自身が一番わかっているはずだ。能力を遺すことによって、蜘蛛が生き延びる確率が上がる。足の一本を失ったとしても、蜘蛛が生き延びることが最優先。そしてその蜘蛛の中にはエイラ、君も含まれる。僕はね、エイラ、最悪でも団長と君が生き延びられれば蜘蛛は復活できると思っている。そのためにも、君が僕の能力を知っていることは必須」

そしてシャルナークさんは、手に持ったケータイを私に示した。

「……これが、僕の能力。アンテナを刺したターゲットをこのケータイで操作することができるようになる。アンテナを具現化できるのは三本が限度」

反対の手で具現化したアンテナを私に見せる。二本。

「このアンテナを自身に刺すことによって、自動操作モードオートメーションモードで敵を倒すことができる。ただし自覚することは出来ないから、具体的に敵を倒せるかどうかは終わってみないとわからないし、手加減なんかも出来ない」

「シャルナークさん、能力の説明は私には不要です。私は『お前の物は俺の物』ジャイアニック エゴイストで手に入れた能力を『舞ダンスい踊シグる二メジャー十二アルカナの使徒』で使用した時点で、その能力の詳細を知ることができます」

「知ってるよ。それでも、ちゃんと説明しておきたかった。これは僕のワガママだけだね」

そして彼は、アンテナとケータイを消した。

いずれも具現化したものだったのだろう。つまり彼は、具現化系と操作系のハイブリッド。

「シャルナークさん、あなたは」

「これ以上の言葉は必要ない。僕はエイラの占いの結果を覆すために尽力するし、エイラは自分の思うがままに行動すればいい。で、僕はどうすればいいのかな？ マチや他の念能力者と交代で警護に付けばいいのかな？」

会話の終わり。これ以上のやり取りを、シャルナークさんは望んでいない。

「……はい。私と、マチさんと、今警護についているハンゾーさんを合わせた、念能力者としての警護。そこに加わってもらいます……シフトは私が組みますので、それに従ってください」

「了解。団長やフランクリンたちとの連絡は任せていい？」

「はい。きつともうすぐ……団長さんたちとヒソカが接触します。警戒だけ、しておいてください」

『愚者』は使えないので推測にはなるが、それでも団長さんとヒソカの接触はもう目前。

大きな衝撃に備えよう。私には、そのくらいしかできることはないから。

第七十七話

警護の時間まで少し寝ておこうと控室に入ると、船がひとつ大きく揺れた。

以前の、家具がグチャグチャになるほどの大きな揺れではない。

しばらくおいて、もうひとつ。

団長さんたちがヒソカと出会ったのかもしれない。

もしそうだとしたら、想像していたよりも衝撃は少ない。

しばらくたって、もうふたつ。

第五層の方かもしれない。でも最後に調べた位置関係と時間的にはヒソカの方が可能性は高いと思う。

……寝よう。今私が考えても仕方がない。

結果はいずれ判明するはず。

「エイラ、まだ起きてるかい？」

私が横になっているベッドの横にマチさんがやってきて、小声で声をかけられた。

「はい」

「……あたしもあたしの能力をあなたに伝えておくよ。あたしの能力はオーラを糸に変

化させる事」

「ちよ、ちよつと待つてくださいい!」

「シャルとあんたの会話、聞こえてたよ。あたしはあんたに能力を遺すことなんて微塵も考えてないけど、保険は掛けておくに越したことはない。聞くだけ聞いておきな。能力自体はもう、見てるだろう?」

……マチさんまで。どうしてこうなった? 私はそんなこと望んでいないのに。

「糸はあたしの手を離れても存在するけど、強度は落ちる。長さを伸ばす程にも、強度は落ちる。そしてここからは、他の奴らは知らないあたしの能力」

私の原作知識でも、そこまでしか知らない。

「変化させた糸を指の数、つまり五本揃えてかき鳴らすことによって生み出す音『不協和音』^{ボクハイヤダ}。聴覚を持つている生物であればその五感を一定時間奪うことができる。……一定時間つてのは、あたしのオーラ総量に準拠するから、あたしがもし今使った場合はおよそ三秒くらい、あんたの場合だとどうなるかまではわからない。範囲は、音が聞こえる範囲」

私は、蜘蛛の仲間になったのだと思っていた。

でももしかしたら違ったのかもしれない。

無意識に蜘蛛を食らっているのかもしれない。

足を一本ずつ食らい尽くして、最後には何が残る？ 私はまだ、一人になる。

「これが、あたしの能力だ。いざという時は、あんたに託すよ」

返事が出来ない、息が詰まる。

私は蜘蛛にとつて存在しない方が良かったんじゃないか。

「……エイラ？」

私は、知らない。私は、いない方がいい。蜘蛛の為に。

左手にカードを具現化する。『乱れ飛ぶ^{シューティング}メジャー^{アルカナ}の使徒』

『死神』はまだ発動できない。ならば『月』

『月』のカードを引く。右手のオーラが短剣の形をとる。

選ぶのは毒。私は、知らない。

自分に短剣を突き立てる。……その直前に、マチさんに止められた。

「バカか！ 何やってるんだい！」

「私は……知らない……私なんか知らない……」

マチさんの手を振りほどこうとする。できない。さらに横から私を押さえつける手

が加わる……これは、カラム。

「今エイラさんに死なれるのは困る」

二対一、自死すら選べない。私は『月』とカードを消した。

二人も私を縛り付けていた手を離してくれた。

「何があつたのかは知らないが、今あなたに死なれるのはまずい。そうすると、私の首も危うくなつてしまう。カミーラ様の気性は知っているだろうか？」

ああ、そうか。

ここで死ぬとカミーラ王子はカラムに責任を取らせるのだろうか、そのくらいはしかない。

じゃあ、どこで死ねばいい？ 私はどうやって死ねばいい？

「冷静になれ、エイラ。どうしてそうなるんだ。あんたが生きていることは、あんた自身はもちろん蜘蛛にとつても重要なことなんだ、それくらいもう理解しているだろう」

私は蜘蛛を食らいたくない……蜘蛛を自分の不幸に巻き込みたくない……。

マチさんは私の耳を引つ張つて、大きく耳元で「わ！」と叫んだ。

右耳がキーンとする。

「蜘蛛をなめるなよ、エイラ。これはただの保険に過ぎない。蜘蛛はあんたごときに引きずられるようなやわな組織じゃない。もちろん、あたしもだ」

何様なんだろう、私。

わかつてたはずだ、無理を道理として力で押し通す集団、それが蜘蛛。

そうだ、私ごときにどうこうされるような人たちじゃない。

「……蜘蛛」

カラムが呟いた。私たちが蜘蛛だということがばれてしまったのかもしれない。別に構わない、無理に隠しているわけでもない。

「マチさん、カラムさん、ごめんなさい。もう、大丈夫です」

私は息を大きく吸って、そして、吐いた。同時にまた船が大きく揺れる。

「ちよつと、おかしくなってたみたいです。私は、私にできることをすればいい……それを忘れてました。カラムさん、このこと、カミィラ様には伝えないでいただけますか？」

「あ？ ああ……私はわざわざ自分が不利になるようなことを報告しようとは思わない。これは私の心の内にだけとどめておくとしよう。無論王妃にも報告はしない」

「ありがとうございます」

そして今度はマチさんに向き直った。

「ごめんなさい。私は蜘蛛を過小評価していた。そうですよね、蜘蛛が私ごときに左右されるわけがない。けれど私も蜘蛛、蜘蛛の一員。私は私の果たすべき役目をこなします」

もう今日は眠れそうにない。私はベッドから起き上がった。

「私にできることは、鍛えること。蜘蛛の力となり手足となること」

全力の練を解放する。隣のベッドで寝ていたリョウジとバチャエムも飛び起きた。

円ではないけれど私の練のオーラの内部のことが手に取るようにわかる。

居間で警護をしているロデノイルが私に気付いたがそ知らぬふりをしている。

ハンゾーはぎよつとして、見えるはずもないのに周囲を警戒している。

二人のどちらか（あるいは両方）が円をするかと思つたが、それはないようだ。

そして目の前のマチさんとカラムは、私に引きずられるように、それぞれ練をしていった。

纏よりも多めのオーラ、そしておそらくは全開とはいいがたい控えめの、練。

私の練に適応できるだけの最小限の練。それは二人の実力が私とさほど変わらないことを意味する。

すぐに練を抑え纏に戻すと同時に控室に誰かが飛び込んできた。

あれは、従事者のイラルディアさん。

「あの、今のは……？」

私の練を感じた？　もしかして、彼女はすでに念能力を身につけているのかもしれない。

「イラルディアさん、私です。少しお話を聞きたいのですが構いませんか？」

マチさんとカラムに頭を下げて、私は控室から出る。

目を丸くしているリョウジとバチャエムは置いていった。

「イラルディアさん……これが何か、見えますか？」

私は人差し指を出して、その上にオーラで9の数字を出して見せる。

「はい……9です」

やはり念能力を獲得している。

「イラルディアさん、1014号室で何かあったのか、話を聞かせていただけますか？」
「はい……あの、自分でもよく理解できていない部分があるのでお話もあいまいになるところがあるかもしれませんが……」

「大丈夫です、それで構いません。今日、1014号室で何かあったんですね」

予想では、クラピカがその能力を使って1014号室での念能力教室の参加者に念を授けた。

そしてさらにこれも予想だが、使った能力は奪^スう人差^チし指^チの鎖^エ。

「クラピカさんと、一対一でそれぞれに面談を行いました。それで……最初は何かわからなかったんですけど、気付いたら注射器のようなものを刺されていて……それを引き抜いて。そしたらオーラも見えるようになっていました。その後、それまで練習していたオーラを感じ取る方法、それで両手にオーラを集めるように指示されました」

やはり、奪^スう人差^チし指^チの鎖^エ。

原作でもオイト王妃に使用した際に念能力を使用する準備が出来ていると言ってい

た。

つまり彼は参加者全員に奪^スう人差^チし指^チの鎖^{エン}を刺し、念能力に目覚めさせようとしていたのだろう。

「それで……葉っぱを浮かせた水の入ったグラスにそれをかざすように言われて……葉っぱが、ゆっくりと回転しました」

つまりイラルディアさんは操作系。

前もってオーラを感じる修行をさせていたのは目覚めてすぐに水見式をさせるためか。

しかしそれだと才能のない人は間に合わない気もするけどな……どうなんだろう。

「今日は、そこで終わりですか？」

「はい。私以外も一人ずつ、同じようなことをしていたようです。一対一の面談なので、他の人の結果がどのようなものかまではわかりませんが」

「いえ、その情報で充分です、ありがとうございました。引き続き1014号室で念の修行をおこなってもらえますか？　そして、私にもそれを教えてください」

「はい、わかりました」

これで1014号室に行っていた参加者が（個々人の才による差はあるだろうが）念能力を獲得したことになる。

どこまでもインフレしていくな、念能力者の数。

上層階に念能力者が増えることは、あまり好ましくはない。

とはいえ、この程度の人数なら今更のような気もする。

各私設兵にハンター協会員、すでに念能力者は山ほどいる。

私にできることは自らを鍛え上げること。……蜘蛛の力となり、手足となること。

得るべきは力と情報。とりあえずは水見式でもしようかね。

また、一度、船が揺れた。

第七十八話

応接室でイラルディアさんと話をしていると、シャルナークさんが厨房から出てきた。

バナナをもぐもぐしながら。

「さすが第一層だよな。フルーツなんて贅沢品、第五層ではほとんど見かけなかったよ」

シャルナークさんはバナナを全部食べ終えると皮を器用にゴミ箱へと放り投げた。

「この食べ物、何でも美味しいんですね。料理のし甲斐があります」

イラルディアさんは厨房での自分の仕事へと戻って行って、今応接室にいるのは私とシャルナークさんの二人だけだ。

「へえ、エイラも料理とかするんだ」

「簡単なものしか作れませんけどね」

母親の代わりに作っていた料理と、ここで習った料理。

簡単なものばかりだけどそれなりにおいしく作れてると思う。多分。

ルウを使ったカレーやシチュー。肉じゃがも似た手順で作れる。

パスタ。ソースから作れるのはナポリタンとミートソースだけ。

麻婆豆腐とかはモトがあれば作れる。この世界にもレトルトのやつがある。ステーキに野菜炒め、これはもうお手軽すぎて料理とも呼べないな。

アレンジしてポークチョップにピカタ。ピカタだいすき。鶏でも豚でも美味しい。

シャルナークさんと料理について他愛もない話をしていると、私のスマホにメールが届いた。

差出人は、団長さん。

『第三層でヒソカと接触した。「まだその時じゃない」と言い残して、俺たちの前から姿を消した。再度ヒソカの居場所特定を頼む』

……接触した、けれど戦闘にはならなかった？

姿を消したというのも気になる。団長さんたちから逃げおさせたのか、どうやって。今すぐ『愚者』を発動したいところだが、今日はもうすでに『隠者』を使用してしまっている。

その旨彼に返信をして、明日の昼まで待つてもらおうことになった。

「ヒソカが行方不明？」

「ええ。団長さんたちが見失ったそうです」

「……協力者がいるな」

シャルナークさんが、ぼそりとつぶやいた。

「協力者？」

「うん、それが誰かまではわからないけど、念能力者。瞬間移動系能力の持ち主がヒソカに協力しているんじゃないかな。それ以外で団長たちが三人がかりでヒソカを見失うなんてありえない」

確かに。戦闘行為もなくヒソカ一人で全員を撒くのは至難の業だろう。

「いるとしたら、やっぱりマフィア関連でしょうか」

「可能性としてはそこが一番高いんじゃないかな……あとは、意思疎通のできる蟻、それに上層階の王族とその部下」

あとは、イルミとカルト。

……まあ、あの二人に瞬間移動能力まであるとは思えないけれども。ここは除外かな。

「旅団の中に裏切り者がいるという可能性は？」

「ゼロじゃないとは思うけど。あ、イルミとカルトを除いてもね」

初期メンバーがここで裏切る意味はないと思うので、あり得るとすればシズクさんかボノレノフさん……。

「そして少なくとも今回に限って言えばシズクとボノレノフは裏切り行為をしていな

い。団長がそれを見逃すはずがないから。あとのメンバーに関しては、僕の知ってる限りでは瞬間移動能力者はいないかな。瞬間移動はたぶん放出系か特質系。団長はそんな能力を持つているかもしれないけどヒソカを見逃す理由がない。ウチで放出系はフランクリンだけど、僕の知っている彼の能力に加えて瞬間移動の能力まで持っているとは思えない。ヒソカに関して旅団内に裏切り者がいるとすれば、エイラ、君だ」

自分の顔が引きつったのを感じた。それを見てシャルナークさんが笑う。

「いやいや、エイラが裏切ってると思つてたらこんなにペラペラしやべらないって。つまり、僕の考えうる限り旅団員の裏切りの可能性はゼロだね」

あーびびった、ここで無駄な仲間割れは勘弁してほしいもんね。

私は旅団を裏切らない、裏切れない。旅団は私の友達で仲間で家族。イルミとカルトに関してはまた別個に考えよう。

カルトが今どうしているのかも気になる。

ヒソカと離れて単独行動なのか、それともヒソカと共にいるのか。

すべては明日の『愚者』の結果次第だ。

居間と応接室をつなぐ扉が開いて、中からロデノイルが姿を現した。トイレかな？さすがに警護兵が王子の使用する居間の横のトイレは使えないものね。

私たちは警護兵控室に設置されているトイレを使用している、ゲレゲレも。

「私は第一王子の命により、別の部屋で警護をしていたリハンという者と交代します。フウゲツ王子の許可はすでに取ってありますので」

リハン？ 第一王子の軍隊にそんな人いたっけ……？ 顔見たらわかるかな。

ロデノイルは少なくとも上からの命令がない限り私たちに関しては静観の構えだったけれど、そのリハンとかいう人も同様だとは限らない。

一応警戒しておかないとな。多分そいつも能力者だろうし。

「わかりました、短い間でしたがお世話になりました」

「いえ、こちらこそ」

ロデノイルがシャルナークさんの方をちらりと見てそつちにも頭を下げる。

私たちは特に隠していないので旅団メンバー組（ゲレゲレとハンゾー含む）が念能力者であるという事は筒抜け。

リヨウジとバチャエムに関しても以下同文。

厨房の方にも挨拶に行っているのでイラルディアさんの変化にも気づくだろう。

1014号室側の情報は先に上にいってるだろうから、ここは気にしなくてもいい。

やがてインターホンが鳴って、二人が入れ替わった。

リハン……私設兵の中にいた気がする。それ以外は覚えてない。

「新たに1011号室の警護に加わるリハンだ。よろしく頼む」

「よろしくお願いします。私はエイラでこちらはシャルナークさん。非正規でのフウゲツ王子の警護兵です。ほかにも非正規のメンバーがいますので後で紹介しますね」

「結構だ、自分で全員と顔合わせをしておくでしょう。王子にもご挨拶をせねばな」
そう言つて王子のいる居間の方へと向かつていった。

扉が完全に閉まったのを見計らつて、シャルナークさんが声をかけてくる……小さな声で。

「第一王子の私設軍隊の面子はみんな手ごわそうだね」

「そうですね……いろんな意味で」

そう、色々な意味で。

一番厄介なのは、切り崩せる隙のない忠誠心だ。

この王位継承戦、実際の戦闘能力よりもむしろ知能と頭の回転が重要。

残念ながら私はそれを持ち合わせていないので、シャルナークさんには今後活躍してもらふことになるだろう。

あ、そうだ。

「シャルナークさん、頼まれていたもの、さつき届いてましたよ」

「えっ、それを早く言つてよ」

日用品に加えて発注しておいたものが、先ほど届いてそのまま入口の横に箱のまま置

いてある。

食品は温度管理が必要なので、いつも別便で届くようになっていた。

シャルナークさんは箱のガムテープをはがし、中から一つの箱を取り出した。

『外部とも通信のできるノートパソコン』

それが、彼が必要としていたものだった。

お金払えばある程度何でもお取り寄せできるので、便利。

第七十九話

シャルナークさんはお取り寄せしたパソコンのキーボードを一心不乱に叩いている。

「どうですか?」

「セキュリティはガチガチだね。まあスタンドアローンで動かす分には何の問題もないんだけど。なんとか内部のサーバーのどこかに潜り込もうとしてるんだけど。そもそもカキン自体がワールドワイドウェブと切り離された国独自のウェブを構築してるからね。多分この船においても同様に独自のローカルエリアネットワークを構築してるんだと思う」

うん、何言ってるんだこいつ。

そもそも私の知識なんてスマホくらいしかないからな。

パソコンなんてヨークシンでネカフェに泊まった時にカードゲームをやったくらいしか触ったことがない。

「衛星電話を使って外のネットワークとは接続できるから。必要なデータがあれば取り込むこともできるよ」

私が眉間にしわを寄せているのに気付いたシャルナークさんはアハハと笑う。

「まず重要なのは情報だからね。この船で今現在何が起きているのか、それを知るために監視カメラやいろんな通信のデータを見れないか挑戦してるところ。僕にはエイラみたいな占いの力はないから」

なるほど、それなら理解できる。気がする。

情報は大事。

やつてることは微塵も理解できないけど。

シャルナークさん、すごい。

「外から簡単に手に入るものだったら乗客名簿とか、公式発表された王族や軍の履歴とかかな。それも正しいとは限らないけど、知っておくのとまったく知らないのでは計算がかなりずれてくる」

「情報収集に関して、何か協力が必要なら言ってください。私も手伝えることがあればお手伝いします」

正直、何もできる気はしないのだけれど。

「うん、とりあえず、お昼ごはん食べたい」

リクエストにお応えして、今日のお昼ご飯はホットケーキですよ。

パンケーキみたいにふわふわのじゃなくて、どっしりしつかりがつつり系。のを三段

重ね。

そしてバターとメープルシロップと生のブルーベリーたっぷりのせ。きつとおいしい。

シャルナークさんにそれを持っていった時、思い出したように彼はこう言った。

「そういえば……前に、カキンの王族から依頼を受けたことがあるんだよなあ、旅団で」
「なんですと？ 旅団とカキンにすでに繋がりがあつた？」

それは知らなかった。原作にもそんな描写はなかったはず。

「王族の中の誰かまでは知らない、団長が請け負ってきたやつだったからね。旅団員全員集合でやる仕事って意外と少ないんだよ。だから覚えてたんだけど。結構前だよ、まだシズクやボノレノフも加入する前」

とすると、多分年単位、五年とか十年とか前になるか。

可能性としては国王……あるいは王子だとすると年齢的に考えて上からせいぜいハルケンブルグ王子あたりまで。

もちろん、それ以外の王族や王妃の可能性もないわけじゃないけど……。

今回このカキンの船の情報を持ってきたのは団長さんだった。

国王か王子と今も繋がっている可能性は高い。

「僕は後方支援だったのもあって、ほんとに詳しいことは何も知らないんだ、ごめんね」

「いえ、別にシャルナークさんが謝ることじゃないですよ、気にしてないです」

シャルナークさんは「ほんとかなあ」なんて言いながらまたキーボードをかたかたと叩きだした。

王族から旅団への依頼ともなれば、当然一ハンターでしかない私が簡単に調べられるような情報じゃないだろう。

そもそも情報処理系とか、絶対ムリ。

団長さん本人に聞いた方が早いか。

教えてくれる気が全然しないけど。

占ってみたら相手がどの人物か程度は分かるかなあ。

自分のことを占うわけじゃないし、このくらいは当ててほしいところではある。

「うにゃあう」

旅団への依頼相手を占いつつ引き続き修行中の二人を見てみると、王子の部屋からのそのそとゲレゲレがやってきて私にすり寄った。

どしたの、おしっこならあっちだよ？

「ぐる……」

私の周りをすりすりしながら三々四周してからキッチンへと向かう。

そこにはいまだ修行を続けているリヨウジとバチャエムの分のホットケーキがそのままになっていた。

「うわあおうおう」

それらのホットケーキをじつと見つめ、そして私を見る。

軽く手を伸ばすが、お皿に触れはしない。そして私を見る。

テーブルにガリガリと爪を立てるちよつと待てやめろおい。そして私を見る。

えっ何、ホットケーキ食べたいの？

君、肉食獣じゃないの？

促されるままにホットケーキを焼いてあげると大喜びでペロリと二十枚ほど平らげ、

満足げに王子の部屋へと戻っていった。

正直フライパンを握っていた右手がちよつとダルい。

あの子、雑食だったのか。

王子のところに持って行ったホットケーキ見て食べたくなつたんだろなあ。

今度またいっぱい焼いてあげよう。ミートソースのせたりしたら喜ぶかな。

さて、途中だった占いに戻ろうか。

一回で全部占うのは無理なので、王子一人につき一回ずつ。

依頼者かどうかをカードに尋ねてみた。

絶対に無いだろうと出たのがベンジャミンとカミィラ、チヨウライ。

もしかして程度の可能性がありそうなのがツベツパとルズールス、サレサレ。

可能性高めなのがツエリードニヒとハルケンブルグ、タイソンと出た。

はてさて、この占いはどこまで信用できるのか……。

てかタイソン王子、可能性高いんかい。なんか外れてる気がしてきたぞ。

とはいえ、個人的にはツエリードニヒ王子一択だと感じている、勘だけど。

旅団へ依頼したのはおそらく緋の眼の奪取。

0巻もちやんと読みましたよ、私は。

クルタ族を潰すのであれば旅団全員集合も充分あり得る。

でも、あまり決めつけるのも良くないかな。

シーラさんがどの程度関わってくるのかも未確定だし。

占いも終わり。私は余計なことを考えるのをやめた。

筋肉だ、筋肉がすべてを解決する。

私はプロテインジュースを片手に自重トレーニングに励むことにした。

今日の交代は夕方。それまでひたすらに筋肉を苛め抜くのだ。

心の師匠と仰ぐなかやまきんに君さんのような肉体を、私は手に入れる！